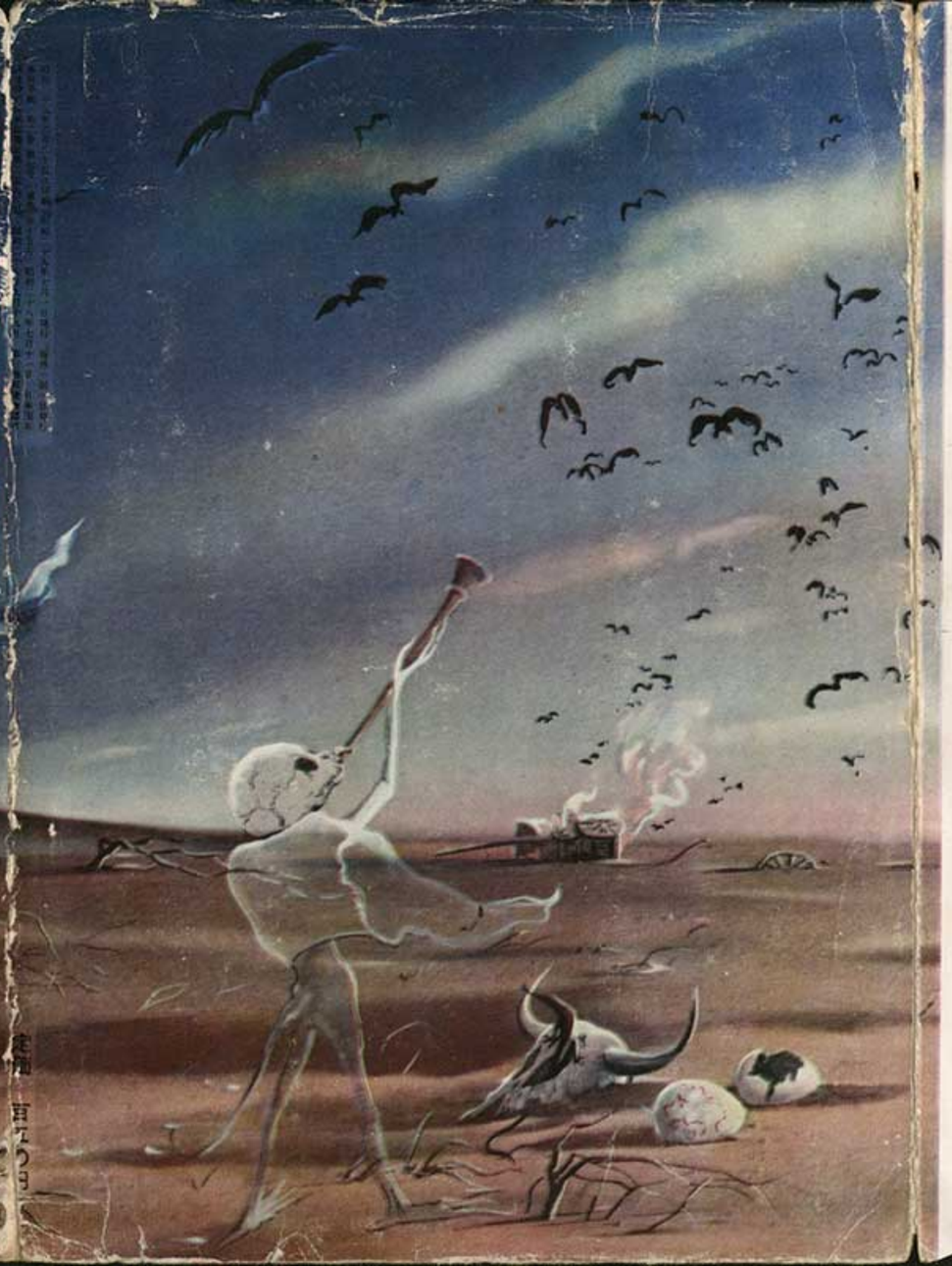
風俗草紙 臨時增刊

現代讀本

刺戟・興奮・戰慄

7

風俗草紙 臨時增刊 現代讀本 7



現代讀本

創刊号

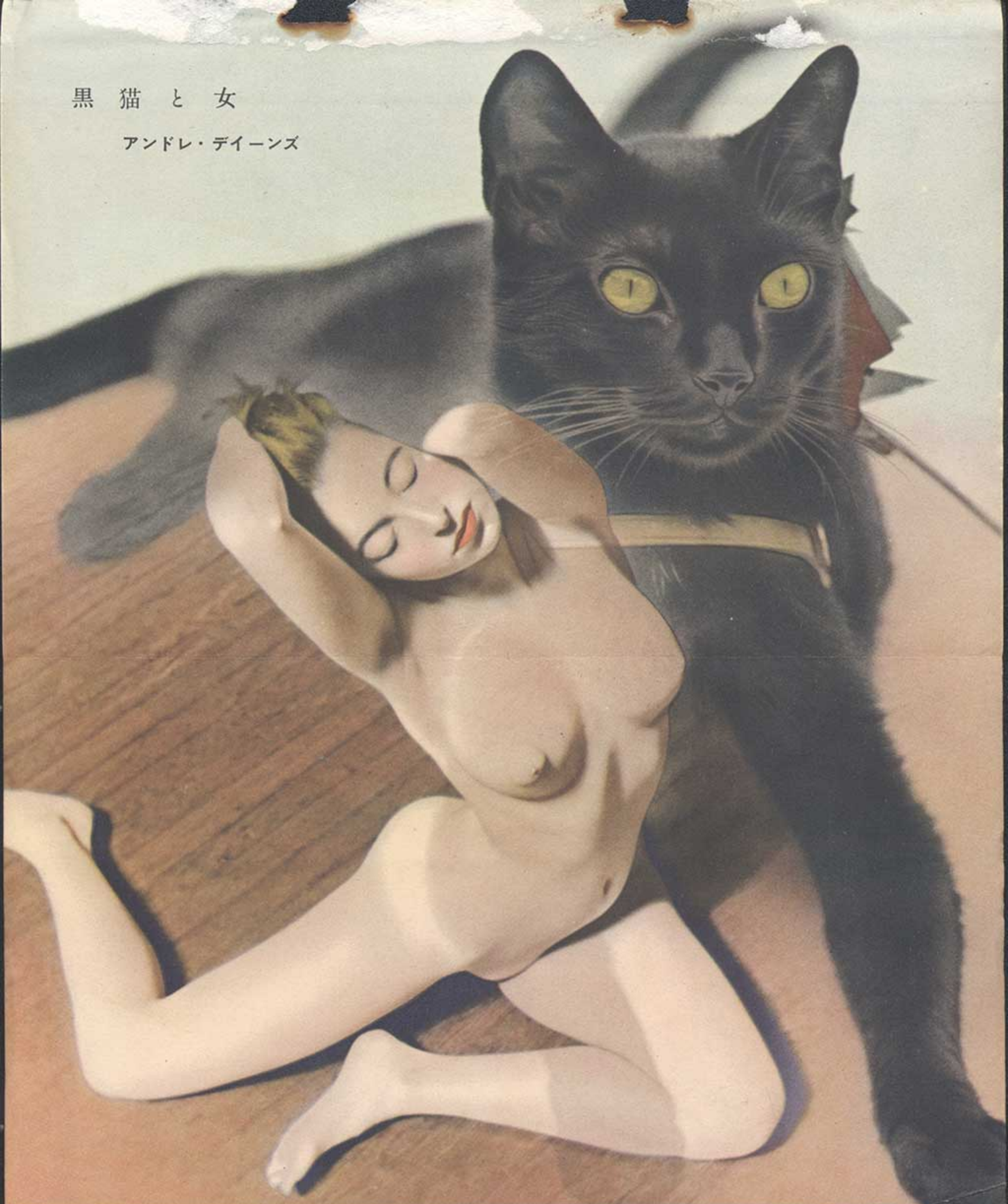
現代讀本

創刊号

日本特集出版社

黒　猫　と　女

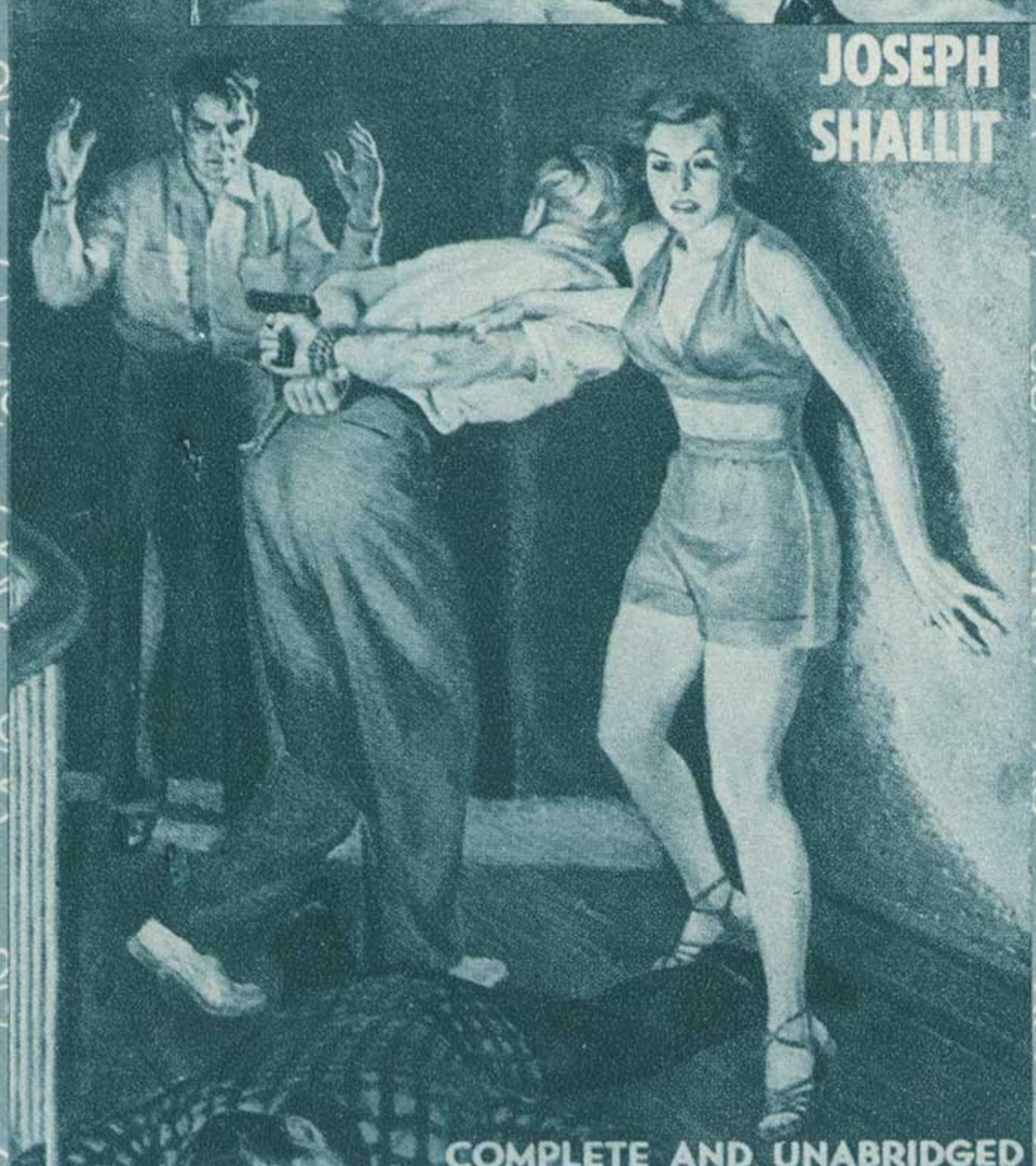
アンドレ・デイーンズ



アクション・ドラマ

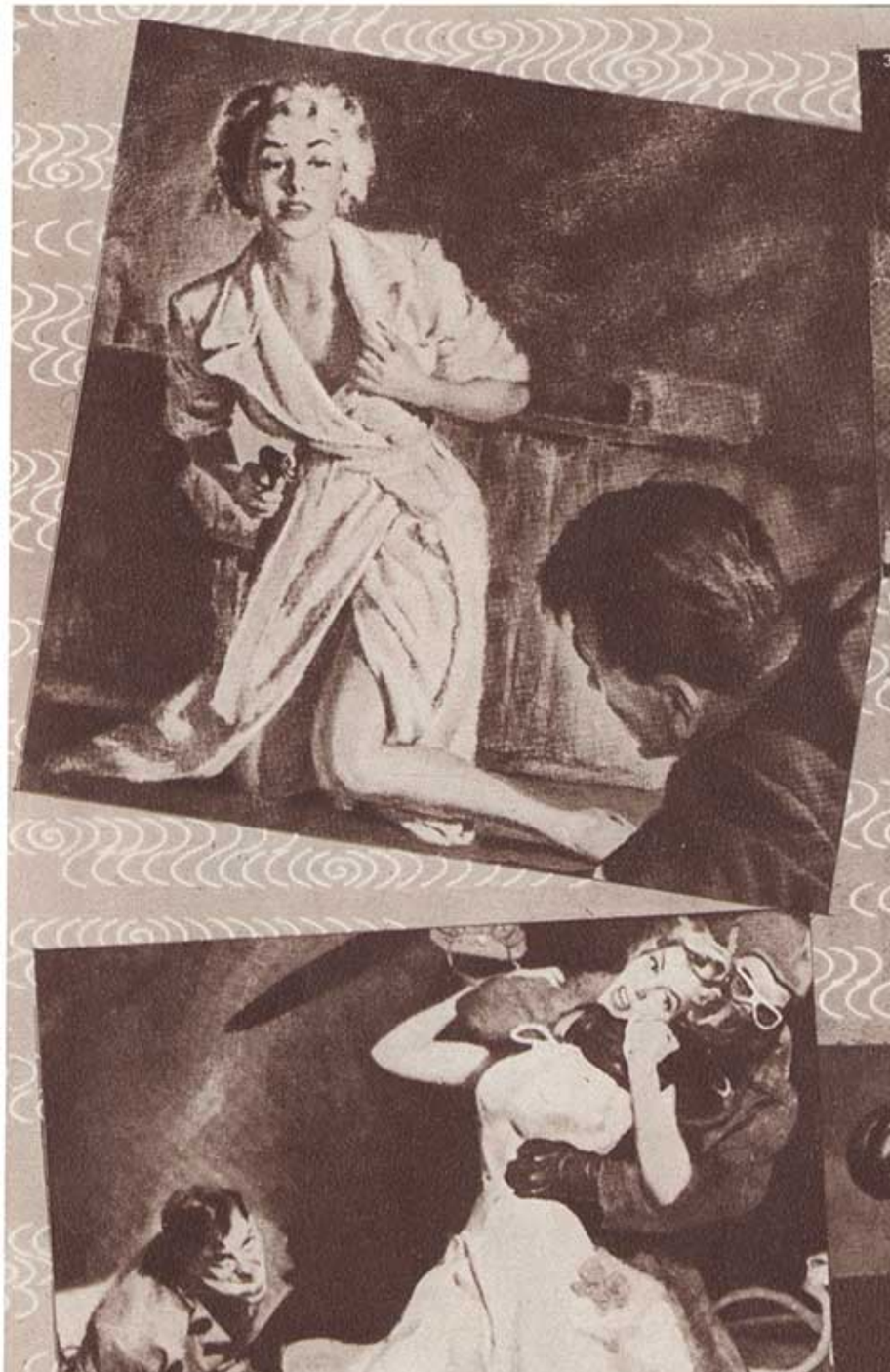
刺戟と興奮の小説・金儲時代！

外人ものの傑作表紙絵コンクール！



こんな悪魔は警察に渡すまでもない。俺は、たった今あんなに俺を酔わしてくれた真ッ裸の女の腹に銃口をあててドスンと撃ったこ犯人は美しい若い女だ。しかし、社会に存在させてはおけぬ。われらの名探偵は、人類のため、正義のために之をたおさねばならぬ。彼は、民衆の正義感の代表者。大悪漢に限って、ゆうゝと保釋されて、またぞろ悪事を重ねる。問答無益、やッちまえだ。

目下、アメリカで大流行の最新型スリラー小説。ミッキイ・スピレーンは一躍、時代の寵児になった。『きゆッとキッスして』、『俺の拳銃は素早いぞ』などの題名が示すとおり、それは、血と女体の匂いが立ちこ



近代人の趣向に百パーセントぴったりしている。健康で、セックス的で、しかも正義感を満足させる。

われわれは、も早やカビ臭い、お為ごかしの旧時代の偽モラルは沢山だ。さっぱりと、はつきりと、スリルを味わい、現実に生きよう。

めたジャズ協奏曲。しかも、近代的文明人の持つ正義感に貢かれた興奮剤にして鎮静剤だ。

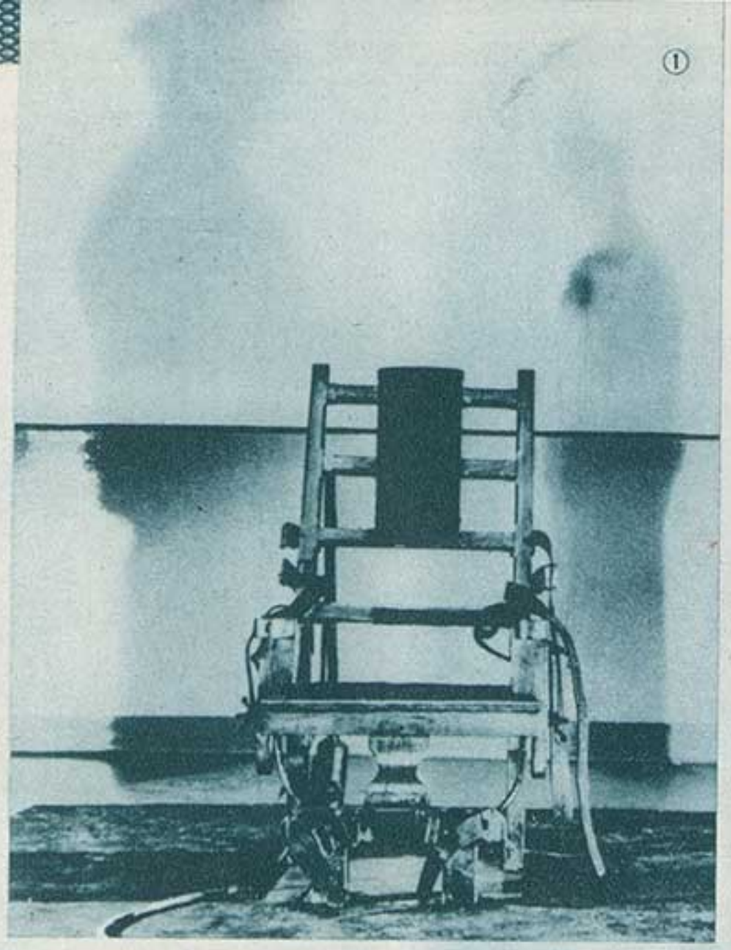
この種の小説や本の表紙もセンセイショナルなもの。「完全本」「完全無削除版」と銘をうち、

「あたしは血みどろの男のからだは見たことがなかったわ」などと見出しがついている。

全米やんやの喝采で売れる、売れる。それは、〳〵。そのはずである。

犯罪科学グラフ

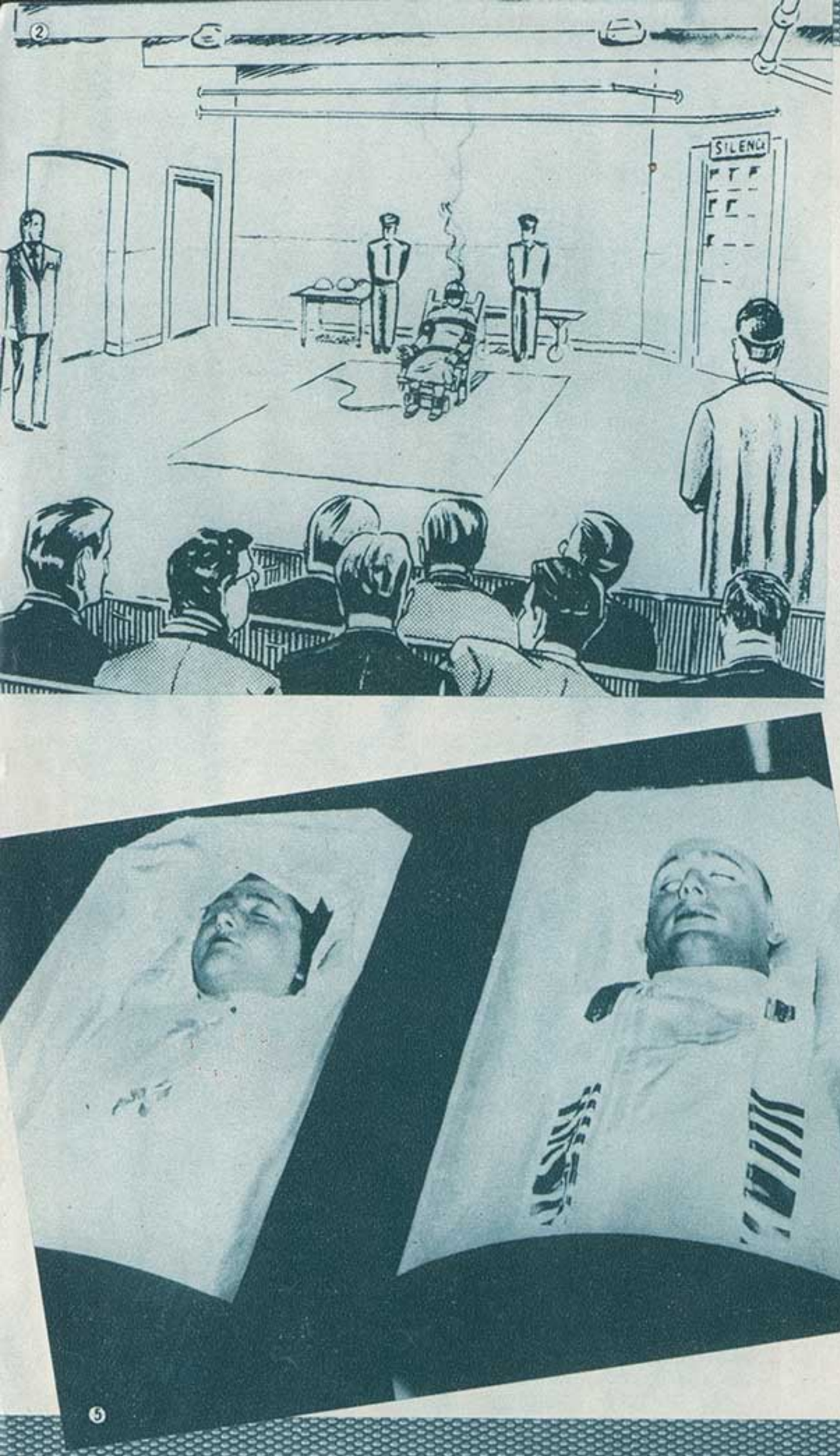
最新の電気椅子


①

科学の進歩と共に死刑の器具も発達し、アメリカでは写真のような電気椅子やガス死刑室を使用している。

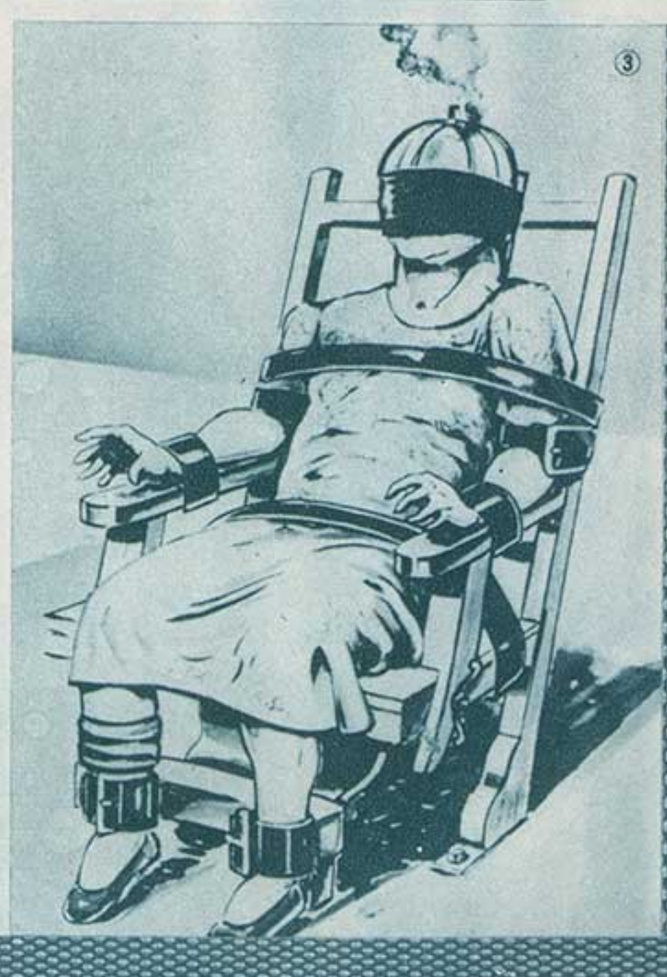
最近原子力スパイとして一世を騒がせたジュリアス ローゼンバーグ氏とエセル夫人は、全世界からの助命嘆願も空しく昨年六月十九日、二人の子供を残して電気椅子の露と消えた。グラフ①は夫妻の坐った電気椅子、うしろの人影が無気味である。②はその死刑室全景③④は夫妻死刑の想像図で、午後八時四分ジュリアス氏の椅子に電気が通じられ、三度の電気ショックの後、八時六分四十五秒定全に死亡した。電気椅子は通常三度の電気ショックが加えられるが、エセル夫人は三度では死にきれず五回ショックを繰返えした。⑤は眠るように安らかな夫妻の遺骸である。

（尚、こゝに掲げた絵は、死刑室に特に入室を許された画家がスケッチしたもの。カメラマンは一人として入室を許されなかった。）



⑤

④

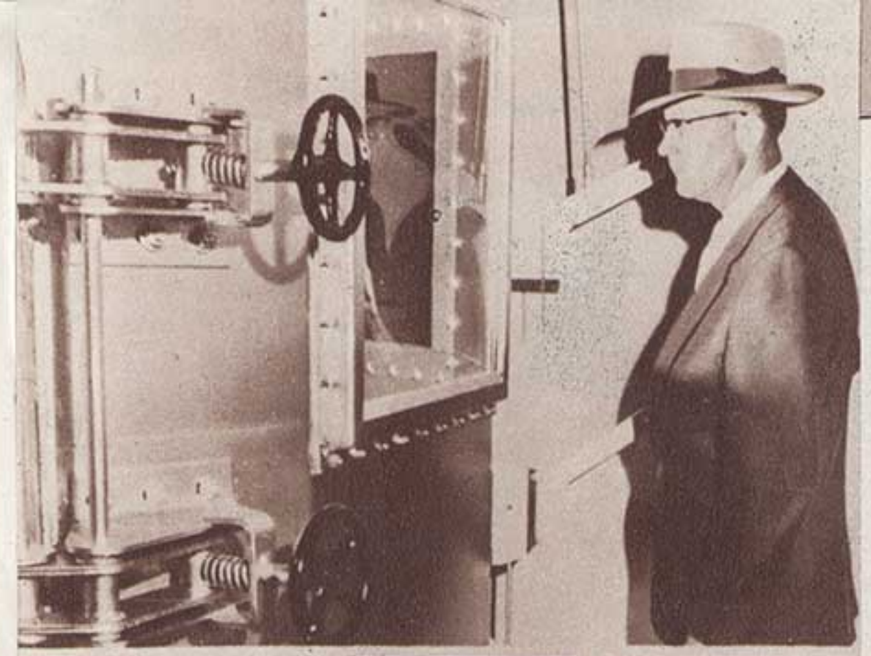

③

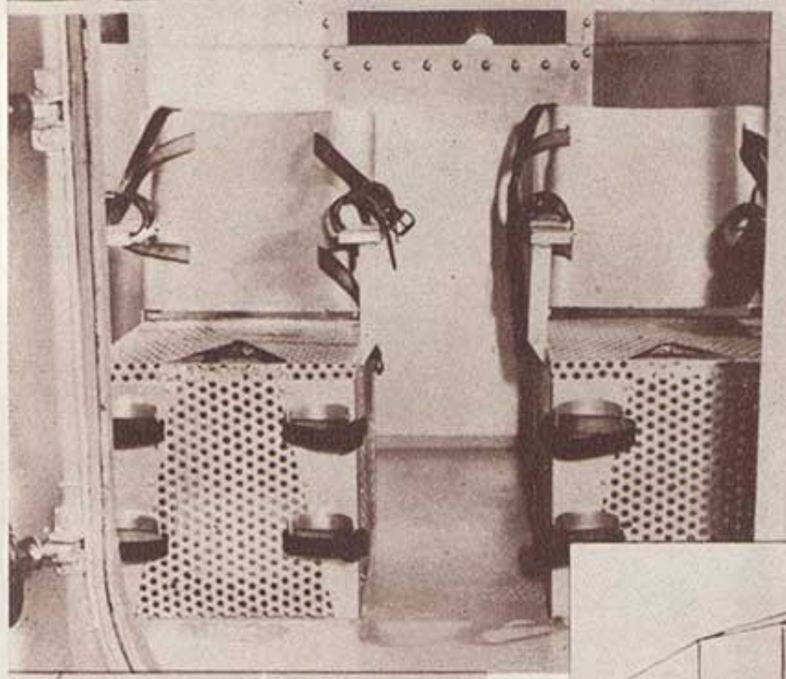
最新アメリカ女性の美容体操？

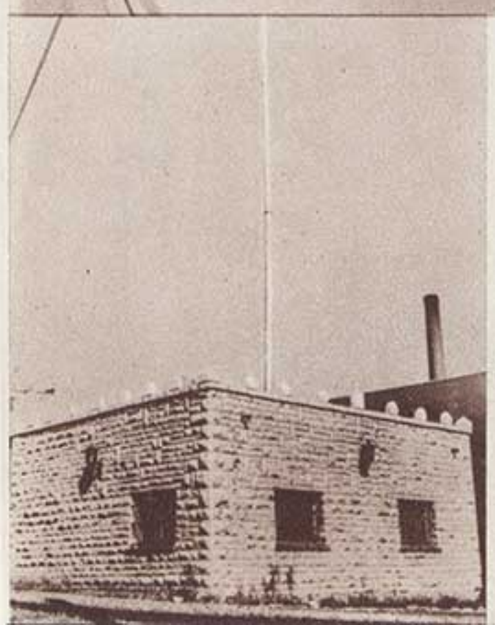
アメリカにはいろんな室内遊戯があるが、こゝに紹介する写真も、美容法を兼ねた御婦人のプレイである。一人がアクティブ（積極的）な役を受持ち一人がパッシヴ（受動的）な位置となつて、ベルトや革製の肌着を使い、写真の如きいろいろな遊びをして、汗をとり、肉体の曲線の美しさを保つ訳である。

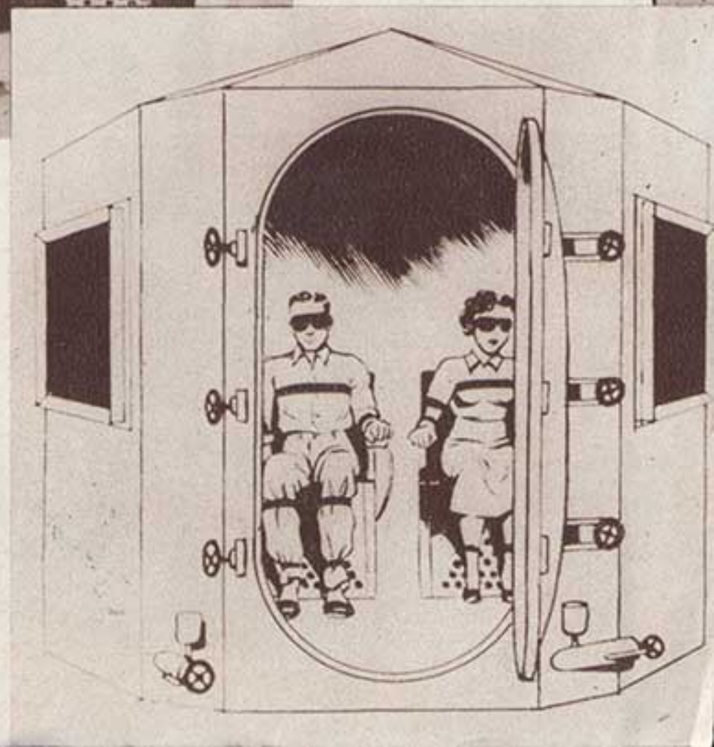
ガス死刑室

昨年十月、六十万ドルの身代金を目当にアメリカの富豪グリーンリーズ氏の子息ボビーちやん（六ツ）を誘拐殺した犯人カール・オースチン・ホールと赤毛のボニー・ヘディーは空前のスピード裁判で死刑を宣告され、ミゾーリのガス室で死刑を執行された。写真はそのガス室で、ドアを密閉してから椅子の下の硫酸を入れた樋の中へポタシウム・シアン化物の錠剤を入れると、毒ガスが発生、椅子の穴から出て室内に充満、四十五分で人間を完全に死にいたらしめる。左下はガス室の全景、高い煙突からガスを排出する。









（前頁からの続き）

ぶたれる方はいかにも痛そうな表情をしているが、はじめから遊びなのだから、やはり楽しそうな雰囲気が見える。

御婦人には生来被虐性がある、という定説だから、

そんな点からこの遊戯がお気に召したのか、アメリカでは大分流行という話である。日本では未だこんなプレイは行われていない。

てきや夜話 其一回

ブル政

改二代

秘田余四郎 由谷敏明画

(一)

「ブル政」こと大西政次郎は、恐ろしく口の不調法なてきやだった。口上売を身上とするてきやが口下手とあっては、これほど、稼業に不向きな男はないわけである。だから、大体が金にはあまり縁のないてきやでも、彼ほどの赤貧は類が少なかった。しかし、てきや仲間では、彼の盛名を知らぬ者はなかった。彼の属する一家で、彼は磐石のような重みを持っていた。口よりも手が早かったからである。彼は昂奮すると、顔面の血が一時に引くと同時に、唇がブルブルとわなないた。日頃の彼を知るほどの連中は、それを見たとたんに、すは！　と飛び退いた。一刻も早くその場から消えないと、命が危いのである。無鉄砲などというものではない。狂気となるのだ。瘋癲と化するのであった。それも、相手を見てやるというような器用な真似は彼には出来なかった。いかに貫録のある大親分に向っても、どんな向う見ずの若い衆に対しても、一旦唇がブルブルとなったが最後、遂巡することを彼は知らなかった。ところが一方、相手が取るに足らぬ女子供の場合であっても、彼は寸毫も容赦をしないのである。そこが、狂気であり、瘋癲である所以で、そんな時の彼は鬼にも譬えられた。しかし、平生は極くお人好して、時たま笑うと、いかにも無邪気に相好を崩した。彼はその長からぬ生涯に、両手の指で間に合わない程の数の女房も変えた。というよりは、狂暴性を発揮しては、女房たちに逃げられたと云った方が正しかった。

しかしながら、こんな男にも、シーグフリードのように、一つの死角があった。手の出せない相手が一人だけあるのである。それが、一人息子の政吉だった。

(二)

政吉は、政次郎の四人目か五人目の女房に出来た一粒種だった。鬼をもひしぐ男にも、親子の情愛は又格別と見えて、政次郎は政吉に眼がなかった。

政次郎は、賭場へも、ねんねこ半纏で政吉を背負って行った。高市の喧嘩に、ドスを抜いて走る彼の背に、政吉の幼ない首が揺れている時さえあった。田舎女郎との一夜に、政吉を中に、川の字に寝たことも幾度かあった。

政吉は、やくざのあらゆる悪徳のうちに、成長して行った。だが、物心つくようになると、そうした泥沼が、政吉には、子供心にも堪らなく厭でならなかった。自分だけは、まっとうな人間になろうと、幼ない心に誓っていたのでもあろうか、よく勉強もして、学校では、いつも首席を通した。

政次郎は、ろくに字も書けぬ男なだけに、成績のいゝ政吉を事毎に自慢の種にした。

「あいつは、天然物だよ」

「ブル政」はよくそう云った。天才という意味らしかった。

「ブル政」らしい表現である。

戦争が始まり苛烈になると、てきやという稼業は続けられなくなり、政次郎は徴用工として働いた。そして食う物も食わずに、政吉を商業学校へ入れた。新聞配達をしながら、政吉は商業学校の四年生になった時、特幹の志願をして入隊した。宇品の桟橋から南方へ送られる時に、政吉は一人の老兵に敬礼をされた。召集された父親の政次郎一等兵だった。政吉は兵長の襟章をつけていた。

終戦後、間もなく父子とも復員して、再会した。政次郎は自分の天地を取り戻したように、終戦後のどさくさに暴れ廻った。懐ろ工合も、彼の生涯を通じて、この時が一番よかったいえた。政吉は、ラジオ屋へ勤めた。あくまで堅気な人間として、世の中を渡りたかったのである。

(三)

最初、政次郎と政吉は本所の掘立ての借家跡の濠舎に起居していたが、半年たらずで、政吉はそこに小さなバラックを建てた。政次郎は家を外に飛び歩いたが、政吉はつゝましく、留守を守った。政次郎は、安心して、いよいよ家をあけた。というよりは、律義な政吉が、煙たかったためでもあった。

ところが、ある夜、政吉が布団に潜りこんだ時、政次郎が戸板に乗せられて運ばれて来た。背なかの不動の刺青が、ずたずたに切られて、幾筋もの創口が赤く開いていた。もう事切れているかと思われた「ブル政」が、息子に声をかけられたとたんに、

「政吉、助けてくれ！」と一言いった。それが「ブル政」の最後の言葉だった。四十五才を一期として彼は生涯を終えたのである。

政吉は唇をかみしめて、無言のまゝ、父親の唇に末期の水をふくました。二度と慄えることのない唇に。だが、そうしながら、政吉の唇が、わなわなと慄え始めていた。そのうちに、彼はさっと立ち上って、暗夜の戸外へ飛び出した。

兄弟分たちが集まって、通夜をした席にも政吉は戻って来なかった。

翌々日の深夜、政次郎を眠らしたてきや一家の親分が一人の若者の殴り込みを受けて、脾腹をえぐられて果てた。それでも、政次郎の兄弟分たちは、それが、政吉の仕業とは気づかなかった。

政吉は不眠不休で相手の親分を殺害した。そして、その足で、高崎へ向った。生みの母に一眼会いたかったのである。深夜に汽車はない。朝まで待つのが待ち遠しく、彼は徒歩で高崎の方へ向った。翌朝、くたくたになった彼が大宮の警察の石段の上で、眠りこけていた。返り血を浴びた彼は、難なく、捕われた。警察の前と知って寝込んだのでは勿論なかった。

(四)

政吉は二十一歳で「ブル政」を襲名した。

保釈で出て来た彼を大挙して、一家が迎えた夜だった。

やはり彼も無口で、商売は出来なかったが、「ブル政」の本領を発揮したことは、その後も、再三あった。たゞ、彼には父親と違ったところが一つあった。それが商売女であろうと、彼は、女に手を出さないことである。たとえ、その二階の窓が開いていた。体よく逃げ出した。てきや仲間で、無理矢理、淫売宿へ連れ込んだことがあった。政吉は、唇をブルブルと慄わした。仲間はあわてて、逃げ腰になった。政吉は、さっと立ち上った。仲間が飛んで逃げた。しばらくして、怖る怖る部屋へ戻ってみると、政吉の影は消えて、跳び降りて政吉は逃げて行ったのに違いなかった。

政吉は二十五歳で、親分の跡目に指定された。それと同時に、親分の一人娘を娶わされた。

その婚礼の夜、政吉は浮かぬ顔をして、しきりにもじもじしていた。その夜、花嫁と二人で新婚旅行へ熱海へ発った。

宿屋で二人きりになると、「ブル政」ははじめて、口を切った。

「お前、まさか男は知らねえだろうな」

「まあ！　そんなこと聞くなんて！」

「知らねえんだな」

「勿論よ」

「そうか！」

政吉はがっかりした様子だったが、突然、

「二時間ほど待ってくれ！　頼む！」

と云ったまゝ、彼は外へ飛び出した。しばらくして、糸川辺の夜の女に、政吉は自ら捕われていた。手解きを受けるためである。一時間もせぬうちに、彼は飛んで帰った。

「いゝか、これは誰にも内証だぞ。俺たち夫婦の仲だけのことだぞ、いゝか」

花嫁は、何かしらないが、夫婦の仲の内証だという事だけで、ニッコリ微笑んで、頷いたのである。

夜の霧の殺人

関屋陸児

1

2

3

ドリーム

4

ドリーム

5

6

7

殺したな

8

トンデモナイ

9

君が犯人にチガイナイ

10

11

12

イタイ

13

ドリーム

14

ギャンソン

15

イラッシャイ

現代読本　創刊号　目次

豪華絵口

（色刷）黒猫と女……アンドレ・デーンズ作　外誌の傑作表紙絵コンクール……グラビア 1
最新の電気椅子……グラビア 4
アメリカ女性の新美容体操……グラビア 7

てきや夜話・ブル政二代……秘田余四郎
（絵物語）奔流の街……一色刷頁
アメリカの女プロ・レスリング……オフセット頁
東西映画入浴シーン競演……オフセット頁

鮮血の暗黒街・アメリカ・ギャング血闘史……黒木鉄之 (36)
殺人鬼アル・カポネと爆弾王ジム・ダイアモンドの凄まじい死闘を軸に展開する鮮血の秘史！

特別二大読物

犯罪捜査ルポルタージュ・牧山桐子の怪死……岩崎栄 (59)
絞殺された美貌の人妻の死因を豊富な現場写真と共に追究する新形式読物の圧巻！

独占紹介！特別読物・アメリカ警察の拷問……A・G・ホプキンス (77)
新聞記者の原著者が冷酷な眼でアメリカ警察の非道を赤裸々にえぐるベストセラーの独占紹介

日本やくざ決闘史・秋葉の血祭り……岩崎栄 (59)
読切連載・第一回・近世怪盗伝・日本左ヱ門……岩堀泰三 (86)
暗黒王物語（第一回）・反逆児デリンジャー……金子龍二 (94)
★宝の渡り鳥物語★泣くな演歌師……添田さつき (242)
勝負師の生態（花札の巻）……倉田一平 (174)

西洋拷問具研究……坂ノ上言夫 (229)
思い出のギャング映画……山下修平 (204)

性犯罪の発生とその捜査苦心実話集

戦慄の〝鎌切り魔〟……三谷祥介 (216)
囮になった処女……福岡透 (222)

やくざえれじい

（時代篇）股旅道化……志摩次郎 (150)
（現代篇）傷だらけの愛情……伊賀逸兵 (155)
血まみれハワタリ譚・探偵小説よもやま話・ボクシング・八百長秘話……沼田清 (140)
意外な犯人たち……中島河太郎 (167)

秘辺話境・媚薬の秘境……関川周 (124)
ある金庫破りの生涯・十万ドルの指……広瀬雄 (145)
てきや放浪記……林喬之介 (160)

特異風俗の研究

私の耽溺日記……喜多玲子 (187)
男性アブノーマル読本……鬼山絢策 (180)
そのあと交際術……鹿火屋一彦 (236)
軽症マニヤ雑談……大槻久良二 (212)

ギャングスター伝列・スクリーンの顔役たち……高橋普 (131)

異色風俗小説長篇二人集

長篇アブ・ストオリー・加虐株式会社……日夏由紀夫 (102)
美貌な娘を入社させて次々と好色な教育を施す社長！　彼をめぐる数人の処女の奇妙な媚態！

官能情痴小説・女の扉……武野藤介 (194)
夜学の英語教師から世を忍ぶ男淫売に転業した男！　彼の躰を買いにくる女達の痴態！

サスペンスストオリー・スペードのエース……田代幸男 (66)
女の躰を抱き起すと脇からぜリーのような血がガバッと吹き出て来た！　力作アクション・ドラマ！

翻訳ハアド・ボイルド探偵小説・嘲笑う殺人……ダシェル・ハメット／平井イサク訳 (248)
名探偵サム・スペードの眼前で続けざまに起った二度の殺人！　行動派の始祖ハメットの傑作

新連載長篇小説・仮面劇場……宮本幹也 (48)
文壇の巨星宮本氏が満々たる野心のもとに書き下すスリルと官能の火花散る長篇第一回！

表紙・秋吉巽

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

35

36

37

38

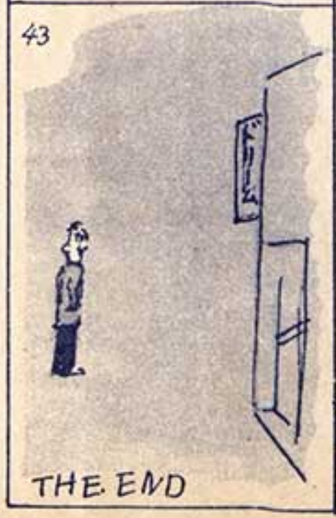
39

40

41

42

43



ギャングスト オリー
太ナん 流リう の 街ま

緒方逸馬
佐野博絵

落花

俺は橋の上で立ち止つた。煙草に火をつけたのだ。

今夜はヘンに生暖い。川岸に並んだキヤバレーの火もあらかた消えて、もうさすがに人影も途絶えたらしい。やつと訪れた都会の静寂だ。**頭の上から煙を出して、俺は何気なく歩き出した。**

と、音もなく頭上に襲いかかつてくるものがある。俺はトツサに飛びすさつて、身を沈めた。眼前、ものの三歩と隔たぬ舗道に、白い物体が風を切つて落ちたのだ。

ボロつ布のように崩折れたそれが、モゾモゾと蠢めいた。**白いレースだ。いや、すんな**

ちて來たのだ！　舗道に叩きつけられた彼女は下着一枚の眩しい半裸だつた！　街の風來坊が惡徳の渦に巻き込まれて死闘するアクシヨン・ドラマ！

りのびた肢だ。やつとそれが、シュミーズ一枚の、つまり半裸体の女だと気がついた時、女は低く呻きながら半身を起した。

俺は目の前のビルを見上げた。一つだけ二階の窓があいている。凡そ五メートルはあるだろう。あの窓から飛び降りるなんて途方もない女だ。

その勇敢なレデイは、呻き声を噛み殺しながら、鋪道を撫で廻している。なるほど、あ

たりに、ハンドバツグの中身らしいものが、散乱している。行きがかり上、俺は片膝をついてそれを集めてやつた。

銀のコンパクト。口紅。それから薄汚れた小さな木札。への13と焼文字が書いてある。まるで風呂屋の下足札だ！。

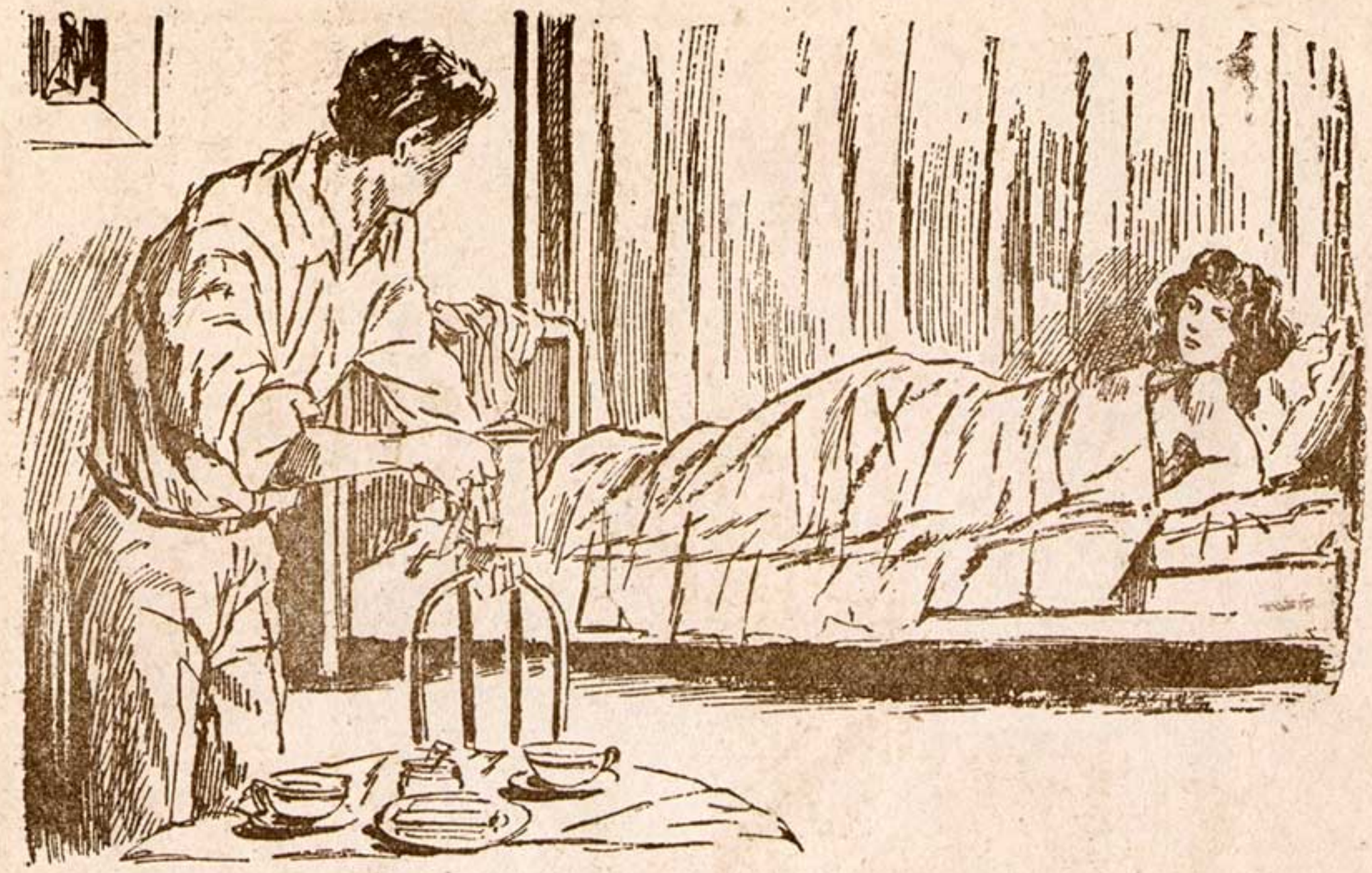
街燈にすかして見てそう思つた時、白い手がツとそれを攫つた。ものも云わずハンドバツグに押込んで、パチンと鋭く止め金を鳴らすと、女は立ち上つた。だが、案の定、二歩と歩けずヨロヨロと倒れかつた。

俺はむき出しの腕をつかんで、女をささえた。女の顔が近くにあつた。大きく乾いた眼が刺すように俺を見る。唇にも血の気がない。

「車をとめて、早く……」

喘ぐと、胸の隆起がゆれる。俺は思わず眼をそらした。それから折よく近よつて来た空車に手をあげた。

俺のアパートの前で車が止つた時、彼女は



もう歩けなかつた。当り前のことだ。運がよくたつて捻坐ぐらいしているに違いないのだ。他に方法がなかつた。俺は女を背負つて階段を上つた。

女の躰は生暖かつた。そしてズツシリと重い。その女がしつかり握りしめている黄色い革のハンドバツグが、丁度僕の顎の下にあつた。

灰色のビル

翌朝、俺はソフアで眼を覚ました。首をもち上げると、ベツドにウエーブのついた、黒い髪が見える。女はまだ眠つているらしい。

俺は快的な気分でトースターのスイツチを入れた。テーブルの上に、皿もカツプも二人前だ。こいつは俺の部屋では珍しいことだつた。コーヒーの香りが、漂い始めてから、俺は朝刊をひろげた。

まるでギユツと、心臓をつかまれたような具合だつた。社会面の見出し活字にである。

昨夜××ビルで謎の殺人事件。被害者は三十二、三才の男。鈍器様のもので殴殺か……。傍に問題のビルの写真が出ている。昨夜の川つ端のあのビルだ。しかも美女天降りのあの窓に、御丁寧に白い矢印がついているのだ。

俺は思わず唸つた。それから新聞越しに、ベツドの方を見た。黒い大きな瞳が、ヒタと俺の視線を迎えた。女は起きていたのだ。彼女は一夜で元気を回復したように見えた。

あの意志的な瞳は、この新聞記事を察知しているに違いない。この女が、謎の殺人事件の鍵を握つているのだ！

俺は新聞をおいて立ち上つた。

「お眼ざめですか、お嬢さん。コーヒーがうまい具合に入つてますよ。どうぞ御自由に御食事をおとり下さい」

返事はなかつた。が俺は外出の支度をしてアパートを出た。貞操の危機だか生命の危機だか知らないが、なにしろシュミーズ一枚で、あの窓から飛び降りるほどの、度性骨のある女だ。聞いたつて謎を明かしやしないのは知れている。それなら、こちらは自分で探ぐるばかりだ。丁度失業中の退屈さましにもなると云うものだ。

例のビルは、昼間見るといやな灰色だつ

た。

近づくと、丁度そのビルの玄関から出て来た男の横顔に見覚えがあつた。

「オイ、瀬戸じやないか！」

「やあ、暫くだな」

彼は白い歯をむき出して笑つた。大学の同期生で、今はA新聞社の社会部に勤めている、気持のいい奴だ。近所の喫茶店に入つて彼と向き合うと、俺は早速探ぐりにかかつた。

「××ビル殺人事件のホシはついたのかい」

「ああ、それで飛び廻つているんだがね。どうもこいつは迷宮入りらしいな」

俺は驚いて瀬戸の顔を見た。

「被害者と云うのが、麻薬密輸に首をつつこんでいた奴でね。どうも仲間割れらしいんだ。椅子に縛りつけられて、拷問された揚句、嬲り殺されていたんだがね。あの連中のリンチと来たら、巧妙に仕組まれていて、ホシはあがりつこないんだ」

俺は再び唸つた。女の、豊かな胸のあたりが、頭の中にチラチラする。

「ところで、被害者の死亡時間、つまり、昨夜、何時頃殺されたのだい？」

「昨夜の十一時前後らしいな。厄介な事件だよ」

十一時。女は、まだビルのあの部屋にいた筈だ。惨殺された死体と一緒に？　彼女が犯人だと云うのだろうか？

俺はフト口をつぐんだ。傍のボツクスにいる、小男の眼付が気になつたからだ。黒いハンチングをかぶつたその男は、まつたく気に喰わぬ面構えだつた。

夜の紳士たち

ドアを明けた時、女はいなかつた。代りに一枚の置手紙があつた。

「無断で御洋服を拝借します。すみません。ミドリ」

なるほど洋服箪笥の中から、白いセーターと、スコツチのズボンが消えている。俺は自分の間抜けさ加減に腹を立てながら、ベツドの上に転がつた。かすかに、女の移り香がする。ミドリか、あの女らしい名前だ。ひよつとすると、何処かのキヤバレーのダンサーかもしれないと思つた。

昨夜痛めた足の具合では、暫く外出出来まいと思つていたのだ。何故か俺はがつかりと気落ちしていた。

だが、そのままでいた。しかし、なにか異常だつた。眼をさました時、部屋の中は真黒だつた。俺は身動きもせず、闇の中に瞳をすえた。ドアに近い闇の中に、一点、赤いものが見えた。それはほ

んとに一点、赤く小さい。だが、俺の全身はゾツと逆毛立つた。それがまるで生物のように、強く弱く息づいているからだ。それは、だんだんベツドに近よつてくる。

煙草の匂いがした。赤い点が煙草の火だと気がつくと同時に、電気がついた。奴等はピストルを人だつた。歯咬みしたが、奴等はピストルを気持よさそうにひねくり廻していやがる。

「オイ若いの、女を何処にかくした!?」

右手からニヤニヤ覗きこんでいる、黒いハンチングに見覚えがあつた。瀬戸と会つた喫茶店にいた小男だ。畜生! 尾行されたのだ。奴等は、俺をいいよだ。

「ミドリはどうした。あつさり泥を吐いた方が、身のためだぜ!」

「そんな女など、知るもんか!」

「ふざけるねえ!」

腕自慢らしいのが躰を一寸左右に振ると、凄まじいパンチが飛んで来た。顔が曲りそうだつた。

「知らん? フフフ、それじやあ、このハンドバツグは誰のだよ!」

俺の眼の前に、黄色い革のハンドバツグが転がつた。あんなに大事そうに握りしめていたそのハンドバツグを、女は残して去つたのだ。奴等は、俺をいいようにしやがつた。

瞼が切れ、顔中血だらけになつた。その上、鋼鉄の短い銃身が俺の胸元にあつた。

「オイ、念仏でもとなえるがいいぜ!」

銃口が大きく迫つたと思うと、そいつがクルクルと廻り出した。

深夜の電話

その時、廊下をパタパタと足音が近づいてくる。それから、ドアがひびいた。俺も奴等も、シーンと息をのんだ。

「竹内さん! 電話ですよ。こんなに遅く、まつたく迷惑なこつた……」

奴等は顔を見合わせた。首領らしいのが、グイと顎をしやくつて囁いた。

「返事をしろ！　よけいなことをぬかすと承知しねえぞ！」

ピツタリ、脇腹にピストルが吸いついているのだ。俺は叫んだ。

「すみません！　今行きます！』

管理人の足音が消えると、奴は再びドスのきいた科白を浴びせかけた。

「ミドリからかも知れねえ。電話に出てみろ！　いいか、無駄は云わねえで、あいつの居場所を聞き出すんだ！」

こうなつたら、御意のままだ。電話室は廊下のはづれにある。狭いその電話室に、左右から小男とボクサーくづれらしいのが、ピタリとくつついて入る。だが、深夜に近いアパートの廊下には人影もない。受話器をとりあげた。

「モシモシ、竹内さんですね？」

祈りは空しかつた。電話はミドリからだつたのだ。

奴等は色めき立つた。

「モシモシ、無断で消えちやつて、御免なさい」

「いや……、足の怪俄はどうです？」

我ながら嫌になつた。しかし、両脇からピストルを突つけられて、他にどう喋れば いいんだ。

「足はもういいんですけれど、御迷惑ついでに、お願いがあるの。これからすぐ来て頂きたいわ。場所は△△駅前広場を……」

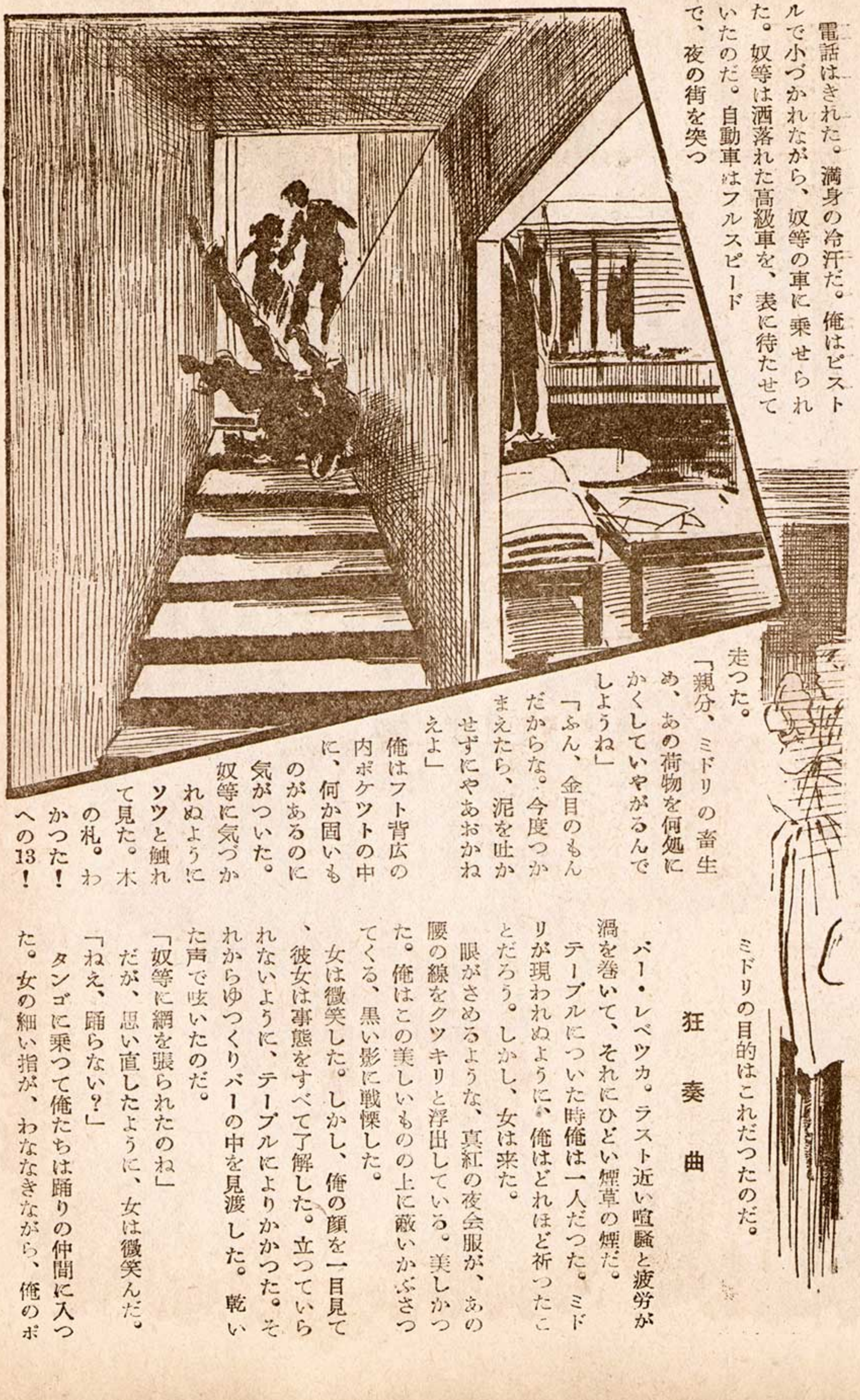
俺は背筋が氷るような戦慄を覚えた。なんと云うことだ。奴等が耳を澄ましていると云うのに……。

「わかつて？　レベツカつてバーよ、すぐ来て頂けるわね？」

「ミドリさん……」

「ああ、それから、昨晩着ていらつしてね。フフるかもしれないから、あの背広よく似合うわ」

チエツクの背広を着て



電話はきれた。満身の冷汗だ。俺はピストルで小づかれながら、奴等の車に乗せられた。奴等は洒落れた高級車を、表に待たせていたのだ。自動車はフルスピードで、夜の街を突つ走つた。

ミドリの目的はこれだつたのだ。

狂奏曲

バー・レベツカ。ラスト近い喧騒と疲労が渦を巻いて、それにひどい煙草の煙だ。

テーブルについた時俺は一人だつた。ミドリが現われぬように、俺はどれほど祈つたことだろう。しかし、女は来た。

眼がさめるような、真紅の夜会服が、あの腰の線をクツキリと浮出している。美しかつた。俺はこの美しいものの上に敵いかぶさつてくる、黒い影に戦慄した。

女は微笑した。しかし、俺の顔を一目見て、彼女は事態をすべて了解した。立つていられないように、テーブルによりかかつた。それからゆつくりバーの中を見渡した。乾いた声で呟いたのだ。

「奴等に網を張られたのね」

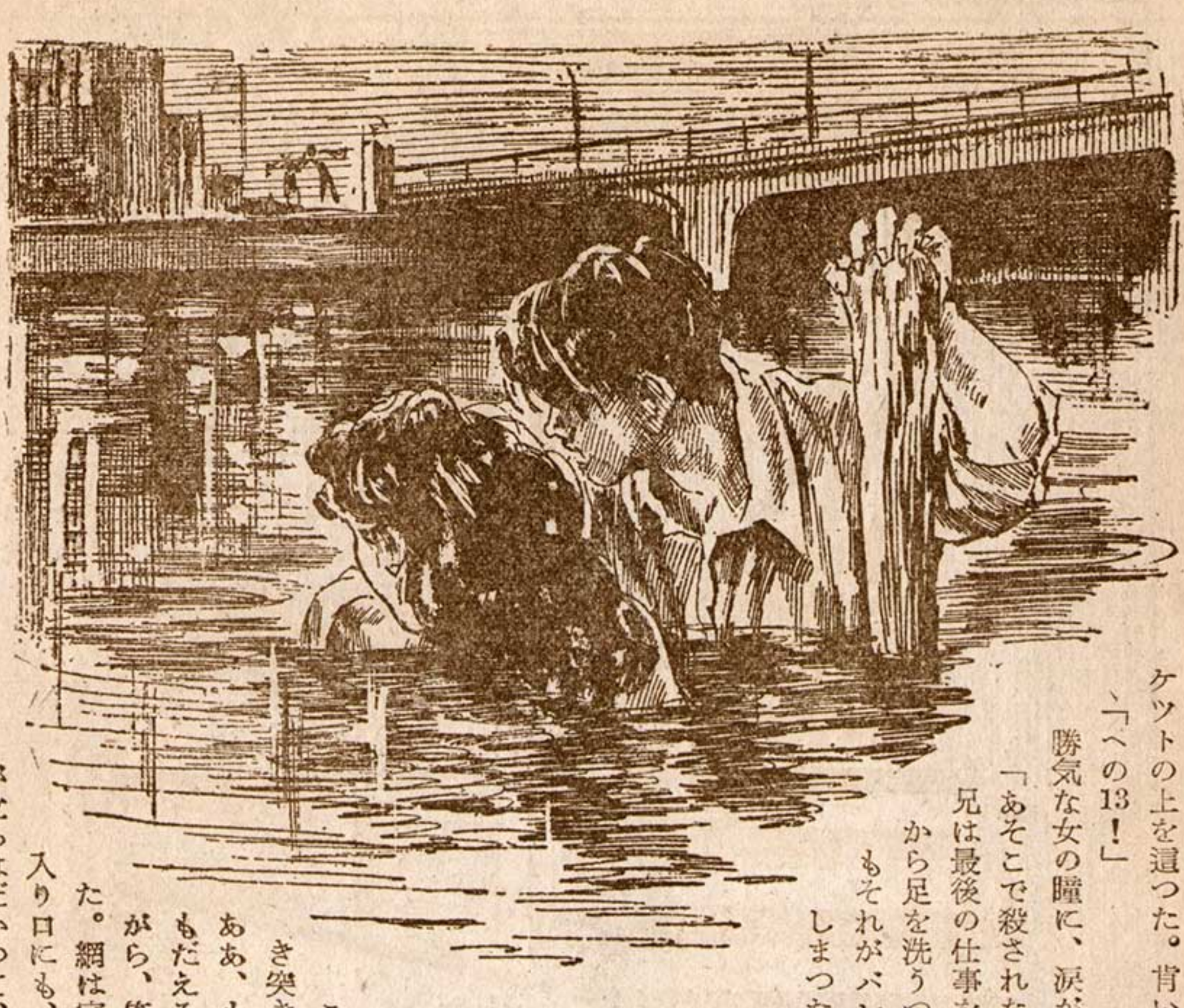
だが、思い直したように、女は微笑んだ。

「ねえ、踊らない？」

タンゴに乗つて俺たちは踊りの仲間に入つた。女の細い指が、わななきながら、俺のポ

「ふん、金目のもんだからな。今度つかまえたら、泥を吐かせずにやあおかねえよ」

俺はフト背広の内ポケツトの中に、何か固いものがあるのに気がついた。奴等に気づかれぬようにソツと触れて見た。木の札。わかつた！ への13！



ケツトの上を這つた。背いて俺は囁いた。

「への13！」

勝気な女の瞳に、涙が浮かんだ。

「あそこで殺されたのは、私の兄よ。兄は最後の仕事をして、奴等の仲間から足を洗うつもりだつたの。でもそれがバレて、責め殺されてしまつた……」

「ヘロインだね」

「そう。兄は死んでも口を割らなかつたわ。あたしに、この木札を渡して……。への13。それがこの△△駅前の手荷物預り所の、預り札だつてことを、やつとさつき突き止めたのに……、ああ、もう駄目だわ！」

もたえる女体を抱きしめながら、俺は八方に眼を配つた。どの出入り口にも、人相の悪い男たちが立ちはだかつて、俺たちに無気味な視線を集めている。

火のような怒りが俺を包んだ。蒼白になつた女を抱えて、俺はジリジリと壁ぎわに近よつた。スイツチが其処にあつた。一瞬、暗闇になつたバーの中が沸きかえる前に、俺は女をカウンターの中に投げ込んだ。

ピストルが八方から鳴つた。酒の瓶が破れる椅子が倒れる。悲鳴、叫喚、怒号。俺は女を抱いて走つた。走つた。裏口のドアを転がり出ると、案の定、三、四人固まつてぶつかつて来やがつた。

ガツと蹴り上げてくる不様な足をつかんで、壁に叩きつけた。一本背負い、腰投げ。キクンと、嫌な音がした。気毒だが、あいつはもう一生、右手じや飯が喰えねえわけだ。

後から羽がい絞めに来た兄さんの首を、脇の下に挟んでグイと絞めつけると、そいつは子供のように無邪気に眼を廻しやがつた。

「竹内さん！　竹内さん！」

ミドリだ。かじりついて来やがつた。可愛いい奴じやないか。俺は満足した。しかし、再び奴等が迫つてくる。

俺は女を抱いて、夜目にも白い河に飛び込んだ。河の水は冷めたい。だが、しがみついてくる女の躰はズツシリと生あたたかかつた。

現代読本

創刊号

『現代読本』は、現代人の嗜好にピツタりする"刺戟的な読物（アクション・ドラマ）"満載の新雑誌てす。言うまてもありませんが、内容はすべて新しい意図によつて執筆された新原稿ばかりです。

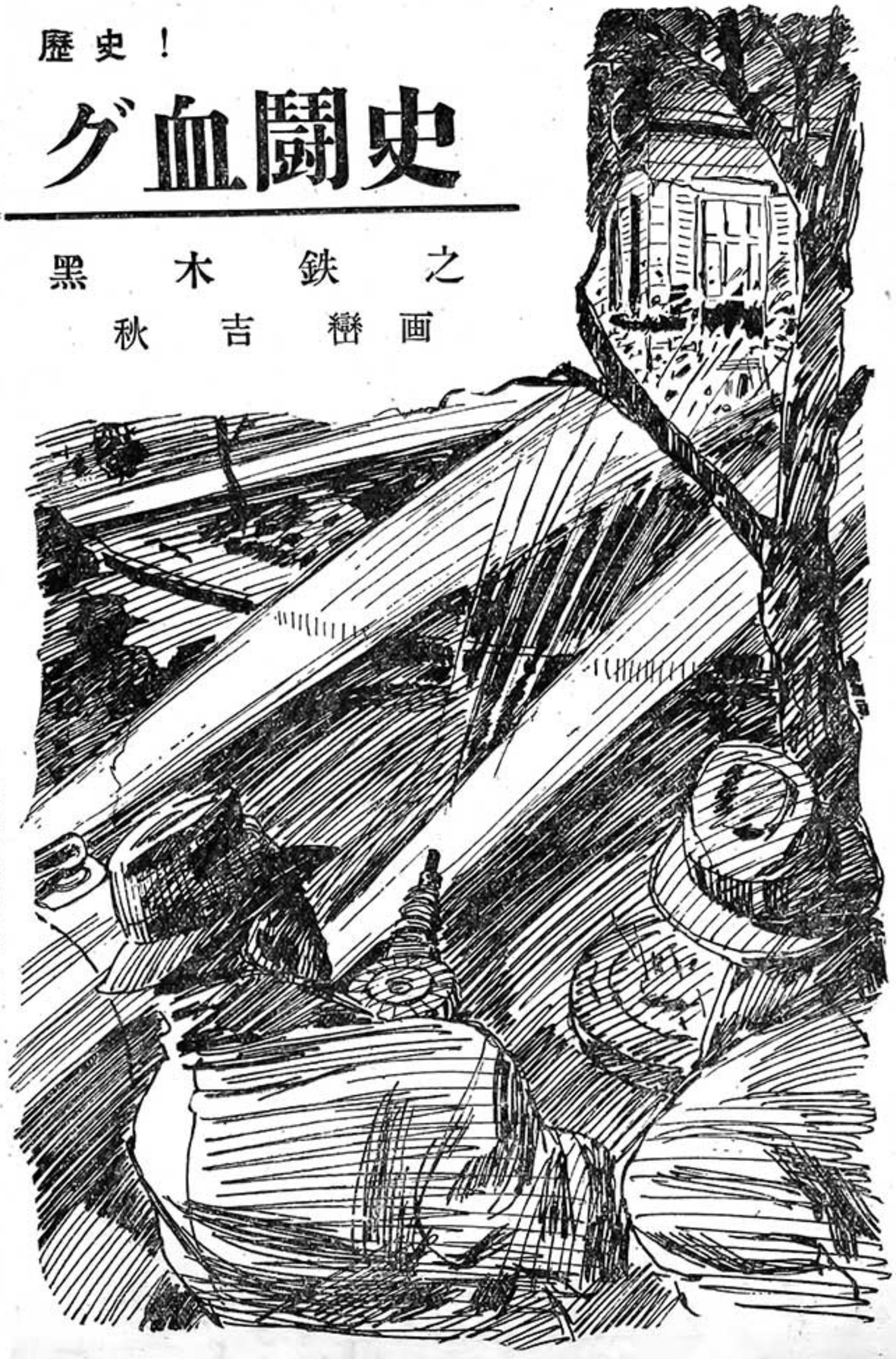
刺戟・興奮・戦慄讀物満載!!

日本唯一の行動派（ヘード・ボイルド）娯樂雜誌!!

鮮血に彩られた暗黒街の　歴史！

アメリカ・ギャング血闘史

黒木鉄之
秋吉巒画



1　俺が法律だ！

「ギャング」という英語は元来「群」とか「団」とか、つまり「グループ」というのと同じ意味である。それが「ギャング」といえば、直ちに、もつぱら暗黒街の住人たちのことを意味するようになつたのは、そう古いことではない。せいぜい三十年前くらいから云われ出した。

単に、殺人者であり窃盗者であり盗賊、ならず者と呼ばれていたものが、「ギャング」といわれるようになつたのは、即ち彼等が一つの強固な組織と、それにともなうすぐれた機動力を持つに至つたからだ。

じつさい彼等は、地上の憲法に対して、彼等自身の地下の憲法を樹立し、昼の法律に対して夜の法律を支配し、ゆるぎない王国を建設した。彼等は昂然と叫ぶ。

「俺が法律だ！」

と。人々はギャングの世界を認めた。だから

「アメリカの昼間は大統領が支配し、夜のアメリカはギャングのものだ」

と明言してはばからぬのである。まつたくギャングは、二十世紀文明が生んだ新しい英雄となつた。人々は争つてギャングの殺し合いの物語を貪り読み、そこから最も新鮮な冒険とスリルと、光彩とロマンスを見出した。

ニューヨークやシカゴのような大都会で、高価なバラの花に埋もれた高級車の行列をみたら、それはギャングの親分の葬式だと思つて間違いない。

それでは一体、どのような社会形態から、どのような経過をへて、いかなる人物が暗黒街のスターダムにのし上り、そうしてギャング王国を建設したのであろうか。

いろいろな場合と、さまざまな条件がある。にしても、やはりアル・カポネほど、「夜の大統領」の名にふさわしいものはないようだ。なによりも、彼の出現によつて「ギャング」の名称が一般化したといえるのである。いいかえれば、彼の歴史を辿ることによつて、立派にギャングの歴史が云いつくせる。いや、アメリカ現代史

ニューヨークの巨頭ジム・ダイアモンドと、シカゴの殺人鬼アル・カポネの死闘を軸として、アメリカのギャング史は展開される！　軽機関銃とピストルと爆弾（ダイナマイト）の轟音につらぬかれた血で血を洗う殺戮（さつりく）の歴史！

の一章さえ出来上るのである。

しかし、いましばらくは、アメリカギャング史を動かす四大人物の色分けをしておかねばならない。なにも、カポネ一人に「夜の大統領」の名誉を与える必要はないし、どうしてもカポネが牛耳ることの出来なかつた人物だつているからだ。いわばカポネの好敵手として、ニューヨークの雄たるレツグス・ダイアモンド（ジム・ダイアモンドともいう）がいる。カポネが「夜の大統領」なら、俺は「夜の帝王だ」と豪語した男である。が、奇しくもカポネとダイアモンドは、それほど売り出さない前、ニューヨークの裏町で脅喝専門のやくざをしていたものだ。後になつてこそ、ニューヨークとシカゴ、即ちアメリカの夜の世界を二分して、激しく対立する親分どうしになつたが、出身は同じなのである。

としても、いまはハツキリと、カポネをシカゴギャング、ダイアモンドをニューヨークギャングとして分けるのが常識になつている。そしてシカゴギャングの大親分になつたりしているのである。東洋のカポネといわれるテツド・ルーインは、正真正銘のカポネの残党で、目下マニラを本拠に、東京の暗黒街や香港の賭博場、その他で活躍していることと、すでに周知の通りである。これはいずれ別に物語ることにする。

いうまでもないことだろうが、ギャングの一人一人、それがたとえ同じ系統や流派から出身したものでも、性格とか特長とかはちがう。親分のあとをつぐというようなしきたりは、アメリカのギャングにはないし、むしろ親分を殺らして自分が親分にのし上るというようなケースが多いのだから、彼等の一人一人、ハツキリと様相がちがうのである。

それに大親分は一人なのだ。シカゴならシカゴの暗黒街を完全に自由にするには一人でなければならない。その唯一のえらばれた者になるために、ギャング同志、激しい血闘を繰りひろげるのである。最後まで生き残つた親分の一人が、一つの世界を支配する。むろん政治的な才能もなければならない。この意味で、ギャングの血闘史は、やはりどうしても、カポネかダイヤモンドが中心になる。

2 情無用の街

ニューヨークを東京に譬え、シカゴを大阪にたとえる人がある。なるほど大ざつぱな感じはそんなものかもしれない。或るアメリカの新聞記者は、シカゴのことを、

「大へん逆説的（パラドクシカル）な街だ」ときめつけ「なぜならば、夥しい教会、公園、大学、宗教団体や学術機関があり、非常に民主的なこの町は、一方恐るべき暗黒組織をもつている。しかも警官は、九百人の民衆に一人の割でしかいない。ロンドンでは、警官は百七十五人に一人の割合だ。ローマや東京では街角ごとに巡査がいる。……」

と語つた。

このシカゴに、ジョニー・トリオという男がいた。彼はシカゴの裏街の恐るべき存在であつた。「四人の悪魔館」という奇妙な名前の博奕宿を経営していたのである。もともと彼は、ニューヨークのファイブ・ポイントからやつて来た男なのだ。ファイブ・ポイントというのが即ち、拳とピストルで一人の人間を一人前のギャングに仕立てる場所に他ならない。「ファイブポイント学校出身」といえ

ば、それでアメリカ中のどこの裏街に行つても「兄貴々々」で通用するくらいだ。おまけにこのジョニー・トリオは「フレテイ・ルーイ」とか「血のジップ」なんていう凄い連中と張り合つたことがある。

一九二〇年、一月十六日、第十八憲法修正案が問題なく是認されて、全アメリカは禁酒（ドライ）となつた。一滴のアルコール分といえども、のんではならぬことになつたのである。しかし、どうしても酒をのまずにいられない人間は多い。折しも取締の目をくぐつて、酒の密輸や密売はさかんに行われた。これについては、面白い挿話が沢山あるが、それは別の話に属するので、次に当時流行した「禁酒（ドライソング）小歌」だけを掲げておく。当時の社会人心を、この歌でのみこんでおいて頂きたい。尚、日本語に訳したのでは、裏の意味やおかしなシャレが消えてしまう点、どうも仕方がない。

〽禁酒法はひどい失敗だ
けれども我々はソレを好む。
コイツはやめるつもりのものをやめさせぬ。けれども我々はそれを好む。
コイツは汚職と堕落の尻尾を残した。
コイツはわが国を悪徳と犯罪で満した。
コイツは一文の値打もない

けれども我々はソレに賛成する。

話が先になるが、歌の文句の中の汚職も堕落も悪徳も犯罪も、カポネがみんなもたらしたようなものである。

とまれジョニー・トリオは、禁止になつた酒の密売を目論んだ。

「こいつは儲かる」と、トリオが呟いたように、ギャングの衝動はすべて、金銭への妄執なのだ。かといつてギャング達に、「あなたはどういう動機でギャングになつたのか？」ときいても「金が欲しかつたからだ」とは答えないだろう。ギャングになる動機と、ギャングの衝動とは、おのづから別物だ。彼等は、カポネに早速もちかけたのである。するとトリオの気持は、もう競争相手を皆殺しすることに傾いてしまつた。

ジョニー・トリオは、一流のギャングらしく、酒の密売の儲けを一人占めしなければ気がすまなかつた。反対に、他のギャング連もトリオと同じことを考える。自然、密売の競争相手は、おのれの勢力拡張のために、たえず殺し合いをやらねばならなくなつた。

「畜生！　奴等を何とかして、手も足も出なくしなくちやならねえ。裏口営業飲屋の親爺たちに、このトリオ様の酒以外は買わせねえようにするにやア、どうしても俺の意のままになる突撃隊員と、イキのいい相談相手が必要だ」

かくてジョニー・トリオはニューヨークの「ファイブ・ポイント学校」を物色した。彼は、シカゴで酒密売を独占するため、ファイブ・ポイント・ギャングの中の、最も優秀そうな後輩をさがしたのである。そして「弾丸のような頭脳」を持つた二十三歳の剛の者をえらんだ。そいつの名前を、アルフォンズ・カポネといつた。

「話の成行はいまいつた通りだ。おめえがシカゴに来て、この競争の始末をつけてくれるなら、密売の利益の半分はやろう」

とトリオは、カポネに早速もちかけたのである。

若い無頼漢アル・カポネは、だまつてシカゴにやつて来た。トリオはいい奴を味方にしたものである。カポネときた日には、攻撃の指導者としてすぐれているばかりでなく、密売の儲けの一部で、その筋を手馴づける策略も実にうまい。そのうへカポネは、直接、酒の密輸入にまで手をひろげた。トラックに何台ものビールを、飲屋の裏口に運びこんで、もし親爺が「買わない」とでも云おうものなら、忽ち親爺は息の根をとめられ、店は叩き

つぶされてしまうのだつた。カポネは絶対に情容赦のない男であつた。そのデンで、僅かのあいだに彼は、七百人の部下を駆使するようになつた。

3　アル・カポネのアルキー料理

すでにおわかりのように、ギャング興隆のそもそもの原因は、疑いもなく禁酒法、もつとも正確にいえばアル・カポネのビール売つけであつた。アル・カポネは、結局ビール密造までやつたのである。この酒の密造のことを「アルキー料理」というのだが、やがてそれは、もつと恐ろしいことを意味する言葉になる。

アル・カポネのアルキー料理！

彼は遂に人間を束にして殺す戦術を生み出したのだ。のちにいろいろと新事業を起して、著しく勢力を拡張獲得したカポネだが、それらはことごとく彼の「アルキー料理」、即ち敵対するギャング団を片つぱしから血祭りにあげて行くことによつて成し遂げられたのである。いまや、トリオでさえも、カポネのうしろで色あせた存在となつてしまつた。

カポネとその一党は、銃身の短い散弾銃と、トンプソン機関銃を射ちまくつたのである。この威力の前には、さしも最後までカポネと張り合つたシカゴ名うてのギャング団も、ついには滅びて行かねばならなかつた。オバニオン団、ジエソナ団、アイエロ団、みんなやられた。

このギャング団同士の戦争で、近代文明都市シカゴも、一時未曾有の殺人流行に苦しめられたものである。カポネが最初に用いた機関銃戦法は、他のギャングたちにもすぐ取り入れられて、さらに色々の戦法を生んだのだつた。その標準的な方法を一つ二つ紹介しよう。

一つは、盗んだ自動車に散弾銃と軽機関銃で武装した一味がギツシリ乗りこみ、相手の自動車を追跡し、その自動車の傍に乗りつけて無理に道の端に押しつめ、そして一斉に発砲するのである。こうすれば相手は自動車もろとも蜂の巣になつてしまう。完全に片付けると人通りの中へ姿をかくし、やがて安全な

地点までくると、盗んだ自動車を乗りすてるのだ。

もう一つ「遠乗り」という方法もよく用いられた。これは相手を誘つて好意ありげに自動車に乗せ、折をみて射殺しておいてどこか遠方の人気のない所に行つてこつそり死骸を捨てるのである。

さらに別の方法は、目ざす相手の家の玄関を見おろすアパートか或は部屋を借りておいて、傭つた暗殺者（敵の知らない顔の奴）を二三人窓の所に立番させ、相手が陽当りのよい午後なんかに家から出てくるところを、カーテンの蔭から機関銃でバリバリと射ちまくり、身体中穴だらけにしてしまうのだ。

ただアル・カネポの妙に潔癖なクセは、一度用いた手を二度と用いないということである。オバニオンは複雑つた。そして一時カポネのシカゴ支配を最もひどく脅したギャングの親玉、デイオン・オバニオンを殺害した方法は「ユダの接吻」と名づけられるものである。オバニオンは複雑な人格の持主で、夜の商売は密売者兼ギャング、昼間は花屋の主人をしていた。又、蘭と殺人の鑑定家としても有名だつた。

或る朝一台のセダン型自動車が、オバニオンの花屋の店先に乗りつけ、中から男が三人出てきた。この三人は明らかにオバニオンの信用を得るように気をつかつていた。そこでオバニオンはいつもならピストルの三挺ももつていたのだが、この時はお客を迎えに花の間を通つてくる間、ほんのちよつと警戒をといた。

ここでふしぎな女が一人登場する。その名を「バツドラツク・メリイ」という。ギヤング蕩し、メリイともいうが、この女は、かならず不幸をもたらした。げんに、デイオン・オバニオンは、この女を情婦にしたとたん、アルキー料理の特製「ユダの接吻」を浴びたのだ。オバニオンの前には「ダンデイ・ジヤツク」が憂き目をみている。三人目のギヤング、ジヨニイ・フイリツプは、不名誉にも禁

棺の費用には一万ドルもかけ、豪華な花輪が二十六台のトラツクに積まれたほどであつたが、その中に「アルより」という、いじらしい名札のついた花籠があつた。

た。棺の費用には一万ドルもかけ、豪華な花輪が二十六台のトラツクに積まれたほどであつたが、その中に「アルより」という、いじらしい名札のついた花籠があつた。

ここでふしぎな女が一人登場する。その名を「バツドラツク・メリイ」という。ギヤング蕩し、メリイともいうが、この女は、かならず不幸をもたらした。げんに、デイオン・オバニオンは、この女を情婦にしたとたん、アルキー料理の特製「ユダの接吻」を浴びたのだ。オバニオンの前には「ダンデイ・ジヤツク」が憂き目をみている。三人目のギヤング、ジヨニイ・フイリツプは、不名誉にも禁

酒警官の銃弾に倒れた。四人目の相手、色男の宝石ギャング、レッド・マクラウリンは大晦日の晩、謎の死を遂げるし、名題の殺人狂（サッグ）ビッグボーイ・ベーツは折角百万長者を誘拐しておきながら、かくれ家に向う途中、自動車事故で頓死という具合だ。

4 脅喝型

一九二〇年から三〇年にかけての十年間は、たしかにギャング稼業が隆盛をきわめている。この間に、ギャングの支配と猛威が、急速に、アメリカの各都市にも侵透して行ったのである。トレド、デトロイト、ニューヨーク、シカゴが先頭に立つたのだ。

さて禁酒法も解除になつたとすると、酒の密造など、一銭にもならない。するとギャングは、本来の姿にかえるほかないわけだ。ギャング本来の姿とは何か？「脅喝」である。これこそ、濡手で粟の金儲け業である。あとは賭博だ。

大体やくざ者というものは、ユスリタカリとバクチが仕事にきまっている。彼等自身もそうだと思つている。ところが、カポネという頭脳的なギャングの出現によつて、ギャングは一種の事業化した形となつた。

これをかねて苦々しく思つていたのが、ニューヨークのレッグ・ダイアモンドに他ならない。出身は同じフアイヴ・ポイントだが、二人の性格は相反している。ダイアモンドは、サツコとヴアンゼツチ時代のニューヨーク、つまりタマニー派の連中が幅をきかしていた頃から、約五十年後輩だが、依然としてやくざの本領は腕一本、肝つ玉次第の「脅喝」だと信じていた。ダイアモンドにいわせれば、カポネなんて、邪道なのである。

面白いのは、ことごとに対立するダイアモンドが、カポネの機関銃に対して、主に爆弾を使用したことである。ダイヤモンドは、この爆弾でオドかしながら、終始脅喝専門のギャングで通した。尤も彼は、ニューヨーク中の賭博場を一手に押えていた点で、バクチ打ちといわれるべきかもしれない。ともかく彼は洗濯屋とか染物屋とか又はガレージ組合とか、自動財売会者とか、肉屋組合とか、そういう大きな組織相手にユスつて廻つたのである。彼のいう「権利金」を徴収したのだ。もしイヤだといつた場合、洗濯屋も何屋も、仕事場に爆弾を投げこまれるとか、配達用のトラックに火をつけられるとか、職工が袋叩きにされるとか、甚大な被害を蒙る。

この強力な脅喝ギャング団で、ダイアモンドのほかに有力なのは、デビツド・アブリン

限りギャング同志の流血戦は行われなかつたのである。

ダイナマイトをなげこみ、一挙に粉々にしたのだつた。申し遅れたが、ダイアモンドはこのとき、オートジャイロに乗つて、空中より爆弾を投下しているのである。この事件ほど、世界に一大センセーションをまき起したものはなかつた。

そして遂に、世紀の決闘が行われるのである。すなわち、ニューヨークのナンバーワンぶん大都会なので、それに協定し合つた縄張りを犯さないつた。けれどもニューヨークは、なにの一、味と「やぶにらみのマリガン」一味だ

ちにデビッド一味のたまり場を急襲して、二百六十発の爆弾と、百五十発の

ドはこのとき、オートジャイロに乗つて、空中より爆弾を投下しているのである。この事件ほど、世界に一大センセーションをまき起したものはなかつた。

そして遂に、世紀の決闘が行われるのである。すなわち、ニューヨークのナンバーワンぶん大都会なので、それに協定し合つた縄張りを犯さないつた。けれどもニューヨークは、なにの一、味と「やぶにらみのマリガン」一味だ

る。ではなぜ何故ダイアモンドが激怒してデビッドの一味を、爆弾攻めで全滅させたかというと、次のような理由による。

それはデビッドが、或る洗濯屋から権利金をおさめるのを拒絶されたとき、きわめて卑劣な爆弾戦術を用いたのだつた。つまりズボンや上着の縫目に爆発性の薬品を縫いこんで、これを洗濯してくれと送りつけたのである。

「ギャングのくせに、女の逆うらみみてえなマネしやがつて」

とダイアモンドは怒つた。彼はギャングとしての意地と誇りを重んじたのだ。そこで彼は、その日のうちにデビッド一味のたまり場を急襲して、二百六十発の爆弾と、百五十発の

たるレツグ・ダイアモンドと、シカゴのナンバーワン、アル、カポネの決戦に他ならない。

すでにギヤング同士の殺人はシカゴで五百件以上を数えるほどであつたが、ダイアモンド対カポネの射ち合いほど凄烈をきわめたものはなかつた。事の起りはダイアモンドの子分が、カポネ一味によつて詐殺されたことにはじまる。一九二九年二月十四日、寒い日の朝、十時半頃、何用でやつて来たのか、ダイアモンドの子分七名が、ノース・クラーク運送会社のガレージに現れたのだつた。

5 眞晝の血斗

多分ダイアモンドの七人の子分たちは、仲間を裏切つてシカゴに逃げこんだ奴を探しにきていたのだろうといわれている。七人のうちの一番兄貴分テスト・チューブは、ボクサーくずれの凄腕で、彼の一撃をくらうと、牛でも首の骨が折れるくらいであつた。ダイアモンド一家の急先峰として、大抵の出入りはこいつが片付けてきたものである。

このテスト・チューブ達が、くだんの運送会社のガレージに腰掛けて一服していたとき、キヤデラツクの大型車がスーツと入つて

男になるヒモ

僕の友人で、自分が、ベアの女のヒモである事を自慢している男がいる。

まづ第一に美男子ぢやなくて、いくら技巧がうまくても、かんじんの力が続かない優男では、これもダメ。

さて、顔がよくて、躰が、立派で、その上に、今度は目はしがきいて、女の機嫌をとることがうまくないとこまる。女がつかれて、かえつてきたら、だまつて、躰をもんでやつたりする位の、気転が必要。女が寂しい顔をしていたら、優しくなぐさめてやり、女が荒々しい愛撫を求めている気配を察したら、一転して、男性的な愛を加える——そう云つた臨機応変の機知がないとヒモとして資格がない。

女の欲望の周期なども、手帳にひかえて、ぬかりなくサービスする位の心構えをもち、あるときは亭主であり、あるときは兄貴であり外へ出たら恋人、閨房では、時には

の女に自慢出来る程度の美貌でなくつちいけない。他の女なんかにうらやましがられる位でないとダメだ。

その次には躰。

これは男性としてちやんと商品価値がある位に出来てなくつちや、落第だし第一、つとまらないや。

丈夫一式で、丸太ン棒みたいんでもダメだし、かと云つ

きて、警官の服装をした三人の男が現れ、その後に私服の刑事らしいのが二人つづいた。そして警官らしい三人が、七人の武器を取上げ、壁に向つて並んで立てと命じた。七人は警官の襲撃にわけもなく命に従つた。七人は警官の襲撃に馴れていたので、何とも思つていなかつた。例によつて警官どもが、一応の真似をしやがるのだ、ここはシカゴだし、まあ警官の顔をも立ててやろう、じきにわけもなく免れられるものだと思いこんでいた。しかし、こんどは平服を着た二人が廊下から現われて、両手を挙げて壁に向つて並んでいるチューブ達七人を、やにわに物もいわず、軽機関銃で無雑作にやつつけてしまつた。警官達は、実はカポネの配下だつたのだ。ニューヨークからやつてきた七人を、まるで簡単にバラして、裏切者をかくまいとおしたのである。

ニューヨークで、七人の部下が詐殺されたことをきいたとたん、ダイアモンドは烈火の如く憤つた。

「俺が死ぬか、カポネが死ぬか、その時は来たのだ！」

彼は叫んだ。直ちに彼はアル・カポネの本拠に、敢然と報復のなぐりこみをかけたのである。このときダイアモンドは、わざわざ最ドレイの役も演じなくてはならない。

少し位の浮気はしてもいゝけど、かりにも自分は男だから、なんて気をおこしたら忽ち失格。ただひたすら、自分をむなしくして、相手の気に入るようにつとめる。——こういう心がけをもつていないと、いゝヒモにはなれない。

「どうだ、むずかしいだろう？」

と、その男は云うんだが、さて、みなさんどうですか。あなたはこれだけの資格をもつていらつしやいますか。

もつとも、これ等の資格をもつて、なお、男だつたら、これだけの資格をもつている、とつくの昔に、もつとまともな仕事をやつているに違いない。

だから、これ等の資格をもつて、なお、女のヒモになつている、という所に、この男たちの本当の秘密がありそうである。

（X）

新式の機関銃を買いこんで、得意の爆弾戦法をやめている。機関銃どうしの果し合いをやろうというわけであつた。

八台の大型幌付自動車は、ホーソンホテルの外の人込みの街を、真昼間堂々とカポネの本拠に向つて進んだ。先頭の自動車は空砲をブツ放して、市民を追い散らした。そしてホテルに近づくと、カポネの手勢を戸口や窓におびきよせるため、一そう激しく空砲を鳴り響かせた。

すでに街は、死の戦場と化していた。カポネの本拠、ホーソンホテルの窓口から応戦の火蓋が切られた。と、一区劃だけ遅れて続行した他の自動車から、一せいに凄まじい弾丸の雨が、ホテルに向つてそゝがれ始めた。これにダイアモンドが乗つていたのだ。ダイアモンドは、わざわざ最

の注意をひいた。装甲車の襲撃によつて、街を射撃場にしてしまうことは、すこし正統をはずれていると思われた。

奇妙な云い方だが、大衆の支持をはなれて、ギャングの存在はありえない。一人よがり、一人強がりのギャングは滑稽である。ギャングはやり方をかえるべきであつた。政界にまで入り込んで、隠然たる勢力をふるつたカポネも、人気を失うと同時に、凋落のきざしをみせはじめた。

このギャング全盛時代に終止符を打つたのは、ジェイク・リングルという男である。彼は「シカゴ・トリビュウン」という大新聞の記者であり、一方ギャングとしても名を売つた奇妙な二重生活者であつた。要するに彼はギャングが普通の市民生活を支配する政治力まで持ちはじめたことを、みずからの力で破壊したのだ。彼は旺盛な筆力を以て輿論に訴え、「政治のギャング化」を阻止した。同時に、政界に野望を持つようなギャングの親分を、じぶんもギャングの親分としてやつつけたのである。

が、彼は遂に一九三〇年、地下鉄のイリノイス・セントラル停車場に通ずる人ごみの地下道で射殺された。このジェイク・リングル殺害事件で、大体第一期ギャング時代が終る。そうして、ギャングは、それぞれの性格に応じて一種の分業化というか、専門化をとげたのである。

6　専問家

活躍した期間は僅かに二年ばかりであつたが、その目ざましい登場ぶりと、花々しいギャングぶりとで、新しいギャング時代を現出した第一人者は、ジョン・デリンジャーであつた。

新しいギャングは、ますます訓練された近代的機動力をもつていたが、それを一つの犯罪に集中した。「恐喝（ラケット）」もやれば「誘拐（キッドナップ）」もやる、「密輸」もやれば「政治的陰謀」の片棒もかつぐというようなことはしないのである。デリンジャーは、もつぱら「銀行破り（バンクラーク）」専門であつた。だから銀行ギャングは、デリンジャーの一手販売で、他に真似がいない。

こうしてみると、第二次的ギャングの特徴は、一つの専門的特技をもつていることと、したがつて縄張り争いというか、そのようなギャング同志の血闘をやらないことの二つである。ただし、極端に武装化された警官隊との、激しい渡り合いを、さかんにやつた。デリンジャー以外のギャングは出来ないのだ。或る時、落目になつたカポネが、若く敏捷なデリンジャーに目をつけて、何とか味方にしたいと思つた揚句、「銀行破りなんかよしたらどうだ」といつたことがあつた。するとデリンジャーは何と思つたのか、

「カポネ氏の預金まで掻つさらつているわけじやないから、ほつといてくれ」

と答えたものである。そのかわり、と、デリンジャーは言葉をついだ。

「俺には一つ趣味がある。それは牢獄破りだ。で、カポネ親分がくらいこむようなことがあつたら、タダで脱出の手伝いをしてやりましよう」

まつたく、デリンジャーは牢破りの名人でもあつた。これは彼のいうように、あくまで趣味で、一度兄弟分の盃をかわしたギャングのために、五件の脱出を成功させてやつているのである。

こうしてみると、第二次的ギャングの特徴は、一つの専門的特技をもつていることと、したがつて縄張り争いというか、そのようなギャング同志の血闘をやらないことの二つである。ただし、極端に武装化された警官隊との、激しい渡り合いを、さかんにやつた。デリンジャー以外のギャングは出来ないのだ。或る時、落目になつたカポネが、若く敏捷なデリンジャーに目をつけて、何とか味方にしたいと思つた揚句、「銀行破りなんかよしたらどうだ」

こういう事情は、アメリカのいわゆるギャング映画をみてもわかることで、一昔前のギャング映画といえば大抵ギャング同士の縄張

り争いを主題にしたものばかりであつた。ところが最近のギャング映画は、例外なくGメンとかFBIのような警官隊とギャング団との争闘を主題にしている。

とまれ、一口にギャングといつても、それはそれなりに変遷推移しているのだ。シカゴギャングは荒つぽく強盗的なまま、デリンジャーによつて代表されるような様相を帯びてきたし、ニューヨークギャングは、都会的巧妙な様相に変化した。曰く「誘拐」とか、曰く「倉庫破り」とかである。ここで最も有名なニューヨークギャングの代表は、ジミー・バレンタインを、ギャングと呼ぶには、すこしふさわしくないような気もする。というのは、単独で犯罪を敢行したようなものだからだ。が、ギャング四傑の中には必ず彼の名が入るので、除外するわけにはいかない。

ジミー・バレンタインは、「金庫破り」「倉庫破り」として、世界でただ一人のギャングなのである。彼は、どんな複雑な金庫の鍵も、微妙な指先の感覚一つで、見るまに開けることが出来た。なにしろ彼は、じぶんの手にかけられた手錠すらも、立ちどころにハズしたのである。要するに彼がいなければ、彼のギャング団は成り立たなかつた。彼のギンヤグ団は、彼が開けた倉庫や金庫の前にトラックを乗りつけて、金品を運搬するだけにすぎない。せめてギャングらしい点は、彼等が仕事をなしとげて逃走する途中、警官隊と射ち合うことくらいものである。

で、ジミー・バレンタインの出現以来、人々の興味は、ただギャング個人の特徴や特技に向けられるようになつた。じつさいバレンタインが、どんなとき、どのようにして警官隊の包囲網を切り抜けたかという物語よりも彼がどうして金庫破りの名人になつたかといういきさつのほうを人々は聞きたがる。

バレンタインは、たえず指先にヤスリをかけて、指先の皮を薄くすることにつとめた。彼の指先は、女の肌にふれたとき、女の心理まで感知したといわれる。

だが、もはやこうなると、ギャング個人の経歴を書かなければならなくなつた。そして現在の、一九五〇年代のギャングも、ふたたび昔にかえつて、ほとんど個人的な色彩をおびているのである。ギャングの情婦、ギャングの私刑等については、主題を変えて、別記しなければならない。

★スピレーン名場面集★

★

彼女はブラウスの襟をつかむと、それを引下した。ボタンが私の足もとに転がつた。彼女の着ているものが、鋭い音をたてて引き裂けた。

彼女は手をお尻にあて、私の眼の前に乳房をつきつけて、誇らしげに立つていた。亢奮の戦慄が彼女のお腹の筋肉を波うたせ、彼女はそのまま私に、思うさま眺めさせておいたのだ。

私は手を下して、椅子の肘かけを握らざるを得なかつた。私のカラーは突然きつくなり、背筋を何かが這い上つていつた。

彼女の歯はきつく閉つていた。彼女の眼は憎悪に満ちていた。

「抱いてよ」

と、彼女は云つた。

また血がつたことを思い出させた。

私は手をのばして、力一ぱい、彼女の口をひつぱたいた。頭がガクリとゆれたが、彼女はまだ其処に立つづけており、その眼はさらに憎悪に燃えていた。

「まだ抱かれたいか？」

「抱いてよ」と、彼女は云つた。

（日本出版協同版・「復讐は俺の手に」）

連載小説

仮面劇場

―第1回―

宮本 幹也
亀山 博画

淺草のストリップ劇場〝青春座〟にフラリ舞い込んだ、ストリツパー志願の家出娘、思わず中年男を蕩ろかす肉体美！ その彼女を虎視眈々と狙う狼たち……第一回早くもお色気とスリルをもつて興味深々!! 文壇の駿鋭が特に本誌の愛讀者に贈る長篇野心作颯爽と登場!!

鼠の小屋

青春座と言えば名前は気が利いているが、浅草では一番ボロなストリツプ劇場だ。何処かの新聞記者が言つた言葉だそうだが、一風の方が優遇されるらしい「悪しい」青春座の楽屋。ここでは、確に人間は日に日に縮こまつて行く感じである。まともに歩いたら頭に幾つコブをこしらえるか判らないその楽屋で、これまた余りマトモな感じでない奈久奈薬男が寝そべつて、大浦ミチルの巨大なお尻を眺めていた。初夏の昼下り。と言つても太陽なんか一年に一度もさしはしなかつたが……。

「センセエ、変な娘が来ていますよ。」

楽屋番のオツトセイが、ごとごとと上つて来て言つた。オツトセイと仇名されたのは、よせば良いのにその奇妙な鼠と、眠つているようなしよぼしよぼした眼を持つている老人だからだ。

「何だい、オツトさん。」

オツトセイを略したオツトさんだが、オツトサンに仙た響きがあつて、親愛の情を表している感じがするから奇妙である。

「センセエ、悪い癖を出しちや駄目だよ。」

ストリツプ劇場のしがない演出家がセンセエと呼ばれる御時世だ、しかし尊敬しているのではない証拠には「悪い癖を出しちや駄目だよ」などとたしなめている。奈久奈はオツトさんには借金があるので頭が上らなかつた。

「よせやい、変な娘つて何だい？ 僕に会いたいつてのかい」

「仲々いい娘ですよ」

「はて、心当りがないが……。何しろこのごろシケてるんでね」

関係のあつた飲み屋の女やストリツパーを頭に描いて見たが判らなかつた。

「大丈夫だよ、手なんか出すもんか。どれどれ」

と、わざともつたいぶつて立ち上つた拍子に頭をごつんと天井に

ぶつつけた。

奈久奈が狭いギシギシする階段を下りて楽屋口へ出て見ると、若い娘の後姿が見えた。ワンピースに白と黒のコンビネーションの靴をはいている。顔は見えないので判らないが、どうにも奈久奈の記憶にはない女だつた。

「貴女ですか、僕に面会を……」

と声をかけると、娘はツとふり返つた。そのふり返り方がいさぎよい感じで、何となく稚い色つぽさがあつたのにはどきツとした。

しかし、

「奈久奈先生ですか？」

と言つた娘の顔を見たとき、いや、驚いたと言うよりは、

その美しさにいきなり眞に驚に垂れて、高い鼻の下の唇だけが悪戯つぽい感じで小さく緊まつていた。

「そうです」

眼が大きかつた。長い松毛がかぶさる程

が、馬鹿に色が白くて、丸顔だ

りくツと引きつけられたと言つた方が正確だつたろう

と奈久奈が答えると、
「先生、お願です。あたしをストリッパーにして下さい」
いきなり言つた。あつけに取られて奈久奈がすぐには何も言わずにいると、
「オツパイは自信があるんです。普通より大きいんです」
と言つた。
奈久奈は思わず微笑した。
「オツパイは小さくても大きくする方法はあるんだけど……。君は幾つ？」
「十七です。満ですけど」
「ふーん。十七にしちや大柄だなあ」
「大きくちやいけないんですか？」
追い詰めて来た。何か是が非でもと言う気魄のようなものが感じられた。
「いけない事はないが……」
と奈久奈は一寸黙つた。もつたいぶつて見たくもなつたのは、娘が余りに美しかつたからで、本当は無理にも裸にして舞台に立たせたい位だつたのだ。
すると、娘は不安そうな表情になり、今にも泣き出しそうになつた。
「困るわ、あたし……」
「君の家の人は賛成してるの？　ストリツパーになるつて、大変な事なんだぜ」
「あたし、家出したんです。もう、帰れやしないわ。死ぬしかないんだわ」
そう言つたかと思うと、細い首筋をちぢめて、何故かふツと身ぶるいした。

ポポ

「君の名は？　まるで映画みたいだが……」
と奈久奈が言うと、娘は楽屋の板壁によりかかつて、
「先生、いい名前つけといてよ」
と鼻声を出した。もうすつかりストリツパーにして貰えたような心算らしかつた。奈久奈は一寸いまいましかつたが、
「仕様がないな。パピプペポとでもつけちまおうか」
と言つたら、
「先生、ポポがいいわよ。フレンチ・ポポ。何となくエロテツクでしよ？　それに何となく気がきいているわよ。何となくそうは思わない？」
やたらに「何となく」を使うのだが、それが妙に面白かつた。
「フレンチ・ポポか。成程」
奈久奈は腹の中で秘かに唸つていた。どうも十七歳の少女にしては恐るべきマセた感覚である。確にこれはイケル名だと思つた。
「よし、それにしよう。ポポちやんか。鳩ポツポみたいでもあるし、少し濁ると相当妙なことになるし……」
と言つて見たが、判つているのか判らないのか、澄ましこんで、
「ポポ、いつから舞台に出られるの？」
と言つた。
「冗談じやないよ。踊りが出来なくて、舞台になんか出られるもんか、それとも、少し踊りの下地でもあるのかい？」

「無いわ」
「一体、君の家は何の商売だつたんだい？」
「過去のことは何にも聞かないつて約束だつたでしよう？　いやよ」
「そうか、そうか、それじや聞かないが、早速だがね、ポポちやん、踊りが出来なくて売り出すには相当の無理を覚悟でなくちや……」
「無理つてなあに？」
「つまり何だよ、肉体的な無理さ」
わざとそんな言い方をして見たら、
「どんなこと？」
瞳をぱちツと大きく開いて小首をかしげた。大カマトトかなと奈久奈は思つた程だ。それにしても何とあどけない表情だろう。
「お腹の皮や内股なんかが少し痛いかもしれないんだ。体をそつくり返らせたり、ごろごろ転がつたり、相当妙なこともするんだ」
「あら、面白そうだわ」
全然まともだつた。少しも表情に曇りが無かつた。奈久奈は却つて手ごたえが無くて困つていた。
「まあ面白いのは見る方さ、する本人の身になつて見れば大変だよ。アクロバツトさ、知つてる？」
「知つてるわ」
「君ほど美しかつたら忽ち人気を独占しちまうよ。アクロバツトをやる女の子には、そう言つちや何だが美人が少いんだよ。どうしたものか鼻の低い娘が多いなあ。併しアクロバツトの魅力には普通のストリツプなんか問題じやないさ。踊りが出来なかつたら、少し無理でもアクロをやつて御覧。それが近道だよ。年齢的には少し遅いかもしれないが、まあやつてやれないことはないな」
と奈久奈がいつたら、
「教えて！」
と直ぐに躊躇無しに言つた。
「大丈夫かい？　中途でいやだなんて言い出す位ならやらない方がいいよ」
「教えて！」
ともう一度彼女は言つた。
「よし、そんなら、明日から稽古しよう。ところで泊まるところだけど、どうする？　僕のところへでも行こうか？」
「行つてもいいわ。でも、ここがいい。ここに泊まれないかしら？　先生、頼んで！」
厚かましいと言うのか臆面もないとでもいうのか、彼女はぼつくりと笑窪をつくつて奈久奈を見上げた。
「よし、支配人に話して来てやる」
と言つてしまつてから、奈久奈は何となくしてやられた様な気がした。まんまと彼女に肱鉄砲を食わされた様な気がした。それでいて腹が立たないのも不思議だつた。

恐るべき鍛練

支配人の大森一水、これはイツスイと読むのではなくカズミと読むのだそうだ、鼻の下にチヨビ髭を生やしたこの男は、奈久奈がポポを紹介すると二つ返事で、
「いいとも、いいとも。夜具は少しお粗末だが、つわものどもの夢の跡でね、へへへへ」
と、いやな笑い方をした。そしてポポの胸のあたりをしげ〳〵と

眺め乍ら、

「藥ちやん、目が早いぞ」

と突つついた。そして、

「その内に試食会を開きたいものだね」

などと言つた。

支配人の大森が稀代の好色漢であるばかりでなく、五人のコメディアンと言うか、つまり男優たちがそれに輪をかけている。だから本当は奈久奈はポポを楽屋に寝泊りなどさせたくなかつたのだが、そうもいかなかつた。背春座はその他にストリツパーが十五人、後は裏方に案内ガールだ。

奈久奈はその夜自分のアパートへ帰つてもすぐには眠れなかつた。ポポが一人で楽屋に眠つているところへ誰かが忍びこんで……そんな妄想が湧いて来るのである。

「大森のやつ妙な気を起さなけりやいいが……」

朝出かけることは滅多にないのだが、その朝は早くから眼がさめた。早々に家を出て近所の食堂で食事をすませた。

背春座の裏口からはいつて行くと、

「センセエ、馬鹿つ早いね。今日は雨かな?」

と言つた。

「何か変つたことはなかつたかい?」

まさかフレンチ・ポポのところへ誰かが忍びこみはしなかつたかとは聞けないので、そう言うと、

「変つたことはないですね」

とオツトさんが言つた。奈久奈はほつとした。まだ大丈夫かもしれぬと内心にやりとした。

だが、オツトセイは鼻糞を掘じくり乍ら、

「変つたことはなかつたが、昨夜は夜遅くまで若い衆が残つていたと見えて、うるさくつて眠れなかつたよ」

と言つた。

それが変つたことでなくて何が変つたことかと言いたかつたが、やめた。奈久奈は何となくかーツとした気持になつて、階段を走り上つた。狙つた獲物を横取りされたような不快な気持だ。頭の中に男優たちのノツペリした顔が幾つも浮んでくる。

いきなり女優部屋の戸をあけた。

「あツ!」

ふとんの中にはいつたのである。

「何処へ行つたのかな?」

男と何処かへシケこんだのかな? しまつたと思つた。早いとこか、しかも軽やかないびきさえ立てて。

と腹の立つ思いだ。

その時、ふと彼の耳に何やら異様な音が聞えて来た。ふり返つて見ると、何と部屋の隅の衣裳棚の上に丸くなつて寝ているではないろ彼女を誘惑した奴は誰だろうと腕をこまねいて考えた。キリキリ

奈久奈は暫くはあきれて突つ立つていた。ふつくらした、嚙じりつきたいような膝小僧が、彼女の毛布からハミ出ている。

「おい、おい!」

と奈久奈は彼女の足を摑んで揺すつた。柔いぽつてりした肉づきだ。

「起き給え、君!」

「ううん」

と言つただけで、すぐには起きそうもなかつた。

「稽古だよツ！」

と怒鳴つたら始めて眼をさました。

「あーら、先生」

「どうしたんだい？　そんなとこに上つて……」

「だつて、とつてもいやなのよ」

「何が？」

「下に寝ていると、男の人がいやなことをしに来るのよ。眼れやしないわ」

「誰だい、それは……」

「知らないわ。男の人よ、きつと」

「当り前だ。女が忍んで来るもんか。とにかく下りろよ。そんなところでよく眠れたもんだ」

「慣れてんのよ、きつと……」

くふんと野鳩のように笑つた。その癖、下りる段になると、

「コワイわア！　先生、下ろしてえ！」

甘えた鼻声を出した。

「仕様がないなあ」

とか言い乍らも、奈久奈は満更でも無かつた。先刻までの不快な気持は吹つ飛んでいた。

両手をひろげて抱き下ろそうとすると、その腕の中へどさりと身を投げて来た。意外に重かつた。よろめいて、その儘ぎゆツと抱いたら、

「先生、男の人つて、どうしてすぐ抱きついて来るのかしら？」

とポポが言つた。

「どうしてつて、そりやア……」

奈久奈はせつかく燃え上り始めた情炎に水をかけられたような気がした。抱いている手を放して畳の上に置いた。

「それじや、聞くけど、女の人は抱きつきたがらないつて言うのかい？」

「知らないわ。そんなこと。意地悪だわ、先生つたら……」

身をくねらせた。ひどく色つぽかつた。奈久奈は腕の中から放したことを悔いた。同時に照れて鼻の頭を撫でた。案外、この女、大したカマトトかもしれんぞ。そう思つたら、不意に荒々しいものが体内を駈けめぐつた。

「さあ、稽古だ。男なんかに目をくれてたらアクロにやなれないぜ。一寸苦しいが、いいかい？」

「そんなに苦しいんですか？」

心細そうな声を出した。

「そりやそうさ」

「困るウ、先生あたし……」

「どうしたんだい？」

「昨夕からまだ何も食べてないんです」

「ふーん。金がないのか？」

「ええ」

至極あつさり言つて、にこりとした。手がつけられない愛らしい表情だつた。仕方がないので彼女を連れて近くの大衆食堂で朝食を食べさせてやつた。余程腹がすいていたと見えて、ライスのお代りまで平げた。

「ああ、やつと人心地ついたわ。先生つて、ずいぶん親切ねえ」

ちつと見つめられた。奈久奈は赤くなつて、

「よせやい。行こう。稽古、稽古」

再び青春座へ引き返して、舞台に彼女を立たせた。スリツプ一つにさせた。

「さあ、体を弓なりに伸ばして御覧。そうそう、そうやつて輪になるんだ」

「先生！」

そり返りながら、悲鳴を上げた。奈久奈は彼女の脊に手を貸してやり乍ら、

「思い切つて！　ぐつと……」

「先生！　痛いわア！　痛いわよオ！　お腹の皮が痛いわよオ！」

「当り前だ、その腹の皮を引き伸ばす鍛練がアクロバツトだよ」

「だつて先生……」

どたりと横に倒れて喘いでいる。

「どうしたんだ？　そんなことで……」

「あたし、食い過ぎたのよオ、こうしていてもお腹の皮が突つ張るんですものオ」

痛いよオ！

「仕様がないな。少し、腹の空くまで、じや基礎的な体操でもやろう」

と言い乍ら、ふと、奈久奈は彼女を裸にしたくなつた。

「ポポちやん。一つ、スリツプを取つて、裸の体を見せて御覧」

「あら、先生、いやなことしちやいやよ。だつて、ここの人つたら、みんな変なんですものオ」

「みんな？」

「ええ。昨夜なんか、入れ代り立ち代り五六人の男の人が来たわよ。ふふふ。あたし、そんなに魅力があんのかしら?」

「冗談じやないよ。ふーん、そんなに奴等が来たのか? ほら御覧、僕のアパートへ行くのが一番無難じやないか」

「だつて、先生には奥さんが……」

「いやしないよ。いるもんか!」

「だからいやなのよ。奥さんがいるんだつたらいやなことなんかしないと思うんだけど……」

「一ゃいやなこと、いやなことつて言うけど、そんなにいやなのかい? 不感症かな?」

「そうかしら? あたしお医者さんに診て貰おうかな? ふふふ」

と笑い乍ら、さツとスリツプをはづした。

「先生、パンテイもぬぐの?」

ぬげと言つたらぬぎ兼ねまじい様子で手をかけている。奈久奈は慌てて、

「それはいいんだよ。ぬぐのは今夜、二人きりの時にな」

と言つたら、

「そうね」

にこりと笑つた。何となく奈久奈は馬鹿にされているような気がした。それにしてもパンテイ一つになつた彼女の体の何と言う美事さ! 大きな乳房が天を向いて盛り上り、ぐつと思い切りくびれている細い腰、滑つこそうな二本の大理石の円柱のような太腿……。

「どう先生、及第? 落第り?」

「うーむ」

唸つた儘、暫くは奈久奈は見惚れていた。これは素晴らしい、大した拾い物だ! しかもうらぶれた感じのストリツパーが多い中で、清潔な美貌を持つた彼女こそは恐らく圧倒的な人気を握るだろう。奈久奈は思わず一歩前へ出た。

「ポポちやん」

とかすれた声で呼んだ。

「え?」

とポポの表情が硬張つた。

「駄目よ先生!」

「僕は……」

抱き締めようとした。

「先生! 人が見ているわよ」

「えツ!」

ふり向いたら、幕の蔭から大森支配人が出て来た。

「薬ちやん、仲々熱心に仕込んでるようだなあ」

皮肉に言つて、奈久奈に近寄り肩を叩いた。

「独占はいかんよ、独占は……。ウチの家風に合わないからな、あはは」

青春座の男女関係はまことに奇々怪々と言おうか、或いは又一種特別の貞操観が出来ていると言うのか、すつかり入り乱れてしまつて収拾がつかないことも事実だつた。それにしても大森の言つていることは何か別の含みがある様子だつた。

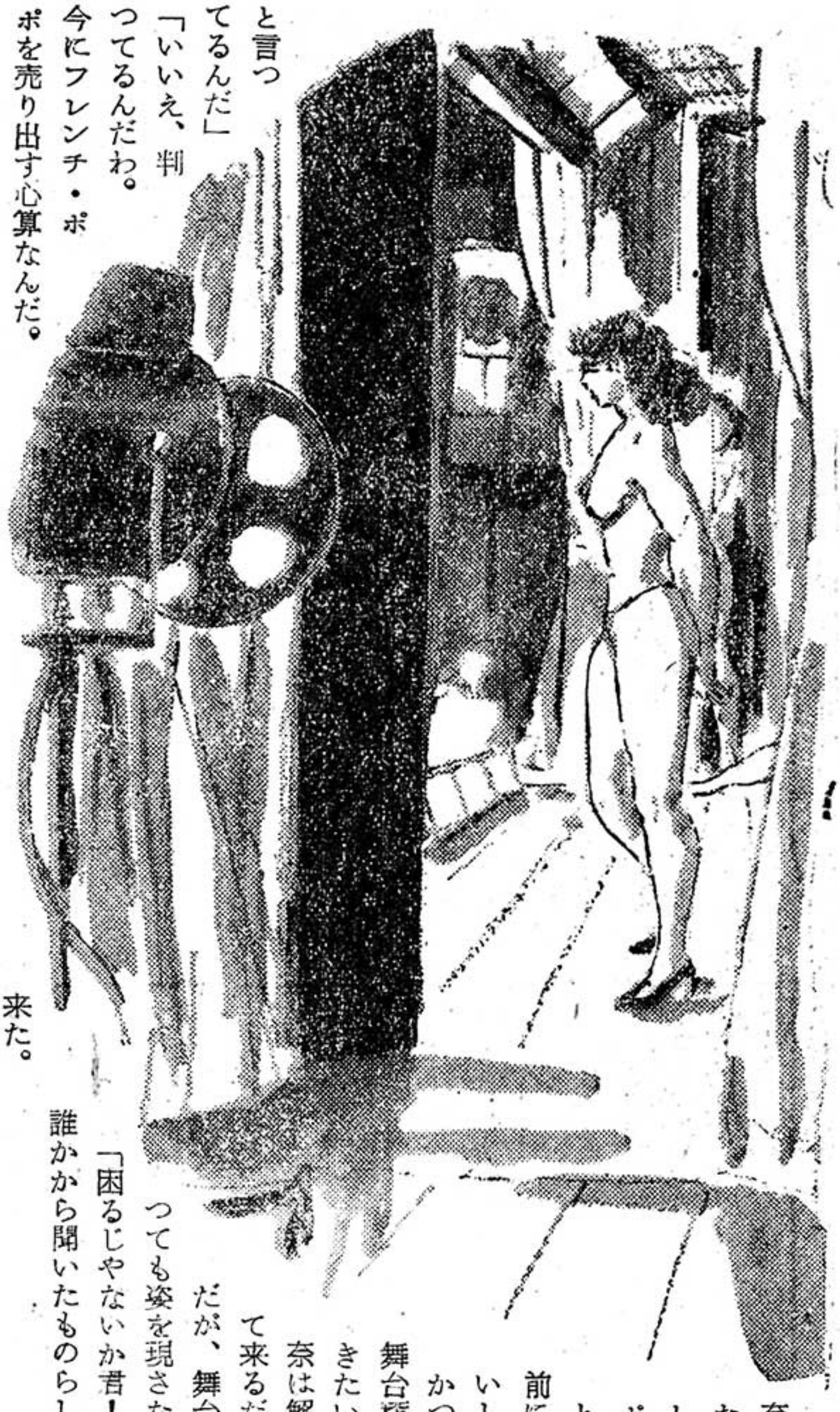
「仕込むのは君に任せるが、売り出すのはウチの劇場なんだからな。ボテレン美人にしてしまつちや元も子もないぜ、気をつけてくれよ」

ボテレン美人と言うのは妊娠した女の子のことだ。

「お互いにね」
と奈久奈も言つた。瞬間、二人の間に火花のようなものが散つた。が、次ぎの瞬間には二人は何事もないかの様に笑い声を跳ね上げていた。
「一ビンさん、うちの男の子に気をつけんと……。昨夜は五人も夜這いに来たそうだ。東京のど真中で夜這いとは恐れ入谷の鬼子母神さ」
二ビンさんというのは大森の名をひねつた仇名だ。
「ふーん。そいつはいけねえ。女優部屋の内側から鍵をかけさせることにするかな」
大森は柄にもなく狼狽していた。ひよつとすると彼も夜這い組じやないかなとふと奈久奈は思つた。

素晴らしき代役

来週の青春座の演し物は「マントルピースの大穴」と「世界各国夜のマン遊記」の二つだ。
夜、舞台がハネてから最後の舞台稽古をして明日からいよ〳〵新しく変るのである。
奈久奈は間もなく舞台が終ろうとする頃、楽屋へ廻つて行つた。
「おや？」
と思つたのは廊下で大浦ミチルと見なれぬ男の後姿が相擁しているように見えたからだ。彼が近づくと、二人はぱつと離れた。すれ違う時に、ちらつと男を見ると、この頃大浦のところへ毎日の様に花環や人形を贈り物する日本貯蓄の社長の伜とか言う男だつた。
大浦は奈久奈の顔を見ると、
「先生、一寸、あたし、出て行つて来てもいいですか？」
と言つた。
「駄目だよ。舞台稽古じやないか」
と奈久奈は突つぱねた。大浦と奈久奈との仲は誰知らない者はなかつたのだが、最近は妙に大浦の方が逃げるようにする。奈久奈もとく〳〵それ程の気持ではなかつたのでこれ幸いと傍観しているところだ。
言つたところだ。
奈久奈が舞台裏まで行つた時、大浦ミチルが後を追つて来た。見ると、ひどく興奮していた。
「先生、自分はこのごろフレンチなんて小娘と出来てる癖に、あたしのすることには邪魔するんですか？」
烈しく食つてかかつて来た。
「邪魔する心算で言つてるんじやないんだ。舞台稽古をさぼるのをいかん



と言つてるんだ」

「いいえ、判つてるんだわ。今にフレンチ・ポポを売り出す心算なんだ。あたしだつて、自分が役落するのをぼんやり待つちやいられないわよ」

「誰が君が役落すると言つた?」

「言わなくたつて、あんたの顔に書いてあるわよ!」

「馬鹿!」

思わず腹を立てた。その心算ではなかつたのに手が動いていた。パシリツとミチの頬が鳴つた。

と、彼女はさツとカクテルドレスの裾を飜して走り去つた。

奈久奈は一寸後味の悪い思いがした。何故あんなに大浦ミチルが興奮したのか判らなかつた。奈久奈がポポを可愛がると言うので怒つているとすると、話が妙である。それより前にミチルは大森とも出来ていたらしいし、現に今は社長の伴とも。判らなかつた。だから単なるいやがらせで、舞台稽古を休んで男と何処かへ遊びに行きたいばかりに芝居を打つたのだと奈久奈は解釈した。だから明日の初日には出て来るだろうと思つた。

だが、舞台稽古は勿論のこと翌日の昼近くなつても姿を現さなかつた。

「困るじやないか君! スターを擲るなんて……」

誰かから聞いたものらしく、大森が興奮して怒鳴りこんで来た。

「どうするんだ、一体」

「仕方がないから……」

と言いかけて、奈久奈の頭にはつとひらめいたものがあつた。

「代役を使うよ」

「代役?」

「ポポだ。彼女に仮面をつけさせて、仮面令嬢の出演とうたうんだ。勿論、踊りなんか大して踊らんでもいい。あのオツパイさえ見せれば……。あと一時間ある。その間にポポに教えこむから……」

「大丈夫かい？」

とは言うものの、安心したらしく現金にも大森はニヤリとした。

それからの一時間は奈久奈は大変だつた。

うまく行くか失敗か、まるで博奕のようなものだつた。ズブの素人を使う危険は充分承知の上だが、同時に又ポポの魅力には若干の自信もあつた。何とポポは、

「君が急に大浦の代りをすることになつた。出来るかい？」

と聞いたら、

「出来そうよ、きつと」

とにこにこツと笑つた。その瞬間に彼の腹はきまつた。よしやらせちまえ！

開幕のベルが鳴つた。一斉に踊り子たちが乳房を揺すり乍ら足を上げた。幕が上つた。いよ〳〵踊り子たちの渦の中へ、ポポが黄金の仮面をつけて現れた。奈久奈は舞台の袖から固唾を飲んで見ていた。舞台度胸満点と言おうか、自ら備わつた貫録とでも言おうか、悠々と彼女は舞い乍ら現れた。薄絹を一枚一枚剝ぎ乍ら、やがて白い裸身を見せ始める。拍手の嵐だ。

「成功だ」

と奈久奈は呟いた。体が熱くなつた。と、その時だつた。

「おい」

と誰かが脊を叩いた。始めは大森だろうと思つて知らぬ顔をしていると、

「奈久奈君」

地獄からでも来たかのような薄気味の悪い声だつた。ふり返つて見ると、見知らぬ男が立つていた。

（つづく）

★スピレーン名場面集★

男も僕の顔を見たが、なれているつもりだつた。唇をひん曲げると、嚙みつくような声で、

「出て行きやがれ、一発ぶつ喰らわされねえうちに」

と怒鳴つた。

僕をなぐりつけるつもりだつたが、僕は四本指を張つて男のヘソの真上を突いた。すると、男は、まるでジャックナイフのように、身体を折り曲げてしまつた。しばらく消えないぐらい口元が赤くなるほどの平手打を喰わせると、男は、今度は身体をのけぞらせた。

普通、相手はそれだけでへこたれてしまうのだが、此奴は違つた。ほとんど息が出来ないぐらいになつていたが唇の様子から、僕をののしつていることはわかつたし、手はにうごいた。気をうしなつたのだ。アカはまだ口を利くにはたまげ過ぎていて、男を見下ろしていた……

（日本出版協同版（俺の拳銃は素早い）

★実錄・やくざ決闘史★

秋葉の血祭り

畫作耕崎野　栄崎岩

いまの天皇が東宮で御結婚のとき、清水の次郎長はすでに物故していたけれど、皇室から表彰碑を下賜された。維新当時の功労に対してであろう。

喧嘩相手の黒駒勝蔵は、明

天下に聞えた秋葉の火祭り。その秋葉山頂を鮮血に彩つて、清水一家二十一人と黒駒勝藏身内百三十人が入混つて死闘する！　俗称荒神山の血煙りを裏から描く実錄篇!!

治の頃まで生きてはいたが、まるで乞食のような末路を遂げてしまつたらしい。

一生を勇敢に終始した人間と、卑劣にコソコソ立廻つた男との、代表的な対照である。

◇

駿河の江尻は清水次郎長の繩張である。卯の花が咲くから四月のことを卯月という。その月半ばのころ、次郎長が、渡世廻りに清水みなと宇土町の自宅を出た。一本刀を腰に、両腕を組み、渋い表情でスタスタと巴川土手の松並木に来かかる。清水と江尻はわずか七丁の距離。渡世廻りというのは、繩張りうちの賭場を見て廻ることをいう。

松並木、一本の松の根方で二十人ばかりの渡世人がバタバタ、ガヤガヤ騒いでいる。みんな次郎長の手下らしい。

めくら縞のよごれくさつた半てん一枚の三十年配なのが、両手両足を縛られ、丸太ン棒みたいに投げ出され、ポカリ、ポカリ、ドシン、ドシン——蹴ツたり殴ツたり、さんざんにやツつけられながらも「さア殺せもツとふて、いい気持だ、肩の凝りがとれらア」なぞとどなつている。

「この野郎ツ、さア音をあげろい。すみません、とんでもねえことを致しましたと、あやまれアがれ、こンちくしょう！」

「んにヤ、もつと殴れツ。さアころせツ。今夜の旅籠で、按摩アとらねえですむンだ。もツと景気よく打ツてくれ。ああいい気持だ」

とんでもない強情なやつとみえる。次郎長この男にちよつと興味を持ツた。

「おい、この野郎は賭場荒らしかい」

「へえ親分。ふてえ野郎なんで」

「まアまて。ちいツとみどころのある野郎らしい。この野郎をおれに任せろ」

子ぶんどもを追いやり、縛られているやつの手足を解いてやツて、さて、近くの料理屋にツれこみ、ちよツと一ぱい飲ましてみた。飲みぷりもいいし、話も面白い。

「清水の貸元、この料理屋、これアなかなかの人物ですね、ここの主人」

「わかるかい」

「この床の懸軸、こいつア狩野常信だし、あの額は市河半庵ですね、親分」

次郎長は無学、無筆、さつぱりわからない。

「てめえはまた、むやみとくだらねえことオ知ツていやるんだな」

「ちげえねえ、まつたくはくでもねえことを知つているンで、もとが法印。法印なんて渡世が嫌ンなツたもンだから、甲州へ流れてあの、黒駒の勝蔵に子分入りしやした。親分の前だが、どうも相すみません」

「なにもおれにあやまることたアねえ」

「いえそうでねえ。清水の親分と黒駒の勝蔵は犬と猿だ。いや、月とスツポンだ。人間と鬼畜だ。まつたくあの、勝蔵ツて野郎は犬畜生ですぜ親分」

「またひどくてめえの親分を悪くいうじやねえか」

「ひでえ野郎だからひどくいうンで。だから盃を返しておいて、ポン出てやつたんで。人の女房を盗む、間男をする、そんなこつたアあの男としてはホンの、お茶漬を食うくれえな無ぞうさなんだが——子分に他人の女房を盗まして、そのご亭主を殺させたその上で、子分からその女ア取り上げる。その子分がグズグズいうからそいつを叩ツ斬るというたあくどい、手のこんだ間男オ——といつたあくどい、手のこんだ間男オやりやアがツたんで、だからおいらア、犬畜生だ、人間じやアねえと見切りをつけて来たンでげすよ」

「あいつのやりそうなことだが、その女

房ツていうのもひでえじやねえか」

「まツたく、鬼の顔に般若でさア。この東海道をついそこの、興津ツて町の魚問屋の女房でしたがね、子分の岩五郎ツてのがおつな色年増でもツて、うまそうな肌の女とかぎつけて、口説き落しに通つているのを、親分が、亭主をバラしてつれて来いと十両投げ出してやるてえと、こいつが二つ返辞でその魚問屋を殺し、売り揚げの七十両をかツさらツて、女をつれ出した。その女をいつの間にか勝蔵のやつがせしめて、それでその子分がおめえさん」

「おい、ちよツと待ツた。その女ツてえのは、年のころ三十と四、五見当じやねえか」

「へ？よく御存じで……」

「大柄な、脂の乗つた、色の白い、ポツテリと肉の厚い、餅肌の……」

「それそれ、そのとおり」

「もしや名めえを——おみつと」

「さては親分も、あのアマをちよいと、なにしたことがあンなさるね」

「ふざけるないツ、そのアマなら、実ア、おいらの義兄の女房だ」

「へえ！おどろいたな、そいつアーーしてみると、あの女ア、親分さんの姉ツてことになるンだね。いよいよこいつあ、オドロキだ」

「待て！そうじやねえ。おれの姉が嫁入ツて、仙吉という男の子を産ンでよ、これがおいらの甥で、ことし十七になるンだが、姉は四年めえ病死——そのあと釜がいまのそのおみつだ。きようの日まで、儀兄は強盗にやられたものと思い込んでいたンだ。ちくしようやツぱり勝蔵だつたのか」

「じや、その仙吉さんという甥の讐だ。親分！仇討ちさせてあげなせい。この法印大五郎が討たしてあげますよ」

「うむ有難うよ。なアに、おれが乗り込んで一騎打ちに仕止めてくる」

「おツといけねえ。急いじヤ駄目だ。あそこじやア小池三五郎という強いツてね、南部浪人でおツそろしく腕の立ツた要心棒がいやす。いくら親分でも、大政小政でも、東ンなツてかかツたツて敵いツこねえ。それとも戦いの寸法といツぱ天のとき、地の利、人の和といいますぜ」

「ナマイキいうねえ」

「決してナマイキじやアねえ。お待ちなせい。半年待つんだ。十月、遠州名代、秋葉山の火祭りがこの十月二十三日から晦日までだ、御存じのあの騒ぎにまぎれ、うまくあツしが手びきしてさし上げやしよう」

「うむ、そうか。いかにもなア」

「そのかわり親分、今日からこのあツしを乾家にしてやツておくンなせい。お願えだ」

「よし、ついて来い」

◇

天下に聞こえた秋葉の火祭り。十月二十三日から二十九日までここに名代の高市というものが立つ。

関東関西、俠客群れ集まツて大いに飲み且つ賭場を張るのを高市という。

次郎長一家が結束して発ツた。大政、仁吉、綱五郎、米太郎、龍作、桃太郎、俗太郎、敬次郎、才次郎、吉五郎、勝太郎、宇吉、幸太郎、丹蔵、その他五人、これに法印大五郎を加えて、次郎長一党錚々たる大豪の粒揃いが二十一人。

これに対して一方、黒駒風雲のやから実に百三十人。松川門之助という水戸浪人が前衛部隊の総大将で、本陣を固める部隊長は、例の南部浪人小池三五郎。両人ともに

邪剣ながらも本格的武道の達人、世間から一騎当千と恐れられている シタタカものだ。

「親分、いよいよ清水のやつらア大井川を越えましたぜ」

註進が飛び込んでくる。

「来たか！うん。いよいよの天下分け目だ。みんなのやつら、しツかりしろよ」

さすがに強盗掠奪の梟雄黒駒の勝蔵、泰然自若として、濃情多淫の色年増おみつを抱きながら酒を飲んで居る。門之助と三五郎、この両人も飲みながら、

「天の与えだ。胸のすくほど斬り払らうぜ、なア小池」

「うん。とんで火に入る夏の虫か。ははは、一ぴきたりとも生かしちやアけえさねえぞ」

十月二十九日早朝、まさに一大血戦の当日を、秋葉山麓の宿で、次郎長以下首途の盛宴を張ツていた。

「おお、みんな朝湯を浴びたか」

次郎長が大政、仁吉らの方に声をかける。

「へえ、一人のこらずカイカイ、モクモクでさアア」

「なアにオいやアがる。斎戒沐浴、躰の潔の身をつつしむツてえことだ。いいか、敵は大軍、味方は小勢。だからといツてこれツぽち敵をおそれるンじやアねえ。ねえがしかし必ずしも勝つものときまツちアいねえ。この二十一人、杖を並べて討死するのもまた本懐だが、そのときにだ、よごれた躰で伸びたンじヤ見ツともねえ、男の恥だ。いいか、あとで人のもの笑いにならねえようにな、一生に一度のおめかしとけよ」

「わかりました」

「では、そろそろ出かけるぜ。みんな立てツて、

「それツ、親分を中に一列に並べツ」

このとき一人、脱兎のように飛び出したのが、トトトツと山坂道を駈け登つて行く法印の大五郎だ。

「あツ、あいつ寝返りだぞ、撃てツ」

大政が跳り上ツてわめきちらすのを、次郎長が、

「放ツておけ。門之助をおびき出しに行ツてくれたンだ」

「でも、なんだか言ツてますぜ」

耳をすましてよく聞くと、いかにも、

「法印大五郎、返り忠だアツ――清水の次郎長、黒駒の勢いにおじけつきやがつて朝ツからヤケ酒のフラフラだアツ――大政はヨコネを踏み出しヤがツて、ヨイヨイだ！　やがて胸つき八丁、秋葉の山下。十丁ばかりの松並木。ふり仰ぐ山の上にキラリ、キラリ、ピカリ、ピカリ――敵の剣、甲が朝日に反射して物々しい光景。

不意に一発、ダアーン！　という鉄砲の音。サツと全山の空気が引きしまり、草木がビリリツと震動した。

吉良の仁吉が、スラリとドスを抜きはなツて、

「さア出かけるぞ、ずいぶんめでたく、勝ちいくさをお待ち致しますよツ」

「続けツ」

と踏み出した。宿の女将がイキな女で、

「親分さん、黒駒の勢いにおじけつきやがつてつてくれたンだ」

次郎長、黒駒の勢いにおじけつきやがつて朝ツからヤケ酒のフラフラだアツ――大政はヨコネを踏み出しヤがツて、ヨイヨイだ。

アツ――」

わめき叫びながら、門之助の陣にパアツと飛び込みざま、右に左に、目にもとまらぬ迅業で、門之助幕下の五六人を薙ぎ仆し斬り落し、

「ざまアみやがれ、へッ、おととい来いだ」

そのまま踵を返して坂を駈け降りる。

「うぬッ――待ちやアがれ」

巧みに計られた門之助、おツ取り刀で追いおろして来た。

「来たかツ」

仁吉、大刀を振りかぶってそれえ馳せむかう。――チヤリン――斬り結ぶ。――ダアーン鉄砲だ。「ウツ」といツて仁吉がシヤガンだ。右の足首をやられたらしい。大政が慌ててそれへ駈けつける。

「あツ」

これが石に躓いて仁吉と門之助の間へブツ仆れた。

門之助が、

「おのれツ」

一歩退ツて、大上段からただ一撃と打ちおろす。大政起きる隙もない。仆れたままに、斬られながらに、槍をサツ！と、門之助の下ツ腹につき出した。だが、門之助の身につけた竹胴が固くて透らない。しかし大力の大政が死に物ぐるいの働きだ。ズデン、ドウ！と門之助が仰向けざまに引ツくり返り、両足を天にバタバタさせている。大政すかさず、やはり寝たままに再び槍をとどろき硝煙梢に絡み、剣撃の音と絶叫の声――。

「退くなツ、斬り込め！」

陣頭に号令、叱咤の次郎長。

「親分！」

「おお大五郎か。あツぱれだぞ、きようの働き」

すでにして混戦、乱闘――銃声しきりに起きてまた鳴ツたぞオツ――

「やアやア、門之助討ち取ツたぞオツ――清水身内の大政だアツ。こンちきしようめ」

尻のアナあたりから胸の方へブツリ！飛び

「とんでもねえ。それよりヤ親分！黒駒のやつと一騎打ちしなせい。案内致しやす」

「それだ。どこにいやアがるンだ」

「あいつア親分とちがつて、奥の方の本陣に控えていまさ。さアこうおいでなせい」

激戦の湯をそのままに、砲煙の下を潜ツて、親分と子分ただ二人の裏参道を猿のように駈けのぼツた。

◇

ここ奥の院に近く一つのお堂をうしろに、まン幕を引めぐらしたうち側——。

鼻柱の太く逞ましい、大目玉の、四角い顔の、色の黒い、みるからに鬼のようなつらだましいの巨漢黒駒の勝蔵。針金入りのうしろハチマキに鎧を着込み、焚き火を前に、長ドスを片手、床几に腰打ちかけて、

「もう清水のバカどもも、いいかげんくたばツたろうな」

いい気持で、おみつに酒をつがしている。

ここまでは鉄砲のタマも飛んでは来ない。

「ふふふ——まるで雉でも啼くような声だ。斬られてやがるンだな」

ときたま、鋭い悲鳴が聞こえてくるのだ。

勝蔵の囲りには、南部浪人小池三五郎をはじめ、駒沢の小次郎、石田の文造など黒駒一家での腕利きばかりが五六人控えて居り、まン幕の外は、三十人からの有象無象だ。

俄に、その有象無象が慌しく騒ぎ立ツた。

「どうした」

勝蔵の顔色が変つて、

「見て来い、

どうしたのだ」

「合点…」

一人が駈け出したその入口で、

「ギャツ」

血煙りだ、白刃だ。

「おい勝公！　覚悟ツ」

「おや！こいつ法印の犬め」

「いかにも大五郎だ。さア来いツ」

「ははは踏みつぶしてしまえツ」

勝蔵は腰をおろしたままでビクともしない。駒沢の小次郎が、

「えいツ」

立つのと、抜くのと、斬りおろすのと、一瞬の迅業。

「なにおツ」

受けて、かわして斬り返える大五郎の腕も相当なものだ。

「あぶねえぜ、行ツてやツておくンなせい先生」

勝蔵が小池三五郎にアゴを振つた。

「どツこいしよ。ひとつ一ぴきかたづけるかな」ノソリと立ツて、三五郎が二人のそばへ寄ツて行つたと思ツたら、抜くても見せなかツた。バサツという音がして、大五郎はグウともいわず斬り殺された。

しかし、このとき、勝蔵のうしろ、まん幕の裾がパツと振られ、そこからヌウツと現われたのは次郎長だつた。

いきなりダツと、先ず、おみつを当て落してから、勝蔵の横顔に土足をダツと蹴りつけた。

「あツ」

「黒駒め！久しいな」

驚いて立ツたところを、

「行くぞ！」

一刀両断と斬りつけてくる。

「うぬツ」

抜く間が無いドスを、サヤぐるみで、初太刀だけはうけとめた。

よろめく足を踏みしめ二の太刀も辛うじてうけたがもういけない。

パツと一間ばかり飛び退つて、

「先生ツ、助太刀ツ——助太刀」

ふツと振り向いた小池三五郎の、その顔の真ンまンなかへ、ガツと、次郎長が捨て身の突きを入れて来た。おそろしいひと突きだツた。

まツたく、これは油断であツた。勝蔵には負けない自信の次郎長だつた。しかし、大五郎の腕には、とうてい敵わないと悟ツて、すばやくその油断に乗じた次郎長の戦法だつた。

三五郎を一突きついて置いて、すぐに勝蔵に——でに影もと向き直ツて見廻したが、もうすかたちもない。

これは、おそろしく逃げあしの早い勝蔵だつた。

◇

要心棒やられ、親分が風をくらツたあとの勝蔵身内、誰れ一人も残らず、悉く消え失せてしまツた。

次郎長はそこにあツた一升徳利を取り上げ、ゴクンとノドを鳴らし、それから斬り殺されている大五郎を抱き起こして、残りの酒を末期の水として口に流し込ンでやり、

「大五郎、有難うよ。成仏しろよ」

合掌して、焚火の傍に行き、勝蔵の腰かけていた床几を引起こして、ゆつくりと煙草に火をつけるのだつた。

× × ×

月は出ていなかつた。

しかし、そんな事はどうでも良いんだ。俺は自然になんか、少しも興味はない。要するに自然つて奴は、芝居の書割りみたいなものだと俺は思つている。

人つ子一人通つていやしない。もつとも、もう午前二時に近い平和島なんだから、無理もない。

一

俺だつて、会社をくびになつたりしなきや酒をのんで、今頃こんな所をほつつき歩いたりしやしなかつた。

波がいやに高い。ちようど、満ち潮なんだろう。どろどろににごつたガソリン臭い波が、それでも、一人前に、ざあざあ、気が利いた音をたてゝいた。

夏の間に客を呼んだ茶屋が、半分こわれかゝつて、すてられてある。

アベツクには、もつてこいの場所だが、今の時間にこんな所へくる酔狂な恋人達はいなかつた。

いくらか酔いがさめてきたので、俺は、背広の襟を立てゝ、しめつぽい潮風をふせぎながら、あの長い橋のたもとへひきかえそうとしたときだつた。

橋から、百米ほど、こつちの波打ぎわに、白いものが、横たわつているのを俺は、見つけた。

しかし、それにしては、いやに、波打ぎわすぎる。——俺は、ちよつと好奇心をおこして、近よつて行つた。

イヴニングをきた女が、ひとりで、向うむきにねていた。

女の酔つぱらいか。それにしても、唯事ぢやない。俺は、いつも女がひとりでいるのを見ると、ホツておけない性質だつた。会社をくびになつたのも、もとはと云えば、女のことなんだが。……

俺は、その女のそばへ行つて、

「もし、もし……気分でも悪いんですか」

と云つて、ムキ出しの肩をつかまえ、ぐつと軀を起してみた。

重い手応えがあつて、ドサツと、あほむきになつた女の口から、ゼリーみたいな黒いやつが、ガバガバつと、音をたてながら、ふき出して、流れたのには、さすがの俺も、

「アツ」

と声をあげた。

白くけむつたようにポーツと闇のなかに浮びあがつているカツコウから、女が寝ているんだと、すぐ分つた。

初め、これはアベツクの女の方だと思つた。アベツクと云うのは、大抵、闇のなかで見ると、女の方しか見えないものだから。

重い手応えがあつて、ドサツと、あおむきになつた女の口から、ゼリーみたいな黒いやつが、ガバガバと音をたてながらふき出して、俺の手をよごした！

……官能と興奮が渦巻く異色のサスペンス・ドラマ！

若い女だ。化粧は、かなり濃い。それよりも何より飛切り上等の

美女だ。プロ・ミス日本だつたら、三等以内に入ることは受合いだ。

俺は、いそいで、胸をはだけてみた。戦艦の前の主砲と云つた形に、お乳が、とがつてつき出ている。おまけに、そいつが生温かいのだ。それをグツと押しあげるようにして、心臓に手をあてゝみた。

――心臓はまだ止まつてないらしい。

俺が、ゆすぶりながら、

「しつかりしろ、おい！」

と呼ぶと、気がついたらしく、

「助けて……ころされる。」

と、うつたえるようにそれだけあえぎあえぎ云つて、また黒いゼリーを一つ吐き出した。

イヴニングは安ものではない。顔に相応して、豪華なイヴニングだ。その胸のところが、泥で無惨に汚れている。靴で、ふまれるか、けとばされるかして、肺を破つたのだろう。

これは、助かりツこないと思つたが、

「医者を呼んでくる。……じつとしていろ」

と叫ぶと、眼を大きくあけて、じつと俺を見た。

忘れられない眼だつた。

何か云いたげに口をうごかすが、もうゼロ、やぶけた肺がなつているだけで、声にはならない。

俺は、あわてゝ、かけ出そうとすると、何か柔らかいものをふみつけた。

小さな化粧袋だ。

夢中で、それをポケツトに突込んで、かけ出した。

橋を渡つて、京浜国道へ出ると、一台の自動車が、客待ち顔にとまつている。

俺を見ると、ポイとくわえていた煙草をすてた。赤い火がきれいな孤を描いて、消える。

「おい。運ちやん。この先に重症の女がいるんだ。君、この近くに行つて医者を見つけてきてくれ。」

車がはしり出したのを、見て、また橋を渡つて引かえした。

ところが、俺は、そこで自分の眼をうたがつた。

どうした事か、もと居た場所に女が居ないのだ。あんな瀕死の重症で、歩き出せる訳はない。

俺は、よしつ小屋のまわりや、立ちくされの堀立便所のなかまで、のぞいたが、女の姿は、どこにも見つからなかつた。

わずか五分か、そこいらの間に、女の姿が、ぬぐつたように消えてしまつたとは、どういう事だ。

俺は思わず、冷水をあびたように、ぞつとなつて、その場に立ちすくんだ。

波は、相かわらずとう、どうと音たかい。

あたりは、墨を流したように真ツくらだ。

俺は狐につままれたような気がして、とにかく医者がくるまで、待つて居ようと、ぶらぶらしたしたときだ。

突然、後頭部に、グワンとはげしい衝撃を感じて、思わず、ひざをガツクリ折つた。

二

翌朝、眼をさましたときは、昨夜のことは夢のように思われた。

だが、起きようとして上半身をもち上げた瞬間、後頭部と、胸に、キリできさすようないたみを感じて、ウームとうなりながら、またベツドにたほれてしまつた。

これは、ちよつとうごかない。

じつと眼をつぶると、昨夜のあの瀕死の女の、眼が、……俺にすがりつくような、訴えるような必死の瞳が、夜光塗料で描いたようにまぶたの裏に、浮びあがつてきた。

黒いかげを足でけりつけてやつた。

大学のときはラグビー部にいたので、キツクは得意である。

靴の先に、柔かい肉の手ごたえが感じられた。

ワツとか何とか云つて、ひるんだすきに立ち上ると、そいつに飛びかゝつた。

乱暴な話だ。そいつが何をもつているか分つたものぢやないのに、飛びかゝつて行つたのだ。

俺も、胸に、すごいメリケンをくつて、息がとまつた。

しかし、俺の方も、たしかにいくつか、なぐつて、（映画みたいに派手には行かなかつたが）、それから、いきなり逃げ出した。

そいつも、すぐ追いかけてきたが、俺が橋を渡つて、大森の町へ入ると、もう、いなくなつていた。

――それが、今朝になると、すつかりハレ上つている。

これは、ちよつとうごかない。

じつと眼をつぶると、昨夜のあの瀕死の女の、眼が、……俺にすがりつくような、訴えるような必死の瞳が、夜光塗料で描いたようにまぶたの裏に、浮びあがつてきた。

あの女は、もう今頃は、冷たくなつているだろう。とすると、俺をみたのが、人を見る最後だつたかも知れぬ。

……俺は、まるで、自分と関係した女のことを思い出すように、その女のことを思い出していることに気がついて、少し笑つた。

俺は物事を単純に考える方だ。

あの女は、酔つて、フラフラ、海を見に行き、あの辺で、痴漢に強姦されそうになつたそれで抵抗し、ころされた。俺の頭をなぐつた奴が、その男だ。

——そう結論を下した。なるべく、かゝりもう忘れることだ。

リリイの奴が、にやアにやア、うるさく鳴くので、俺は、やつと、ベツドからはい降り、扉をあけて、戸口にきている牛乳をとつた。

二日酔いで、全然、食欲がないから、この牛乳は、全部リリイに進呈することにしよう。

「さア、リリイ」

うちのリリイは、レスリー・キヤロンよりは美人である。妖艶なこびを見せながら、皿にあけた牛乳をペチヤペチヤ、なまめかしい音を立てゝ呑んでいた。……が段々、不味そうに、音を立てなくなり、そのうち、皿を離れた。

「どうした？　リリイ」

と云つているうちに、ケイレンをはじめた。

それから、リリイが死ぬまでに五分とかゝらなかつた。

俺は心底から戦慄して牛乳を凝視した。

俺を殺そうとする奴が居る！

三

もう、キズのいたみなんて云つていられなくなつた。

俺は、起きあがると、服をきた。こうしちやいられない。

靴の裏みたいな感じのするロの中へ、煙草をおしこんだ。

マツチをとろうと、上衣のポケツトへ手をつゝ込むと、何かさわつたものがある。

出してみると赤い、ビニールの化粧袋だ。

そうだ。

今となつては、こいつが唯一つの手がかりだ。

口紅が一本。

粉白粉の入れものが、甘い匂いをはなつている。それから、女だけが使う紙。

キヤメルが一箱。

その他に、マツチと、トランプの札が一枚出てきた。トランプはスペードのAだ。

これは何のおまじないだ。そう云えば、鼠の尻尾を、ハンドバツクのなかに入れている女がいたつけ。——それと、同じように、マスコツトとか何とか云う奴かも知れない。

マツチのペーパアをみた。

京橋・ユートピア。あなたを、歓楽のかなたにお誘いするクラブ・ユートピア。

なるほど。——彼女は、文字通り、歓楽のかなたへ行つてしまつた訳だ。

「かなたへ」行つてしまつた訳だ。

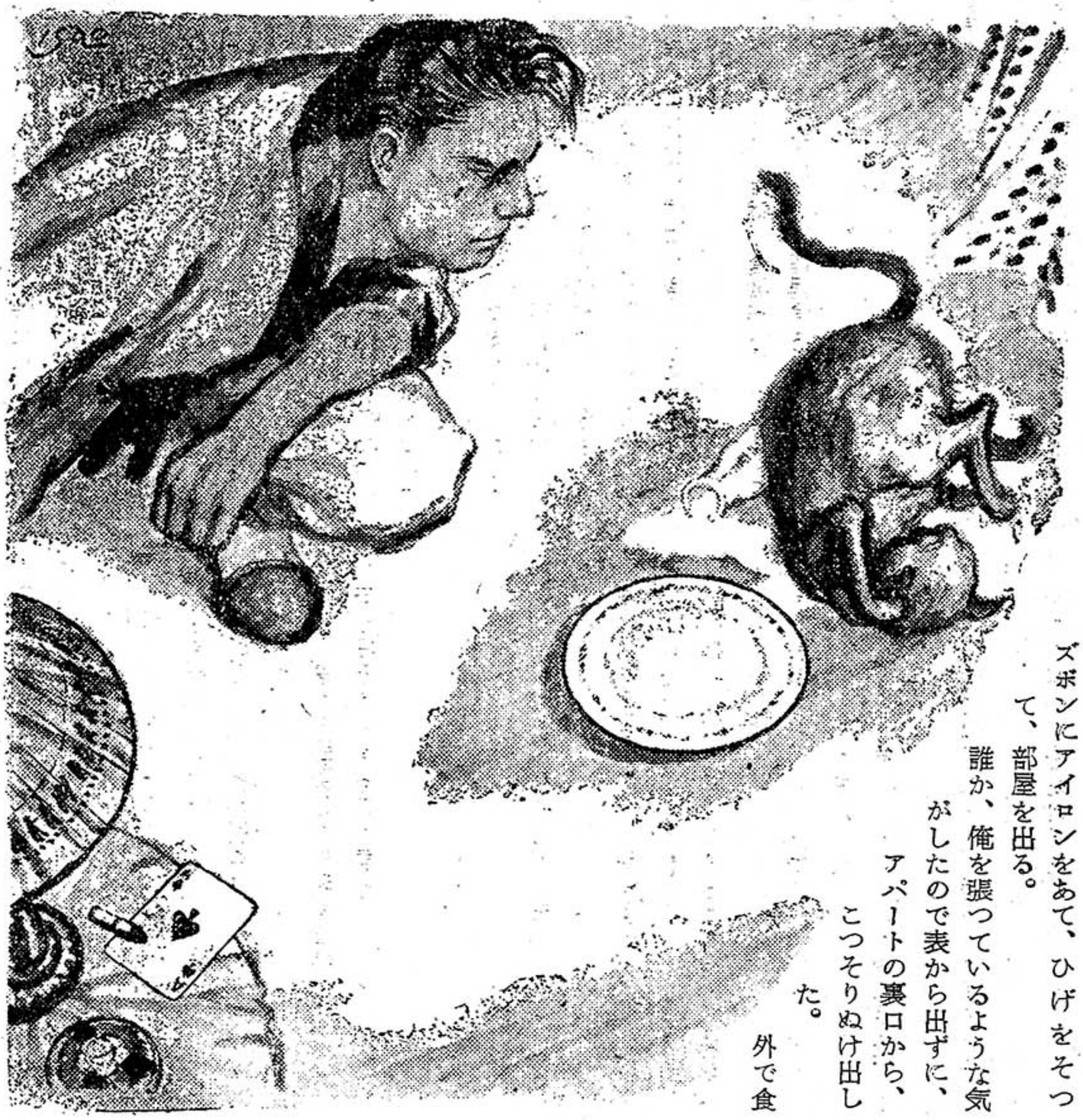
すると、彼女は、この店の女か？

とにかく、こゝへ行けば、何かつかめるだろう。……これは、単なる強姦事件というものではないらしい。

俺のアパートまで、つけてきて、俺を殺そうとしているからには！

この店へ行くのは、危険かも知れないが、しかし、もう、どこにいても危険なことは同じではないか。俺は、復讐心のとりこになつていた。

ファースナーをあけると、



ズボンにアイロンをあて、ひげをそつて、部屋を出る。

誰か、俺を張つているような気がしたので表から出ずに、アパートの裏口から、こつそりぬけ出した。

外で食事をしたり、公園をぶらついたりして夕方まで時間をつぶした。

公園で、俺に道をきいた娘がいた。俺がさそえば、映画位、一緒に行きそうな素振りだつた。

その女が、行つてしまうのを見送るのは、残念の至りだつたが、この際は仕方がない。

夕刊をかつてひろげて見たら、片隅に少さく、

「東京湾の六号岸壁に、本日午後一時頃若い女の死体が漂着した。年齢は廿一二歳。裸体で、身許不明。多量に水をのんでいるので自殺と見られる。」

と記事が出ていた。新聞記事なんてこんなものだ。それとも、何か大がかりな、陰謀が行われていて、他殺死体を、自殺と見せかけるように、各方面に手配済になつているのか。

そうだとしたら、昨夜の女はなほ可愛想だ。

日が暮れかゝつたので俺は京橋へ行つた。

四

簡単に分ると思つていたユートピアをさがすのは、案外骨がをれた。

警察へきゝに行つたら、
「キャバレーは、しよつちゆう名前をかえるので、店の名前だけぢや……経営者の名前は？」
なんて、呑気なことを言ゝやがつた。
それでもようやく分つた。
ビルの地下室にある、少さなナイト・クラブだ。
最近まで駐留軍専用だつたような様子で、昨夜の女の、豪華な、イヴニングもなるほどと思われた。
螢光燈の明りと云うのは、女の顔のそばかすや、腕のノミのあとなどをいやにハツキリ見せる。だからどうして、バアや、キヤバレーが螢光燈をつけるのか、その根臍がさつぱり分らないが、まア、そんな事はどうでもいゝ。
とに角、俺は、何気なく入つて行つて、まつすぐに、バーテンのいるカウンターの所まで行き、バアに片足をかけ、
「ハイボール」
と云つて、そつとあたりを見まわした。
ボツクスが十ばかり。ボツン、ポツンとそこに客が入つている。まだ時間が早いのだろう。外人の客もいる。
若い、軀の良さそうなバーテンが、くわえ煙草で、「バイヤコンデオス」か何かうたいながら、ハイボールを作りはじめた。
カウンターのわきに、扉があつて、そこから奥にまた、部屋があるらしい。さつきから女が出たり入つたりしている。
俺が、おどろいたのは、こゝの女が、みんな粒よりの女ぞろいだと云うことだ。
普通のバアやキヤバレーだつたら、こうは美人を集められない。
これなら、昨夜の女が、こゝに居たのも不思議ではない。こゝの主人が美人を集めるのに特別の才能でもあるのか、それとも何か外の理由でもあるのか。そう云えば、俺が、カウンターによつかゝつて、ハイボールをちびちびのんでいると、
「おい、雪子と、さちよは、プレス・クラブだ。車がきているから、すぐ行け」
と、ニツカポツカの男が入つてきて、女を指図しながら、また消えて行つた。
「昨夜、どうだつた？」
「どうも、こうも、ありやしないよ。……ジミイのやつがしつこくつて、大騒ぎさ」
「としこも居たんだろ？」
「あゝ、あいつはジミイに首つたけだからね。くつついて離れやしない」
と云うようなひそひそ話も耳に入る。
そのうちに、バーテンが、
「ダイス、なさいませんか。どうです」
と、台の上にあつた、革のコツプを、俺の前へ置いた。
「ヨシ！」
と、俺は、煙草をすてゝ、コツプに手をかける。
――しかし、今夜は、不思議と芽が出なかつた。
バーテンは肉の厚い顔を、無表情に光らせながら、コツプを振りつゞけた。体臭の強い奴だ。……こいつ日本人ぢやないかも知れない。
「ダメだ。……カードなら、強いんだが」
と、俺はコツプを棄てゝ云つた。
「カードか。ありますぜ、カードも」
男は、ポケツトから、カードの箱を出してしやつた。
俺は、それを手にとつて、模様を見た。
それから、パラパラとひらいてみてから、
「このカードぢや勝負は出来ない」
と、そろえて返した。
「どうしてです」

バーテンは、けげんそうに俺の顔を見た。
「しらべてごらんよ。スペードのAがないぜ」
バーテンは、何か口をうごかしてから、それを手にとつて験べた。
「なるほど、こいつは失礼」
と云つて、新しいカードを、台の下から出してきた。
カードの運も悪かつた。いや、これは、俺の計画だつた。
かなりの額を、俺は、負けつゞけた。
いゝ加減、負けたとき、カードを投げて云つた。
「止めた。金は無いよ」
「なにイ?」
と、その男は、カウンター越しに、身をのりだして、俺の顔をにらみつけた。
その声が、あまりに大きかつたので、外の女も一斉に、こつちを振りむいた。
「無いとは何んだ。……勝負して、無いで、済まされるか。えゝ?」
「俺の家までくればある。くるか?」
「おゝ、行こうぢやねえか。どこへでも」
と、その男は、カウンターをまわつて、俺のわきにやつてきた。
こゝではまづい。外へ出て途中で、こいつをやつつける。それが、俺の気持だつた。
この男が、昨夜の男だ。俺は、そう直感した。あの女が、どうしてスペードのAをもつていたか分らないが、この男のカードだ。
カードを配るときに、スペードのAだけをかくす方法があると云う。そういうインチキを器用にやる女だつたのかも知れない。
——俺たちが扉の方へ行こうとしたときだつた。
影のように一人の女がすつと、バーテンのうしろに寄つてきて、
「どうしたの?」
ときいた。
ぴつちり、身についたスーツをきていた。両手でにぎれるほど、きゆつと胴がしまつていて、ハト胸だ、おまけに、高いハイヒールをはいているので、尻がぐつと、うしろへ突出るようになつている。
俺は、顔より何より、その鳩時計みたいな軀のかたちが気に入つた。
顔だつて、まんざらぢやない。きれ長の細い眼を、半分とじながら、ねむそうに俺を見ている様子が、この女の閨房を想像させる。
と、その男は、カウンターをまわつて、俺のわきにやつてきた。
「こいつが、カケの金がないつてぬかしやがるんだ……」
バーテンは、あごをしやくつた。
女は、表情をかえないで、俺をじつと見ながら、
「まア、いゝぢやないの。……」
と云つた。
バーテンは、ふしようぶしよう、カウンターのうちへかえつて行く。
「来いよ。払うぜ」
と俺は声をかけた。
女は、自分の肩で、俺の肩を押した。
「ねえ、飲まないで、先にたつて、ボツクス の方へ俺をつれて行つた。いゝ匂いだ。安い香水ぢやない。
「三十だ。……それがどうした。」
女は返事をしないで奴は、女の尻をいやに、こね廻すように見せるものだ。こいつを両手でつかんで、引きよせたら天国だな。

席につくと、

「私、あんたが好きだわ」

と云つて、片唇をきゆつと引いた。

「俺も、お前が気に入つた」

と俺は云つた。——どつちにしても、こういう機会をのがすやつは居ない。

五

酒を呑むと女の唇は、益々ぬれてきた。

しかし、別に話すことは何もないので、結局、益々、酒をのむと云うことになる。

強いウイスキーだが、俺は、ちつとも酔わなかつた。緊張していたのだ。

「こつちへこいよ」

と女に云つた。女は、じつと俺の眼を見つめたまゝ、卓子をまわつて、俺のわきへきて腰をおろした。

俺は、右手をのばすと、いきなり、女の肩をつかんで、ぐつと、俺のわきへ、引よせた。

「危い」

と女は、よろめいて、手を、俺のもゝの上についた。

俺はむしやぶりつくように、女の唇をさがして、そいつに吸いついた。女は、二三回逃げてから、俺の唇に合わす。

そして、じらすように、もてあそぶように、唇を、左右にうごかしつゞけた。

まつたく、この女の接吻は悪くなかつた。息がくるしくなつて、俺が唇を離すと、やつと眼をあけたが、今度は、自分からのしかゝるように、かぶさつてきて、接吻をしだした。

俺は、ちつとも酔わなかつたが、やつと俺は、柔かいふくらみを

つかみ当てた。

女は、もう、息をはづませながら、

「こつちへこない？」

と、スーツのボタンをはめながら、席を立つた。

「金はないぜ」

と俺は云つたが、女は、じろつと俺をふり返つただけだ。

六

カウンターの横の扉から、奥へ入つた。

入りしなに、バーテンが、じろつと俺をにらんだ。

奥には、いくつも部屋があるらしかつた。広間のような所もある。どうも、結局のところ、あのバアは、この

奥の部屋をかくす為のロビ
トにすぎないようだ。
一番奥の扉へつくと、女
は、カギで、それをあけて、
俺を先へ入れた。
まで、第一流のホテルの部
屋と思えばいゝ。
女は、灯をつけるとそこで、
立つたまゝ、俺に接吻し、次の
部屋にきえた。
そしてすぐ、シャワーの音がき
こえてきた。風呂へ入つているら
しい。俺は、ピンクのカーテンを
あけてみた。いゝベッドが置いてあ
る。
浴室の扉があいた。パッと、白い
湯気が入つてくるのと一緒に、桃色の
肉のかたまりが、飛び出してきた。
何もつけてない、素ッ裸で、おそれ
る所もなく、俺の前へ立つた女の軀全体に湯
気があがつている。
俺は、まだぬれて、ペタペタしている、そい
つを、抱きあげると、腕にかゝえて、ピンク
のカーテンの内へもつて行つて、シーツの方
へ、おつぽり出した。

それは男の為に、つくられたよ
うな軀だつた。歓楽の為に用意されたおもち
やだつた。
俺は、へとへとにつかれて、しばらく、う
とうとした。
女は、じつと、俺の顔をみていた。それか
ら、スタンドをくらくし、そつと、ベッドを
すべりおりた。しばら
く俺の寝息をうかゞつてから、素ッ裸の上に
ガウンをまとつた。
カーテンの外に出て行くのを見すまして、
飛鳥のような早さで、俺は、飛びおきた。
女はベルを押そうとしていた。
俺は、物も云わずに、女の髪をつかんで、
ぐつとひいた。「きやーつ」
と女は悲鳴をあげてよろけた。俺が女を、

ころがすと、女も、すごい力で俺に喰つてかゝつてきた。

女の爪で、頬にするどい痛みを感じたが、そのまゝ、女の上に馬乗りになり、女の顔に、思い切つて掌を飛ばした。

パシツ、パシツと鳴るたびに、俺の方も、腕のつけ根まで、しびれた。

「ヒイ、ヒイ」と、女は、声をあげた。十度も、掌を往復させているうちに、美しかつた女の顔が、ゆがんで、みるみる紫色にハレてきた。一分前まで、俺に甘い言葉をさゝやき、俺をいゝ気持にさせてくれた軀だつた。

女が、ひるむのを見て、俺は、手早く女を素ツ裸にし、ガウンのひもで、手をうしろに、ゆわえた。

口へは、俺の靴下を突込んだ。

そのとき、廊下に面したドアが、はげしくたゝかれた。

しかし、そこはカギがかゝつていた。そのカギにピストルが打込まれ、カギがこわされた。

ドアを体あたりで、ひらいて、飛び込んできたのは、さつきのバーテンだ。

俺は、女の軀を起して、それを楯にとつた。「ムウウ……」

女は、何か云つたが、声にはならない。

「どけ、どけ」と、バーテンは、女にさけんで、ピストルをかまえた。

女は俺の両手のなかで、猛烈にあばれた。軀をねじり、足をバタバタと、けあげた。

ピストルの音がして、俺は、もゝに、にぶい痛みを感じた。子供の頃しもやけになつたとき感じたような、いたがゆさだつた。

しかし、その前に、ギヤアという声がして、つかんでいる女の軀が一瞬硬直し、急に重くなつた。俺は、女の躰を、前へ、なげとばした。そして、とびのけるバーテンに、パツとはねて飛びついた。

俺がつかんだのは、バーテンの足だつたようだ。「うおツ」

と、バーテンがころがる。俺は、顔と云わず、胸と云わず、手あたり次第に、無茶苦茶になぐつた。俺のこぶしが相手の歯にあたるにぶい音がして、血がふきだした。

そうしながら、ピストルをにぎつている手を、足で、ガンガンふみつけた。

男の手からピストルが離れ、床をすべつて行つた。

女はおほむけにのけぞつて、たほれていた。眼は、もう白眼になつている。

つい、一瞬前に、あんなに、俺をたのしませてくれた躰が、ざくろみたいに口をあけて、そこから、血がふき出して、床に海を作つている。

俺は、ピストルをとりあげると、悲鳴をあげる男の口のなかに、三発たゝき込んで、そいつを黙らせてやつた。

廊下を走つてくる大勢の足音がした。

この事件の全貌は、まだ分らない。国際的にひどく大がゝりなある政治事件に関係しているらしい。

平和島で殺された女は、あまりに色んな秘密に立ち入りすぎたので、殺さない訳には行かなかつたのだろう。そういう意味で、殺された人間は、この日本で、まだ沢山いる。

しかし、いづれにしても、そんな事に俺は興味はない。どつちでもいゝ事だ。

驚ろいたのは、俺を誘惑した女が、あの店の主人で、この女のグループをあやつつていた、という事だ。だから、平和島で女を殺したのも、この女らしい。

俺は、正当防衛がみとめられて、無罪になるらしい。早く街へ出て、女をさがしたい。

今、俺がしたい事と云えば、それだけだ。

アメリカ警察の拷問

デモクラシーの国アメリカにもこのような反人道的な警察権の濫用がある!! これは、一米人記者によつて暴露されたアメリカ警察の裏面史であり、第三段階として怖れられている拷問の赤裸々な姿である!

A・G・ホプキンス
風間草子訳
伊藤静夫画

自由民主の国アメリカの警察にも拷問がある——といえば一寸奇異の感を抱くだろう。けれど、ニューヨーク・ヴイキングプレス社記者、アーネスト・G・ホプキンスの著書、「非道なる我が警察」によれば、詳しくその模様が述べられている。

同書は一九三一年の出版となつている。だから今から約二十年以上も前のデーターをとり集めたものであるけれど、数えてみれば丁度太平洋戦争開始よりさかのぼること四、五年、アメリカには不景気が訪れていたが、国際的には比較的隠やかであつた時代のことなのだから、マツカーシー旋風の吹きまくるアメリカ、我が国の戦争中を思わせるといわれる程、自由を失いかけているアメリカの国内事情を考えあわせると、実に興味深々たるものがある。

▽「第三段階」という言葉△

先ずアメリカには〝サード・デイグリー〟(第三段階)という言葉がある。この言葉はアメリカ人にとつて何かしら陰惨な響きを持つている。つまり第三段階とは逮捕に始まつて第三番目の段階ということなのだ。

先ず逮捕が第一段階であり、連行が第二段階であり、或る室内、(屋外のこともある)での訊問が第三段階という意味なのだ。この第三段階という言葉が何故アメリカ人に恐怖と隠惨なひびきを与えるものであろうか?

デモクラシーの国といわれるアメリカに、このような極めて反人道的な警察権の濫用が行われて来た事実が、米国自身の一新聞記者の手によつて暴露されているという事実は面白い。然もこの著者は、偏見とかセンセーショナリズムというものを一切排し、極めて科学的な冷静さをもつて、徹底的にアメリカ警察の裏面を描き出している。

だがこのような著書が官憲の圧迫なしに世に公けにされたというアメリカンデモクラシーの一面目と、この著書に描き出された非道なる警察の存在という矛盾は、我々に奇妙な感情を与えずにはおかない。

彼はその冒頭でこう云つている。

「アメリカ人は非道な国民であるという言葉は余りにも云いならされた言葉だが、実際我々アメリカ人の非道さは、御丁寧にも三重の要素をもつている。第一に犯罪の性質が非道極まること、第二に一般市民の非道なことと第三に法を施行すべき当局、特に都市警察の無法さである。」

そして健全なる国家維持という点で、この第三の警察の無法が最も深刻な問題を蔵していると指摘している。

それではどのような無法が、アメリカ警察によつて行われているか、次に第三段階の内幕なるものを紹介しよう。

▽兎も角ふんじばれ△

これはテキサス州のダラスの町に起つた出来事であるが、ターナーと呼ぶ或る事業家が商売上の用事で外出、先ず町の公衆電話に入つた。所が生憎な話中なので一たん外へ出て数分後に隣のボツクスへ入つて行つた。器械が故障なのか又通じない。仕方なく次のボツクスへ入つて行つた。

たつたこれだけのことなのだが、ようやく用事をすませてボツクスを出て来たとたんにパトロールの巡査に腕を摑まれた。今内部で何をしてたのだと聞くのだ。電話をかけていた、と答えると、あんなに何度もボツクスを変える必要はない。電話料金箱から金を盗んだのだろうとにらみつける。「そんな馬鹿なことはない。じやア調べてごらんなさい」と道極まること、第二に一般市民の非道なこと、ポケツトから財布を出して内部をみせると、たまたま、ニツケル銅貨が五つばかり入つて無法さである。」

いた。

さあ、得たりとばかりパトロールはターナー氏を警察に連行して、他の容疑者と共に留置場に放り込んだ。こうして四十八時間にわたる不法監禁を受けたのである。この間自分の事務所に連絡することはおろか、友人に弁護を頼むため電話をすることさえ拒否されたのだ。

生憎、電話料金の盗難がその辺りで頻発していた際だが、相手の事情に碌に耳を傾けず一方的に拘束するということは、逮捕件数が多いほど成績が上るという実情では、警官の側からすれば、それも生活につながる問題なのであろう。

こんな話もある。私服の刑事が毎月、或る平均数の逮捕実績を上げないと制服巡査に格下げされるという制度があるため、その平均数に満たない恐れのある時は、何でも構わないから黒人街へ入つてゆく。そしてうさん臭そうな人間を誰でも構わず引つ張つて来る。法廷に出た場合、黒人が最も分の悪い取り扱いを受けるということをチヤンと計算に入れているのだ。

このような当てずつぽうの憶測から出た逮捕が、往々恐るべき「サードデイグリー」に つながる自然の入口になるのだから恐ろしい。従つて彼等が正義の味方であるとか、法の番人であるということは、民衆も信じなければ彼等自身も自覚などしてはいないだろう。そうして一たん捕えたが最後、容疑者に対する警察官の心理の中には、恰も獲物に飛びかかる空腹な野獣とでもいうべき、一寸常識では考えられないような アブノーマルな嗜虐性が生じて来るのだ。

▽死人と握手させる△

そこで、どういう拷問が行われているかというと、みるも無惨な惨死体や、バラバラの手足、頭の皮膚のついた儘の女の毛髪などをもつて来たりして容疑者にみせるという方法が、相当行われているようだ。然も驚いたことには明るみにされないだけの話で、何処にでもあることとらしい。

またヴアジニア州で起つた強姦、殺人事件では、容疑者は死体置場に連れてゆかれ、殺された女の側で長い間尋問された挙句、強姦殺人の場面をもう一度繰返すことを強制されたが、容疑者はとうとう自供書に署名を終えると、わなわなと慄え出し、その場にたおれて了つたので、そのまま監房にかついでゆかなければならなかつた。

種々雑多になつてゆく。

デトロイトの或る町で一九二八年、エロシイ・カーターという若い娘の死体が附近の湖に浮んだ事件が起きた。

すると真先きに彼女と同棲していた恋人のリイ・ブラシイという青年に嫌疑がかけられたが、青年を拘束した警察官は、粗末な板の上にのせられてある少女の死体を念入りに眺めさせ検分させた挙句、のどを締められた痕をゆつくり撫でさせ、ざつくり割れた頭髄骨の間から手を入れさせ、然も面白半分に、紫色にふくれ上つたみるも無気味な死体の手を摑えることを強制させたのである。

これが何処からともなく人の口に伝わり、さすがに世論の憤慨を買つたが、これに類したことは明るみにされないだけの話で、何処にでもあることらしい。

またヴアジニア州で起つた強姦、殺人事件では、容疑者は死体置場に連れてゆかれ、殺された女の側で長い間尋問された挙句、強姦殺人の場面をもう一度繰返すことを強制されたが、容疑者はとうとう自供書に署名を終えると、わなわなと慄え出し、その場にたおれて了つたので、そのまま監房にかついでゆかなければならなかつた。

このことは後で事実が弁護人に分り、判決はくつがえされた。しかし人間の心理として恐ろしいものをみたとたん、ショックを受けるのは当然のことなのだが、いま挙げて来たように、容疑者に死体をみせる場合、それが犯人であるかどうかは別としても、強い衝動を受けるのが普通である。

警察側ではショックをみとめれば、これは恐らく真犯人だからギクリとした反応がみられなければ、しぶとい犯人だ、ということになり、それが事実犯人であれば未だしもだが、無実な人間であつた場合は救いようのないことになる。

これはまたデンヴァーにあつた一人の白痴の少年が盗みで捕えられ、やがて罪状を告白したが、その三十いくつかの罪状の中には、この少年が町の感化院に無事に保護されていた間に起つた殺人や、銀行強盗迄を含んでいた。この少年は麻薬常飲者だつたが、拘留されていた間に、何か薬を飲まされた形跡があり、その影響で、あることないこと、物につかれたように喋らされたものらしい。

また、一九三〇年頃、ニューヨークで実際行われていた拷問をウイツカーシャム人権擁護委員会が発表した所によると、一寸した盗みを働いたというだけのかどで、未だ学校を出ていないような若い少年達が根棒で殴打され、打ちのめされ、ゴムのホースで腎臓のあたりを一定の間隔をおいてたたかれる。(これは一見、シャツにかくれて傷痕が見えないが何年か後に内臓に故障を起し、種々の病気の要因となることがある。)はては靴で急所をけられる等の惨忍な拷問を受けた。

これらの少年達は然も学校で人権を尊ぶ米国憲法の美しさを習つているのだ。

このようにゴムのホースで打つというやり方は痕が残らないため拷問の証拠因滅にはもつて来いのものである。

▽奴に金魚をみせてやれ△

「金魚を見せてやれ」という言葉がある。これはゴムホースの拷問をかける部屋を金魚部屋と呼び、容疑者をそこへつれてゆくことをシカゴの警察官同志の間で流行らした合言葉だが、一度、或る無実の罪をきせられた学校教師が、この拷問を受けたことから問題になつて一時取り止めになつたが、やがて再び密かに行われるようになつた。

これもやはりリデンヴァーでの出来事であるが、刑事の妻でパール・オーラフリン夫人の場合である。

彼女には前夫との間に十才の女の子がいた。三日後にその子の死体が遠く四哩も先のバークレー湖に浮んだが、頭は何か鋭い刃物でたたきわられていた。後で人の話によると、夫人は女の子をドライヴに連れて行つたことが分つた。自動車を調べてみると、血のついたハンカチーフもみつかつた。

さあ、これはてつきり夫人が怪しいということになり、夫人は拘留されることになつたが、奇妙なことに真夜中、悲歎からか、疲労からか、病中にあつた夫人を連行したのである。

丁度、土曜日だつたが、それからずつと次の火曜日まで、一睡もとらさず、食物も与えずに尋問を続け、それは次の火曜日までつづいた。彼女が病中にあつたのは不順なメンスのためで、精神も幾分異状な状態にあるようだつた。この間、体の異常は益々悪化したが下着一つ取り変えることも許されず、手や顔を洗うことも許されなかつた。ある時などは病気のまま、死体置場へつれてゆかれ、死ん

だ娘の側に一時間近くも立たされていた。

衰弱がいよいよ激しくなつた頃、ようやく看守がオレンヂジュースを運んで来た。むさぼるように摑み取つて、ふと内をみると、大きな黒い油虫が浮んでいる。「キャツ」と叫んだきり、彼女は気絶して了つた。ようやく家族から依頼された弁護人がかけつけたときには、全くの死体のように、眼は落ち凹み、青ざめて血の色も見られなかつたという。着物は汚れ、部屋は悪臭がただよつていた。

彼女は娘の殺人を自供したが、これは世論によつて尋問の方法が惨酷過ぎるということから覆えされ、のち、あらためて別の証拠が挙げられて判決が下された。

これはまた随分前のことであるが、一九一九年の一月ワシントンの中国大使館で三人の大使館員が殺された事件が起きた。李という学生が「ニューヨークに住んでいる王という中国人が、殺人のあつた真夜中頃附近にいた」ことを密告して来た。ただちに刑事が派遣され、折悪しくスペイン風と胃病で床中にあつた王を拘引していつた。

王は三年前にアメリカにやつて来た留学生で、胃が悪いため、殆んどずつと起きたり寝たりという状態をつづけていた。然し警察に連行されて取調べを受けた結果、入国者記名簿にどうしたことか名前がのつていなかつたのがいけなかつた。

夜に日をつぐきびしい尋問が始つた。殊に病人でもあり、殺人など犯せる筈もないのに（然も真夜中のワシントンの殺人だ）彼が、看護にあたつていた王の兄かどちらかが殺人を犯したと自供しろと責められ、そのうち病気が悪化して、物を食べることも出来なくなつた。

王をみて、警察側は慌て始め、警察官の一人を医者に仕立て監視かたがた王の側につきそわせた。

八日目に漸く少し回復した王を大使館に連れてゆき、階段から階段を歩かせ、犠牲者の写真をみせ、殺人につかつたと思われるピストルをみせ、血染のハンケチをつきつけて、執拗に説明を求められるのだつた。

九日目にとうとう正式の拘留が決定したがそれから二日後王は自供書に署名を了えると気絶した。これ迄打ちつづく尋問で自由な睡眠を許されてはいなかつたのだ。それから一

ケ月、王は床に臥した儘だつた。

その年の九月、王は告発され、一月に法廷に立たされ、自供を有力な証拠として絞首刑をいい渡された。直ぐに控訴したが、却下となり、遂に最高裁判所に上訴されて調査の結果、王が無実だつたことが明らかにされ、五年の不法監禁と十二日間の拷問の後、王は自由の身となつた。

▽電気猿△

たまたま、拷問の相手がニグロとなると、もつと気楽にやれるようだ。これも主にニグロに対して行われるものだが、テキサス州のダラスではずつと以前から、「電気猿」といつて容疑者を真夜中の暗い森へ連れてゆき、電流を二つに分けて、その音響電池の一方の線を容疑者の脳天に通じさせるという拷問を行つていた。

警察官の間では、この拷問のことを、背中にチクリとお見舞いする、といつているが、電気猿という言葉は、電気が通じたとたんピリリとしてロケツトのように手足を動かす所からそう呼んだものだろう。然しこの言葉をきいただけで震え上り、被執行人は何でもかでも自供して了うのであつた。この電気猿は一九二五年頃から次第にすたつて来たが、続いてひどいむち打ちが、これにとつて代るようになつた。

これはある地方の刑事部長の話。

「第三段階？　なあに、一寸も惨酷なことなんかあるものですか。私の所ではこんな風にしてるんです。何もそれこそ暴力なんかとんでもない。平手いやしません。ここの地下に部屋が一つありましてね。一寸薄暗いが、特に汚ない部屋でことなんか一つもないでしよう。」——

カンサス市で銀行ギヤング事件が起きたが犯人の逃走中、交通巡査が殺されるという事件があつた。逃走犯人の自動車が追跡され、番号が確められたが、捕まつたのは車を犯人にかした持主の黒人だつた。彼を容疑者として逮捕した警察当局は、彼を足でけつたり、ゴムのホースで打つたり、拳銃の背で打つたり、根棒で散々殴りとばした挙句、急所をもみ上げたりしぼつたりまでして、銀行ギヤングを働き、スミス巡査（交通巡査）を殺害したと自供させようとするのだつた。

オハイオ州クリーヴランドで銀行強盗事件が起つた時、主人が犯行を働いて後、金を持つて逃亡して了つたため、使用人の黒人が逮捕され、金のありかを問いつめられて拷問にかかつたが、事実彼はしらなかつたかも知れだろうと思つたから戸を開けたら、ごらんなさい。三人のチンピラの奴ぐつたりとなつてよろよろと飛び出して来たと思つたら、一人はその儘ぶつたおれ、後の二人はそこでゲロゲロ上げちやいましてね。間もなく三人共きれいにドロを吐きましたよ。どうです。こんなやり方は。暴力なんかとんでもない。平手打ち一つ食わしてやしませんからね。惨酷なことなんか一つもないでしよう。」——

ないのだ。これが又ひどいやり方で、尋問の最中、この黒人を素裸にし、床にねかせ、警官の一人が、急所をもつて黒人の体を吊り上げるというやり方だつた。しかもこれが何回も何回も繰返されたという。

▽花嫁殺しトニーの自殺△

最後に哀れな少年の物語があるので、それをつけ加えよう。これは或る大きな街に起つた殺人事件から始つたことだが、その街の警察署の記録には「花嫁殺し犯人、トニー、独房で自殺」とだけしか記されていない。

花嫁殺しトニーの自殺は、その市の警察の部厚い記録に残つている。彼の公判の開かれようとする朝、独房で看守の眼を盗み、首を縊つたものだつた。恐らく裁判に出るのが厭で自殺したのだろうということだつた。

トニーは彼が殺人を犯した事を確かに自白しているし記録は一応筋が通つている。然しこの事件は、どうもおかしいと私は睨んだ。弁護人の口からきいた事実や、何人かの証人達の話を総合してみると、この事件には恐るべき無法な自白強要手段が用いられたのではないかという気がしたのだつた。

これに先だち五人の有力な人間がトニーの裁判に立会つて、この十八才のイタリヤ少年が自白させられるためにどんなにひどく殴打されたかを証明する事になつていた。

十八才のトニー少年は、やはり、同じ年頃のクリステイーヌとこの市のイタリア街に住んでいた。彼等は結婚して漸く三週間しかたつていなかつた。彼等の住んでいた街は不良少年達が多く、少年裁判所の保護者だつた。彼は働きに出るようになつたしかし、トニーと彼女の争いなどは絶えなかつた。

八月のある夕方、彼等はいつものように起きて働きに出かけたが、トニーの家族の話によると、彼は八時頃帰つて来て寝たという。

次の朝二つの事が同時に起つた。というのはトニーはいつものように起きて働きに出かけてゆき、彼の妻クリステイーヌの死体が何哩か先の崖の上に見つかつたという事である。

彼女は射殺されていた。だが現場の状況では、彼女の死後その死体が自動車で運搬された事を物語つている。

もう一つ妙な事があつた。というのは、その辺りの地面は崖の端に向つて、ゆるやかな傾斜を辿つているのに、女の死体は平らな所に置かれてある事だつた。あと数歩先に運べば、そして崖ふちから下へ投げ込めば、恐らく下の沼が死体を永久にかくしたかも知れないのだろうに。

この二つの状況、つまり、死体をのせて走つた事と大膽な死体の放置が、ギヤングの罪を連想させた。トニーはこう弁護士に口述している。（勿論彼の口述を信じなくてもよいが）

四人の男、彼は名を挙げるのをはばかつたが、顔見知りであるらしい四人の男達が、トニー達の車を人ツ気のない曲り角へ誘い込みトニーを外へ放り出すと、少女を乗せて走り去つたという。

こんな事実は非常にありそうな事であるのに、警察がこの事について捜査したという記録はないようだつた。トニーの用いた車には血痕はなかつたのは事実だ。

事件の起つた朝、トニーがいつもと変らぬ様子で仕事に出かけて行つたというのは無罪

の証拠か、それとも罪をかくすためであつたか、これは読者に御判断願いたいが、もう一つ、判断して戴きたいと思うのは翌日、つまり土曜日の午後、仕事から帰つて来たトニーの態度についてである。ここに弁護人に述べているトニーの陳述から引用しよう。速記人の取つたもので、明らかに何等かの修正が加えられているようだ。

「八月二日、土曜日の二時頃、私は家から出て来ました。すると私の家族の一人S・モスキトーが玄関の所に坐つていて、私に『トニー・クリスチーヌの家で何かあるらしいよおまわりが来てるぜ』というのです。私はいでクリスチーヌの家へ駈けつけました。家の前の石段を上り、内部へ入つた時、奥から人の叫び声が聞えました。クリスチーヌの母親と兄ジョニイの家内が叫んでいるのでした。私服の刑事が二人そこにいましたが、その一人は私の知つてるイタリア人刑事のXで、後の一人はZ刑事だという事を後でしりました。

こうしてトニーは彼が真に罪があるかどうかは別として、自から捕われに飛び込んで来た訳であつた。トニーは、クリスチーヌが死んだのを知つたのは、この時が初めてだと主張している。

――「マリイとX刑事は、何かこそこそ云つていました。マリイが私をクリスチーヌの夫だと告げたのです。それから私は車にのせられて警察署へ連れて行かれましたが、その間にも刑事は、クリスチーヌの死について知つてる限りのことを話せおまわりが来てるぜ』というのです。私はさもないとためにならないぞ、と驚かすのです。私は実際どうしてこんなことになつたのか分らなかつたので、クリスチーヌと会つたのは、一昨日の八時頃が最後だといいました。全く私自身、クリスチーヌの死をきいてびつくりしていました。

そして警察署へひかれたトニーに、刑事部長が非常に優しげに問いかけている。

――彼は私に友人のような調子でこういいました。『クリスチーヌは近所でも色々噂があつたんだよ。君が殺したくなるのも無理はない。僕だつて君ならやつちやうね』『でも私は何も知らないんです』と私はいいはりました。すると別の刑事がやつて来て、『よろしい、さかさづりにして殴りつけてやる、貴様の急所をけとばしてやるからそう思え！』刑事が次々にやつて来て、その言葉通りのことをしました。これは部長がいなくなつてからです。そして喋らないと、もつとひどいことをしてやるというのです。

―「部長が部屋から出てゆくと、再び尋問が始りました。余りしつこいので黙つていると喋るまでたたいてやるといつて、顔に平手打ちを食わすのでした。次に私は廊下の壁に向つて立たされ、刑事から両脇腹に厭という程の一撃をくらいました。それから今度は後から頭をガンとやられたので、瞳にひどく頭を打ちつけ、思わずよろめきました。そして腰といわず肩といわず、盲滅法に打たれ、私は立つていられなくなつて、何か水か食物を下さいと歎願しました。勿論そんなものをくれる道理がありません。そこへ部長が入つて来ました。すると皆私を襲うのを止めて了うのです。それからかれこれ四時間位も立たされていたでしようか。坐る所かその間、瞳によりかかることも許されませんでした。――

この方法は、体に全然痕を残さぬ方法で、警官達の間に〝柔かくもむ〟という言葉で伝えられている。

――「部長は部下の一人に、家内と子供を劇場へ迎えに行つてくれと云つて自動車の鍵を渡し、部屋に残ると又優しく私に話しかけて来ました。柔かな調子で色々きくのですが、何を答えたらいいのでしよう。この詰問は翌日の夕方迄かかりました。」――

自白させることに失敗した警察官は、いよいよ、ほんとうのことを許されました。そこでやつと私の拷問にとりかかることを決めた様子だつた。

――「私は裸にされました。そしてテーブルの上に顔を下にしてねかせられました。頭はテーブルの端にたれているのです。男がやつて来て、私の右の手を押さえつけ、頭を下へグイと押し、他の男が左の手を別の方向へ押さえつけました。また別の男は、足をしつかりと押えつけているのです。私は刑事の一人が手にゴムのホースをもつていて、一時間程の間続けて様にじんぞうのあたりを裸の背の後から殴りつけるのです。『未だ喋らないか』といい乍ら。始め何もいう事はないと思うのだが、そうすると忽ち警官に反ぱくされる。「それぢやア、赤ん坊殺しにミルクでも飲ませろつていうんですか、そんなに甘やかすから犯罪が増えるんですよ」と。

然し、警察官の乱暴な行為が、果して犯罪人を減らすものであろうか。私は警察が真の民衆の友になることを願うものである。

――「部長は部下の一人に、家内と子供を劇場へ迎えに行つてくれと云つて自動車の鍵を渡し、部屋に残ると又優しく私に話しかけて来ました。柔かな調子で色々きくのですが、何を答えたらいいのでしよう。この詰問は翌日の夕方迄かかりました。」――

自白させることに失敗した警察官は、いよいよ、ほんとうのことを許されました。そこでやつと私の拷問にとりかかることを決めた様子だつた。

――「私は裸にされました。そしてテーブルの上に顔を下にしてねかせられました。頭はテーブルの端にたれているのです。男がやつて来て、私の右の手を押さえつけ、頭を下へグイと押し、他の男が左の手を別の方向へ押さえつけました。また別の男は、足をしつかりと押えつけているのです。私は刑事の一人が手にゴムのホースをもつていて、一時間程の間続けて様にじんぞうのあたりを裸の背の後から殴りつけるのです。『未だ喋らないか』といい乍ら。始め何もいう事はないと思うのだが、そうすると忽ち警官に反ぱくされる。「それぢやア、赤ん坊殺しにミルクでも飲ませろつていうんですか、そんなに甘やかすから犯罪が増えるんですよ」と。

然し、警察官の乱暴な行為が、果して犯罪人を減らすものであろうか。私は警察が真の民衆の友になることを願うものである。

――「部長は部下の一人に、家内と子供を劇場へ迎えに行つてくれと云つて自動車の鍵を渡し、部屋に残ると又優しく私に話しかけて来ました。柔かな調子で色々きくのですが、何を答えたらいいのでしよう。この詰問は翌日の夕方迄かかりました。」――

自白させることに失敗した警察官は、いよいよ、ほんとうのことを許されました。そこでやつと私の拷問にとりかかることを決めた様子だつた。

――「私は裸にされました。そしてテーブルの上に顔を下にしてねかせられました。頭はテーブルの端にたれているのです。男がやつて来て、私の右の手を押さえつけ、頭を下へグイと押し、他の男が左の手を別の方向へ押さえつけました。また別の男は、足をしつかりと押えつけているのです。私は刑事の一人が手にゴムのホースをもつていて、一時間程の間続けて様にじんぞうのあたりを裸の背の後から殴りつけるのです。『未だ喋らないか』といい乍ら。始め何もいう事はないと思うのだが、そうすると忽ち警官に反ぱくされる。「それぢやア、赤ん坊殺しにミルクでも飲ませろつていうんですか、そんなに甘やかすから犯罪が増えるんですよ」と。

然し、警察官の乱暴な行為が、果して犯罪人を減らすものであろうか。私は警察が真の民衆の友になることを願うものである。

――「部長は部下の一人に、家内と子供を劇場へ迎えに行つてくれと云つて自動車の鍵を渡し、部屋に残ると又優しく私に話しかけて来ました。柔かな調子で色々きくのですが、何を答えたらいいのでしよう。この詰問は翌日の夕方迄かかりました。」――

自白させることに失敗した警察官は、いよいよ、ほんとうのことを許されました。そこでやつと私の拷問にとりかかることを決めた様子だつた。

――「私は裸にされました。そしてテーブルの上に顔を下にしてねかせられました。頭はテーブルの端にたれているのです。男がやつて来て、私の右の手を押さえつけ、頭を下へグイと押し、他の男が左の手を別の方向へ押さえつけました。また別の男は、足をしつかりと押えつけているのです。私は刑事の一人が手にゴムのホースをもつていて、一時間程の間続けて様にじんぞうのあたりを裸の背の後から殴りつけるのです。『未だ喋らないか』といい乍ら。始め何もいう事はないと思うのだが、そうすると忽ち警官に反ぱくされる。「それぢやア、赤ん坊殺しにミルクでも飲ませろつていうんですか、そんなに甘やかすから犯罪が増えるんですよ」と。

然し、警察官の乱暴な行為が、果して犯罪人を減らすものであろうか。私は警察が真の民衆の友になることを願うものである。

日本左衛門

岩堀春三
古正英生

○

日本左衛門（俗に日本駄右衛門）、こと浜島庄兵衛は正義を愛した。その上に正直で、思つたことを実行する性格だつた。つまり、とてものことに世間の表街道をまともにあるいて行けないようにできていた。

彼の家は公家侍で、西三条橘小路実孝卿のお長屋に住んでいた。

橘小路家は先々代に権大納言をだした家柄だが、当主になつてからは、そのころの京公卿の例にもれず、有名な貧乏公卿だつた。時に、当主が地方に出張して、大名や旧家に、宮中式の礼法を教えたり、歌の手ほどきをしたりして、わずかに貴族の体面を守つていた。

浜島庄兵衛の母は、彼を生むと間もなく、ちよつとした風邪が原因で死んだ。そのため彼は橘小路実孝の特別なはからいで、彼の大奥から乳を貰つた。幼年時代にも御台さまに可愛がられ、三つ年下の姫君彰子の遊び相手に数えられていた。

彼は父の碁友達で甲斐の浪人という男から、北条天道流の棒術と武田流の軍学、並びに剣を学んだ。ことに棒術にはたけていて十九歳の暮れには皆伝の腕前だつた。背丈があつたので、相手の脳天を狙うには便利だつたのである。

その他、ひと通りの文学は、殿さまの実孝がひまにあかせて教えてくれた。実孝は公卿にしてはきさくなたちだつたし、息子のないせいか、庄兵衛を特に可愛がつた。ほとんど自分との間に、その頃の武家などがしきりに格式ばつたようなへだてをおかなかつた。

実孝卿はよく自分たち京貴族のことを、風流乞食といつた。

「そちの軍学も棒術も、歴の許では泥棒よけ以外には役にたつまいて。いや、それさえ今どき、公卿屋敷などに押入るほど、間抜けな泥棒がないだろうよ。」

二十歳をすぎて、急に大人びた庄兵衛を相手にそんな冗談ともつかぬことを云うことがあつた。

また次のようにひがんだ物のいい方もした。

「今の世にいれられる人間は、おたいこを上手に叩くか、権力か金のある奴かだ。天皇家にしてから江戸将軍家に捨扶持を貰つてやつと二世帯のやりくりをしているんだからな。歴なんかも、習い覚えた遊芸を、地方の田舎者に押売りして養つているよりノウがあるまい。官位につこうにも、手品のいる世の中では、その手品に使う種、つまり金がなくちや話にならん。強いてそれをこしらえるには、姫をどつか大名の妾にやるか、地方の旧家と縁組でもさせるかよりあるまい。どうだ庄兵衛、そちも一つ大金を儲けて、歴から姫を買つてみんか？」

そんな時、庄兵衛は主人の貴族のボツちやんらしいひがみを悲しく思う前に、彰子のためなら、ほんとに千万両の金を、どつかで盗んできたいと思つた。彼がそんな風に考えるのも、実孝の冗談をまに受けた訳でなく、当時の公卿に例のないことでもなかつたからである。ある公卿の屋敷では、正月の宮居に上る衣裳もなく、それを得るために、姫を夜の女にだしたという。地方の大小名や旧家への輿入れはまだいいほうだつた。中には、この京で町人の妾になつているものもある。そういう場合、いろいろ工作して、仮親をたてて。みたりなんかして表面はつくろつていたが、金ほしさの才覚には代りがなかつた。

○

庄兵衛が姫の彰子と再び十数年ぶりで、親しく接したのは、元文四年三月の花の一日であつた。彼が七歳の頃からは、さすがに、彼

主家の姫君の匂やかな素肌を抱き緊めながら青年浜島庄兵衛は眞実〝金が慾しい〟と思つた。……やがて江戸の奸商を恐怖のどん底におとし込んだ豪邁な盗賊日本左衛門の波瀾の生涯！

の大奥でのお相手は禁じられた。

それが、その去年の花見に、ぐうぜん彰子の伴をすることになつたのである。貧乏な橘小路家は主人の外出にも満足な伴揃ができる訳もなかつた。その日も実孝が宮中にでむくと、姫の外出に侍の供は、庄兵衛ひとりという有様だつた。あとは臨時雇いと小者たちである。

嵐山で駕籠を降りると彰子は、ふと女中たちのうしろで、無礼にも膝をつかず、自分を眺めている背の高い若者にきづいた。瞳の涼しい、仲々の美男である。

彰子は無礼をとがめる前に、胸のコドウが激しく打つのを感じた。花の道をたどる足が、なにかに狩りたてられるように早くなつた。ふと汗ばんで、花の下影に立止まつた時、女中たちの姿は見えず、こんどはあわてて膝を山の草についた若者の姿だけが眼についた。

彰子は男の背越しになだれ下る白紗の幕をおぼろにひきつめたような花の谷を見た。

「みなはどうしやつたかしら?」

彰子は黙つていると、先刻からのいき苦るしさがいつそうつのつてきそうでやつとの思いできいた。樹々の枝に蔽われた大気は動かなかつた。若草は答えない。姫はつぶやくようにいつた。

「そなたの足の早いこと。」

「姫がお速い。まるで駈けて登られた。」

庄兵衛はそう答えてちよつと頬笑んだ。そのしまりのある口許が、幼顔を匂わせたのか、彰子はやつと、彼を思い出した。それで、相手のどことなく、自分に見せるへだてのなさや、親しげな今の口の利きようが、しまつたのである。

二人はじつとしていた。かすかに姫の唇が開いていた。彼女はななめに仰向いて瞳を閉じていたのである。その場合、そうするより、羞恥に負けて、ほかのどんな態度もとれなかつた。庄兵衛は、そんな姫の富士額に、花の影が落ちているのをみた。彼は身を慄わした。

それらは、一しゆんのできごとである。姫が木の許に立ちどまつてから、次に女中たちの姿が葉間にあらわれるまで、僅かな間であつた。だが、彰子も庄兵衛も、その後、その時のことを思う度に、じつに長い間のできごとのように思えた。

○

橘小路彰子が江戸に降ることになつたのは寛保元年八月である。庄兵衛がはじめて、彼

「姫!」

男は、自分の混乱を隠すように、腕をひいた。しかし急に崩れてきた姫のからだを、すぐ支えた。ちよつと、彼の顎までよりない姫の頭が、肩にふれた。彼の右腕は上手に、姫の肩先を摑んだが、別の腕は、姫の胸前を押してしまつた。

「姫!」

女と唇を合わしてから、一年半ほどたつている。

彰子と密々にあうようになつたはじめは、庄兵衛も、奇妙な混乱に度々落ちた。彼女に対して、高貴な姫としての幻影と、主家の娘というひけめと、恋人としての親しみが、時により比重をかえて彼の心を領した。

だが、逢うせが度重なるにつれ、彰子のからだに親しみがましてきた。はじめは、羞恥の情から、あまり口数をきかなかつた彰子も、時には心急くように、自分から抱擁を求めるようにもなつた。

たとえば、彼女のからだの変調を、うれしげにうつたえたのも、彰子である。

「もう姫はそなたのものえ。」

彼女ははずむような口振りでいつた。

「そなたと離れている時にも、姫はそなたを身内にもつようになりましたの。」

それを打明けられた時、むしろ庄兵衛の方が、尻込みするような驚きを感じた。たしかに、そうあるべき夜を重ねていた。また、彰子を離して、生き甲斐のない心にもなつていた。だが、逢うキリ、彼女との生活に迫まれる時がきてみると、忘れかけていた階級の垣があらためて、頑丈な造りをみせはじめた。押してもたおれず、越そうとして越せない混乱がどつと感じられた。

高貴の姫君である。主家の娘である。

自分は文無しの公家侍。そして、その主家を離れて、食えるめあてもない。

だが、そういう前途に対して、なんの不安も持つていなさそうな彰子をみると、庄兵衛もしだいに覚悟ができてきた。

ことに、この日頃、このせいか、いつそうお尻がはつてきて、なんとなく片輪な感じに

なつてきた彰子の後ろ姿をみた時など、庄兵衛は、彼女がうんと身近に感じられるようになつてきた。

二人があうのは、いつも馬小屋である。そこはちようど、姫の住む奥からも、庭伝いに廻れるし、庄兵衛の住む長屋からも便利だつた。夜は人気がなかつたし、もし誰かが近づいてきても、夢中になつている彼等に代つて、馬がまず、看視の役を果してくれた。

庄兵衛はよく彰子の背後にまわつて、藁屑を注意深く払つてやつた。時には、それが残つていて、月光の下にでてはじめて気のつくことがあつた。

「いや。そんなにきつうおたたきあそばして。」

彰子は面白がつて、そんなことをいうようにさえなつていた。

彰子の江戸行きは、遠縁に当る、梅渓中納言通条卿の娘で、現将軍の嫡子、徳川家重のお局になつている御幸の方の招きに応じたというわさであつた。

はじめのうち庄兵衛は、そんなうわさを深くは気にとめなかつた。彰子自身少しもそれを口にしなかつたし、気にしている様子もなかつたからである。

ところが不意に、ある夜、彼女は、彼に、江戸行きが事実だと打明けた。

「それで姫はどうなのです。」

「どうつて、行きます。」

「姫！　それではわれわれはどうなのです。姫は拙者を捨てて、行かれるのですか。そのようなからだになつていながら、自分の女房が、金のために売られるのをみて、どうして黙つていられるものか！」

「お金で買える位階なら、庄兵衛がお金をこしらえてみせましよう。いまさら、姫と離れて、どうして拙者が生きて行けるのです。」

が、いや、自分の女房が、金のために売られだ、お金がなければ、家が守れないのです。わらわは、位階のために。」

かつたからである。

○

浜島庄兵衛が、はじめて、他家に忍びいつたのは、二十二歳のその夜である。まだ残暑のきびしいせいか、京橋で有名な材木屋、大徳屋五郎右衛門の屋敷は、ところどころ、引戸が開いたままになつていた。大徳屋は町家ながら、京洛の寺社に一手御用の大商人であつた。彼が、そのように勢力をのばしたのは、なたです。わらわのみうちには、そなたがいまも住んでいます。でも、行くよりほかはないのです。」

「しかたがありません。父が、御幸の方さまに承知の旨をいつてやつたというのです。わらわになにができましよう。わらわの夫はそなたです。わらわのみうちには、そなたがいまも住んでいます。でも、行くよりほかはないのです。」

「ばかな、それではまるで……。」

「そなたはごぞんじないのかえ？　家にはお金がないのです。父はこんど近衛の権中将に京都所司代の役人と結びつき、なにかと手段を講じたからだという。一説によると、寺社の建築を強制的に彼の手に落ちるようにして、その請負高の何割かを、役人の手に戻したともいわれている。

浜島庄兵衛はそういう家に、盗みに入ることは別に悪いことだと思わなかつた。むしろ、忍びいるのは正義のためだと思つた。ただ、そのさい、多少うしろめたく感じたのは彰子のために、金が欲しいという事情だけで

あつた。彼はなんどか、豪壮な邸宅の塀を見上げて考えた。

「これが越せるだろうか。越せればしめたものだ。」

もつとも、棒術の手練を経た彼には、眼の高さ一尺もない塀を越すことは、現実になんともなかつたのだが、それを越せば、自分が別のものに変形する怖れを感じたのだ。

金を持ちだすのはなんともなかつた。彼は七百両を用意の風呂敷に包んで背中にかけると、五郎右衛門邸をでた。

その時の感想を、後年、彼の一の部下になつた中村左膳に語つた記録がある。

「行きの暗い気持は跡もなかつた。月の明るさをそのままに、自分が天にも届く男になつたようにこそあれ。」

だが、彼の盗賊開業は成功したが、その終局の目的は失敗した。約束通り、その夜も、次の夜も、馬小屋で彼は彰子を待つた。けれども、彼女は現われなかつた。

後年、どんな場所とて忍びいれないところのなかつた浜島庄兵衛だが、不思議に、この時は勝手を知り尽している橘小路家の大奥には忍び入り得なかつた。悶々としている間に、彰子は東に下つた。

まもなく、大盗日本左衛門の名が、しだいに世間にひろがつていつた。

○

主家を出て、浪人していらい、浜島庄兵衛にとつてわすれられないのは、彰子の肌の香と、あの大徳屋に忍びいつて外にでた時の、一仕事した爽快さである。彼はその後、場数を踏み、大きな収獲も得たが、はじめの時のような気分は二度と味合えなかつた。

彼は押入る家を、何かの意味で不当な利益を得ているというわさのある家に限定していた。俠盗の名が高くなるにつれ、誰いうとなく彼のことを日本左衛門と呼び、部下もしだいにふえた。五百余人を数えたのは、泥棒開業後五年目、

延享二年である。

集団化するにしたがつて、庄兵衛は党を組織化した。押入るにしても、こつそりとはやらない。部下を引つれて、堂々と目的の家に乗込むと、まず、その家の門前に橘の紋所を描いた高張ちようちんを二本たてた。そして、自分は床机に腰かけて、朱のたれをつけたさいはいを振つて、下知を下した。彼は黒塗りの胸胴、すね当てに、大身の反りある大小を腰に、左手には鉄筋入りの六尺棒をぐつとにぎつて、勇気凛々と構えていた。

報告に従つて、土地の代官所などから役人が繰出しても、ただ遠巻きにするだけで手がつけられなかつたという。

庄兵衛が部下を督励する時の文句はたいていきまつていた。

「女に眼をつけるな、人を殺すな！　ただ金銀だけを持出せよ！　その他の物品には手をつけるな！」

当時辻々に張られた彼の人相書きなるものが残つている。それによると『日本左衛門人相書、江戸より遠はされ候御書付写し』とあり、左衛門こと浜島庄兵衛の次に、以下の項目が並べてある。

一、年二十九歳（註見かけ三十一歳）
一、小袖、くじらにて三尺九寸。
一、鼻すじ通り、月額濃く、引疵一寸五分ほど、目、中細長く、貌長きほう。
一、えり、常に右にかたよる。
一、びん、中少しそり、元結十まき
一、脇差二尺五寸、鍔無地ふくりん金福人模様。小柄ななこ……（中略）
一、印籠、烏のまき絵。
この者、悪党仲間にては日本左衛門という
も、本人は左様に名乗り申さず。
右之通りの者これあるにおいては（以下略）

○

庄兵衛はなかなか捕まらなかつた。事実は彼を見かけたものもいるが役人側でも、捕物のさいのケガ人の数を怖れて手を出さなかつたのである。

延享四年の正月、彼は大津の豪商近江屋与右衛門方に押入つた。油商近江屋は商家であつたが、それはむしろ近年になつてからのことで、もと地方きつての旧家として近隣に鳴つていた。なんでも浪華の末吉孫兵衛などと共に海外貿易で巨富をなしたという。屋敷の構も大名の下屋敷風な豪荘なものであつた。

庄兵衛はれいによつて床机に腰かけながら号令していた。

用心のためであろう近江屋がやとつていた浪人体の武士が四、五人、勇敢にも斬つてでたが、たちまち多勢の庄兵衛の部下に刀を叩きおとされしばられてしまつた。主人の与右衛門はじめ十数人の家族が、男はしばられ、女子供はそのままに広い庭に引きだされた。

部下たちが働く間、庄兵衛はいつになく、近江屋の家族のほうに声をかけた。寒中のこととて、寝着のままうちふるえている子供たちを哀れに思つた様子である。

「寒かろうが、子供たちにもつと厚着をさせるがよい。」

だが、女たちの誰もが答えるものとてない。庄兵衛は笑つて、部下に着物をかけてやるようにいつた。

「ご主人、家族はこれだけかな？」

「は、はい」

と、答えて、まだ四十恰好の、さすがに大家の主人らしく、落着いた男が、まわりを見廻した。そして、あきらかにあわてたように屋敷の奥手を見た。

「まだ、誰か忍んでもいる様子だな。」

他人の表情に敏感になつている庄兵衛が、たたみこむように尋ねた。ちょうどその時、廊下に女の悲鳴がきこえた。庄兵衛がそのほうをみると、女がひとり、六、七歳の女の子を前にかばうようにかかえながら、部下にせきたてられてきた。

暗夜に仕事のしよいよう、あちこちにかくやかがりをたいている。女の顔が、夜目にも美しくほのほに照りだされた。

「あつ！」

と、庄兵衛は思わず洩れる声をのんだ。女は、家族たちのほうに連れてこられると、主人の膝にすがるように、ペタリと地面に坐つた。

「姫！」

庄兵衛はつぶやきそうになつて面をそむける。彼はしばらく、そのままに何事かを思い迷うふうだつたが、側に立つている参謀格の中村左膳に耳打ちした。

「頭領、しかと相違ござらぬか。」

左膳も驚いて、美しいまげも少しくずれてびんにほつれのかかつた女のほうをみた。

「うむ。」

庄兵衛はうなずいて床机を立つた。

その女が、橘小路実孝の娘、彰子姫であることは、間もなく、彼女だけを庄兵衛の部下が引たてて、庭内のあずまやに連れてきたときに、すぐわかつた。女のほうが、そこに待つている庄兵衛を見て、「ああ、そなたは」と泣き崩れたからである。

彰子は江戸に下つたが、すぐまた京にもどされた。あきらかにニンシンしていたからである。その後、出入りの近江屋与右衛門に引きとられ、そこで女子を生んだ。

「そうか、あれが、さつき、そなたが抱きかかえるようにしていたあれが。」

「はい。」

「で、今はそなたは、ここの主人の？」

「子供を父無しにはしとうはございませぬ。」

「拙者も、そうしとうはなかつた。」

庄兵衛は吐きだすようにいつた。あの時のやれ門をしめよ、人を集めよとひしめく。庄兵衛、大笑ひして、なにをみずから名乗りでたものが、逃げましようぞ、まあ、お心静めて縄打たれよ。』

彼が獄門になつたのは、それからまもない延享四年三月である。

処刑宣言文は左の通り。

異名日本左衛門、無宿十右衛門こと

浜島庄兵衛　二十九歳

この者儀同類大勢申合せ、美濃、尾張、三河、遠江、駿河、伊豆、近江、伊勢八ケ国にて所々押込み金銀多く強盗致しそろ段、重々不届至極につき町中引廻の上遠洲見附に於て獄門す。

（おわり）

「いいえ。でも、いつかはと思い定めていましたぞえ。けれど、そのお方が。」

「もういわれるな。」

庄兵衛は彰子の言葉を押えた。

日本左衛門が京都町奉行永井丹波守に自首して出たのは、それから三日後である。その時の奉行所の様子を甲子夜話の著者は次のようにしるしている。

『庄兵衛、麻上下を着し両刀を帯し、お尋者の日本左衛門にてそうろと玄関に立つた。その場にいた同心与力の輩、驚天して立騒ぎ、

暗黒王物語（第一回）
反逆児デリンジャー
金子竜一

民衆の敵
NO・1

「カポネは？」

「彼は何でも屋だ。デリンジャーは、ギャングとして生き、ギャングとして死んだ。骨の髄までギャング・スターだつた」

そして彼こそが「銀行破り（バンクブレーカー）」の開祖だと、つけ加えるのである。なるほど、西部開拓時代以来サム・ロビンソンをはじめとして無数の「銀行荒し（ラケッティアー）」はいたが、銀行ギャングらしい銀行ギャングは、ジョン・デリンジャーのあとにも先にもいないように思われる。

彼は天才的な閃きをみせて、銀行襲撃を一

「最もギャングの名に価するギャング、つまり、ギャングのナンバーワンは誰か？」ときいた場合、「そりやあ何といつても、ジョン・デリンジャーさ」と、すべてのアメリカ人が必ず答える。

種の組織化した。だから神出鬼没、実に百六件の襲撃に成功し、掠奪した金額千万ドル（三十六億円）といわれながら、ついに最後まで、当局に手も足も出させなかつたのである。彼を裏切つたのは、女に他ならない。そして彼は、夜の英雄らしく、頭蓋と心臓に一発づつくらいこみ、アスファルトジャングルの猛獣の如く大往生を遂げたのである。おめおめと手錠をかまされて、電気椅子に送られるようなドヂは踏まなかつた。どうせギャングらしく、巷を朱に染めて死んだ。

たゞ、彼のために惜しむらくは、折角の最後の瞬間に、彼が一発の応酬もみせなかつたことであろう。尤もそのとき、彼の脳裡には、最後まで人生から裏切られたという深い絶望があつたのかもしれない。それとも、たかが街の娼婦にハカられたという、自嘲だつたのだろうか。とまれ彼は、あまりにもアツケなくF・B・I（米国聯邦検察局）のメルビン・パービス刑事によつて射殺されているのである。

「手を上げろ、ジョニイ！　貴様は包囲されてるぞ」

とメルビン・パービスが鋭く呼びかけたとき、デリンジャーの手は反射的にズボンの右ポケツトに走つた。そこに彼の愛用の三八〇自動拳銃があつた。が、彼はそれを抜かなかつた。とたんに、メルビン・パービスの一弾、二弾が、つゞけさまに彼の頭蓋と心臓を射ちぬいていた。彼は倒れた。すぐ動かなくなつた。かくてアメリカ中が、多少の畏敬の念をこめて呼んだ

「民衆の敵NO・1」

は、三十歳の誕生を迎えずして、この世から姿を消したのである。宿敵デリンジャーを屠つて、一躍勇名をはせたF・B・Iの腕利き、メルビン・パービスの短かい言葉は、なかなかに味い深い。

「私はたゞ、運がよかつたのだ」……

反逆の誓い

幸運（ラッキー）とか不運（アンラッキー）とかを問題にするなら、ジョン・デリンジャーは不幸な生れつきであつた。といつて、いわゆる貧乏な生れつきのことでは、最後まで人生から裏切られたという深い絶望があつたのかもしれない。それとも、たかが街の娼婦にハカられたという、自嘲だつたのだろうか。とまれ彼は、あまりにもアツケなくF・B・I（米国聯邦検察局）のメルビン・パービス刑事によつて射殺

へマな奴と組んだのだ。強盗をやつて収獲はタツタ六ドル！　しかも十年叩き込まれ、その間に妻は離れて行つた。こうしてデリンジャーの血なまぐさい人生がはじまる！　機関銃と自動車を縦横に駆使して全米を恐怖に巻き込んだギャング王の数奇な運命!!

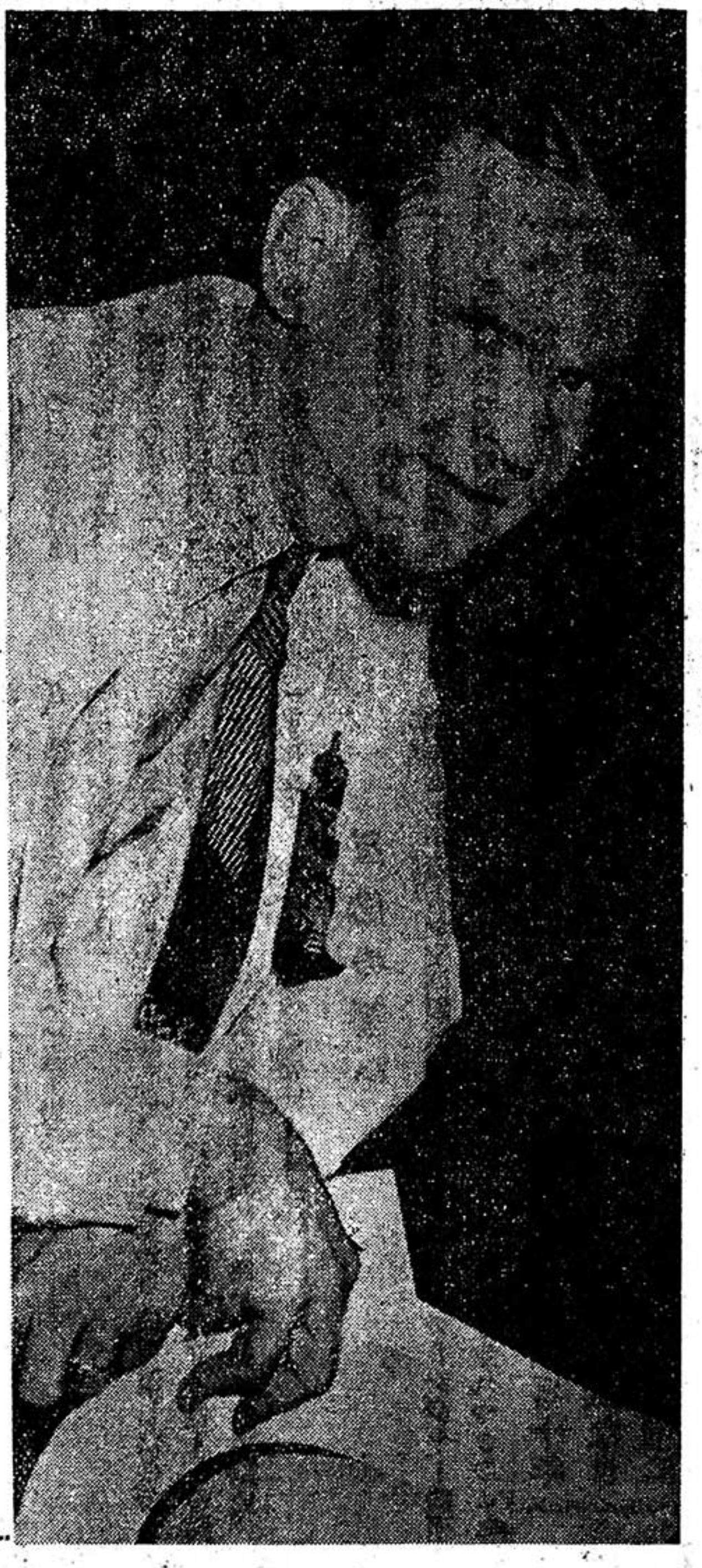
ではない。彼は何よりも、愛情にめぐまれなかつたのだ。

ジョン・デリンジャーは一九〇四年（明治三十七年）、アメリカ中西部インディアナ洲、インディアナポリスで生れた。いま生きていれば、ちようど五十歳になる。父は町のはずれの、小さな食料品屋であつた。これはいゝ。が、彼は四歳にして早くも母親を失つているのである。最初の愛の欠乏だ。やがて継母をむかえたが、これはよくあるように、愛の欠乏に拍車をかけるようなものであつた。

襲撃から逃走まで三分

彼が家を飛出したのは、不幸な生い立ちの多感な少年にありがちな行動で、いうまでもなく彼の罪ではあるまい。時に十四歳であつた。家をとび出した彼がありついた仕事は、或るミシン屋の小僧で、週給二十五ドルもらえた。第一次大戦のはじまるちよつと前だから、アメリカ全土相当な不況で、すると週給二十五ドルは、少年としてはかなり以上の収入であつた。その証拠に、彼は貯金して自動車を買つている。こゝで少年期から示した自動車への関心を忘れてはならない。なぜなら、後に彼が一世を風靡する銀行破りになつたとき、自動車こそがきわめて重要な役割を演ずるのだ。

とまれ孤独な彼をなぐさめる唯一のものが自動車というわけであつた。彼は、さみしいにつけ、くやしいにつけ、自動車を無鉄砲に疾走させることで、みずからの心を慰めた。こゝでもう一つ忘れてならぬことがある。それは目下アメリカで最も流行している嗜虐趣



デリンジャーを射殺したF・B・Iのメルビン・パーピス

ギャング王・デリンジャー

味の探偵作家ミッキー・スピレーンの言葉だが、即ち「フルスピードで自動車をすつ飛ばすのは、サディスティックな快感に他ならない」ということである。ちなみにギャングに共通した心理がサヂズムであり、快感というより、一種の勝利感が、彼等の行動原理となつている。

十六歳になつたとき、ジョン・デリンジャーは、町の小実業家の娘と恋愛らしきものをした。恋愛らしきものといつたのは、彼のほうだけが夢中だつたからである。結婚の約束までしておきながら、その娘は彼を裏切つた。しかも彼の身分を軽蔑し、嘲笑した。それが裏切りの理由でもあつたのだ。愛に飢え、やつと娘の愛が彼をいたわるかと思うと、この裏切りである。はたの目には、ささいな出来事とみえても、彼の心の底には、深い傷が残つた。

それればかりではない。十九歳で結婚した相手の女、ベリル・ホービスが、ひどい女であつた。職工の娘のくせに、アメリカ女の欠点を、一人で持つているような女なのだ。虚栄心が強くて、浮気つぽく、ダラシがない。折悪しく不況はつのり、デリンジャーは例のミシン屋を失職して、しがない農場の日傭人夫であつた。それでも彼は、妻の愛情にすがつたのである。この世で愛情だけが、彼の欲しい唯一のものであつた。しかし

「食べるものも食べずに、どうやつて愛し合うのよ」

と、これが妻ベリルの云い草である。そこへ、エド・シングルトンという前科者が現れ、ベリルとぐるになつて、デリンジャーに悪事をそゝのかしはじめたのである。殻物商に強盗に入ろうというのだ。

「要領は俺にまかしときなよ。ジョニイ。おめえの腕つぷしがありや、きつとうまくいく」

デリンジャーは遂に決心した。だが、しかし彼等の収獲はタツタの六ドルでしかなかつたのである。あまつさえ、二人は警察にあげられた。結果は、デリンジャーに十年の刑、エドが二年の刑、ヤツの要領というのがこんなことだつたのか。……

ペンドルトンの州立矯正院（ステート・ファーム）に送られて、デリンジャーは、たゞいゝしれぬ悲しみにとざされた。おまけに、しばらくたつてやつと面会に来た妻の、冷然たる宣言、

「ねえ、離婚の証認してよ。あたいが、あんたの出てくるのを九年も待てない女だつてこと、いまさらわかりきつてるでしょ」

が、デリンジャーの心に、決定的な打撃を与え、そうして反逆を誓わせたのである。

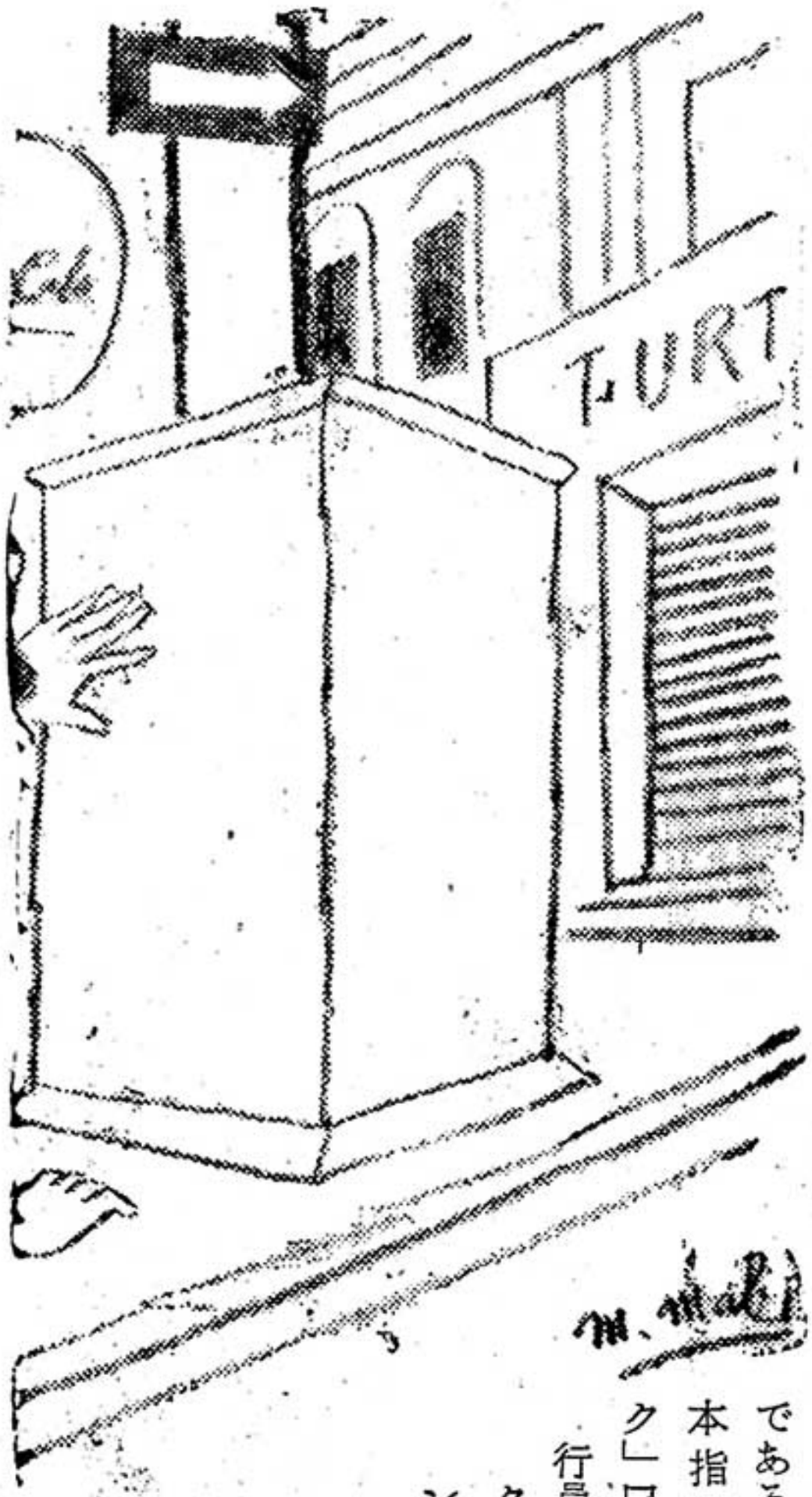
戦斗開始

「六ドルで十年だ。六十ドルなら百年か。六百ドルで千年とくらあ。ケツ！面白え、千年が万年だろうと、世の中だつて監獄みてえに冷てえぜ。地球中のゼニ、洗いざらい掻つさらつて、これ以上入りきれねえくらい、監獄に入つてやろうか。どつちみち人生は同じようなもんだろう。それとも、ゼニで女のツラ張りトバしてやるかエディ」。

もつともこの五人は、まだ矯正院に残されていた。が、デリンジャーは、必ず五人を脱出させてやると約束して出て来たのだつた。将来この五人が、彼の腹心となつて働いたのは、デリンジャーがけつして嘘をつかない男だつたからである。この五人を脱出させるためにデリンジャーは、イースト・シカゴにやつてきて、イカサマ師のホーマー、元自動車競争のヒルトン　共謀し、見事に第一回の銀行破りに成功した。彼の手口は、あらかじめ銀行内部を、たんねんに下調べすることから始まる。白昼堂々と銀行破りをやつたデリンジャーを、あるいは無謀呼ばわりするが、それはあやまりだ。

ともかく第一回デールヴイル銀行を襲つてセシメた五千ドルを、彼はムダに使わなかつた。すつかりピストルと弾薬を買いこんだのである。そうして、それらの武器を、矯正院行の荷箱の中にひそませた。かくて例の五人は、約束どうり、脱出に成功したのである。

武器、弾薬、人員、自動車と揃つたところで、彼は作戦を練りに練る。彼等一味のかくれ家は、インデアナ州ポーレープシツプの片田舎、つまり「パチンコ・ハリー」のおふくろが働いている農



ユニテイ銀行で八万ドル

やつたときも、その他ことごとくピツタリ三分で、一秒の狂いもなく、事を遂行している。アメリカン銀行のときは、銀行員の一人が非常ベルを押したが、デリンジャーは少しもあわてず、

「まだ三十秒あらア」

と豪語したほどだ。彼の三分間予行演習は警察がくるまでの時間を見こしてのことであつたし、運転手というのがまた、ちやんと自動車競争の選手だつた奴なのである。それに、彼の自動車は勿論、防弾装置の完備したものであつた。

ジョン・デリンジャーの名は一躍アメリカギャング界の花形としてのし上り、こゝ一二年で、ネルソン、フレッド・パーカー、アービン・カービスなどの親分衆とも盃をかわしたのである。

ケチのつきはじめ

ふしぎなことに、デリンジャーは、人を殺していない。仲間すらも殺していない。殺したのは彼の手下たちであつた。それでも、世

間の人たちは、彼が殺したのだと云いたがる。一つには彼が変装術の達人であり、いろいろなイメージを人々に与えすぎたためかもしれない。

で、彼がみずからのピストルに、大いに物をいわせたのは、恐らくボヘミヤ荘での警官隊との乱戦のときぐらいだつたのではあるまいか。ボヘミヤ荘というのは、ウイスコンシン郊外の観光ホテル兼連れ込み宿みたいなもので、一九三四年の四月十三日、金曜日、先にのべた親分衆たちと、この日何という酒宴の最中、FBI並びにGメンの一隊に踏みこまれたのである。

ちよつとした足取りにさえも用意周到なデリンジャー一味としたことが、この日何という不覚をとつたことだろう。この時警察に密告したのは、「笑うキューピー」と仇名のあるネルソン親分の情婦で、ヘレン・ギリスという女だつた。彼女はいつしかデリンジャーに想いを寄せていたのである。がデリンジャーは冷酷無惨に彼女をハネつけた。彼女が待つている寝室に、あとで行つてやると云つておきながら、その実ネルソンに、

「おめえの女が、おいらにちよつかいかけやがつた。やくざの仁義もしらねえガマに、ちいとばかし物を教えてやんなよ、ネルソン……」

とデリンジャーは告げたのである。ネルソンは彼女を殺すつもりで寝室に行つた。が、彼女への未練から、ビンタを一つ張りとばしただけであつた。殺しておけばよかつたのである。女の執念は恐ろしい。いわば女としての最大の侮辱を受けたヘレンは、そのまゝ電話に飛びついて、デリンジャーがこゝにいる！と密告したのだ。

こゝでFBIのメルビン・パービス、カーター・ボウムの指揮する十五名のGメンと地元の警官隊が、時を移さずボヘミヤ荘を包囲したのであつた。しかし、デリンジャーの手下が、見張りに立つていて、一味の危険はすぐに急報された。

五人の手下（自動車手たち）が、パツとホテルの中から躍り出すと、木蔭の自動車に飛び乗つて早くもエンジンをかける。しかもそのうちの一台、又一台が機関銃を乱射させながら、警官隊のど真ン中に突進して来たのである。警官隊の包囲が崩れた。二三人がバタバタと倒れる。

「射て！」

とFBIのパービスは、Gメン達に命じた。デリンジャーの奇襲を研究しつくしているパービスも、多少あわてゝいた。めちゃくちゃな乱戦となつた。

「ダメだ！　逃げる！　警官隊はホテルに接近しろ！　気狂い自動車にかまうな。ホテルから奴等を一人も逃げ出させるな！」

パービスは叱咤した。すると接近する警官隊に向つて、ホテルの二階から凄まじい銃火が浴せられた。明らかに一歩先んじていた筈の警官隊が、いまは逆に巧妙なギャング戦法の餌食であつた。暗夜を裂いて、ギャング側の銃弾は、思いがけない方向からもほとばしつた。まるで警官隊より、ギャングのほうが多数であるかのようである。メルビンずつと・パービスは焦つた。警官隊が、これほどマな醜体を演ずることに腹を立てた。全然警官隊の機関銃も、自動小銃も、効果的な威力を示していない。そればかりか、パービスの同僚のカーター・ボウムとゼイ・ニューマンが倒れた。二人のGメンもつゞいて倒れた。

「まだデリンジャーはホテルの中にいるぞ。ホテルだけを目標にしろ！」

と、パービスは必死で叫んだ。けれども、もう、完全にこの捕物が失敗であることをパービスはいやというほど実感していた。九仞

の功を一揆に欠いたのである。FBIの腕利きが、いゝ恥さらしだつた。

そのように、泰山鳴動してネヅミ一疋、いや、やぶれかぶれにホテルの中に投じた催涙弾を浴びて、最後にむせび出たのは、ヘレン・ギリスをはじめ、それぞれ四人の情婦たちだけであつた。ギャング連は、捨身の囮りになつた手下をのぞき、かんじんのデリンジャーこそが、当局の最大目標であつた。

デリンジャーと女の関係は、彼の悲劇的な生い立ちを思い起せば、何かうなずける。そうだ、彼は女の愛情を、心を全く信じない男になつていたのだ。一説にイヴリンというニグロの混血女で、ブルース歌手をしていたのが彼の情婦だというが、これは多分に彼女自身の自己宣伝色が強い。何故ならデリンジャーは全く女と無関係だつたのではない。いやむしろ、彼は変質的に女を漁つた。それが彼の愛情への反逆、踏みつけにした。多くの女を女性への復讐であつた。彼が殆んど娼婦を相手にしたことでも、彼の気持はわかるようだ。

「もつと不幸になれ！」

それが彼の女への言葉のすべてだつた。そうして一九三四年七月二十二日、土曜日の晩、彼が行きつけの女郎屋のおかみの密告によつて、映画館「バイオグラフ」からの帰途、あえない最後を遂げたのである。ギャングとして活躍したのは、考えてみると二年間なのだが、人々にはカポネ以上の印象を与えた彼であつた。女郎屋のおかみに見破られるほど、彼の顔は売れてしまつていたのだ。映画には、カムフラージュのつもりで、その女将アンナ・セージというルーマニヤ女と、彼の女ポウリイ・ハミルトンを連れて行つたのだつた。

女将は何故密告したか？　彼女は密告の代償として、たゞルーマニヤに帰国するためのパスポートを要求したにすぎない。彼女が密告した、世紀のギャング、ジョン・デリンジャーは、FBIの腕利きメルビン・パーヴィスを仕とめたあと、いみじくも云つた。

「私は幸運だつた。……その幸運は、デリンジャーの、女性に対する止み難き弱さ、どうしようもない弱さがもたらしたものなのだ……」と。

（終）

弱さについて

FBIのメルビン・パーヴィスの怒りが絶頂に達したこと勿論である。このたびの失敗は、多数の警官の死によつて、古今未曾有の不祥事と呼ばるべきものになつた。ギャング連の行方は杳としてわからなかつた。どうやらわかることは、ギャング連がちりぢりにひそんでいるらしいことである。パーヴィスは、情婦達をきびしく追求した。これは或程度成功した。女が白状したかくれ家の足どりを、パーヴィス一流の軌跡計出法で辿り、やがてフレッド・パーカー、ネルソン、アルウイン・カーピス等の主領級を逮捕出来たのである。FBIの腕利きが、ひとり依然としてデリンジャーのみが無事であつたのは、彼は情婦らしい情婦がいなかつたからである。

しかもデリンジャーこそが、当局の最大目標であつた。

デリンジャーと女の関係は、彼の悲劇的な生い立ちを思い起せば、何かうなずける。そうだ、彼は女の愛情を、心を全く信じない男になつていたのだ。一説にイヴリンというニグロの混血女で、ブルース歌手をしていたのが彼の情婦だというが、これは多分に彼女自身の自己宣伝色が強い。何故ならデリンジャーは全く女と無関係だつたのではない。いやむしろ、彼は変質的に女を漁つた。それが彼の愛情への反逆、踏みつけにした。多くの女を女性への復讐であつた。彼が殆んど娼婦を相手にしたことでも、彼の気持はわかるようだ。

「もつと不幸になれ！」

それが彼の女への言葉のすべてだつた。そうして一九三四年七月二十二日、土曜日の晩、彼が行きつけの女郎屋のおかみの密告によつて、映画館「バイオグラフ」からの帰途、あえない最後を遂げたのである。ギャングとして活躍したのは、考えてみると二年間なのだが、人々にはカポネ以上の印象を与えた彼であつた。女郎屋のおかみに見破られるほど、彼の顔は売れてしまつていたのだ。映画には、カムフラージュのつもりで、その女将アンナ・セージというルーマニヤ女と、彼の女ポウリイ・ハミルトンを連れて行つたのだつた。

女将は何故密告したか？　彼女は密告の代償として、たゞルーマニヤに帰国するためのパスポートを要求したにすぎない。彼女が密告した、世紀のギャング、ジョン・デリンジャーは、FBIの腕利きメルビン・パーヴィスを仕とめたあと、いみじくも云つた。

「私は幸運だつた。……その幸運は、デリンジャーの、女性に対する止み難き弱さ、どうしようもない弱さがもたらしたものなのだ……」と。

（終）

長篇・アブストオリイ

加虐株式会社

日夏・由紀夫

水沢・深雪画

フ教育を施すインチキ会社社長！

女の心理を描く異色長篇讀切！

一、田中という男

僕が、田中を知ったのは、W大の学生時代である。

そのころは、田中は、ちよつと芥川龍之介を思わせる、やせぎすの、眉目秀麗の青年だつた。

いつも、泣いたあとのようにみえる、澄んだ眼が印象的で、僕は一辺で彼が好きになつてしまつた。

好きと云つても別に深い意味はなくて、たゞ、友達を選ぶなら、美青年の方がいゝと本能的に彼を選んだまでである。

青年同志の気安さから、僕たちは、すぐ、何でもうち合ける親友になつてしまつた。ところが、驚ろいたことに、親しくなつてきいてみると、彼は、僕のように童貞ではなかつた。

童貞でないどころか、彼は、その頃、毎晩のように、芸者遊びをしていたのである。

その頃は、終戦直後で、今のように、青年の気風が乱れていなかつたし、（今でも、乱れているとは思わないが、男女の交際が、あの頃より自由になつていることは、確かだろう。）遊ぶ機関も少なかつたので、学生の分在で芸者遊びをしている、というようなことは、僕を驚ろかすに足りたのである。

美貌な娘を次々と入社させて、自分の好みの儘にア

奇妙な色情の渦に捲き込まれ押流されて行く微妙な

彼は、父が、アミノ酸を作る会社の重役をしていたので、小遣いには不自由していてなかつた。

それでも、学生のことだから、芸者遊びと云つても、新橋や、赤坂で遊ぶのではない。

渋谷の、ちつちやな待合でかくれ遊びをするのだ。その頃は、まだ戦争がおわつたばかりだつたから、やけのこつた待合なんかも、休業中のものが多く、芸者なんかも、あらかだ疎開して、ろくな芸者はいなかつたらしい。

それで、そういう休業中の待合が、ひるま小遣いかせぎに、こつ

そりお馴染の客をあげて、あまり、はやらない芸者を呼んで遊ばせる。

それこそ、税金もいらなけりや見番も通さないので、その当時の金で、二百円か二百五十円あれば、結構、二三時間、絹布団のなかで、戯れられたのだ。

そんな安直な遊びでも、若い青年にとつては、冒険であり、華やかな遊戯なのである。

田中は、二三日渋谷へ行かないと、「頭がにごつていけない」などゝ云つて、僕達をうらやましがらした。

僕も彼につれられて、二度ほど、行つたことがある。

彼の説によると、

「芸者遊びをするなら今だ。なぜなら、今まで、戦争で、旦那もとらず、客とも寝ないという、素人娘のような生活をしてきた芸者は、男とみれば、しがみつく。いわば、芸者の発情期で、これから、土地がひらけたら、こんな芸者は一人も居なくなる」

ということだつたが、僕についた芸者は彼の言を裏切ること大なるものがあつた。

しかし、今は、これらの話をするのが目的ではない。彼の不思議な会社の物語りをしようというのだから、彼が、学生時代からこういう男だつたという事だけ、知つて頂いて、話を飛ばすことにしよう。

二、入社試験

学校を出てから八年たつた。田中に再会したのは昨年のことである。

久しぶりに会つた田中は、あの学生時代の、眉目秀麗なおもかげがほとんどなくなつていた。

あの生理の教科書にあつた、「パセドウ氏病」にかゝつた男の絵のように、ぶよぶよにふとり、眼だけ、むくんだような顔のなかでギヨロツと飛び出していた。——その風貌は永い間の酒色の生活を思わせるに十分だつたから、たしか、三十一か二の筈なのに、四十近い男のようにみえた。

彼は、今、ある小さな会社を経営しているのだと云つた。

「遊びにこいよ。面白いものを見せてやるぜ……」

と云つて、ニヤツと笑つた。——その笑いは、学生時代から、女の話をするときに、必ず彼が見せる笑いだつたから、僕は、彼が、秘画か何かをもつていて、それを見せてやるというのだと思つた。

勿論、それは、そうではなかつた。

それから四五日すると、彼から電話がかゝつてきた。

「これから、すぐ俺の会社へこないか。今日は、女事務員の入社試験なんだ。君も立会つて呉れないか」

僕は、うまく仕事が進まないで、いらいらしていた所だつたから、すぐ承知して、彼の会社へつた。

彼の会社は、東京駅の八重洲口に今度新しく建つたKビルの五階にあつた。二部屋ほどの、少さい会社で、社員も、五六人しか居ないらしく、どうみても活況を呈している会社のようではなかつた。

僕が、扉をあけて入ると、すでに、僕が行くことが知れていたのだろう、社員たちが一斉に立つて、お辞儀をし、そのなかの一人が僕を、社長室に案内した。

三、女の正体

僕は、今、田中の会社が二部屋からなつていると

のわきに、タイプライターのおいてある台と腰かけ、それから、壁にそつて、かなり大きめのソファが二つおいてあつた。

僕が入つたとき、田中は、一組の男女と、かなり興奮して、口論していた。

一組と云つても、田中が「君たち」と云つているので、実は、ひどくちぐはぐな感じの男女だつた。

女の方は、二十八、九なのであろう。黒ドスキンのスーツを、いようにいやに着こなして、いかにも粋な女だつた。帽子のベールを顔全部に垂らしているのが、女の妖艶な顔に神秘的なカゲを与えていた。

それに引かえて、男の方は、よれよれのレーンコートをまとつた、ちよつと年の分らないような男で、顔と云えば、しなびた南京豆のようだつた。よほど、貧乏らしく、背広も、レーンコートも、アカだらけで、見るからに、不潔で陰惨な感じを与えられる。

「ミツコ、お前が知らないといけないから、云つておくが、この男は、コカイン中毒なんだよ。怖ろしいコカイン中毒なんだよ」

田中が、その男を指さして云うと、その男はグフ〳〵と云うような、気味の悪い笑声をたてて笑つた。

ミツコと呼ばれた、その女性は、動物のうす皮を思わせるナイロン靴下の足を組みかえながら

「知つています」

と切口上で落ついて応えた。スカートと足の間に白いレースの下着がのぞいていた。

「僕には、お前の気持が分らない。みすみす落ちぶれるのが分つていて、この男の喰いものにされるのが分つていて、それで、ついて行こうと云うお前の気持が。——えゝ？　そうぢやないか！」

田中は、何やら、いらだつて、くわえていた煙草を床に投げすてた。すると、その男が、呼ばれた男は、ふけだらけの頭に、レインコートをのせると、その女性のあとから、いかにもセカセカした調子で、つき従うと、こつちを向いて、

「ぢや、またしばらくの間、あしたでもお金を頂きにきますと、につこり笑つた。

二人が出て行つてしまうと、田中は、はじめて、僕の方を見て、「やア、失礼」と云つた。

「あの、きれいなひとは？」

「女房——みたいな女だ。いや、女房だつたと云つた方がいゝな」

「へえー。ぢや、あの変な男と」

「そうなんだ。あの男は、上海から引あげた大陸ゴロなんだね。——ひどいコカイン中毒

で、何をしているか分んない男なんだが、面白いものをもつてきたり、変つた所へ案内したりするものだから、つい便利で、出入りを許してたんだ。処が、一度、僕の留守に家の方へ、あいつがきて、女房がお愛想のつもりで、応接間に上げたんだ。どうも、僕が思うに、そのとき、あいつは女房に、なにか上海からもつてきた、変な絵でも見せたんぢやないかと思うんだがね。そういうのは、すごくいゝ奴をもつているんだ。——そして、その場で、女房のやつ、でれでれになつて貞操をうばわれたらしい。僕が、その晩かえつたら、己之がきて、いやらしい事を云つて困つたなんて云つてたがね。その晩、女房、凄くもえてねえ。ふだんと、全然ちがうんだ。一体、女房の軀は——」

と、彼は、手で、その形や、すがたを表現しながら、その晩がいかに、外のときとちがつたかという事を、微細な点にわたつて、僕に説明した。

そういう点は、昔の田中と少しも変つてなかつた。僕は、今みた艶治な女性の軀の秘密が、目の前にありありと描き出されるようで煩情されるのを覚えながら、ふと疑問をいだき

「しかし、何だつてあんな変な、きたならしい男とも——」

と問ひかけると、

「僕も、そう思うんだがネ。あの己之つて奴は、上海で、外人女の男妾みたいな事をしていたと云うから、何か、すごい秘法でも、もつているんぢやないかね。上海仕込みのネ……とにかく、普通の男だつたら、プライドからでも、とても出来ないような事を、平気でする奴だからネ。女をよろこばせる為に何をするか分つたもんぢやない」

「だけど、それにしてもね、あんなきたない男を奥さんが、よく……」

「だから、僕が、いつも云うのさ。女なんて、どんな素晴らしい衣裳に身を包んでいても、どんな優美な言葉を使つていても、中身は、ケダモノだつてネ」

田中は、そう云つたとき、扉をあけて、社員が入つてきて告げた。

「応募者がきましたけど——」

「あ、こつちへ通してくれ」

四、短い水着

やがて、一人の娘が、案内されて入つてきた。

やつと、二十一か、二になつたかと思われる娘で、桜模様の、ピンクの着物をきていた。

彼女が入つてくると、部屋のなかが一時に、パツと明るくなつたようだつた。

田中は、彼女を見るなり、いきなり、こう浴びせかけた。

「や、あんた、少しおそかつたな。もう、ほとんど、きまつちやつたんだ」

「あら！」

と、その娘は、明らかに落膽したらしい表情をうかべて、ドキマギしながら、

「どうしても、ダメでしよか、私」

「ウーン。そうね。……まア、一応選衡だけしようかね。就職難らしくて、大勢きたんでねえ。……気に入れば、とつて上げてもいゝけどね」

「お願い致します。私、困るんです。おつとめしないと……」

娘は、哀願するように、田中を見つめた。その瞳には、娘らしい必死のコケツトがみとめられて、それが可憐だつた。

「ぢや、とにかく、履歴書をこつちへ出して」

「ハイ」

娘は、生き返つたようにふくさ包みをとりいて、封筒を出した。

「ふーん。本間敏子か。水着をもつてきましたか？」と、彼はきいた。

「ハア？」と、娘は、けげんな顔をして、

「あの、水着が要るんでしようか？」

「もつてこなかつたの？　それぢや仕様がないが、こつちで用意してある水着をきてみて下さい。裸になつて……」

「あの、どうしても、そうしなければいけないんでしようか」

おづおづしながらたづねた。そうきくのさえ、羞恥に耐えられないらしく、パツと顔に紅葉を散らしながら。

「ア、事務員つて云つてもネ、夏になると海岸で、水着きて、宣伝してもらわなくちやいけないんだ。うちのチューインガムをね。だから、軀のきれいな子でないとね」

田中は、娘の羞恥など顔中にないように云つた。

「あの、私……そんなこと……」

「いやなら、いゝんですよ。もう、きまつてるシだし、皆んな、進んで、裸になつたんだからね」

田中の様子には、小扇を追いつめて、もてあそんでいるような調子があつた。娘はしばらく、じつと、唇を噛んで下を向いていたが、

「ぢや、……あのオ、水着をかして」と消えいりそうに云つた。

田中は、僕の方を向いてニヤリと笑いながら、机を廻ると、ひき出しから、黒い、しゆすの水着を出して渡した。

「あの、どこで、着がえしたらいゝんでしようか……」

「更衣室は別にないから、こゝで替えるんですね。僕達は、みていませんから、どうぞ……」

娘は、もう半泣きにベソをかきながら、それでも、仕方がなく一番くらい隅に行つて、向うを向いた。

田中は、僕のそばへきて、僕のわきを突つつきながら、その後姿を、にごつた眼で、陶然と見つめる。正直なところ、僕も、生つばを呑込むような気持だつた。

ためらいがちの手が、帯のむすび目にかゝると、シュ、シュつと、ひそやかな音がして、帯がほぐれて行つた。

帯がとれると、ピンクの着物が、ずるつと、肩から、裾まで、幕のように垂れ、そのなかにこもつていた甘酸つぱい匂いが、部屋のなかのセメントの匂いとまじつて、かすかに僕達の方まで、たゞよつてきた。

着物を幕にしたまゝ、彼女は、そのなかで小ぜわしく手をうごかしていた。ひもがいくつかとれたあとで、うすいモモ色のメリンスの腰巻きを彼女は、つゝまましく巻めて、僕たちの眼から、かくすように、小さくソファの上に置いた。

今、すつかり何もつけてない裸を部屋の空気にさらしているのかと思うと、僕は、キュンと胸がつまりそうな気がした。

彼女は、ちよつと、よろめくようになりながら、いそいで片つ方づゝ、水着の足を通し、それから、着物と長じゆばんをとつて、肩へ紐をかけてからためらいがちに僕たちの方を向いた。

まぶしいような白い裸だつた。その柔らかい、いかにも女性的な肌に、真ツ黒い水着がきゆつとあざやかに喰い込んでいた。

その水着は、田中が、わざと、そういうのを選んだのであろう。だれが着ても短かすぎるような水着で、上を引つぱれば、下がつれ出てしまうのだつた。

彼女もそれに気がついて、しきりに、股のところへ手をやつて、そこが、うまく包まれているか、どうか気にしていた。柔かい肌にそのシュスのシングルの布は、喰い込むようになつて、それをかくしていたが、危うく、お乳の方は、赤く色づいた乳首が半分ほど、黒い布のはじから顔をのぞかしていた。

「あ、よしよし。もつとこつちの明るい方へきて。……はアん。なかなか、いゝ躯していらるんだねえ。着物きていちや分んないけど。……ねえ、君、どうだい」

田中は、机の上に腰をもたらせながら、その恥かしがる裸を賞味するように、しげしげと見すかし、僕の方を振むいたが、僕は、

「そうだねえ」

という外はなかつた。

「そのお腹に当てゝる手をとつてごらん」

と田中は、命じて、かくそうとする手をとらした。

ピツタリと身についたシュスの布は、裸以上に、娘の起伏を告げていた。

そのとき、僕は気がついたのだつた。

僕たち二人を、恨めしげに見つめる彼女の眼が涙で一杯になつているのを！

僕は、胸をつかれて、あわてゝ、視線を床に落した。——はしり寄つて、彼女をなぐさめたかつた。わびたかつた。

これでは、まるで、中世の奴隷市場ではないか！

彼女の眼は、あふれてくる涙をたゝえ切れず、それは、次々と頬にすじをつけて落ちはじめた。

さすがに、それを見ては、田中も、あわれをもよほしたらしく、

「よし、着物をきていゝ」

と、その刑を免じた。

「あとで通知しますが、多分来て頂くようになるでしょう」

その時になつて、僕は彼女が、水着をきているのに、下は白足袋をはいて、草履をつけているのに気がついた。そのチグハグな感じは、ユーモラスと云うより、彼女を、余計、あわれに見せていた。

涙をふいて、着物をつけた娘が去ると、田中は、笑いながら僕に云つた。

「君、気がついたかい？」

「何に……」

「相変らず、ボンヤリな男だな。あの娘、生理期間だつたんだよ」

「えつ？　そう？　どうして分つた」

僕はびつくりする他なかつた。

「だつて、ちやんと、見えたもの。……娘のアレつてのは仲々色気のあるもんだな。……だから、あの子、清潔な色気があるな。……大したケガでもなあんなに裸を恥かしがつていたのさ。」

五、低い椅子

その日は、この娘のあと、六人ほどの応募者がきたが、田中は、彼一流の、おどしたり、すかしたりする術をつかつて、これらの娘を全部裸にして、水着をつけさせた。

だから、その黒いシュスの水着は、前の娘の肌のぬくみが、まだ、のこつているうちに、次の娘の、柔かい、しつとりとした生肌をつゝむという調子で、最後には、娘たちの温気のために、それは、しつとりとしめるようであつた。

田中は、それらの娘のうちから、乗馬が何よりも好きだと云う、ハキハキした勝気の娘と、手首に、白いホウタイを巻いた女とを採用した。だから、和服の娘を入れて三人である。

「やつぱり、美人というだけぢやダメなんだよ。何かの意味で、面白い所がなくつちやね。あの、泣いた和服の娘は、性感が並はづれて強いと僕はにらんだんだ。裸を見られて泣く娘なんて、仕込んだら、すごい好色な女になるよ。乗馬が好きな娘つて云うのは、これもまた仲々得がたい女だよ。女のサドだからね。ほうたいの娘？……大したケガでもないのに、やたらに、ホウタイを巻きたがつたり、コルセツトをつけるのを好んだりする女は、これは、男にしばられたり、いぢめられたりするのが、三度の飯より好きな女だからね……これも面白いんだ」

彼は、三人の娘を採用した理由を、その晩僕をつれて行つた料理屋の座敷で、こう語つた。

僕はそれから、一週間に一回か二回、時には一日おき位に、彼の会社へ遊びに行く習慣が出来た。

そうして、彼が、会社で、この三人の娘をいかに手なづけるかを、つぶさに見ることが出来た。

彼は、もともと、遊んでいても喰べられる身分だから、会社と云つても、仕事には熱を入れず、（父や世間に対する体裁だけで）一実はこれらの女事務員を、色んな方法で、もてあそぶ事に、惰熱の大半をかたむけている様子だつた。

例えば、それは、こういう風にして行はれた。

彼の机のなゝめ前に、タイプライターがのつている台があつたが、その台も、腰かけも、奇妙なことに、大変背がひくかつた。

タイピストには、ホウタイの娘が採用された。

彼女は、芳子と云つた。

小麦色の軀がきゆつとしまつた、いゝスタイルをしていて、いわゆる、小股が切れあがつた

と云う感じの娘だつた。（スタイルが良かつたのは、一つにはコルセットをしていたセイかも知れない。）

彼女は、エンピツ型と云われているタイトスカートをはいて、会社へきたが、そういう彼女が、そのタイプの前に腰かけると、ひざが腰よりも高くなる。

しかも、その位置は、そのまゝ、田中や、僕の居る所から、見えるような位置なのであつた。

はじめ、彼女は、それに気がつかずに、割と無雑作に腰をかけていた。椅子が不自然にひくいので、どうしても、ひざが開きかげんになる。

ひざが、ひらかれると、スカートの奥のむつちりした二本の太い柱が、田中の眼にまつすぐにうつるのだ。

彼女はコルセットのガーターで靴下をつつていた。

靴下の色が濃くなつてきわまり、ふともゝの肉が、はみ出している奥の突あたりに、ほの白く下穿きがみえた。木の下陰に咲くくちないしの花のように。

彼女は、終日、こうして、田中や、田中の所へ裁決をもらいにくる男社員に、知らずに美しい場所を見せていた。

田中は、ふと、すまして頂けないでしようか」

つて見たくなつて、とう話しかけた。

「パンテイ替えてきたんだね。昨日までのピンクのトリコットのは、どうしたの」

「アラ！」

と、彼女は、頬をおさえて、一辺に、ひざ前をきゆつと合わせてしまつた。気がついたのだ。

それからは、いつも、ひざをかたく合わせていたが、すると今度は、すつかり見えてしまう事になる。

「アノ、社長さん、もつと、高い椅子にかえて頂けないでしようか」

彼女は、ある日、ついに意を決したように、田中に向つて申入れた。

「何？　君は、生意地だぞ。椅子一つかえるんだつて、タヾでは出来ないんだ。まだ、入つて幾月もたゝないのに、もう、そんな事を云いだす。君は、僕が若いと思つてナメるのか」

田中が、わざと激怒した風を見せると、芳子は、あわてゝ、

「いゝえ、そんな事、ありませんわ。なめる

なんて」

「ぢや、なぜ、急にそんな事云い出すんだ」

「だつて……」

と云いかけて、唇をかみながら、自分の席へかえつて行く背に、

「あんまり、我儘を云うならば止めてもらうだけだぞ、いゝか！」

と、止めを刺すのだ。

「ハイ」

と彼女はシュンとしてしまう。そして、それからは、たえず、田中や、僕や、社員の眼を意識しながら、仕事をしなければならないのだ。針の座へ座つているようなものだつたのだ。

が、彼女が、唇をかみながら、それをこらえたのは、本当に彼女のなかに、田中が云つたような素質があつたせいかも知れない。

六、処女教育

この他、あらゆる奇妙な方法で、彼は、これらの娘を「教育」した。それは、調教師が動物を馴らすようなものだつた。

僕が行くと、芳子が一生懸命タイプを打つている前で、僕を相手に、きくに耐えないようなY談をはじめるのが例だつた。

田中のY談は、実に、徹に入り、細にわたつて、手まねや、疑音を入れてやるので、僕のような男でも、きいていられなくなる程なのだ。だから、芳子は、きいてないふりして、タイプを打つているが、それでも耳に入らずには居ないのだろう。

いつかタイプの音もみだれ勝ちになり、僕たちの方から見える腰を、恥かしそうに、もぞもぞうごかしながら、しまいには、真紅になつて、机の上に、うつぶしてしまう。

「社長さん、あのオ……」

と、何か目顔で知らせて、扉の方へ出ていこうとした。すると、田中は、

「いかん。絶体にいかん。まだ、そんな事許しておらん！」

と、田中は厳格に注意する。

「だつてエ……いやア。ひどいわ」

と、彼女が、ハンカチで、顔をおほいながら身もだえする様子は、何んとも色つぽかつた。

また、こんな事もあつた。

ある日、社長室へ入つてゆくと、部屋のすみに、ベニヤ板で、公衆電話位のカンタンなかこいが出来ていた。

僕は何だろうと思つたが、きかずに、田中としばらく雑談を交していた。

そのうちに、芳子が、しぎりに立つたり座つたりして、落ちつかない様子を示していたが、ついに、たまりかねた様子で、

「社長さん、あのオ……」

と、何か目顔で知らせて、扉の方へ出ていこうとした。すると、田中は、

「いかん。絶体にいかん。まだ、そんな事許しておらん！」

と大声で制した。

「だつて、お客様が――」

「客がいたつて構わないぢやないか。そんな事、お前は云える身分か」

芳子は、すごすごと、席へもどつたが、しばらくすると、すきをみて、また扉の方へ走

りよろうとした。すると、田中は、その肩をつかまえて、そのすみのボツクスへ彼女を追いこんだ。

ベニヤのかんたんなかこいだつたから、そこで立てる音は、つゝぬけにきこえた。

田中は席にもどりながら、僕に片眼をつぶつてみせた。僕は、田中の非道徳なやりかたに憤激したが、それと同時に、胸がしめつけられる様な興奮を覚えたことも記しておかなくてはならない。

彼女は、恥かしいのであろう。僕が、かえるまで、とうとうそこから姿を表わさなかつた。

もう、その頃は、彼女は、田中と或る種の間がらになつていたように思われる。

と云うのは、このボツクスの件と前後して、あるとき、夕方おそく僕が行くと、田中と彼女だけ居残つていた事があつたからだ。

しかも、彼女は、服のまゝ、手首をハンケチか何かで、後手にしばられて、ソファにころがされていた。手が後にまわつているのでお乳が、ブラウスの上から、余計つき出された恰好にみえた。

そのお乳を、田中は、突ついたり、もんだりしながら、何かしきりに口で責めていた。

「どうしたんだね」

と僕は、彼女が何か悪いことをしたのなら、とりなしてやろうと思つてきいた。

「ウン。きいてくれよ。こいつがね、僕の机のひき出しに入つていた、アノ、いつか君に見せたろ？……あの器具を盗みやがつたんだ」

「うそだわ。あんな社長さん、ひどいことおつしやつて！　私、何の覚えもないのに…」

彼女の声は、途中から、上づつて、泣き出してしまつた。

「ちや、どうして、アレが君の机の引出しに入つていたのだね」

「存じません！　社長さんが、お入れになつたんでしよう！　私をはづかしめようとして……」

彼女は、躯をふるわせながら精一杯に抗議した。

「まだ、そんな憎々しい事を云つている。欲しかつたんなら、欲しかつたつて、正直に云えば、許してやるンだ。いつまで、強情はつているとお仕置きするぞ！」

「欲しかつたなんて！」

そうだろう。その器具が欲しかつたなんて、娘の身で口が腐つても云えないであろう。

「あくまで強情はるなら、人のみている前で、こうしてやる」

彼は、そう云つたかと思うと、「イヤ、止して、イヤ、イヤ」と身もだえする彼女の肩をぐんと抱きすくめ、はげしい、なぶるようなキスを与える。

彼女は、私が見ているので、目をかたくつぶつて、口をひらくまいとしているようだつたが、どこかを、くすぐられたらしく、「あ」と云つて、口をあけ、と躯をふるわせたのは、とうとう舌を入れられたのだろう。

僕はそれから先を見ていられなくなつて、

「僕はかえる」

と云つたが二人は、もう返事もしなかつた。

七、劇的（ドラマチック）な夏

目くるめくような夏がやつてきた。

田中は湘南のZに小さな家をかりて、そこを、会社の寮にした。

僕も招待されたので、行つてみると、六畳、三畳、三畳というその小さな家に、そのとき、田中が、例の三人の女事務員をつれてきていた。

「あゝ、よく来たな。退屈で困つていたん

だ。こう女ばかりにかこまれてはね。……今日は君がきてくれたから、二つ大いに遊ぼう」

と、田中は歓迎してくれた。

浜辺は、ごったがえすような人の波だった。あらゆる原色がはんらんし、人々の歓声と、レコードが、波音を消していた。

入社試験のとき、泣くなく裸になった敏子は、この日も、紹の着物をきて、海岸へ出たが、とうとう裸にはならなかった。僕に再び裸を見せるのがいやだったのだろう。

芳子は、一番徹底的に、田中に教育され、もう、彼の情婦のようになっていたので、僕の前でも、平気で水着姿になって、喜々として彼とたわむれていた。その水着は、白い毛のジャージになったものだったが、白いので水につかると、半分位透いてしまうのである。それを気にして、彼女は、水から上るたびに、軀からそれをはがすようにしていた。

――これも、彼が見立てゝ、わざと、皆の前で、恥かしがらせるように、着せたのであろう。

「なにしろ、芳子は露出症だからな。みんなの前で、恥かしいところを見せるのがうれしくて仕様がないンだろう」

と、田中にからかわれ、

「ひどいわ！　知らない。ン！」

と、田中の背を打つたりするほど、なれなれしくなっていた。

乗馬が好きだと勇敢に答えた娘は、初江といって、この日も、午前中、どこかの馬をかりて、半パンツに、ポロシャツという少年みたいな姿で、海岸中をのりまわしていたが、午後になると、真赤な海水着をきて、僕達の仲間に入ってきた。

馬できたえた腰からもゝがたくましく、コリコリと張っていて、どっちかと云うと、男のような軀つきだったが、それでいて胸と、尻は、女としての成熟を語って、なまめかしかった。彼女は、三人のうちでは、一番陽にやけていて、腕も、腿も、小麦色になってその上にかすんでいるのが、印象的だった。

「私、シュージャインのようでしょう」

彼女は、僕にそう云って白い歯をみせてさわやかに笑った。

芳子が、田中につきまとっているので、初江は、自然僕を相手にするような成行きになった。僕は、彼女に砂をかけられて、うづめられながら、奇妙な幸福感を味わっていた。僕の目の前で、あらわれもなく、しゃがんだり、ひざをついたりしながら、夢中になって、砂をかけている彼女の、――力が入るたびに、微妙に隆起する下腹部や、弾力のあふれるもゝを、近々と、目にしながら、僕は、何か女の圧迫感というものに酔ったようになって、軀がしびれてくるのを感じるのだった。

皆の笑い声で、ふと目をあけると、僕の顔のわきに、竹の筒が立てられ、彼女が真面目くさって、お経を上げていた。

田中と、芳子は、肩を組みながら、それをゲラゲラ笑って見ていた。その後で敏子が、日傘をかざしながら、仲間はづれの寂しい顔でひかえているのが、印象的だった。

――そうだ。そのときの、僕の印象は当ったのだ。

田中は、わざと、一番好色な（と彼が思ってる）敏子を、意識的に仲間はづれにして、この晩のような事が起るのを、待ったのである。

それが、彼の術だったのだ。

その晩、僕たちは、ビールに、かわいたノドをうるほしながら、四人で麻雀を打ちはじ

めた。(このときも敏子は仲間外れになつた)。

一種のカケ麻雀であつた。一種の、と云うのは、かけたのがお金ではなかつたからだ。一番負けたものが、一番勝つたものの、云いなりのことをする。——というのが、賭けだつた。

その結果、一番負けたものが僕で、一番勝つたのは、初江だつた。

「さア、私のいゝなりになるのよ。なにをしようかな」

と初江は、興にのつて、

「まづ、こゝへ腹ばいになつて、私の足をペロペロなめなさい」

と、自分の前の畳を指さした。田中と、芳子は、わアと一斉にはやし立てるのに興奮し、

「お前なんか、これが一番のごちそうなんだ。さア、文句云わずに、有難く、女王様のおみ足をきれいにしろ!」

初江は、そう云うと、湯上りの浴衣の前をまくつて片ほうの足を僕の前へ投げ出した。

僕は仕方がなく、てれかくしにニヤニヤ笑いながら、畳の上へ横になると、目の前へつき出された初江の足を、両手でもちそえると、目をつぶるような気持で、まづ、土ふまずの柔らかい所に唇をあてた。

「わア、くすぐつたい。バカ! だれがそんな所をなめろと云つた。もつと、先だ」

と、自分から、足の指のところを、ぐいと一杯に、私の口のなかへつき入れてきた。

この時、田中と、芳子は、何をしていたか分らないが、多分僕たちの遊戯に興奮して、接吻でもしていたのではないだろうか。

僕が、やつと三週目をまわりおわつたときだつた。

わつと、誰かゞ突然、泣き出す声が起つたかと思うと、障子が、乱暴にあけられ、バタバタと外へかけて行く乱れた足音がした。

僕たちも、田中たちも、あわてゝ離れた。敏子の姿がきえている。

「敏子さん。あまり、あたしたちが、ふざけるので、驚ろいて行つちやつたのでしよう」

「でも、どうして、あんなに突然泣き出したのかしら。泣くなんておかしいわ」

田中は、ひとりで、ニヤリと笑うと、

「僕が、行つてみるから、君たちは、三人でビールでも呑んでいたまえ」

と、云つてゆうゆうと腰をあげた。

★

あとから、彼のかたつた所によると。——

彼女は、海岸に出ていた。月のない晩で、

彼女の白い和服が、闇のなかで、ホノ白くにじんだように見えた。田中が、声をかけて近づくと、敏子は、また逃げた。

こうして、和船のかげの所まで、彼は、追つて行つて、敏子をつかまえた。

つかまえた彼の腕のなかで、またはげしく泣いた。

彼女のつけているキヤラの香りが、潮風のなかでたゞよつた。

彼が、無理に接吻すると、喰いつくように吸いかえしてきた。案の定ひどく興奮しているのである。

「いや。なんて、ひどいの、社長さんは！」

と、彼女は、むせびつゞけた。

足もとの砂が、力を入れるたびに、くずれて、少さく舞つた。

波の音が、彼女の情感のように、大きく高まつてはまた引いて行つた。

つゝしみ深い女ほど、いざとなると、ひたむきになるものだと云う、言葉が真実である事を、彼は、闇のなかで、知るのだつた。

八、エピローグ

さて、この奇妙な会社の物語りも、これで打切らなくてはならない。

★スピレーン名場面集★

部屋を横切のに、私はスポットライトの後ろを廻らなければならず、半ば暗闇の中で例のカーテンを探すのに一分かかつた。カーテンのかげにはもう一つドアがあつた。それはその男は夢中になりすぎていた。彼は失敗した。私は失敗しなかつた。私がまだバランスがとれないでいるうちに、棍棒が頭をめがけて振り下ろされた。が、彼はそれ以上に大きかつた。私は片手をやられていたので、もう一本の方をやられたくなかつた。

私が壁によりかかつて、とがつたつま先で蹴り上げると、彼はまつ二つになりそうになつた。彼は叫び声をあげようとした。が、聞えたのはうめき声だけであつた。

棍棒が床に落ち、彼は手を腿のつけ根にあてて、身を折つた。今度はちやんと測つた。私は短く半歩踏み出すと、歯がかけて、私の靴にとび込んで来るほどひどく、その野郎の面を蹴りつけた。（C書房版・「復讐は俺の手に」）

～～～

山桐子の怪死

の怪死体！　それはかつて〝ミス・桐子だつた……疑惑の數々、果か？…だが〝科学は僞らず〟本査ルポルタージユである!!

星　秀雄

もし、過去の〝ミス・桜島〟という誇称に自己陶酔するような彼女でなかつたなら、これほどまでに、悲惨な二十五年の生涯を、桐子は閉ずることなく終つたであろうに。

まるで金の鈴のように、こがね色の桜島特有の蜜柑林の丘を背にした、情景豊かな、この有村に育まれた牧山桐子は、幼時の頃から所謂運動神経の発達した愛くるしい子供として、丘に浜に一日中を馳せ廻り、すくすくと伸びて行つたのだつた。

この有村に、お大尽として名の通つている農家、笹野井矢衛門の一粒種の猛は、体格の優れた乱暴者ではあつたが、同じ地の漁師、宍戸作兵の悴の悟朗と、二つ、三つ年下の桐子を中心に、幼な友達として、村の小学校を卒えるまで、互にむつまじく過してきた間柄であり、義務教育を終えるとすぐ、二人は各々父の家業を継いでいつた。

文士くずれの夫愛也を抱えた桐子は、紺碧の海をへだてた桜島を眼前に控えた、絶景の地の一つである鴨池に、グリーランド・ビリヤードを経営し、当初は彼女の敏腕と、集る文学青年グループによつて表面的な華やかさはあつたものの、雄ネジ、雌ネジのように合致する夫愛也の異常生活と彼女の持ちまえの素質が却つて敬遠の的となり、今ではただ残酷的な存在に近かつた。

打算的な考え方を微塵も持ち合せていない悟朗は、暇々に桐子を訪れるのを唯一のよろこびとしていたと同様に、幼な友だちとしての親しさ以上の好意を寄せ、今では彼の折々の来訪を心待ちする彼女でもあつた。

*

彼がいつものように、そして今となつてはそれが最後となつた訪問のその翌朝、桐子は鴨池海岸の松林に、冷たい屍となつて発覚されたのである。もとより他殺容疑事件として国警県本部の刑事部長、検屍官、捜査、鑑識各課長以下係官が、急遽現場へ鑑識、捜査の陣を布いた。

殺人容疑者として指名手配されたのは、この朝すでに家には姿を現わさなかつた悟朗である。被害者牧山桐子方の家宅捜査の結果、証拠品として押収されたものの一つに、うすよごれた、そして淡い血痕らしいもののついた一本の手拭が、鑑定の結果、悟朗所有のものと分つた。

*

従来疑義をいだきながら解明の機会を得なかつた私は、最近、この事件に直接たずさわ

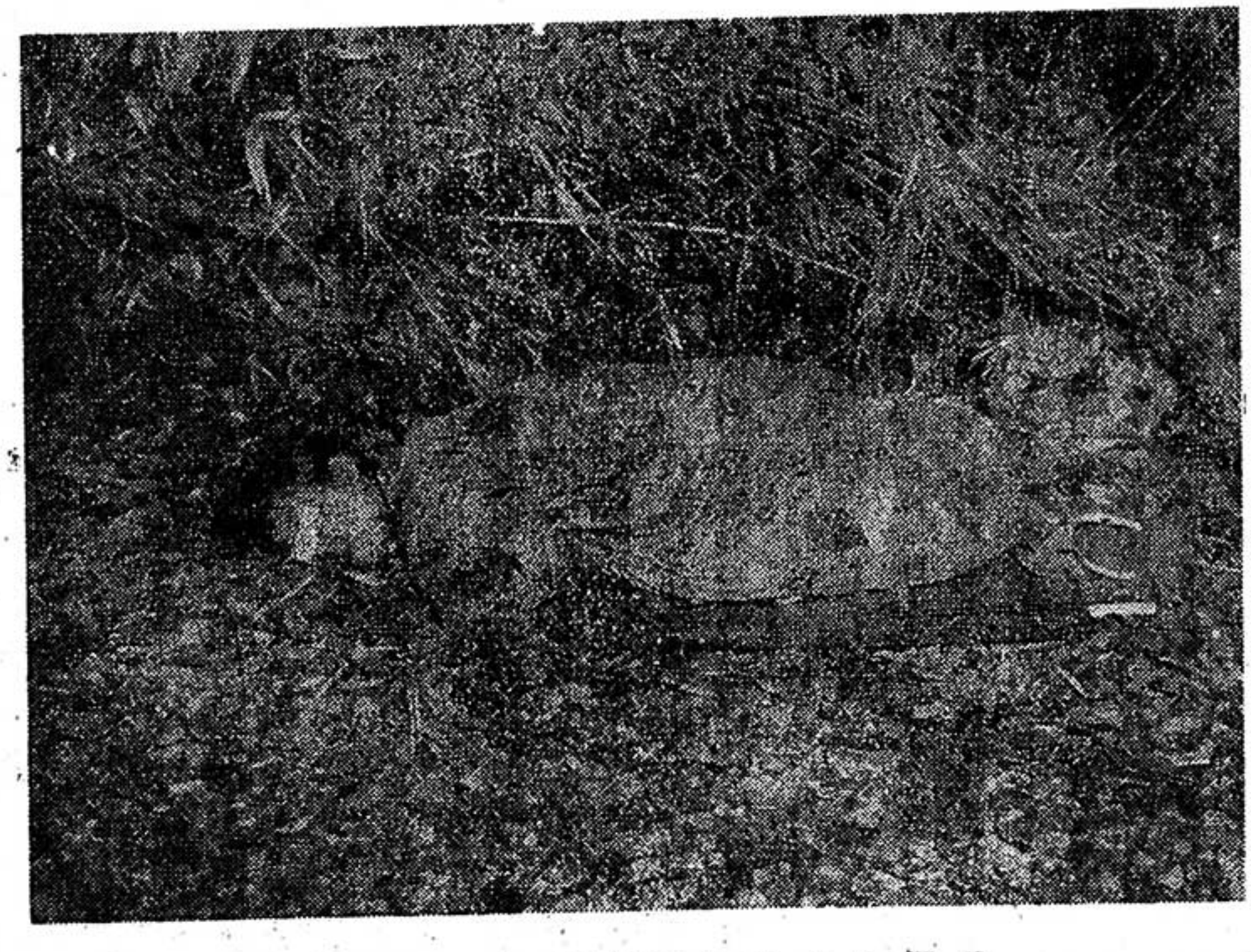
牧山桐子の怪死

犯罪捜査ルポルタージュ

淋しい松林で発見された若い女
ス桜島〃と謳われた美貌の人妻
て彼女は、絞殺されたのだろう
篇は、この難事件に挑む科学捜

私『どうして魚の血と人間の血と区別できるのですか。』

木下『血痕検査（写真③血痕附着の紙片）を予備及び確定の検査方法によつて、試験されねばなりません。例えば数年前に起つた下山総裁他殺容疑事件にも、鉄道線路の附近を検査して効果をおさめたルミノール化学発光試験法というのもありまして、血がついていますと、暗いところでは青白い光が一層よく見えるのです。これは非常に鋭敏な反応で、雨で大部分が洗い去られた後でも分るのです。またヘモクロモゲン検査法（写真④ヘモクロモゲン結晶）といつて、ヘモクロモゲンの紅葉のような結晶ができると、この斑点は血痕である、と断定できるのです。従つてこの反応がないときは、血痕を認めることができないと決定するのです。



①死体となつて発見された桐子

私『質問があとさきになりますが、その手拭は、どうして宍戸悟朗のものと分つたのですか』

木下検屍官『その手拭から魚鱗が発見されました。そしてこれは後から分つた問題ですが、血痕は多分魚の血であつて、人間の血は認められなかつたのです。』

つた有名な木下検屍官に、当時の模様を、つぶさにおたづねして、漸く納得できたのである。ここに聊か、これに関する問答を披瀝して読者の御参考に供したい。

*

②絞死の全身状態

る人血にだけ反応する抗血清を、細小試験管に入れ、その上に検査物の血痕溶液を重ねますと、人血の場合だけ、その接触面に白輪を生じるのです。この本試験を沈降反応法といつております。

そのような次第で、この手拭からは血痕検査の確定試験によつて、はつきりと血痕であることは確認されたのですが、沈降反応法では白輪がでませんので、人の血は認め得ないのです。

従つて口なかなか大変なことなのですが、理想としてはあらゆる動物に対応する抗血清を予め備えておいて、それらの検査の結果、魚の血であるということになるのですが、この場合は、人血は認め得ないのと、魚鱗がその血痕中についていたことから推測して、恐らくは魚の血だろうと考えられたのです。』

私『なるほど、素人の私達は極く平易に考えておりますが、御専門の立場からは、判定上むつかしいことも多いのでしようと御察しいたすことができるようになりました。』

木下『そうです。正しく且つ迅速に！という点は、科学の技術も、ヂヤーナリズムの仕事も変りないと思います。』

私『本当ですね。そうしますと容疑者として宍戸が指名手配されたのは、屍発見の前夜に、彼が牧山愛也の家に桐子を訪れ、彼の帰途を彼女が送つていつたこと、その翌朝宍戸の姿がなかつたこと、そして被害者宅から押収した手拭は牧山家のものでなくて血痕と共に魚の鱗がついていたことなどによつて、最初から容疑されたわけですね？』

木下『その通りです。私も可なり多くの屍を取扱つてきましたが、この事件など結果的に見ては大した問題には思えないのですが説明づけるために、相当骨の折れた方です。』

私『その理由はどうしてですか？』

木下『絶対にお話しできない点は、予めお許し願うことにして、今は差支えない程度にその概略を御話しいたしましよう。』

私『どうぞよろしくお願いいたします。』

木下『この事件は鑑識陣と捜査陣とが渾身一体となつて活躍した点に於いて、――私共のところでは、そんな事は一度もありませんが、聞くところによると、鑑識陣は科学万能を叫び、捜査陣は非科学的なカンを固執してゆづらぬところもあるそうですが、

この事件ほど、両者の持ち場を、お互が尊重し、受け入れ合い、その為に好結果をもたらしたのだと痛感した事はありません。』

私『そのお考えは分るような気がいたしますが、具体的には、どのようなことなのでしょうか？真犯人は、やはり宍戸なのですか？いやそれよりも、この屍の死因は一体絞殺なのでしょうか？』

木下『そこですよ、問題の核心は。この事件の複雑性については、捜査の聞き込み調査が、非常に参考になるのです。それは、どこまでも科学的捜査を基盤において行つた結果と思います。御質問のように、この屍の死因は絞死です。しかし絞殺ではありません。』

私『絞殺と絞死とどう違うのですか？』

木下『絞殺は所謂相手を絞め殺すのですが、絞死は絞めることによつて死ぬので、相手は他人でも自分でもいいわけです。この区別は様々の検屍所見や解剖所見によつて概ね分るのですから、首が紐のようなもので強く巻かれて死んだ場合は、絞死といつた方が範囲が広いのです。』

私『なるほど、然し被害者の体中は傷だらけだつたそうですね』

木下『そうです。この女性の身体は、見るに忍びないほどのたくさんの生傷があつたのです。然しこれは切り傷ではないのです。皮下出血といつて、生きているときに、外力が体に強く作用しますと、皮膚の下の小さい血管が破れて、皮下に出血するのです。勿論これは生きているときに出来るので、死んでからは出来ないのです。これを生活反応とか、生存反応とかいつて、生きていた証拠だというのです。話が又それますけれど、これと反対に、あの下山総裁には、この皮下出血が該当部になかつたのだから、死後轢断です。ところがこの女性屍には生活反応があります

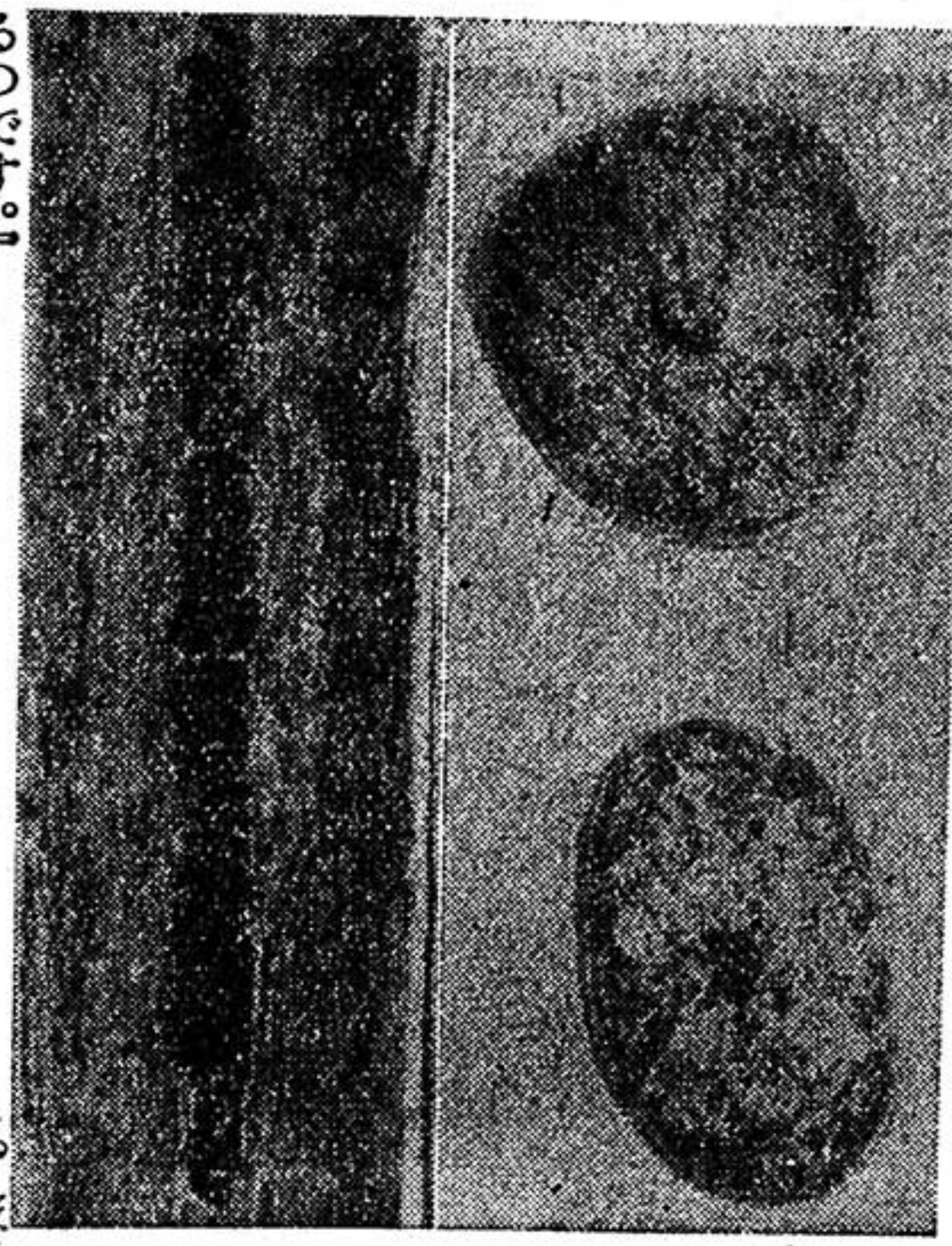
③ 血痕附着の紙片
④ 血痕の証明となるヘモクロモゲン結晶

ので、これは生前のキズであります。従つてこの絞死は検屍の際、先ず他殺の疑をもつたのです。その上、この屍の下半身の様子が、どうもただごとではないような状態なのです。』

私『強姦でもされた形跡でもあるのでしょうか？』

木下『ところが、この屍は絞殺にしては、その所見が余り著明ではないのです。尤もうつぶせになつてはいましたが、（写真①②）何れにしても他人が絞め殺す場合には、首に巻きつけた紐を力一杯に絞めつけて、或は結びつけて再び息を吹き返さないように努力するのです。従つて索溝といつて、首のまわりに紐状の跡が溝のように凹んで出来るのですが、自分で絞める場合（写真⑦紐）は著明ではありません。顔面は、どす黒いように、うつけつして、はれぼつたくなりますし、鼻血などを出したり、眼の球やまぶたの裏側に溢血といつて、普通は蚤の刺した位の大きさの出血の斑点ができるのです。

ところが自分で絞める場合は、首を一巻き絞めただけで、もう気を失つてしまいますので、それから更に強く絞めたり、巻いたり、結んだりは、もうできなくなるのです。従つて顔面のうつけつも、鼻血も少く索溝も著明でないのが一般です。この女性屍の場合も、所見が著明ではなかつたのにあちらこちらに皮下出血があるので、一応は他殺を疑つてみましたが、入念に検べてみますと、この皮下出血は新旧いろいろあるのです。』



⑤ 男性の毛断面と縦面

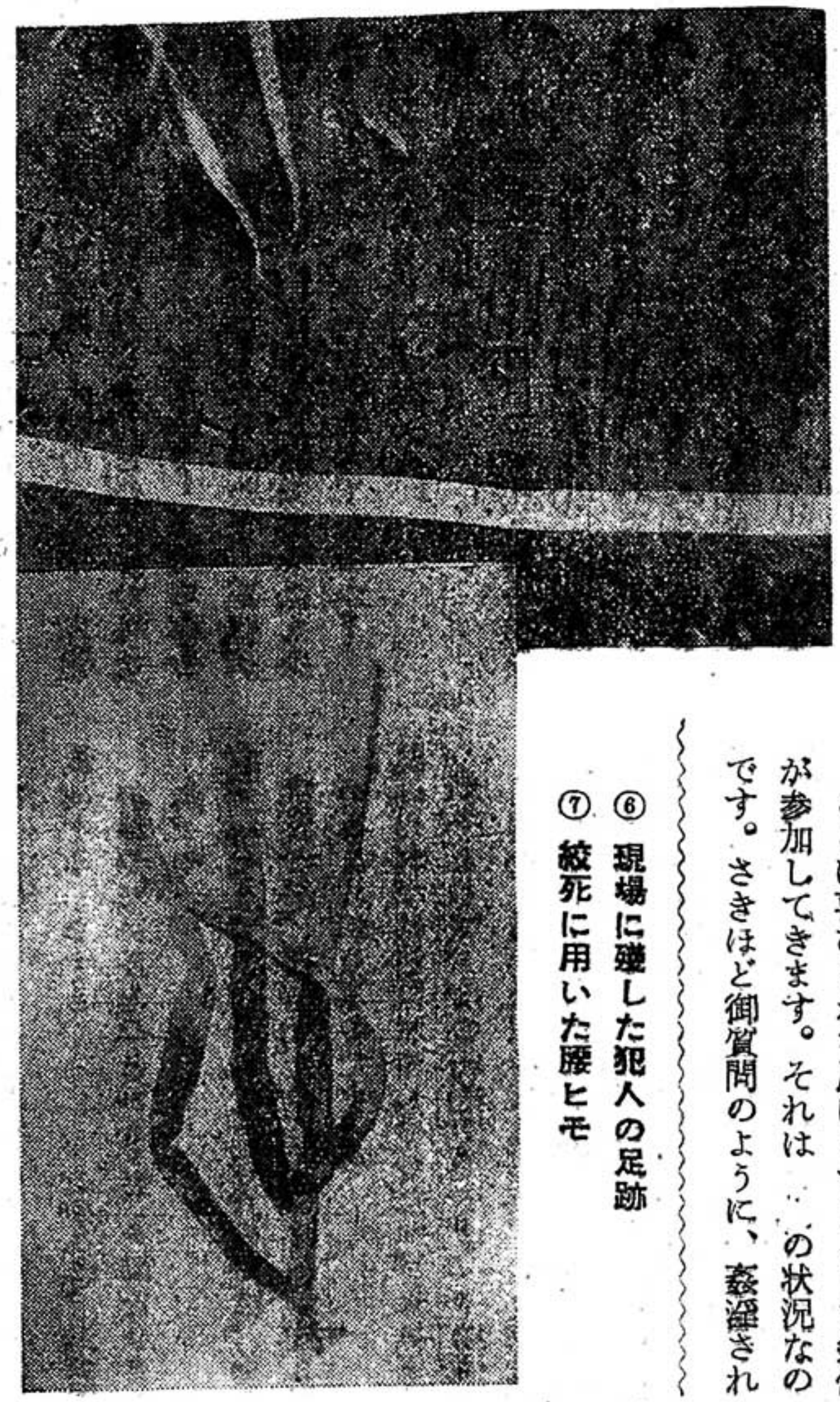
私『皮下出血の新旧はどうして見分けるのですか？』

木下『その色調で分るのです。そしてその色調は、受傷後の日の経過と共に変つてゆくのです。ですからその色調が、時の経過を示唆することにもなるのです。従つて、凡そ死因と直接関係があるかないかの問題が残るのです。』

私『と云いますと？』

木下『たくさんの皮下出血がありますときは死の直前に抵抗防禦をしたという見当がつくのです。従つて死因と関係があり、他為的になされたもの、すなわちこの女性屍の場合、絞殺されたという判断が濃厚になつてくるのです。

既に留置され取調べを受けていた宍戸は、犯行の容疑に対して、肯定もしない代りに敢て否定もしようともしなかつたのです。絶局桐子の存在しない此の世は、彼にとつて生き甲斐もなく、もうどうでもよくなつていたのでしょう。彼にとつて処刑という問題は、初めから考慮になかつたのです。然し捜査官にとつては、このようなどうでもよい式の態度というものが、実に迷惑千万な事なのです。でもわれわれ科学陣の信念にとつてはこれらの態度によつて何等の影響は受けな



⑥ 現場に遺した犯人の足跡
⑦ 絞死に用いた腰ヒモ

いのです。

というのは、新しい此のキズの中に旧いキズが一層たくさんある此の女性屍は、死ぬずつと以前から、これらの生キズを負わされているし、又自分自身では到底為し得ない部位にもあることが分つたのです。彼女の皮色や艶から推しても〝ミス・桜島〟は往年の面影もなく憔悴し切つているのです。

これらから考察されたのは、変態性として、よくあるマゾヒズムです。そうなるとこの皮下出血は、死因に直接関係はあるまい、ということになるのです。勿論この皮下出血が、余りに多すぎる場合には、これだけでも、いつかは死因となるときも稀にはあるのですが、そうなると死因は絞死で、これは自分で絞めたのだろうという考え方の公算が大きくなるのです。

ここに再びこれを反ばくするような条件が参加してきます。それは……の状況なのです。さきほど御質問のように、姦淫されたかどうかの問題ですが、精虫を検出したのです。然し生前に暴力をもつて姦淫された場合は、大てい出血しますし、指圧による皮下出血を生ずることが多いのです。又場合によつては、被害者なり、加害者なりの毛が、落ちていることが多いのです。勿論普通は精虫を見出します。』

私『その毛は、男のですか、女のですか？』

木下『どちらと、きまつてはいませんけれどもし男性のがあつたら、それは容疑者として考えるのが当然でしょう。この場合にも検査の結果、三本の男性の毛（写真⑤男毛の断面と縦面）と、一本の犬の毛とを発見したのです。然し出血や太もものの部分の皮下出血はありませんでした。すなわち、普通の場合と一寸違つたような感じがしませんか？』

私『犬の毛？　いや全く混沌として分らなくなつてきました。』

木下『まあ最後までゆつくりお聞き下さい。この姦淫は、稀有のことながら、屍姦という点をも考慮しなければならなくなりまし

た。

又毛髪については、人間の毛か？　動物の毛か？　人間の毛なら、どの部分の毛なのか？　男性か？　女性か？　凡その年令層は？　自然に脱落したものか？　或は抜去したものか？　どんな刃物で切つたものか？　それから幾日位たつているか？等の問題もあるのです。』

私『大したものですね』

木下『この女性屍の場合、このような男性の毛や、犬の毛がなかつたら、　外部的な所見としては、裾がめくれている位で、ズロースもはいていますし、（これは後から再びはかしたのですが）出血もその部の皮下出血もありませんので、　検査をしない限り姦淫の変化を見逃したかもしれません。

この異つた毛があつた為に、更に入念に　検査迄したのですが、結果として精液（写真⑨検出した精虫）が、而も淋菌（写真⑩淋菌）を混えて検出されたのです。もとより主人との関係も考慮しなければなりません。調査の結果、主人は三、四日前から不在で、而も夫妻共に淋疾に罹つた過去がないことが、病歴や検査の結果、判明したのです。』

私『そうしますと、犯人は、淋病にかかつているものということになりますね。』

木下『そうです。そしてその犬の毛は、その容疑者が、何か犬との関連性をも示唆していることになるのです。』

私『それでは前におつしやつたマゾヒストは桐子として、その相手方のサヂストは恐らくは主人と考えてみても、真犯人は誰なのでしよう？　淋菌由もない桐子ですが、宍戸との関係以外に一寸考えられません。』

木下『それは余りに眼前の素を今一度振り返つてみる必要はありませんか？』

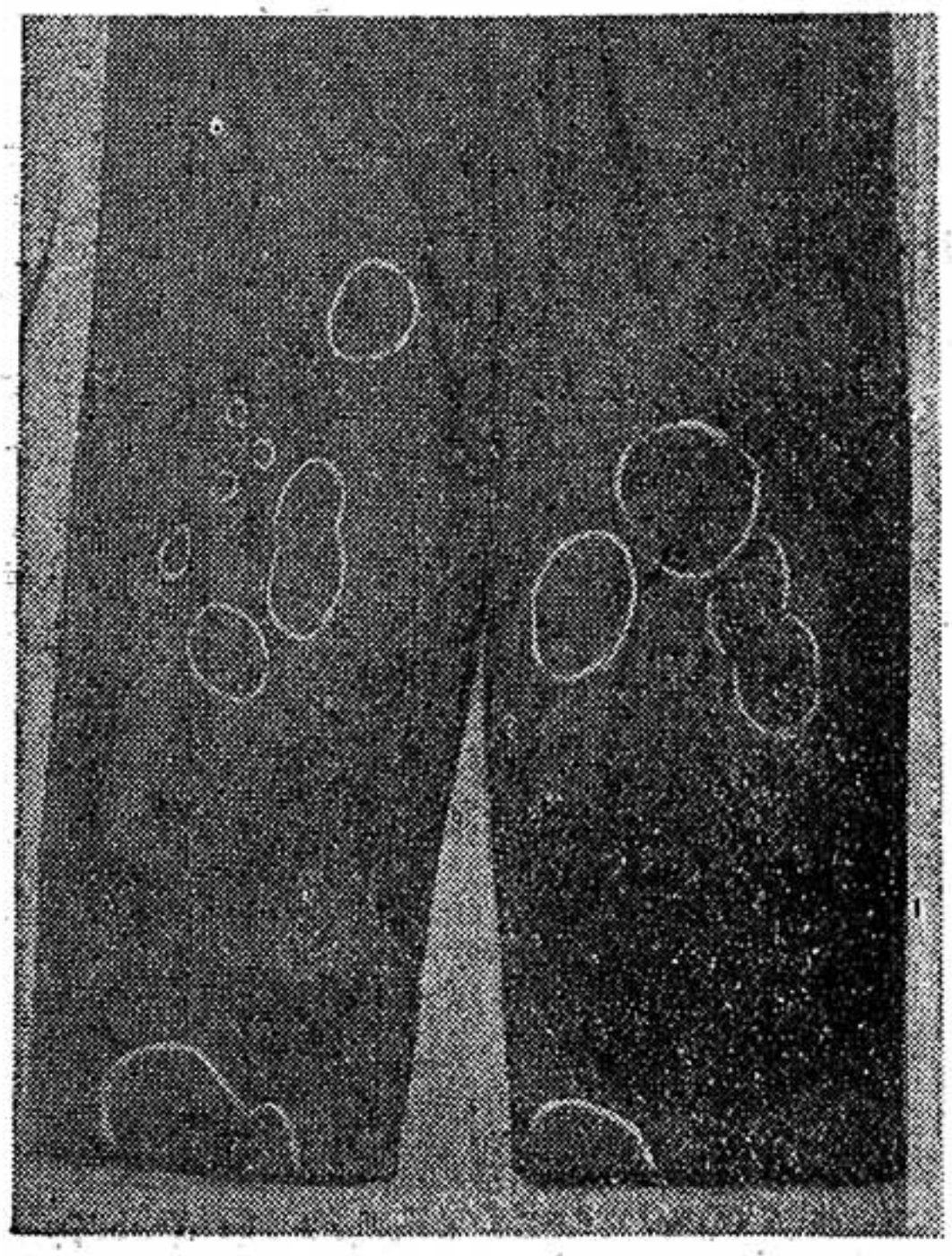
私『とおつしやいますと？』

木下『再び出発点へ戻つて真犯人は一体誰なのか？という問題です。恐らく貴方も既に漁師宍戸悟朗を、真犯人として、おきめになつているのではないですか？』

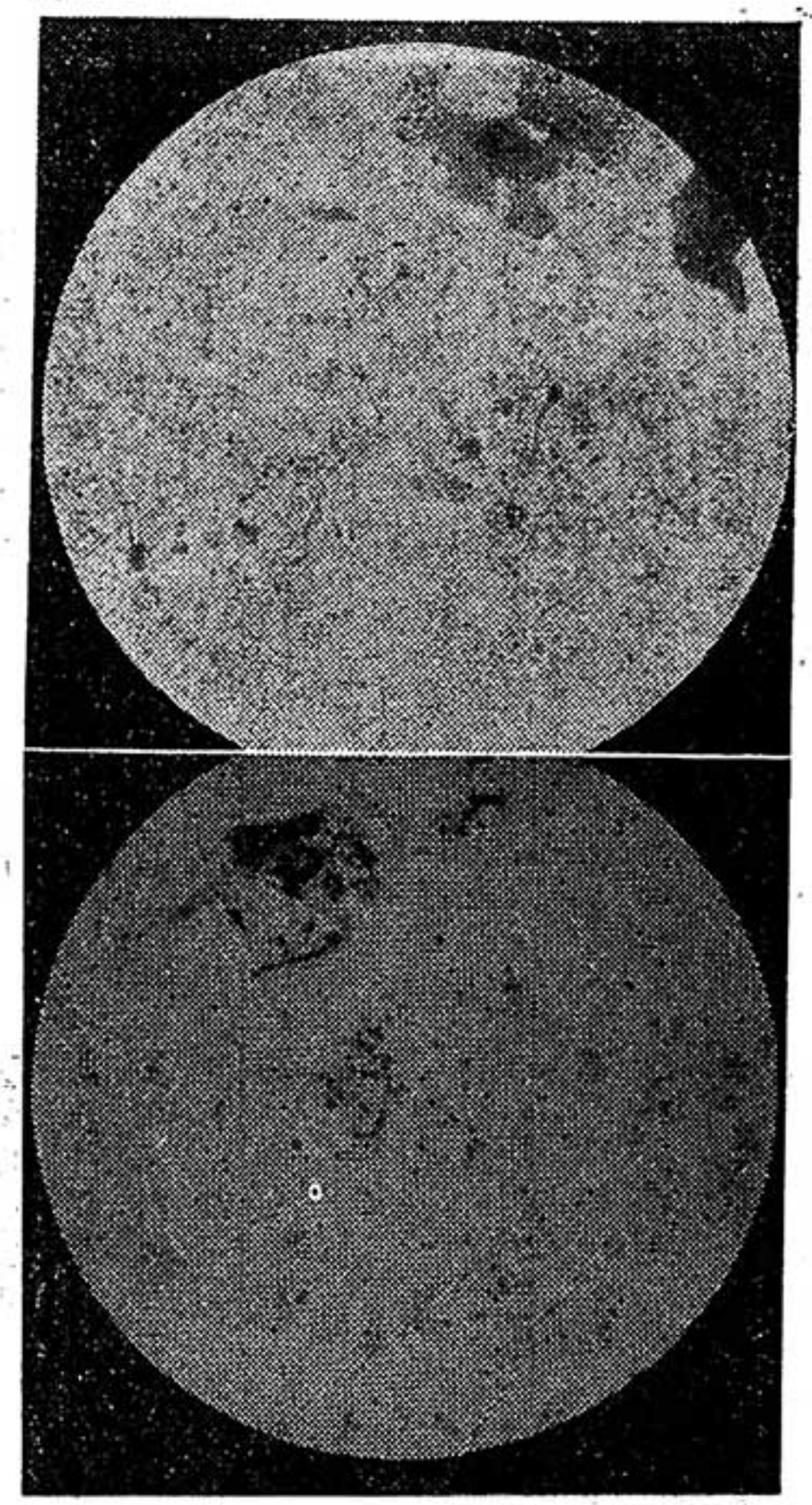
私『科学者の眼は、そんなに応揚にしては関係は？　そして血液型の関係は？……と次から次へと考え巡らしてゆかなければなりません。』

木下『個人識別の問題ですね』

私『仰せの通りです。先ず血液型によつて容疑者の範囲を縮小できます。桐子はB型夫もB型、桐子の　汚点はAB型



⑧ 犯人のズボンに附着の汚斑



菌淋⑩と（上）虫精した出検⑨

のような反応を示し容疑者として一応取調べた宍戸はO型であり、淋疾の病歴は全くなく、先きに追求されるままに矛盾の告白をしていた彼は、犯罪に何等の関係のない事実が、客観的に証拠づけられたのです。

一般の容疑者が、事実を只ひたかくしにかくそうとする努力、言い換えれば、否定の主観は肯定の客観によつて常に克服されてゆくのに、それとは全く逆に、肯定の主観が否定の客観によつて克服された珍らしい例であり、彼の一筋の心理経過には興味あるものがあるのです。

恐らくは、彼の希いとして極刑に甘んじたい、とひそかに考えていたのではなかろうかと思うふしがあるのです。真犯人とは無関係に。』

私『そうしますと結論として桐子はマゾヒストにされた上、理由は別として、自ら自分の首を絞めて死んだ事になりますしその肉体は容疑者宍戸以外の彼女の最も厭悪していた真犯人（A型）によつて、

かてて加えて忌わしい淋菌（写真⑧犯人のズボンに附着の汚斑）までも感染された気の毒な女性の一生だつたということになりますね。』

木下『全くその通りなのです。』

＊

こうして私共二人の問答は終つたのだが、引きつづいて、木下検屍官が捜査官と協力調査の概要を知り得たので、ここに申添えておく。

有村の学校時代の幼な友達の一人、笹野井猛は、家業にいそしむ宍戸とは反対に、その頃から厭がる桐子を追い廻つたり、そのあげくは、加速度的に怠惰、酒呑み、女狂い、賭博、窃盗と悪癖がつのつていつた。

たまたま此の事件発覚の当日、三日前発生した牛の密殺事件の彼疑者としてそれより一足さきに警察に挙げられていた。

雨上りの月光の夜、桐子は来訪した宍戸を浜辺まで送つていつた。

彼と別れて後の彼女は、まるで放心状態で松林の石に腰をおろし、夫から、しばしば首を絞めつけられて、悦惚に似た空虚感を追求していた彼女は、矢にはに腰紐をとつて、自己と自己の首を一巻きして一結したまま帰らぬ人となつてしまつた。彼女は完全なマゾヒストになつていたのだ。

たまたま笹野井が杉山家の飼犬をあやして同家の牛の密殺に成功しての帰途、彼女の屍を発見した。それを裏付ける証拠として、現場に彼の足跡（写真⑥）が厳然と残されていた。この一瞬、彼は更に悪鬼と化した。

出漁のため一家を挙げての出さきから、直接警察へ引つぱられた宍戸は、釈放後、ある月の夜、単身鴨池を後に湾外に遠く去つていつたまま永遠に帰つては来なかつた。（完）

辺境怪奇地帯秘境の秘境

岡川周迪夫

白い塔

アフリカ大陸の西、俗に象牙海岸と称われる仏領アビジアン港から、奥地にぐつと延びた拓殖鉄道の終点ボボヂウラツツの町には、白色の塔が天に聳え立つている。

町ではナン・ロウ（白塔）と呼ぶ。その白粘土の塔身には（白人ヲ欺スナ白人ニ欺サレルナ）と云う、土着フーラ人の文字が黒瑪瑙で鏤ばめてある。奇妙な塔だと人は思うだろうが、これは此処の土地柄を知れば納得が行く。

つまりボボヂウラツツは、未開の宝庫アフリカのゲイト（西口）と云われるだけに、此処へくれば野獣宝石薬草金塊香料毛皮象牙から、学術資料や見世物にするミイラまで手に入る。だか

達が押しかけてくる。その中にはサーカスや動物園の猛獣買入人もいるし、珍石漁りの宝石蒐集家もいる。また毒草や菌類の標本購入にきた学者もいると云う風だ。

彼等は本来なら駱駝に乗り銃隊に守られて、暗黒の密林や灼熱の砂漠へ旅しなければならないのに、こゝのホテルへ泊っていれば、用が足りる。奥地の土民たちが、夜昼の別なく荷を肩にやってくるからだ。いや、生きたライオンや毒蛇は檻に入れて大勢で担いでくるし、毛皮は駱駝に積み、時にゴリラの剝製を背負ったりしてくるのである。

さて一八三七年の雨期開けのこと。

このボボヂウラッツの高級ホテル・リールに、フランスの香料商が泊っていた。一行五人。社長と呼ばれる精悍な大男が、美しい金髪のマダムと三人の部下を連れているのだ。

或日だ。

社長のデリベレがマダムや部下と、ホテルで暑気よけのブランデーを舐めていると、テラスの下から、例によって、土民が「旦那、香料要らんかね」と声をかけた。

商人達はホテルの窓に、それぞれの仕入れ品目を絵文字や土語で書いておくからだ。

「うンと珍種でないといらん」

社長は土語でうるさそうに云った。

「俺の品は旦那らが嗅いだ事もねえもんだ」

そう云ってテラスへ上ってきたのは黄色い巻布に汚れた腰衣をつけたピグミー族の若者である。彼は、肩から亜麻袋をおろした。

社長は窓に出た。

途端に微妙な芳香が鼻を衝いてきた。

「ユンベホア……」

社長は驚いた声で云った。マダムのミカヤ部下も出てきた。ピグミー人は亜麻袋の口をあけながら、

「違う、ユンベホアなんかと違う」

「なに？」

社長は首を突き出して、袋の中を見た。

『まあ、あんた、いい体をしてるのね』マダム・ミカは腰衣（ロキル）一枚の逞しいピグミー人に、すり寄っていった……媚薬に憑かれた白人と土人が織りなす愛慾の葛藤!!

――乳白色の樹皮である。

むツと、官能を掻き乱すような香りが噴きあけてくる。

「媚薬」

社長はフランス語で呟いた。三人の部下は眼を輝かした。ピグミー人は、秘密を隠すように袋の口を締めて、

「買わんかね？　グベダの皮だ。これを煮て汁を採る……酒のように醗酵する……それを旦那らの売りだす香水に一滴二滴いれるとなその香水を御婦人がつければ殿御が、殿御がつければ御婦人が惚れる、ぞっこん惚れる、逆を流して惚れる」

マダムと部下は、その言葉の面白さに笑いだした。だが社長は何か考える面持だ。

それは催淫剤として名高い茜草科のユンベホアではなかつたが、矢張り……別種の媚薬と睨んだからだ。素晴しい。聞いたこともない品種だけに掘出し物だ。そこで社長は慎重に切りだした。

「匂いは気に入つたが値段によつてだ」

「これ皆んなで五万フランでどうだ」

「ほう五万フラン」

社長は「安い」と胸のうちで叫んだが、首は反対に横に振つたのだ。

ピグミー人は、むつとした顔で、

「高くない、旦那。グベダの香木はまだ白人は誰も知らない、いやな、ピグミー族も俺達の一族しか持つていない木だ、それも決して他国へ持ちだしちやならねえ掟の木だ。だけど俺ア金がいるんで、伐り倒したんだ」

「なんで、金がいるんだね？」

「俺ア……」と口籠つたピグミー人は、なぜか顔を赤らめて、

「白人の女に惚れ　　たんだ。その女は五万フラン持つてくれば夫婦になるつて云う。だから、俺ア、一族の掟を破つて、このベグダの皮を剝ぐくと、部落をおン出てきたんだ。だから五万フランは一フランも負けられない、旦那」

「分つた」と社長は大きく頷いた。そして部下にフランス語で早口に云つた。

「君ら、一生に二度とない幸運が舞い込んだぞ、ぬかるな」

ピグミー人は、ぽかんと社長を見て、
「旦那、なに云っているんだね？」
「いや、君と取引してもいゝかと相談したのさ。まあ室へ入り給え。大金を渡すんだから室を閉めて」
「すまん、旦那」
若いピグミー人は、ぺこりと頭をさげた。

ゴリラの足枷

翌朝である。
若いピグミー人は、ホテルの三階にあるマダム・ミカの寝室に監禁されていた。その足首には、鉛の塊りが附いた鉄鎖が絡んでいる。ゴリラの足枷と呼ばれる、その昔アフリカ奴隷を船で積み出す時に用いた道具だ。
マダム・ミカは、紗の帳のあるベツトで、いま目の覚めたところらしい。物憂げな姿態だが、絹枕の横には消音装置のコルトが置いてある。
こうなつた経緯は、昨日だ。
ピグミー人が社長のデリベレに言われるまゝに、階下のテラスから室に入ると、テーブルに五万フランの代金が積まれた。ピグミー人は、いプランデーで歓待された。その上、
ゝ気持に酔払つたまではいゝが、牀にのびて寝てしまつた。
気がつくと夜で、この三階の室に運ばれているし、足には鉄の枷が絡んでいるではないか。そして、社長と三人の部下が意味ありげに取囲んでいるのだ。
「俺をどうするんだ？」
「相談があるのさ」と応じた社長の手には、ピストルが光つている。
「解つた、俺のグベダの木の場所は言う」
そこで部下の一人が羊皮紙と羽根ペンを持つてきて、ピグミー人の言葉で地図をつくりだした。
「俺アこは駱駝の脚で三日三晩も掛る奥地だつな？」
そこなケチな真似はしない。もつと巨きいことだ。と云うのは、君に、その木の在り場所を教えて貰いたいのだ、つまり駱駝一頭分ばかり欲しいんでな」
「うわ、ピグミー族の宝を盗るのか？厭だと言つたら、どうする」
「仕方がない、君の担いできた亜麻袋の中味を只で貰つて、その中へは君が入るんだ、夜中には狼の出る砂漠へ置いてくる」
「諾と言つたら」
「別に五万フランやる、合せて十万フラン

▲ここは駱駝の脚で三日三晩も掛る奥地だつまり往復六昼夜の旅なのだ。
社長と三人の部下は、ピグミー人の監視をマダムのミカに委せて、駱駝を雇うと、闇を衝いて奥地に向つていつたのだ。

ところでマダム・ミカが三面鏡の前で朝の化粧を始めたときだ。

足枷で動きがとれないまゝに、半裸の身体を牀になげだしたピグミー人が、

「マダム、煙草を一本恵んで下さいよ」と声をかけた。

「はいよ」

ミカは気軽に立上り、フランス煙草と灰皿を捧つて行くと、マツチを摺つてやつた。

「旨い」

ピグミー人はジュツと音をさせて吸つた。が、暫時して彼の眼は鏡の前のミカの豊かな腰に吸いついた。何を思つたか、腰衣の隠しから、小さな壜を取出すと、

「マダム、この香水をつけてみんかね」

「え?」

ミカは振りむいた。

「これはピグミー族じや花の涙つて香水だ、俺ア恋人にやる心算で持つてきたが、マダムが親切にして下さるんで少し分けてやりてえよ」とピグミー人が小壜の栓を抜くと、甘美極りない香りが、ぷーンと漂つた。

「ま……いい匂い」

さすがにミカは女だ。立上ると、ピグミー人の手から小壜を取つてきて、鏡に姿を映しながら髪や耳の裏になすりつけた。——と見る見るミカの瞳は妖しく潤み、頬は上気しだした。そして唇が酔つたように、

「ああ、妾……」と胸を掻き抱いた。

「どうしました、マダム」

「いえ、なんか切ない程いい気持なの」

と言つたミカは憑かれたように椅子から離れてピグミー人の方に寄つた。

ピグミー人は腰衣一つの逞しい身体で、瞳に凭れている。じいーつと、寄つてきたマダム・ミカを見た。

「まあ、あんた、いい身体してるのね?」

「ふふふ、白人の女は俺をアラビヤ馬のようだと言いなさる」

「アラビヤ馬……そう、ほんとにそうだわ」

とミカの唇はうわ言のように呟き、裾を乱して、ピグミー人に近々とすり寄つた。するとピグミー人は呪文めいた声で、

「マダムは、綺麗だ」

「ねえ……旦那が商売に夢中で妾にかまつてくれないせいか、妾、時々、身体が燃えてしようがなくなるの」

「ふふ、その旦那は今度、六日も留守だ」

「だから、あんた……」と熱つぽい声で言つたミカは、若いピグミー人の漆黒の肌に倒れかかつた。

殺人蔓

社長のデリベレと三人の部下が乗る駱駝は二日目の朝、荒涼たる砂地を進んでいた。処々に侏儒みたいなサボテンが群れている丈で鳥影も見えない。

一行は、先刻から駱駝が妙な鳴き声をあげだしたのに、不安な気がしていた。

やがて砂地から叢林を過ぎた時だ。

一行は思わず驚声をあげてしまつた。行手は見渡す限り、血の色をした苔地帯なのだ。駱駝の脚も辣んだように動かない。

「社長、凄まじい苔ですね」

部下の一人が言つた。

「なあに変つた風景で面白いじやないか」と剛腹に言つた社長は、駱駝に鞭をくれた。

だが、愈々、その鮮紅の苔地帯に掛ると、一行の身体がムズムズしてきたのだ、いや耳の中や鼻の穴までで、ムズ痒い。

さすがの社長も「こりや変だ」と叫んだ。が、その原因は、すぐ解つた。

それは駱駝の脚が苔を踏むと、ユラユラと赤い濠気が立昇り、それが皮膚に触れたり、鼻口に入るとムズ痒くなるし、時には笑いた

くなるのだ、駱駝すら身を揉んだりする。

そのうち部下が、わハハハと笑いだした。いや杜長も、わハハハと笑つた。遂には一行四人、駱駝の上で、とめどもなく笑い続けるではないか。

だが社長は笑いながらも（狂うかもしれん）と気附いたから、部下を叱咤するように、「進路をかえるんだ、急げ」と叫んで、右手に見えてきた樹林帯を目指して、駱駝を走らした。

ところが樹林帯に飛びこんだ途端に、またぎよつとなつた。

見たこともない人面の形をした花が丈なす茎の上で揺れているのだ。互に人語を私語くような音をたてては揺れている。中には、キキと奇声を発する花もある。

「こらいかん、突つきるんだツ」

社長が恐怖の声で叫び、駱駝に必死の鞭をくれた時、前面の巨木から垂れ下つた蔓に、ヘルメツトを絡まれた。いやヘルメツトばかりか、くるくるつと肩から胸、胴と、まるで蔓は生物のように巻きついてきた。

「わツわツ」

社長は悲鳴をあげた。駱駝は驚いて走つた。すると社長の身体は蔓に絡まれたまま、宙に残つた。

部下達は仰天した。誰かが「殺人蔓だ」と叫んだ。彼らは、社長を救うことも忘れて狂気のように駱駝を鞭打つた。

だが蔓は行手のいたる処に、ゆらゆらと揺れ、垂れ下つているではないか。

「げツげツ」

とうとう先頭の部下が巻きつかれた。いやそれより早く殿りの部下は、くるくると巻かれて、声もなく樹の茂みへ引き込まれてゆく。

独り残された部下は駱駝の背に伏した。方角もかまわず、ただ走らした。遂に、蔓はその走る駱駝にまで絡んだ。駱駝は鳴きながら首に絡んだ蔓を放そうと、後退りする。ダダダ……と駱駝の力は蔓をひきちぎつた。——

そして逃げた。

「げツ」

部下は叢に投げだされた。

だが駱駝は乗手を捨てたまま背の瘤をゆすりながら逃げて行く。

部下は、ふらふらつと立上つた。

——と、その片手が、誰かに、ふわーと摑まれた気がした。

「うえ?」

と見ると、人面の形の花に触れた手が、その触れた途端にばつと縮んだ花辨に咥え込まれたのだ。

部下の顔から血の気が引いた。

これこそアフリカの奥地に咲く食虫植物の花と知つたからだ。

昆虫でも鳥類でも、その花にとまつた瞬間に、パクリと花辨を寄せて呑む。

底には、有毒の消化液が溜つて、呑んだものをドロドロに溶かして了うと云う。

「あツ」

部下は悲鳴をあげて手をぬくと夢我夢中で走りだした。

窓から覗く白塔

ボボデウラッツのホテル・リーの三階寝室では、マダム・ミカが病み呆けたように寝ていた。

「マダム」

懐しいフランス語で呼ばれて、ミカは、鈍い視線をむけた。

「ま、アルマン」

五日前、夫デリベレとピグミー人の香木を取りにいつた、三人の部下の一人アルマンが右手に繃帯を巻いた姿で茫然と突つ立つている。

「マダム、兇いお知らせです」

「え? デリベレは?」

「社長は亡くなられました。いえ、ケルンも殺人蔓に巻かれて。あのピグミー人に騙されたのです。奴はわれわれを獣スタンも……殺人蔓に巻かれたのです。奴はわれわれを獣も近づかない魔境へ誘い込んでしまつたのです」

くうツ。ミカの唇から嗚咽が洩れた。

そのベツトの下にはゴリラの足枷が謎のように置いてある。——

ピグミー人の姿はない。

※

——事の次第は、あの朝だ。

ミカは、ピグミー人の香水を嗅いだばつかりに官能が淫らに燃えて、身もよもなく彼の足枷の錠を外してやるとベツドへひきずりこんだ。

若いピグミー人の愛撫は、獣類の強烈さで、ミカを恍惚境から放心状態にまでさせてしまつた。いや最後には昏睡に陥つてしまつた。

幾時間かして気がつくと、ピグミー人は消えていた。

しかし亜麻袋は置いてあり、中味もちやんとあつたが、代金五万フランはマダムの手鞄の中から抜いてあつた。

ミカは部下のアルマンに言つた。

「不幸は重なるものね、妾が寝ている間にピグミーの土人は逃げたし」

「逃げた?」

「あんた、手をどうしたの?」

「食虫植物に喰べられたのです。毒液で、まるで火傷したように爛れました」

白人の女と男は絶望的な眼を見交した。

窓からナン・ロウ（白塔）が意味ありげに見おろしている。

〔白人ヲ欺スナ白人ニ敗サレルナ〕の文字が陽にきらめいて見える。

（完）

……ギャング・スター列傳……

ジョージ・ラフト

ジェームス・キャグニイ

スクリーンの顔役たち

高橋 晋

§ピストルの音と共に§

思えば、「暗黒街の顔役」"Scavface"こそギャング映画の金字塔を作つた傑作だつた。

「この作品はトーキーという武器を得て、はじめて成功した――」

とハワード・ホークス監督がいつている。

ピストルの轟音、相撃つ肉弾、どれもこれも音響なくしては完成出来ない強烈な世界だ。

トーキーの勃興と共に、ミュジカル物、探偵物などと共に大流行したのがこの非人情な世界を描くギャング映画だつた。

――第一次大戦以来の失業時代、経済恐慌、そうした時代に起る悪質の犯罪などなどが反映し、観客も又、なにか強い刺戟を求めていたのであろう。

特にニューヨーク、シカゴあたりの大都会ではギャングの跳梁は一段と激しく、一九二〇年から三〇年にかけて、全世界にその名を轟かせた、アル・カポネやデリンジャーは犯罪者の王様として暴威を振つた。

だから、ギャング映画の生れる下地はちやんと出来ていたという訳だ。

生活に疲れた人々に刺戟をと各社は競つて

ポリーヌ・カローフ　ベイジル・ラスボーン

ギャング映画を製作した。この種の映画は嬰々ギャングスターの悪を魅力的に描き、所謂悪の讃美歌となつたが。

トーキーという、音を相棒に持つや俄然ギャング映画は独走しはじめた。

「ポール・ムニの出現!!」

が、これに最大の拍車をかけた。

それまで、ムニはほんの端役でスクリーンをまごまごしていた。「役者になるより、大工になれ!!」

なんて云われた、ところがギャング映画がトーキーと同時に華やかに開幕されるや。——

「血を見て笑う男——」

そんな俳優が必要になつてきた。それまでのスターは、所謂色二枚目で女を口説で殺せる芸当は出来ても、ピストルで人を殺す男は演れる道理がない。

「おまけにギャングは空想じやない、現実に生きリウツドもそのギーには、ハタと行き詰つた。

ハワードホークス監督が、「見ていてスクリーンから血が吹き飛ぶような写真……」

を作りたいと、方々、スターを探し廻つたが得られない。そんな時に「役者をやるより大工をやれ!!」と、云われていたポール・ムニを思い出した。

ムニの個性はたくみに活かされて、ギャング映画の金字塔「暗黒街の顔役」が完成したのだつた。

冷血な殺人鬼、その殺人の手法はギャング団が現実に駆使した手法が採られ、

「世間に殺人の方法を教える——」

と、いうので、公開の際には相当な鋏除を受けた。

「民衆の敵」「犯罪王リコ」「夜の大統領」「無冠の帝王」「地獄の一丁目」「街の野獣」

プライアン・ドンレヴイ

「ビツグ・ハウス」暗黒街映画はそれを演じるスターの魅力と直結してギャング・スター全盛期を作りあげた。

§ギャング・スターは一朝に成らず§

この「暗黒街の顔役」からは名スター、ポール・ムニを生むと同様に、共演した俳優の中から、個性の強烈なギャング・スターを多量生産したのだから面白い。

ジョージ・ラフト。**ボリース・カーロフ**、**ベイジル・ラスボーン**、**ニツク・クラバツト**、この四人は、現在でも活躍しているが、なかでもニツク・クラバツトは現役のパリパリで、ギャングスターとしては欠くことの出来ない存在となつている。

グレイス・ケリイ

ベイジル・ラスボーンは一見したところで温和しい温顔だが、一度ピストルを握るや血に笑う男に変化する。変質者が得意で、そのためファンが極く小数の同好者しか付かないと云われている。

ポール・ムニの出現に刺激されて、それまではとつても主役を演れる可能性の少かつた。**ジエムス・キヤグニー**、**エドワード・G・ロビンスン**などが一躍スターとしてのしあがつた。

「ギヤング・スターは、素人から急になれるもんじやない――」

と、今でも云われるように、美男子が一躍スクリーンの英雄に出世するのとは大部話が違う。

キヤグニーなぞは、イリノイ州の**オツト・レジイニア**という、ギヤング団に身を寄せて、命がけで彼等の生活を見学している――

「実弾を二百や三百、撃つてみなくちや、とつても、ギヤングなんてやれるもんじやないよ――」

と、キヤグニーが云つているのを聞いてもギヤング・スターは一朝一夕には生み出せるものではない。

戦後は三枚目に転向してしまつた、**シーザー・ロメロ**も、嘗つてはキヤグニーの相手役として、血なまぐさいスクリーンの良き相棒だつた。

ロメロの十八番は、常にキヤグニーのピストルに依つて、最後に死んで行く割役りで、ロメロはどうしたら、空砲に当つたのでなく、実弾に倒れるか――その研究では定評があり、

シーザー・ロメロ

「流石に!!」

と、手に汗を握らせる名演技、死ぬだけが上手いなんて云われるんじやネーとロメロ転向の心境かも知れない。

「ロメロが本当に死ぬ時は絶対に見逃がさないぜ――」

と、キヤグニーが云つたという笑い話も伝わつているくらい。

年期の入つた異色のギヤング・スタ

「死体になつて、息をしていたんじや惑じが出ませんよ――」

そこで、彼はプールの中で、もつぱら窒息の術を習得したというのだから、三枚目に転向してしまつたのは、どんな理由か解らないが惜しい話である。

最近、「白熱」でキヤグニーと一緒にめづらしくロメロが倒れて死んで行くという、十八番を見せたが、流石に上手いものである。

ピストルの発砲、もんどり打つて倒れるロメロ、断末魔、やがて全身から生命が消えていく一瞬。

粘液質で、大人か子供か解らない、人の良さそうなパソナリーテイにもかかわらず、冷酷無惨な殺人をやる、ギヤング・スターの性格スターがいる。

ローレも最初からギヤングを志願した訳じやない、立派な性格俳優たらんとし

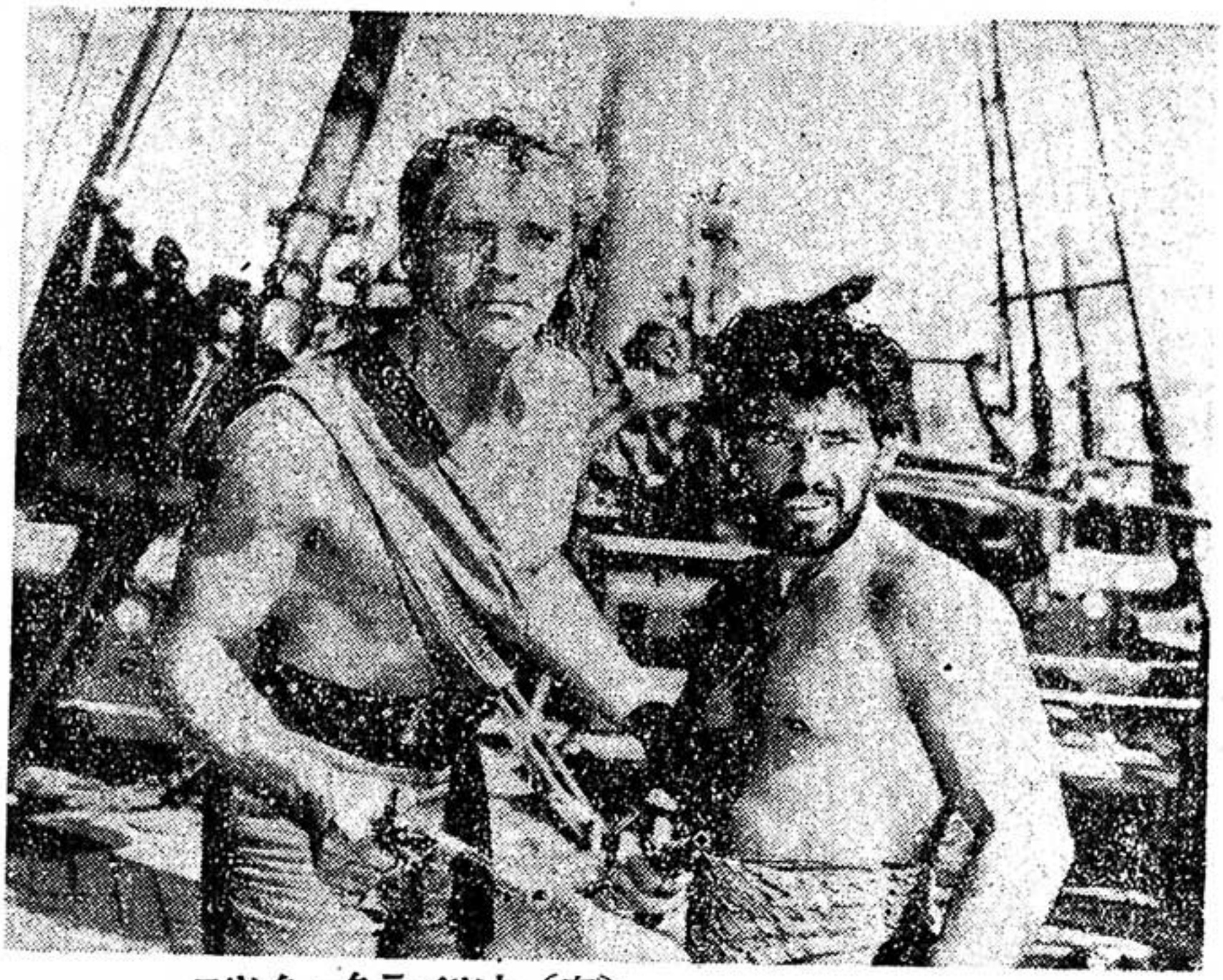
シドニー・グリーンストリート(左)とピーター・ローレ

「底の知れない薄す笑い」

が高く買われたらしい。ジョン・ヒユーストンの「悪魔をやつつけろ!!」では、**ハンフリー・ボガート**を喰つている。

ロローレ以上に年期の入いつた老ギヤング(最近では)にうつてつけというのが、**シドニー・グリーンストリート**である。

頑丈な体駆と、ピストルさばきの鮮かさ。



ニツク・クラバツト（左）

押し出しのよさ――「ピストルを射たないギャングを演りたい」と云っているが、当分はピストルさばきは廃業出来そうもない。

「名前はよく知らないが、実によくお目にかかる――」

と、誰れでもが云うブライアン・ドンレヴイ――彼のギャング経歴は相当なもので、西部劇でも悪役をやらせれば比較なき強悪を演じる。

「彼の持味は純都会的」

なのだから「暴力帝国」の弁護士を開業しながらギャングをあやつるといつた貫録をそなえ、

「僕は一生、ピストル片手にスクリーンのニクマレ者をやり通すつもり……」

と、自覚している。ドンレヴイの後援会が各地に存在して、彼の手からピストルを失わせるなと熱烈に応援しているのだから、彼のギャング的人気は、なかなかあなどりがたいものがある。

§嫌われるの が財産§

ハンフリイ・ボガート

「シェーン」でアラン・ラッドが猛然と人気スターとなり、賞を頂戴した席上、彼は……「僕は、実に運がいい男です、それというのが、僕はただ立っているのに、グレイス・ケリイ君とジヤツク・パランス君が、僕を引き立ててくれた……」

と、スピーチで語っている。その通りで、アラン・ラツドがいくら張り切つても、ケリイとパランスの御両人が、全身から発散する強烈な醜悪感をみなぎらせていなかつたら、「シェーン」は成功しなかつたろうと云われるのだから大した物である。

ケリイは、映画歴古く「ザボイ・三人組」と呼ばれる、ギャング・スターのコンビで売

ザカリイ・スコット

ローレンス・ニイアニイ　マイケル・ストロング(右)とジョン・ペイン

り出したスター。

その三人組の中には、**スティーヴン・マクナリー**、**ジエームズ・ミリキヤン**、と役者が揃っている。

「この三人を揃えて、ギヤング映画を作つたら絶対にヒツトする――」

と云われる程の強悪ぶりで、それだけに彼等は引つぱりダコ、「にくまれつ子、世にはばかる」類かも知れない。

ゲイリー・クーパーの「ハイ・ヌーン」ではめづらしくこの三人が顔を合せて、この映画に光彩を加えている。

「素顔はなかなかの色男――」だが、彼等はその素顔をいかに隠すかで苦心しているというのだから、面魂もなかなか蔭の努力がいるというもの。

二挺拳銃というのは西部劇の十八番かと思つていたら、ハンサムなギヤング・スター、**ローレンス・ニイアニイ**がこれをもつぱら売物にしている。

ローレンスの場合は女にモテるギヤングなのだから、なかなか、当人には都合のいいように出来ている。

戦後の尤も強悪フェースとして「突然の恐怖」一本で押しも押されもしない、ギヤング・スターになつてしまつた、**ジヤツク・パランス**――彼は、前後左右、あらゆる角度から眺めても、好感という物がまつたく感じられない「スネーク・モーン」と云われる程の蛇の化身みたいなものである。

その彼がもつぱら悪党をやるのだから、去年の「全米女性映画研究会」から、その嫌悪

ジェームズ・ミリキヤン

さに対して「ゾーとする賞」が贈られて話題を撒いた。

彼は元来、舞台俳優で相当なインテリーなのだが、そのフェースが高く買われ、マリリン・モンロウ同様に、早期出世スターの男性版。

「シェン」の彼の悪党ぶりは近来マレに見る極め付きで、日本の映画界にも一人ぐらい居て貰いたい顔である。

ジャック・パランスと同様にフェースの悪党ぶりでなかなか派手なのが**ザカリイ・スコット**で、彼もパランス同様に妖気をただよわせる方のギャングスターで、長身、よく効果を出す眼、手と足のさばき方——西部劇で専門に悪役を演じていたが、「ジョン・ウェインの紹介で、ギャングに転向した」

のが、彼の運の開けるキッカケ、忽ちギャング・スターの上位に納まつてしまつた。

「探偵物語」で異常犯罪者に扮して、讃嘆された、**マイケル・ストロングとジヨセフ・ワイズマン**も当代きつての、ギャングスター、ワイズマンは新劇の俳優で、「今でも映画はアルバイトです」と申して、ハリウツド入りをしていないが、その特異な体質から受ける異常な空気はワイズマン独得で、

「大学時代に生きるのが厭になつて、自殺を何回もやりそこなつた為ですよ……」

と、述懐しているが、**インテリー**ファンが実に多い。

マイケル・ストロングの方は、白痴的感覚で次々に殺人を犯すといつた風貌——「アリバイなき男」のストロングなぞは、好演技でくるんじやないかと、本当に弾が飛んでくるんじやないかと、顔を眺めちやう」なんてジヨン・ペインが笑う程、真に迫つている。

飛行機事故で急逝して、その死を惜まれて

スティーヴ・コクラン

いる、**ジョン・ガーフィルド**も、生活の暗い影を背負つたギャングスターのNO・1で、「その男を逃がすな!!」「郵便配達は二度べルを鳴らす」の好演は今でも語り草。

ジョンの平常は実に、紳士であつて「僕は殺伐な映画は嫌いだ」と日頃云つていたと言われている。

筋肉質な体軀、疲労した瞳、これが彼の持ち味で、追われる恐怖は流石に彼の至芸だつた。

ジョンが善良な為に不幸に陥ち入るギャングを好演したのに比べ、性悪の為に世の中からつまみ出されて、益々悪党になつていつたという、根つからのタフ・ガイなギャングを演じたら類のないのが。

ステイブ・コクランである。彼の物に憑かれたような悪党ぶりは、「非常線」の中でも群を抜いている。

コクランのギャング振りは徹底的に派手なギャングで、乱射乱撃を得意としている。

「アスファルト・ジャングル」で、うらぶれたギャングを好演して評判になつた**スターリング・ヘイドン**も、

「生活からアプレた、現代人」として、好評である。追いつめられたヘイドンの眼の中に平和を念願する静かさが流れるといつた、ギャングの哀愁で、パツとしないが悪の苦しさを滲み出すギャング・スターでは、その名声がなかなか高い。

スティーヴン・マクナリー

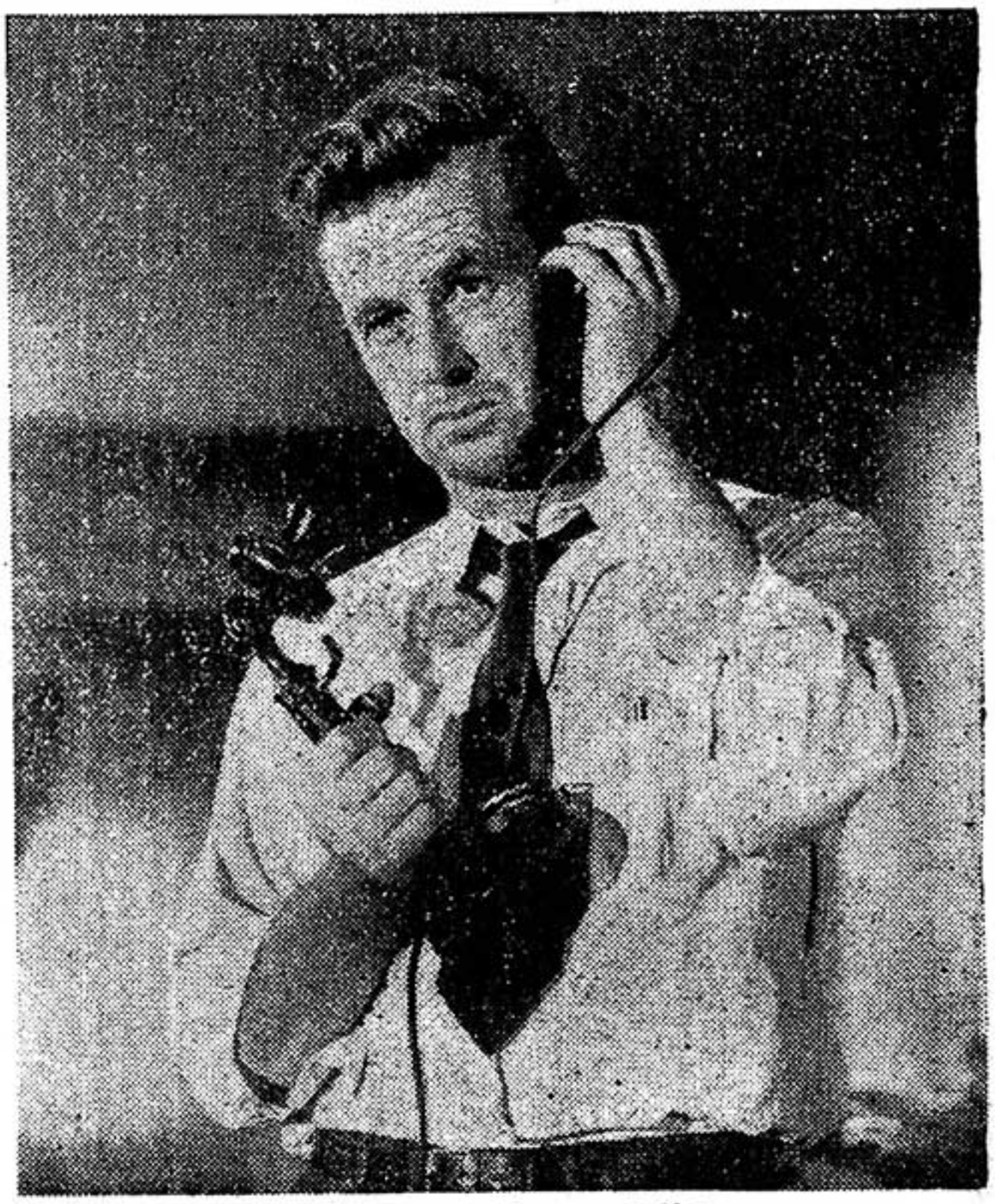
戦後イタリア映画に登場した、**ヴイツトリオ・ガスマン**も色悪からギャング・スターとなり、今やアメリカ映画に登場して、なかなかの人気者。

「にがい米」「アンナ」等でガスマンの悪党ぶりは板についている。

女蕩し型のギャングで、その二枚目ぶりと、演じる行為の卑劣さが彼の持味——。

「私生活もなかなか色好み」

と、云われるだけあつて、シエリーウイン



スターリング・ヘイドン

タースと結婚したが、忽ち秋風が立つているというから、ギャングスターは善良な男が多いと云われる中での戦後派の代表。

◇喧嘩道具A・B・C◇

人間は、人間同士の喧嘩にも色々な道具を使う。さしずめ、太古時代では、手頃な石や棒切れを使つたろうが、鉄を利用することを知つてから、喧嘩道具は一段と進歩した。

その種類も実に多くなり、ナイフ短刀の類刀剣、槍、薙刀の類、洋の東西を問わず、相手を殺傷する目的の道具が、時によつて兇器に早代りする物も多い。鎌とか鉞、鉄やヘヤピンだつて恐妻家には脅威的武器になる。

このほか、平素は、平和的道具が、時にアメリカインデアンが、丁々発止と渡りあう斧は、いわゆるトマホークと呼ばれる物だが、もと〳〵平和的な用具である。彼らは、男と男の一騎打ともなると、なたといピストルを持つていても、このトマホークだけで戦い、負けた奴は頭の皮を剝がれてしまう。

日本の刀、西洋のサーベルも喧嘩道具の花形だが、西洋でも、あのヘナ〳〵と撓う形状

「ガスマンがハリウツドに永住したら、どんな事になる解からないし――」

と、カーク・ダグラスを嘆息させたと云う、「ベツド・ギヤング」のニツク・ネームも嘘ではなさそうである。

になる前は、だいたい日本の山刀に似たような厚味のある剣であつた。しかし、騎士道はなやかなりし頃の決斗では、たいてい、あの中に呑まれるとドスという名になる。

外国には色々な短刀がある。

トルコ原産のダガーアラ、ビアのシルター（三ケ月状になつているやつ）などは代表的である。

次はピストルだが、これが現代通用の喧嘩道具のナンバーワンかも知れない。日本の巡査など、太古式な棒切れと、近代的なピストルを持つているから、手が長かつたから、相手の剣がとどいたのが真相らしい。

しかし、何といつても、そのほか古くは鞍馬天狗が持つている短銃は短刀であり、Bクラスはピストルであろう。から、手の中に入るくらい小さいブローニングまでである。

短刀こそ実に種類が多い。その小型なものはナイフである。

恰好は悪いが銃身の長いものほど命中率はいい。

昔は、小学生が肥後守を持つて渡りあつた話があつたが、このごろのチンピラ学生は、現代支那語では短槍と書く。槍ではなくてピストルのことだ。

ボタンを押すとぴ1んと刀が飛びだすナイフくらい使うにちがいない。鹿の角が付いたジアメリカのギヤングで御馴染のトムソンガヤツクナイフは時代遅れになつた。ン、一名トミイは小型機関銃である。そのうち原子ピストルくらい出来るかも知れない。

「オナゴとあなどると容赦いたしませぬぞイ」

★血まみれハツタリ譚★

ボクシング八百長秘話

神沼三田清　崎勳画

血まみれ（ブラディ）**の愛撫**（ペッティング）

血を売る商売がある。するとこれも一種の血を売る商売か。……眼から、鼻から、口から、おびたゞしい血がふき出し、それが身体中にベタベタくつついて、文字通り血だるまになる。それでもなお、

二人は激しく闘う。観衆はまつたくこの血まみれの熱闘に、妖しい興奮を味わい、残酷な快感を経験する。血に狂つているのは二人のボクサーではなく、むしろ観衆のほうなのだ。ことに女は、血をみて狂喜する、陶酔する。

ところが、なんのことはない、この二人のボクサーは勝負を決することよりも、いかにして血まみれになるかに苦心しているのである。血を出さなければ商売にならないのだ。いゝかえれば、お客は、血を流しながら殴りあう人間の凄惨なさまを見にくるのである。血に対して、なにがしの入場料を払うのだと云つてもいゝ。

このようなボクシングのことを、俗に「血まみれの愛撫（ブラディ・ベッティング）」というが安酒場や、逢引用の十仙映画館などがゴタゴタ並んでいる娯楽（レジャー）横町には、きまつてこのイカサマ拳闘をみせる小屋がある。まさにイカサマなのだ。考えてもみるがいゝ。どんなに荒つぽい奴だつて、毎晩毎晩、眼瞼を切り、鼻つ柱をつぶし、口の中をズタズタにしてた日にや、血がいくらあつても足りることじやない。そこで、この種のボクサー達は、鼻の片一方の穴にニワトリの心臓をそつとつめこんでおいたり、口の中に豚の血袋をふくませておいたんたんするのである。

そしてこの種の見世物ボクサーは、もうボクサーのくずとしてしか扱われない。まともな力の世界から転落して、たのしみの少ない小市民や女子供相手のしがない「血まみれ愛撫」稼ぎでは、大道芸人と同じ扱いをうけても仕方がないのである。

事実、こんなボクサーの収入は、一試合五ドルにもならない。五ドルでは、永久にその日暮し

だ。そうして彼等は、安酒に酔い痴れ、アル中の仲間入りをして、ついに敗残の人生の幕をとぢる。

以上はアメリカの話だが、日本にもよく似た話があることを忘れてはならない。しかもアメリカの場合は、これが哀れなボクサーの末路であるのに、日本では前途有為な青年が、この種のボクシングで身も心もダメにすることが多いのである。国が貧乏だからというのは理由にならない。未来の白井義男を夢みる青年ボクサーに、いきなり見世物的な荒稼ぎをさせる組織もいけないし、青年たち自身も考えがなさすぎる。

白井義男といえば、この輝かしいチヤンピオンも、且つては一試合三百円で稼いでいた。つまり「代用サンドバツグ」というたぐいのボクサーである。近頃では大学の拳闘部の連中が、駐留軍慰問と称して、アメリカ軍のキヤンプで試合を行うようだ。いくらアルバイトとはいえ、稼ぐために殴られて、頭の中をイリ卵子にしてはつまらない。こゝに、ついでながら注意しておく次第である。「パンチ・ドランク」といつて、頭がバカになることは御存知の筈だ。

秘密試合

これはいわゆる八百長ボクシングとはいえないかもしれない。試合そのものは正真正銘の死闘だからだ。たゞあくまで警察の目をくらますために、

喚声と怒號の中でリング上に死闘する血まみれの男たち！　だが彼等の背後には顔役の眼が光り、巨額の金がその鮮血と共に取引される……

により、ひそかに行われる賭博だし、これこそ世の人の知らないボクシング秘話だと思つて、こゝに紹介することにした。むろんアメリカの話である。

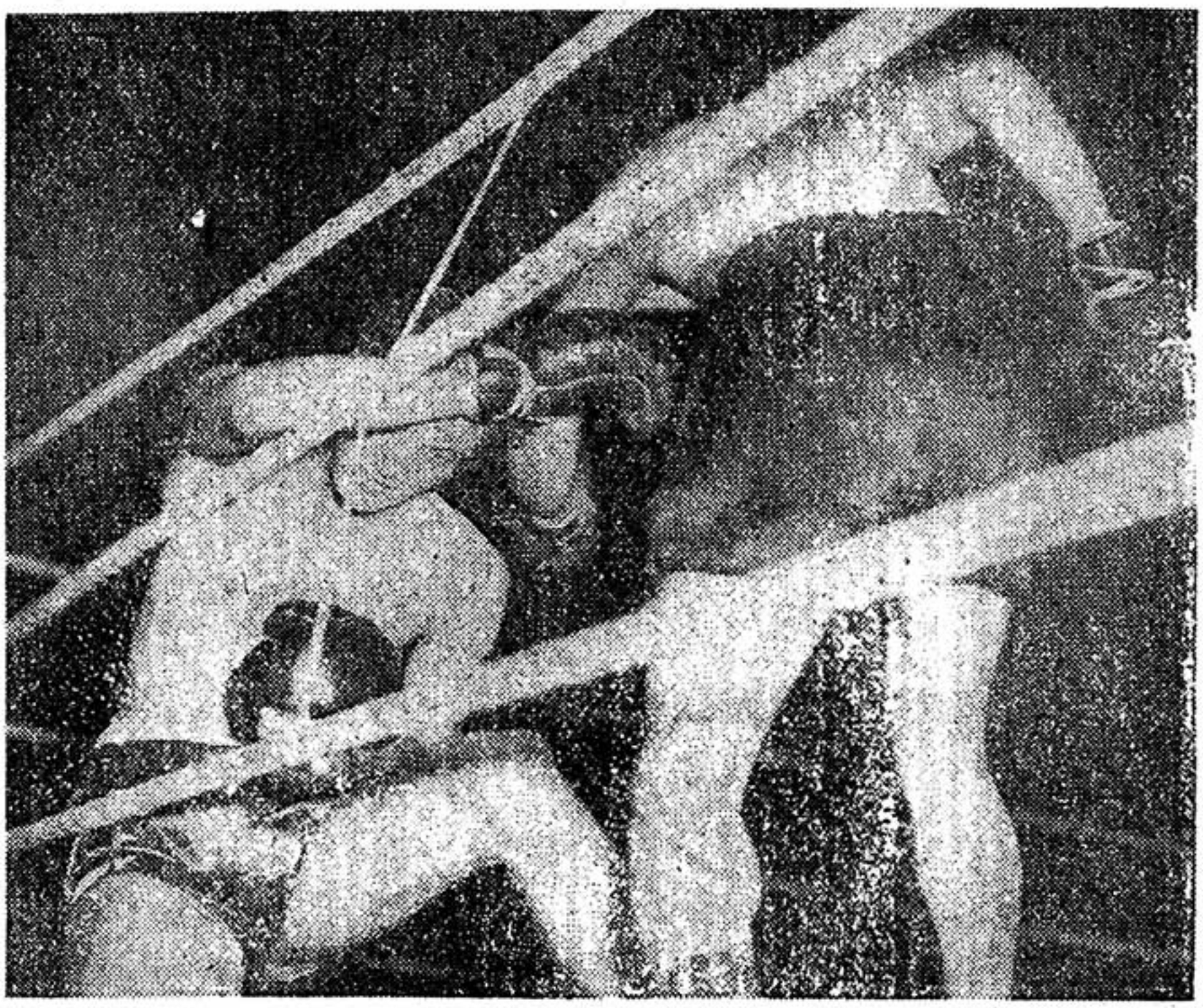
アメリカでも、ニューヨークとかシカゴなどのような大都会の、或る酒場の地下室とか倉庫とかで、この命知らずの怖ろしいボクシング試合は行われる。見物人は、特別会員の紳士淑女に限られ、会員券はふつう千ドル以上である。いわずとしれた暗黒街のボスがその勧進元なのだ。だからこの暗黒の世界でボクシングを職業としているものは、自分がボクサーであることを絶対の秘密にして、地下に潜つた生活をしている。こういう物凄い試合をやつていることが知れると、警察に引張られ、イモづる式に組織がバレるし、なによりも、ギャングのために一発で息の根をとめられるからだ。

さてニューヨークのブロードウェイに「青い星」という酒場があつた。この地下室で行われた有名な秘密試合のことを、参考までに書いてみよう。

その夜、時計が九時を示す頃、いままで酒をのんだり、ダンスをたのしんだりしていた紳士淑女が、いつとはなく、四人、六人と姿を消して行つた。地下室へ下りて行つたのである。地下室の入口には、顔中傷だらけの男がいて、五百ドル乃至千ドル紙幣と引換えに一枚の券を渡す。この券が、入場券と賭博券を兼ねていることは、いうまでもない。

厳重な入口を通つて、かなりな広さの一室に入ると、そこが試合場だ。といつても、べつに煉瓦土間に四本の丸太を立てて、それにロープがめぐらしてあるだけのリングである。尤もリングの周囲の客席は、ゼイタクなソファである。申し遅れたが、地下室の入口あたり、機関銃が据えてあつて、万一の場合にそなえてある。

試合は十時からであつた。それまでに前座のそえものとして、いわゆる卑猥なショウがある。試合は一試合きりなのだ。が、そのかわり、フイニッシュ・ファイトで、どちらかが完全にノビてしまうまで行われる。そして



ルールは、ロンドン・プライズ・リングの古い様式によつて、ベアナックル、すなわちグローブなしの素手で殴り合うのである。

十時になつた。巨大なボクサー二人が登場した。腰から足の先まで、長いタイツをはい

ている。すぐに打合いが始まつた。反則というものは一切ない。どんな手を用いてもいゝのである。薄暗い電光が、けだもののように輝き、血を流し死闘する二人のボクサーと、興奮を押し殺して試合をみつめる客たちを無気味に照している。こゝにあるのは異様な殺気だけである。人々の沈黙が、殺気に死の雰囲気を加える。観客はどんな場合にも、声をあげることを許されない。外部にもれてはならぬからだ。だが、ともすると人々は喚声をあげそうになる。すると正面に陣取つたギヤングの大親玉、すなわちこの試合の勧進元が、ジロリとした顔でみんなに合図する。その場はすぐシーンとなつて牛耳られているものであり、もしボスの命令に服さなかつたり、いわゆる裏切り者の烙印を押されると、かならず悲惨な最後をみなければならぬのである。昨年のはじめ頃、日本でも封切られたアメリカ映画「罠」をごらんになつた方は、八百長試合を強いられてそれに背いた一人の職業ボクサーが、遂にはレンガで両手を粉々に潰されてしまういきさつを、こゝに思い浮べられる筈である。

さきの「世界地図」レナードは暗殺された。彼は地下室のボクシング稼業がイヤになつたのだつた。彼はスポーツマンとして、明るい光栄にみちた地上のボクサーに憧れた。矢もたてもたまらなくなつて、レナードは、暗黒街から脱け出した。

彼はむろん変名していた。かくてオハイオ

水を打つたような沈黙の中で、拳の打合う音だけが、厚い壁や天井ににぶく、陰気に響く。戦つているボクサーの一人は、秘密ボクシング界の最強豪ジョン・マクダーモットであつた。対する一人は「世界地図（ワールドマップ）」の仇名をもつトーマス・レナードだ。仇名の由来は、彼の顔が多くの試合で切り裂けて、さながら世界地図のように傷だらけだつたからである。どちらも野牛に似ていた。

いつまでたつても勝負はつかない。二人とも、顔がザクロのように割れてしまつた。二人ともエネルギイの極限まで使い果していた。驚くべきことに、夜明けの四時頃まで、この死闘は続いたのである。そうして二人は遂に相重なつてぶつ倒れ、動かなくなつた。

後日譚

この秘密ボクシングの後日譚は、ぜひ書いておかなければならない。というのは、すべて八百長拳闘というものは、ちまたのボスによつて牛耳られているものであり、もしボスの命令に服さなかつたり、いわゆる裏切り者

州のクリーヴランドで、許可証を取り、ヘヴィウェイト級のふつうのボクサーとしてのスタートを切つたのである。ところが、命がけの試合をやつてきたレナードは、クインスペリイスタイル（現在行われているグローブをはめたルール）の選手を相手にするには余りにも強すぎた。出る試合〳〵、ことごとく、たちまち相手をノツクアウトする。人々はこの無名の強豪に舌を巻き、人気の上昇は勿論、やがてすぐチヤンピオンになるだろうと確信した。

が、彼の顔は「世界地図」の異名がある通り、昔のギヤング仲間は、彼がクリーヴランドで売り出していることをすぐかぎつけた。レナードの周囲に、たえずうろんな影がつきまとうようになつた。かくてレナードが、ふつつのボクサーになつて十五回目の試合の当日、その日も勝つて七百ドルの資金をふところに、宿舎に帰る途中である。突然、道路に散乱していたガラスの破片によつて、彼の自動車がパンクした。瞬間、さすがに彼は、

「奴等の復讐だ！」

と感じた。彼はいそいで、ポケツトのコルトをにぎりしめた。リングでは無敵の勇者レナードも、いまは哀れにふるえる。彼はパツと自動車から飛び出すと、大通りを突つ走つた。そして向うの明るいレストランに駈けこもうとした一歩手前で、

「ダ！　ダ！　ダ！」

と彼の背中は、蜂の巣にされたのである。悪魔の軌むようなタイヤの音が彼は倒れた。たゞ、彼が死にかけに洩らした暗やみの方に疾走し去るのを、彼は絶望的に耳にした。レナードは病院に運びこまれたが、むろん助かる命ではない。誰も彼の前身を知らなかつた。哀れなレナードは共同墓地に葬られた。

一つ目のコネリイ爺さん

尤も、暗黒街のボクサーから脱出して、ちやんとした一流選手になつたボクサーもいる。ジョー・ゴツス、トム・アーレン、ジミイ・エリオツトなどである。最も有名なのはウエルター級の世界選手権を獲得したマツテイ・マシューズだ。マシューズは、はじめ人足だつたのが、暗黒街のボクサーになりさらに脱出して出世したのである。ジヤツク・デムプシイは炭坑夫だつた。パトリング・シキは、悲惨な黒人の人夫だつた。

こういう立派な立志伝があるかと思うと、一方には八百長専門の、しがないボクサーで一生を終るか、せいぜい出世してやくざの用心棒になる手合いが多いのである。八百長百長といつても、最初に述べた「血まみれ愛撫」式の見世物のほかは、ナレアイ勝負しかとかく勝負事には、賭け事がつきものない。とが、むろん助かる命ではない。誰も彼の前身で、アメリカ人は競輪のかわりに賭け拳闘を持つていると思えばいゝ。当然本命の選手というのがあるわけだが、そいつに因果をふくめて負けさせるのである。儲けるのは勧進元のやくざにきまつている。

「お前は、今日の試合では負けるんだぞ」

といわれれば、選手は上手に負ければいゝのだ。命令に反したら、暗黒街の掟に従つて、再び世間に通用しない人間にされてしまう。なんといつたつて、力の世界だけに、強い者が強いにきまつているのだから、そこに番狂わせをさせるには八百長以外にはないわけだ。賭けるほうとしても、八百長を承知で、どの試合が八百長かに山をカケるのが、そのまゝ賭博の形になる。で、八百長秘話といえば、先の暗黒街物語のような悲惨な話が、どうしても主題になつてしまうのだ。

或る金庫破りの生涯

10万ドルの指

廣瀬雄

十万ドルの保険がついた魔術の指！　どんな精妙で厳丈な金庫も彼の手に掛つたらボール箱同然！　生涯を金庫破りに賭けた天才の秘話！

1

艦長室の白い扉に固くくつついている頑丈な錠前を点検していたときであつた。いきなり、警報が船内にまで鳴り響いてきた。出火を知らせる警報であつた。

「コートニイ。火事だ！　火がダイナマイト倉庫に点きそうだ。すぐに倉庫の鍵を開けてくれ」

いつも落着いている艤装長がリベット工のコートニイの手をぐつとひいて船渠をかけあがつていつた。

この事件がおきたのは、ちようど、アメリカが第一次大戦に参加した当初のことで、所はニューヨークのモーズ造船所。

この主人公コートニイは、この造船所に勤めていた一介のリベット工員であつた。彼は錠前について、鍵について、金庫の構造について——どの仲間にも及びもつかない豊かな知識と体験を持つていた。

そのころ、この造船所に、捕獲されたドイツのいかめしい軍艦がつぎつぎに入つてきた。ところが、この抑留軍艦のどの船室も丸や三角や菱形と、種々様々な錠がおりたままどうしても開かない。ドイツ人は、だれも彼も、船室に錠をおろし、その鍵は海中に放りこんでしまつたからである。

コートニイの才能は、こんな機会に頭角をあらわした。船室の鍵を彼独特の道具で、器用にこぢ開けていつた。

艤装員室の火事がおこつたその朝は、コートニイは、ちようど、クロンプリンツエンシン、セシリイ号の艦長室の錠前をあけている最中であつたのだ。

消防夫たちは、ホースの先を握り、必死になつて、めらめらする焔に水を浴びせた。コートニイは頭からズブ濡れだつた。ただ、われを忘れ、必死になつて、針金を操作するのだ。

一刻、一刻、硝煙の臭は濃くなつてくる。水で指先が滑つた。重大な倉庫であるだけに錠の構造は精巧をきわめていた。

艤装員たちは、ただ息をこらしてコートニイの指先をみまもつていた。まさに生命をかけた瞬間であつた。

「開いた！」と、たれかが叫んだ。

遅しと待ちかまえていた艤装員たちは、倉庫内におどりこんだ。そして爆発寸前、ダイナマイトを、やつと運びだすことが出来たのだつた。

2

いつたい、世にいわれる「金庫破り」とは悪玉のかたまりのような男にたいしていわれるのが普通である。だが、「世紀の金庫破り」といわれたニューヨークのチャールス・コートニイは、ちようど、大つびらで、明るい男であつた。彼の手並は、近代犯罪研究対象のひとつに数えられ、後にコートニイの指一本に十万ドルの保険がついた。邦貨に換算すれば三千万円の指なのだ。

一九二二年、終戦とともにコートニイは、ニューヨーク繁華街の一二五丁目に錠前店を開いた。

ある日、若い産婦のいる病院から、コートニイの店に至急電話が掛つてきた。ひとりの産婦がいまにも出産しようとしている。ところが、看護婦が扉を閉めたとたん、その扉がどうしても開かない。閉められた産室のなかで、産婦がヒステリツクに泣きわめいているというのだ。コートニイはすぐに病院に駆けつけた。もちろん病院の扉など開けるのは、ものの一分とは掛らなかつた。彼は楽々と産婦を救つたのである。

金庫破りも、天才化してくると、たんなる市井の錠前師の存在だけではなくなる。彼は警察官や消防夫のように、スピイデイに、処理することに唯一の興奮を持つた。また探偵のように、ふかい思慮をめぐらさないと、知らぬ間に悪者に利用されたりする。

ある夜、店を閉めかけていたときであつた。コートニイの店のまえに、瘤きたてた黒光りの高級車が音もなく止つた。若い、身なりのいい運転手がうやうやしく自動車の扉をあけると、白髪をたくわえ、黒づくめの服装に身をまとつた紳士が豪然と降りたつた。それにつづいて、中年の美貌な貴婦人が、夜会服に貂の毛皮という姿で降りてきた。

紳士は、コートニイの顔をみまわしてから口をゆがめて嗤かにいつた。

「わしらは、劇場からの帰りなのだがね。劇場で鍵をなくしてしまつたのだよ。これではじぶんの家に入ることができん。謝礼はお望みどおりだすから、すぐに御同道願えんかね？」

コートニイは、この紳士に同情したのである。

さつそく、仕度をして、老紳士にいわれるままに、高級車に乗りこんだ。

やがて、高級車はアパートに着いた。そのアパートは、ふかく寝静つていた。彼らは、紳士の室のまえまできた。すぐに開けてくれると、紳士夫婦はあらためて、コートニイに頼んだ。コートニイは、

「一応ここの管理人に、これがあなた方の部屋かどうかたしかめてまいりますよ。——まことに失礼ですが。」

と職業的にいつた。紳士は、口をゆがめた。

「深夜のことだし、もう管理人も眠つてしまつている。起すのも気の毒だ。正真正銘、これは、私の部屋だよ。」

夫婦がいやな顔を示して、コートニイを遮つた。それにも構わず、コートニイは、広間の受話機をとつて、管理人を呼びだした。

やつと、眠たげな管理人の声がした。

だが、すぐに、その声が活気づいて、

「何ですつて、その部屋の主人は、きのうフロリダに発つたばかりです。……それは怪しい！」

という返事である。

そうだつたかと、身構えて、コートニイは後をふりかえつた。だが、紳士も貴婦人も、そのときは煙のように消えていた。……

コートニイの天才的な金庫破りを利用しようとする悪らつな手口はこれだけではない。あまりにも、数が多かつた。——大晦日の夜であつた。閉店後、コートニイは、机のまえで、新たに案出した道具をいぢつていた。新しい錠開け鍵を作つたのである。コートニイは、独り、裸電燈の下で、悦に入つていた。

と、店の扉が開いた。ふたりの男が、ゆつくりと靴音をたてて入つてきた。ふたりともに灰色の中折れをまぶかに帽つていた。顔色は浅黒い。外套の襟をたて顎までかくしている。

「あんたが金庫破りの天才ときいて、わざわざ参上したのだがね。」

「……。」

「今夜、これからすぐの仕事なんだがね。」

兄貴格の背高の男が、低いバスで、コートニイに口を切つたのだ。この男は、店の入口に垂れている遮蔽幕のところに突立つて、出口をふさぎ、両手を突込み、ポケツトをふくらませていた。ポケツトのなかのピストルの銃口は、こちらに向けられている。

「六万ドルの仕事なんだぜ。……山分けといこうじやないか」

「明朝、きて下さいよ。」

「おい。しらばくれるな。」

こんどは低背の男が鋭い眼付でコートニイの胸に近づいた。

「ネデアケ道具を用意して、おれたちといつしよにいくのだ。金庫破りを手伝うのだ。でなければ、貴様の頭に風穴さ。」

コートニイは、眼のまえの男の突き刺すようなどんぐり眼を睨みつけながら、

「断る！」

と、怒鳴るが早いか、机上にあつた鋏状の鉄道具を相手の右肩に叩きつけた。

男は、不意を喰つて、ポケツトのなかで空弾を鳴らした。コートニイは傷いた背低の男に、後から、物すごいパンチを喰つて、床に倒れた。

このふたりの訪問客は、深夜のギヤングだつたのだ。

3

コートニイが開店して以来、彼の仕事といえば、ニューヨーク入港の船室の錠前あけであつた。それは、数限りがなかつた。

世界一の豪華船であるフランスのノルマンデイ号の船室の錠も、ほとんど、コートニイが造りなおした。船客は、だれも、じぶんの部屋の鍵を持つていつてしまうのが例だつたからである。

だが、コートニイの劃期的な錠前師としての仕事は、百万ドルの海底船引揚げ作業であつた。

これは、ケープ・ヘンリー沖で嵐のために沈没したマヂソン号から、金庫をそのまま引き揚げようという試みだつたのだ。この船を引き揚げるには、三ケ月を要する見込であつた。保険会社は、海底に沈めたまま、この船の金庫の中味を取りだそうとした。金庫のなかには、現金と債券で、百万ドルが眠つているのだ。船体の一部をダイナマイトで爆破させなければ、金庫引揚げはむりであつた。ダイナマイトを使うのもたいへんであつた。

そこで、この話が、コートニイのところへ持ちこまれた。

海底の金庫破り——このようなスリルに富んだ経験は、コートニイには、はじめてである。コートニイは、思い切つて、この仕事を引き受けた。マヂソン号百万ドル引揚げの華やかな話題が全世界に拡がるや、つぎつぎに沈没船引揚げ相談が、コートニイのところへ、持ちこまれてくるのである。どれも、コートニイは断つた。

その後、コートニイは、欧州で、兵器王として不可解な名を謳われていたベジル・ザハロフ王の仕事に招かれたことがある。

このとき、コートニイは、はるばる飛行機でドイツのプレストに向つた。一九三二年の春のことであつた。

海底の金庫というのは、フランス商船エヂプト号であつた。この船は、一九二二年にビスケイ湾で沈没したものである。五百万ドルの金銀の塊を積んでいた。当時、引揚業者が集り相談し、たびたび、引揚作業を行つてきたのだが、その都度、失敗していた代物であつた。

さて、コートニイが現地に着いてみると、四十余名の潜水夫が、この海底の金塊を眼ざして、生命がけて血眼になり、この作業に従事している。

潜水夫のなかに、深海作業用としてドイツのある会社が特別に造つた、新案潜水服をき、心にしかと誓つたのである。

ている者がいた。この姿がコートニイの眼に止つたのである。この新案潜水服は、二万ドルもする代物であつた。この服は三着しかなかつた。

コートニイの慾望はむくむくと、持ちあがりはじめた。あれほど心に誓つた潜水への断念であつたのに。この潜水服を着けて、海底の金庫破りをしたらどんなものだろうか。彼は、たちまち、この新たな興奮のとりこになつてしまつた。で、コートニイは、重大な極悪犯を犯すような気になつた。この新案潜水服を身に着けるや、海底に降りていつたのである。

コートニイは、潜水夫たちに、海底の金庫の構造をくわしく示し、条播機で孔をあけ、錠を解く秘密を教えてやつた。作業は一週間かかつた。やがて、甲板に、眼もあざむくばかり、宝石や、金貨、ルビー紙幣の束などが積まれた。ルビー紙幣は、乾かすために、甲板のうえに、貼り並べられた。潜水夫たちの願望は、いまや叶つたわけである。感激の涙を流すもの、神経錯乱のため、檣から身を投げるものなどが続出した。かと思うと、水夫同士、みたこともない眼前の宝物に興奮し、小刀をかざして、血斗しあう。それこそこの海底の宝物をまえにしての人間の修羅場が展べ拡げられた。

だが、これらの神経の荒れた殺伐な水夫連の黄金地獄の興奮の真只中にあつて、コートニイの求めていた海底の金庫破りの興奮は終つたのであつた。

4

冷静な正義派コートニイの興奮は、ほんのちよつとした瞬間、いやがうえにも発揮された。

コートニイの生涯のうちで、冷蔵庫の錠あけという場合が、しばしば、数えられる。

コートニイは、毛皮店で、曳喰い防止のために使つている電気冷蔵庫に閉ちこめられてしまつた店員を救いだしたことがある。

この店員は、冷蔵庫のなかで、寒さのためこごえて、人事不省に陥ちていた。死の一歩手前、冷蔵庫の時計錠が、金庫破りの手によつて開けられたのであつた。

「冷静に。冷静に。冷静に。——とじふんでいいきかせるのだ。けれど、こんな場合私の心は、まだまだ慌てふためくのだ。」

と、コートニイは、述懐している。

近代的金庫破りコートニイの生涯は、自分自身に対する能力の試練であり、その試練に伴う快さの体験者だつたということができる

やくざ・えれじい（時代篇）

股旅道化

もう、まつつぐな、一本道。遠い、なつかし、夢にもなんどかみた鎭守の屋根が、森のみどりの中に……

「おけえりなせえ兄貴！」

どうして知つたか、身内の三下が出迎えていた。

五年前、やはりこうして、そつと親分一家に見送られて、旅にでた泉三郎だつた。ご他分に漏れぬやくざ同志の、ほんのささいな、縄張り争いがもと、喧嘩の果に、人を斬つてしまつ……というよりも、一家の中で、一人は、兇状を背負つてゆかねばならぬ、そいつを引受けさせられて。

「親分はお達者か？」

「へい。」

「で、お糸は？　お糸も達者か？」

と、つづいてでそうなのを、いや、なによりも先に尋ねたいのを、口にはしなかつた。

「そうか、親分におかわりなくつて、そいつアよかつた。」

きのきいた野郎なら、ここらで、向うから、

「お糸さんも、鶴の首で。」

と、いつてくれそうなものだが、しらねえ筈のない三下奴。

「兄貴もずいぶん、ご苦労なすつたでしよう

ね。」

と、間の抜けたおべつかをつかやあがる。

小さい宿場だが、東海道のどんづまり、大津のそばにあるものだから、富田の親分安五郎の、賭物の収入りは相当なもの、それだけに顔も通つていた。

「今度、ほとぼりがさめて戻つてくりア、おめえも、おれの代貸をつとめてもらアにや。まあ、そいつを楽しみに、お糸の夢でもみて草鞋を履いてくれ。なあに、あの女のことア、おれが、誰に指一本ふれさせるものではねえ。」

そんな安五郎の言葉がたよりだつた。

旅が楽しいほど、馴れた度胸があるではなかつた。土百姓の次男坊が、ついに好きなバクチに深いりして、友達の新吉などと共に、富田の安五郎一家と化けてでただけのこと。

だから、旅のはじめは、おひかえなさんせ、おひかえ下せえまして、ありがとうござんす、手前、生国を発しますると、とどこでも判でおした仁義のきりようまでが、びつくりの、旅修業だつた。

で、正直なもの、どこの宿でも、三下の貰い弱音をきいて、柄にもねえと、富田へいそぐ足を引止めてくれる親分はなかつた。

そんな奴でも、足掛け五年、いつの間にか旅にも馴れた。道中ガツパもそのままに、一本刀を右にもちかえ、ごめんなすつて、と土間に、膝を降ろすだけで、仁義に応じる相手を、ぐいとにらみかえして貫禄をしめすすべも身についた。与えられる草鞋銭の額もふえたし、もう一夜、と引止められることも多くなつた。

旅から旅へ、義理で、見もしらぬ喧嘩を買つてで、兇状も重ねた。いつか、左のひたいに二寸ほどの刀傷もできて、それが仇名の、むこうきずの泉三郎、多少は、旅人仲間に顔が売れた。

ちつぽけな富田の宿に舞戻つて、安五郎あたりの代貸をつとめるよりは、旅人の生活が、よつぽどのんきで、兄貴、兄貴と顔をたてられる。で、

「よしなせえ、いまさら。」

と、酒をのみながらの泉三郎が、故郷恋しさに、一宿一飯の名のとおり、二夜と引止めてくれる親分はなかつた。

「だがな。」

理屈や損得ではないものが、双六のふりだしにはあつた。小料理屋の女、お糸が、必ず待つています、と、約束した。いや女の口約束というではなしに、心と心とが、五年間、離れていながら、一日も引あわぬことのなかつた想いと想われる情の糸に結ばれていた。

親分安五郎までが、それをいつて、お糸はきつと、引受けたと旅のはなむけにしてくれた。

「そうでござんしたか。」

泉三郎は、押しつぶすような声で、安五郎の話に応じた。

「すまねえ、たのまれがいのねえことだが、本人が心がわりしたんじやア、どうにもしようがなかつたのよ。」

「へい。」

「もつとも、おれも、可愛いおよしなせえ、いまさら。」

義理と人情と恋のしがらみ……一家の兇状を背負つて股旅五年、やつと辿りついた懐しい故郷で、泉三郎を待つていたのは身内の裏切りだつた……。

志磨次郎

めえを裏切つた女、その場で叩つ斬つてやりてえ、いやせめて、髪をおろして坊主にでもしてやりてえと、憎しみはかかつたが、それも、手柄になることじアねえ、それに……」

「……」

「相手が新吉の奴じアね。」

「新吉……でござんすか？」

「おめえとは同じ村の出だつたな。あの野郎も今じア、てえした顔だぜ。」

「と、おつしやいますと。」

「二足の草鞋だ……というのは、こうよ。おめえが旅にでてまもなく、新吉の奴が、お糸のもとへしきりにかよい出しアがつた。おまえとあの女の仲は充分にしつている野郎のことと、友達の女を、力づけにと、はじめは思つていたが、眼にあまるところがしばしん見えてきた。それで、おれが新吉に注意をすると、野郎め、そのままサカズキを返しますと、逆いとまよ。ふつうなら黙つていねえが、おめえもしつての通り、奴の叔父貴というのが、お上の御用をうけたまわる目明しだ。兇状旅のおめえに、重荷のかかるようなま真似はおれもしたかアねえ、黙つてみすぐしていたのよ。そしたら、お糸のアマを家に入れて、おめえもしつての寺島村の賭場、あそこを盗みとりの、いつの間にやら二足わらじ、ちかごろはおれにますますたてつきアがつて、この富田まで、手をのばそうつて。」

「親分、わかりやした、先はおつしやらねえで。」

「すまねえな、久しぶりにかえつてきたてめえに、いきなりこの話じア。」

「なんだつて？」

「いいえ、きかしていただきまして、泉三郎、はじをかかずにすみやした。」

「お糸はどこに。」

と、人にたずねようものなら笑われものだつた。まして、血を分けた兄弟以上に、信頼しあつていた新吉に、その女を寝取られたとあつちや……

「だ、だれだ！」

新吉は、土地の代官によばれて、つい遅くなつた日暮れ道、ふいに前にぬつと突立つた旅人に、思わず二、三歩あとじさつて叫んだ。手が、刀のつかにかかる。それというのも、あきらかに、相手に殺意があるからだつた。いや、それとも安五郎に頼まれた旅の人か？」

手拭いを頬かぶりの相手は答えない。

「もし。旅の人なら、そこを盗み斬つてやりてえと、憎しみはかかつたが、それも、手柄になることじアねえ、それに……」

「……」

「相手が新吉の奴じアね。」

「新吉……でござんすか？」

「おめえとは同じ村の出だつたな。あの野郎も今じア、てえした顔だぜ。」

「と、おつしやいますと。」

「二足の草鞋だ……というのは、こうよ。おめえが旅にでてまもなく、新吉の奴が、お糸のもとへしきりにかよい出しアがつた。おまえとあの女の仲は充分にしつている野郎のことと、友達の女を、力づけにと、はじめは思つていたが、眼にあまるところがしばしん見えてきた。それで、おれが新吉に注意をすると、野郎め、そのままサカズキを返しますと、逆いとまよ。ふつうなら黙つていねえが、おめえもしつての通り、奴の叔父貴というのが、お上の御用をうけたまわる目明しだ。兇状旅のおめえに、重荷のかかるようなま真似はおれもしたかアねえ、黙つてみすぐしていたのよ。そしたら、お糸のアマを家に入れて、おめえもしつての寺島村の賭場、あそこを盗みとりの、いつの間にやら二足わらじ、ちかごろはおれにますますたてつきアがつて、この富田まで、手をのばそうつて。」

「親分、わかりやした、先はおつしやらねえで。」

「すまねえな、久しぶりにかえつてきたてめえに、いきなりこの話じア。」

「なんだつて？」

「いいえ、きかしていただきまして、泉三郎、はじをかかずにすみやした。」

「お糸はどこに。」

と、人にたずねようものなら笑われものだつた。まして、血を分けた兄弟以上に、信頼しあつていた新吉に、その女を寝取られたとあつちや……

「だ、だれだ！」

新吉は、土地の代官によばれて、つい遅くなつた日暮れ道、ふいに前にぬつと突立つた旅人に、思わず二、三歩あとじさつて叫んだ。手が、刀のつかにかかる。それというのも、あきらかに、相手に殺意があるからだつた。いや、それとも安五郎に頼まれた旅の人か？」

手拭いを頬かぶりの相手は答えない。

「もし。旅の人なら、そ

道具によ。なくぜ、おいらア。どんなつれえなる。」

旅の空でもよ、ふるさとの夢をみる時にア、「泉さん、おりアおめえを待っていた。きっとこうして、おれを斬りに……」

てめえの顔が、浮き上ってきたものよ。もつ「馬鹿！」

とも、はずかしいが、お糸の姿はためしに浪相手の事情もこつちの事情も、なんのへつれずだ。」

「すまねえ！」

「うるせえ！　でめえにあやまられてなにに

「手前を斬りにくると思つて、念仏だけはとなえていたか、抜け！　抜きアがれ。」

「待て、待つてくれ。その前に話しておきてえことが。」

「いやだ！　抜けてこい！」

「泉さん。そりやおいらア、お糸を。」

「馬鹿！」

相手の抜くのが待ちきれなかつた。五年間の旅人暮しが、喧嘩は、先に斬つたがかち、と、くれもなし、ただ、先に叩つ斬るがかち、と、身にしみた性根になつている。泉三郎の脇差しが、すいと横に払うように走つた。

「うわツ！」

新吉はわき腹を押えるようによろめいた。

「くそツ！」

こんどは泉三郎が、真向からきりつけてくる。うむ！　と、新吉、やつとのことで、抜き合した刀身で、そいつを受けとめた。

「くたばれ！」

泉三郎の闘いに馴れた剣は、必死に受けた新吉の脇差を、上から押しつけるように、ぐと、相手の脇へくいこんだ。

「うーむ」

と、新吉は、倒れた

「待ツ、待つてくれ！　泉さん！」

「ちえツ！　面白くもねえ野郎だ！　この期におよんで、どんなごたくをならべようつていやアがるんだ。」

「待つて、待つてくれ！　この新吉、泉さんに、いずれは斬られると思つていた。」

「いい覚悟だ。さア、念仏でも唱えていろ！」

泉三郎は、また、脇差を、さつと振り上げた。

「早えとこ、いきの音とめてやるが、せめてものおいらの慈悲だ！」

「待て！　泉さん、きいてくれ！」

「くでえ野郎だ、まだいつてやがる。」

「いう、いうともよ。泉さん。おいらア、富田の安五郎に自分から、たてついたことア一度もねえ。五年前、おめえが、どう思いちがえたか、一家の兇状を引受けて、旅にでなつた。それもおいらからいやア、馬鹿げたことだつた。おめえのすがたが、宿から消えねえに、もう、安五郎は、お糸のもとに質を運んでいた。泉のような、腕も度胸もねえ三下が、兇状もつての旅ぐらし、どこで一人前のあつかいをしてくれるか。いずれは野垂れ死に、それをあの馬鹿が、可愛いお前を捨てて、薄情におんでて行きアがつたと、さア、それから逃れさしたが、どうにもならねえのは、五郎より、この安五郎は……と、さらつてものア、毎日よ。お糸もはじめは、ごつこくなる。ついにはたつていやだといやアがるなら、と、子分を連れての強ねだり、かぶりを振れば、押えつけ、いやもおうもねえしぎだ。おいらア、あんまりみるにみかねて、そいつア親分、話がちがう。泉の奴が、あんまり可哀想で、と、柄にもなく口を出した。なにをこの三下奴、でて行きアがれ、と、サカズキを投げられる。ふん、ようし、そつちがそんな気なら、こつちもいのちにかえてもお糸を渡すものか、泉三郎さんがかえつてくるまでは、おいらが、と、そのまま、お糸と共に、寺島の叔父のもとに転がりこんだ。そして……」

「そして？　てめえ、嘘じア？」

「斬られたくねえから嘘をというのか！　いや、斬られることは、覚悟していた。」

泉三郎は、もう、どなつた。

「くそ！　いやだ、いやな野郎だ、新吉。」

れぬというように、腕も度胸もねえ三下奴は、どこまでも道化てやがら。とうとう最後にア、女のために、友達をドスにかけるような、そんな……ちえツ、いやだ、てめえ、いやな野郎だよ、新吉。なぜ、黙つて斬られやがらねえ。」

「泉さん、すまねえ。立派な腹をきめて、お糸さんを安五郎の手から連れもどすようにしてやるうそれ以上、話をきいていられねえ。」

「新吉、おれつて奴は、どこまでも道化てやがら。とうとう最後にア、女のために、友達をドスにかけるような、そんな……ちえツ、いやだ、てめえ、いやな野郎だよ、新吉。なぜ、黙つて斬られやがらねえ。」

わずか、故郷にかえつて一夜をすごしただけだつた。それもあつたかい寝床の中で、夜

傷だらけの愛情

やくざ・えれじい（現代篇）

伊賀逸兵

が明けたわけではない。

新吉を、寺島の家にかつぎこむわけにもいかず、さア助かつたやら、助からぬやら、附近の百姓衆に身柄をたのんで、とつてかえし夜が明けていた。とうとう五年間、夢にみつづけたお糸のシャクで、一杯のむことも、もう、永久にないだろう。そして、明日も、明後日も、股旅の草鞋に足の裏を痛めて。

（鈴木　節画）

た富田の宿。安五郎も同様に、叩きつた泉三郎だつた。

騒ぐ身内をじろりとにらんで、表にでたら夜が明けていた。とうとう五年間、夢にみつたが、どこでハリツケ（仕事をする）ようとしつたこつちアねえ。」

わたしが、お京を探しているのは、弓子のことをたずねたいからである。弓子は、このごろ、てんで、洋裁学校にはいつてないという。弓子が、高等学校に上つた年に、わたしは、叔父の家を飛びだしたが、たえず、妹の身の上には、できるだけ、注意をしていた。横浜（ハマ）では、はじめの一歩が、かんじんなのだ。その一歩を、踏み外せば、決して、後戻りは、出来ない。

海に面して、倉庫と鉄工場が、肩を押しつけあつている。ところどころ、ポツンと電柱が立つている。そんなものかげに、ヨタ公がたにわらわれるわ。そんなものかげに、ヨタ公がなにげない顔つきで立つている。一町四方にそんな男のすがたがみられれば、近くに鉄火場がある。

夜の底で、波が岸を敲く。波止場の第二突堤に、女は立つている。

「あんた、ちよつと。」

力の抜けた肩が、捨てられたわら屑のようにうらぶれてみえる。

「あそんでかない。」

わたしは女にピースの箱をさしだす。女はおどおどと一本ぬきとる。わたしはライターをつける。頬の肉の落ちた女だ……。

「こんなところに立つていて、商売（バイ）にアなるまい。寝床（シャ）は、どこだい。」

「はしけ船の中。」

女は淋しそうに答える。

「あんた、海からきたの？」

「お京をしらないか？」

「お京さん？　しらないほうがいいぜ。あんたは、この辺に立たないほうがいいわ。」

もぐりのようだ。お京は、緋牡丹の入墨をしている。この辺りのあんたたちのハチコー（親分）だ。」

「ねえ、お願い、あたい金（シン）なしでいい、あんたにわからわれるわ。（関係する）この場所（ショバ）もらつて。」

「よしな。おれはお京のヒモじやねえ。あんな。

潮風の吹きつけるハマの焼跡に、ドスと鉄拳の渡り合い!!『兄さん待つて…』と馳けつけた懐しい妹が、こともあろうに仇敵の愛人だとは、

空倉庫の地下室に、百燭の電光が白い。お京が、黒地にあやめを浮かした和服すがたで、お上品に坐っている。ほんの少し乱れた膝頭から、緋の長襦袢のすそが覗く。それがイカサマの道具である。勝負が熱してくると、白いふくらはぎが、奥まで覗く。おわざと胸前が乱れる。ダンナ(お客)の瞳が、そこにすいよせられる間隙に、お京の指が細工する。もし、ばれれば、両肌をぬぐ。

わたしは黙って張る。綺麗に取られる。まわりの素性のわからぬ素人衆もだいぶとられている。

「ご馳走さん」

わたしは立ち上る。倉庫を出ると、お京が追ってきた。

「秀さん、いつ横浜に戻ったの?」

「気になることがあってね。」

「あたいじゃないわね。」

「やきなさんな姐さん。」

「ふん、誰が、ハク情もの。」

「鉄の顔がみえなかったね。」

「だから。あんた、無事にこうして歩るいていられるのさ。」

「そうかもしれねえ。」

天神組の鉄五郎は、表面、この辺の沖仲仕のボーシン(親方)である。裏側では、タレ(賭場)をもつハチコーである。もう一つ、南京町と連絡のある麻薬業者。お京はその女房(女)、お京はコンクリートにりを打ちつけて、顔をしかめた。

「畜生! あんたのいき根とめてやる。」

「いいとも、どうせ未練のないいのちだ。」

わたしは、お京の口に手をあてた。

「あの時、噛まれた指が、みなよ、つぶれてらア。」

「あんたを追ったのはあたしじゃなくってよ。あたいは黙っていたのよ。けれど、天神組の鉄はあたいの匂いをかぎわけるの。」

「わかっているよ。」

わたしはいう。こうして、それなのにお京が、またも、わたしと

並んでいる。この辺りで、夜、なにが起つたとしても、ショバ（縄張り）内は鉄の眼だつた。

「あれからあたい、気狂いのように、あんたを探したわ。おかげで、鉄にはひどいめにあわされた。みたい？　その証拠？」

「証拠？　そんなものが？」

「はずかしいけれど、あんたにみせたい。あたい、そりア、あんたに無理にお開きにされてくやしいけれど、忘れられなかつた。それがしぜん鉄にしれちやつて……憎いわ、あんたが。」

「眼をつむつていて。」

わたしの手を摑んで、お京はわきにはさむという。もう一方のわたしの掌は、お京の引くにまかせて、傷跡にふれる。

わたしは胸をつかれる。その場所に、わたしが案内されたこのアパートは、わたしを待つていた。あんな場所に、いつたところで、つまりはゴロツキよ。あんたが鉄のかわりになるだけ。そしていつかは、また、あんたの代りになる奴ができる。それが渡世人の暮しよ。

そういえば、わたしが案内されたこのアパートは、素人染みたすまいだつた。ちかごろのお京のくらしが、いわずして察しられる。

「ありがたいが、汚れすぎてるぜ、おれ。」

「お互いだわ。あんたさえその気になつて下されば。」

「わかつた。覚えておこう。で妹のことは頼るものか。こんどはこつちで探してやらア。」

「よしたほうがいいわ。いいえよしとくれつてお願いしたいの。やくざだのなんだのつていつたところで、つまりはゴロツキよ。あんたが鉄のかわりになるだけ。そしていつかは、また、あんたの代りになる奴ができる。それが渡世人の暮しよ。あたいがそれとなくさぐりだしたところでは、たつたひとりの肉親の兄さんが、家出しちやつて行方不明。学校にかようのも心苦るしく、近頃流行のアルバイトで、南京町の、喫茶店に、そつとつとめていたらしいの。夜は十時までつていう純喫茶よ。どう引きあつたものか、そこで鉄がしりあつた。鉄にあたいがそれとなくさぐりだしたものか、

「どうするつもり？　妹さんをせめてみる？　鉄の素状をあばいて？」

「いや、おれが、鉄との間を決算にしようよ。」

「そう。とめないわ。妹さんのためなら。」

「お京さん。弓子のためもあるる。それからあんたのためも……もし、またあえるようなことがあつたら、お説の通り、足を洗うぜ。」

「嬉しいわ。」

「なんだか淋しいね。」

お京はわたしの首に腕をまわした。それから、くるりと向うむいて、上衣をぬいだ。白い肌に、牡丹の花が、美しく咲き競う入墨の背中が、シュミーズの下からむきだにしになる。それは、すぐ寝着の衿にかくれた。

わたしが天神組の鉄五郎に、呼出しをかけた場所は、近く市民住宅が五百戸たつという、むかしのK船会社の焼跡だつた。

腐つたにおいの海とのまじりあつた橋の上で、約束通り、さすがに鉄も、ひとりで立つている。たしか、彼も、わたしと一つ、二つ年のちがう、三十七か八才、思えばお互いに、もう激しい商売が、重荷のころ。

もつとも、鉄五郎は、灰色がかつた背広にネクタイもきちんとつけて、みたところは、どつかの会社の若手重役。

「どつかに子分を隠していやアがるんじやないか。」

わたしはうたがつてみたが、そんな様子もない。

「しばらくだつたな。どうだい旅の味は？　ちよくちよく、秀さんの消息はあつたがね。だから、お互いに、久濶の挨拶はぬこうぜ。」

そう鉄がいつている間に、わたしは、その背後のくらがりで、ポツとたばこの火をみた。

「お京、なにしに来た！」

わたしはとがめる。鉄も驚いてふりむく。

「見物にきたのよ。」

「くたばつたほうの介抱をしようつてのか？　よしな。いのちだけはたすけよう、秀を連れて、一しよに横浜を風ぶがいい。

と、鉄がいう。

「ありがとう。だが、あんたは生かしちやおけねえ。」

「なんだつて？」

「お京にひでえ傷をつけていただいたのアあんたの女房（バシタ）だつた女へのしうちと、まア眼をつぶろう。いのちをかけて、ほれた女だ、たとえどこに傷がついても、くださるといやアありがとうと引退ろう。だがね、もう一人、別れてもらいたい女がいる。そのためにア、やくざの天神鉄。いや、世の中の裏街道をあるく男の素状もしらせたくねえ。」

「待つた、秀。おれのいいたいようなことをいうぜ。なんのことだ、そりや。」

「あそこに、ホレ、心配そうに走つてくる人がいてよ。」

と、お京がいつた。

「あつ、弓子！」

鉄の言葉の終らぬうち、わたしは、彼のわきばらにぶつかつていつた。どうして知つたのか？　妹のくるまでに、とつさに鉄のいのちを奪う必要にわたしはせまられる。

「おい！」

さすがに鉄も喧嘩なれて、身をひいた。だが、足もとの、焼跡らしいくぼみにひつかかつて、どつと尻もちをつく。

「しめた！」

わたしはドスの双先をまともに、倒れたすがたにぶつけるように、つつと、進む。

「あツ！　ばかツ！　兄さんのばかツ！」

背後で弓子の叫びがする。一しゆん、わたしの足許が狂う。

「畜生！」

さつと、鉄が手もとをひらめかすのがわたしの眼にとまる。わたしはわき腹をおさえた。

「ああ、兄さん！」

「あんた！」

弓子とお京が、しがみついてくる。

「なに！　兄貴？　弓子、秀は弓子の。」

「鉄さん、めいわくかけましたね。気になることはねえ。あんたが妹のいろだとはしらなかつた。あんたがおいらのようなやくざでなくつて幸いだ。秀さん！」

「兄さん！　兄さん！」

「弓子！　お前、どうして知つた？」

「鉄さん、おいらのような悪に口をきくんじやねえ。」

「秀さん！」

「あんた、あんたがいけないのよ。ここにいるこの女はおれの女房でお京つて、名代の悪い奴、そいつと組んで、この鉄さんを色じかけで、恐迫しようとした。素人衆だが鉄という人は度胸のある人だ。なかなかおどしにのらねえので、呼び出してのこの始末。自業自得つてもんだアね。」

わたしはお京からうけとつたハンカチをまるめて腹にあてる。

「鉄さん、めいわくかけましたね。気になることはねえ。あんたが妹のいろだとはしらなかつた。あんたがおいらのようなやくざでなくつて幸いだ。」

「秀さん！」

「あんた、あんたがいけないのよ。ここにいるこの女はおれの女房でお京つて、名代の悪い奴、そいつと組んで、この鉄さんを色じかけで、恐迫しようとした。素人衆だが鉄という人は度胸のある人だ。なかなかおどしにのらねえので、呼び出してのこの始末。自業自得つてもんだアね。」

わたしはお京からうけとつたハンカチをまるめて腹にあてる。

「鉄さん、めいわくかけましたね。気になることはねえ。あんたが妹のいろだとはしらなかつた。あんたがおいらのようなやくざでなくつて幸いだ。」

「秀さん！」

「鉄さん、おいらのような悪に口をきくんじやねえ。

★たかまちからたかまちへ★

香具師放浪記

ペテンとハツタリで、たかまちからたかまちへ渡り歩く〝香具師〟稼業を、裏の裏からのぞく異色読物！

林喬之介

子供を集める、綿あめ、風船や、玩具。そのほか、いろいろの店が境内せましと並んでいる。

その片隅の方で、今しもまじめそうな顔をして薬を売つている男がある。これがガンス イ屋だ。

「さア皆さん、これに取り出したこの薬は最近ドイツのクバイス博士により発明された、特効あらたかな眼薬で、やに眼、ただれ眼、トラホーム、眼の病と言うものになら何でも効く。……」

弁舌さわやかに喋る言葉にひきつけられて集まつた田舎者連中が、好奇の眼をみはると一番近くにいる小娘の手などを、男は何気なく摑える。

「いいですか、このお嬢さんの手。白くて非常に美しい。この手の甲にこの眼薬を一滴おとす……いかがですお嬢さん。手の甲にの主取りを嫌つて野に下つて商売をはじめたのが始まりだとも言うし、徳川時代に全国的の下部隠密組織を作るため、これが発達したとも言われている。

◇ガンスイ屋◇

田舎の祭礼日。神社の境内には、二三人の男の手の甲につけりと共に、多くの店がひらかれている。

小娘のほかに、成程その一滴は、手の甲から手のてやると、ひらへと泌みとうる。其処でドイツのクバイ薬なのです。……」

イス博士によつて発見された、最近の特効眼

◇野士か矢師か◇

香具師と露天商人を、まつたく同一視しているものもあるが、これは間違いであつて、香具師と露天商人は根本的に異つている。元来香具師と云うものは、ヴアガボンドなのである。

だから、香具師の稼ぎ場所は、祭礼日などが主になつてくるわけである。

最近は、彼等の世界も昔とは異つて、大部組織的に変つてきていると言われているが、それでもその根本にあるものは、そう変つていない。

香具師或いは野士とも昔から言われていて一種独特の自尊心をもつてきたものである。

戦国時代に主家を滅亡された武士が、二度

ス博士と言う名はじめて聞くがそれ程のえらそうな博士の発見したものなら、余程いい眼薬だろうと思つて、早速買つていつて点ける気になる。

これがガンスイ屋のうまいところドイツのクバイス博士なんて勿論インチキで、此の場合は思いついたままの名前だ。水爆の反対に、クバイスを逆に読めばスイバク、水爆の反対になるわけで、こんな博士がいるわけはない。眼薬もそのとうり、水にアルコールをまぜて瓶入りにした代物なのだ。

さて、その横の方では、鎖や指輪などを、トランクから取り出して見せている男がある。これはぬけ打ちだ。

「さア皆さん、よく見てごらん。これは最近輸出向に作つたものだが、貿易事情の為にキャンセルされたもので、仕方がないから国内で捌くことになつた。どうしてキャンセルされたかと言うと、何れも一寸した傷があつて、みんなにはわからない程だが、其処で私はこれを一手に引き受けて露天で売つて歩くことを思いついた。これらの品物だつて、東京の銀座、大阪の心斎橋あたりの貴金属店に出しておけば、チヤンとした正札をつけておかれるものだ。だがそれではあまりにもインチキだ。いくら国内がこんなにゆがんでいても……」

うまいことを云つて、もつともらしい手附きで、開けたトランクの中の鎖や指輪を取り上げてみせる。

そんなにいい品物ならと云うので、集まつてみている人は、値ごろ手ごろのものを買つていく。

これがとんでもないインチキで、値段とはつりあいもとれぬ安物。何処をおせば眼に見えない傷があつて、輸出をキャンセルされたのか、と言いたくなる。

ここのところが香具師の面白いところで、口上のつけようで、商品が如何にも生々としてくるから不思議である。

◇モミ師とがせみつ打ち◇

さて、境内を外れて、山の方にかかると、三人ばかりの男が、何か盛んにやつている。小さな台の上に玉くじがおいてある。一体何だろうとのぞいてみると、これが簡単な賭博である。種は至極簡単で、小さな紙に一、二、三、四、五と書いた紙を、くるくるとまるめて台の上に置く。これを一つひろつて一と書いた紙をあてれば、賞金は十倍になるわけだ。これがモミ師である。一人が主人公で、あとはサクラだ。

「さア、百円で千円、二百円で二千円。種

もしかけもありませんよ。デンスケみたいに運不運なんてことはない。ほらこうして書いてある紙をまるめて一つずつ台の上に置く、この一と書いてあるのをとれば、当り金は十倍だ。サアやりますよ。」

書いた紙をまるめて台の上に置くと、サクラが、

「よし、これだ」

百円札を二枚、ポンと台の上に置いてそれをとりあげる。

「あッ、一と書いてあるぜ」

誰が見ても、すぐに判るような仕掛けだ。

「へえ、あんたは強いね。又やられた。さアそれでは二千円」

「済まないね」

二千円をポケットに入れると、サクラは、隣に居る男に、

「これは運がよければ、いい儲けですよ。十回やつて一回あたつて、もともとなんですからね。十回やつて二回あたれば、完全な儲けなんて、ほかにはありませんよ」

と云う。慾にはきりのないもので、この手にのつて次から次へとひつかかつてしまう。

これで不思議なことには、大きくひつかかるのは男よりも女の方が多く、最後に貞操はもとより骨のズイまでしやぶられてしまうものがある。

◇ドヤにおける悦樂◇

夜がすつかり更ける。香具師達は店をたたんで旅館に戻る。それぞれの儲けを話しあい今日の収穫を誇り、酒を飲んだりして寝につく。

翌朝、次のたかまちに向つて、一同は出発と言おうとしたときには、もう次の男の布団の中へ引き込まれている。

「あッ、いや……」

外へ出てペツたりと恥かしそうに坐ると、今度は隣に寝ていた男が、くいとその手を摑む。

ぐんなりとした女中が、やつと御用済になつて、半分泣き、顔半分苦が笑いで、布団のおうともせずにみんなの顔を見ている。

「あのう、千円お勘定が足りませんが……」

旅館のお内儀が受けとつた代金を見て言う。すると、昨晩の一番先の若い男が、事もなげに、

「ああそうかい。昨晩煙草を買つてもらおうと思つて、あの娘に千円あずけておいたのをとつといてもらおうか」

女中は、今更のように驚いた顔で、急にベソをかいた。あんなことはされたが、せめて千円だけでも取れたと思つていたのに。

「さて、今日のバイはどうかな……」

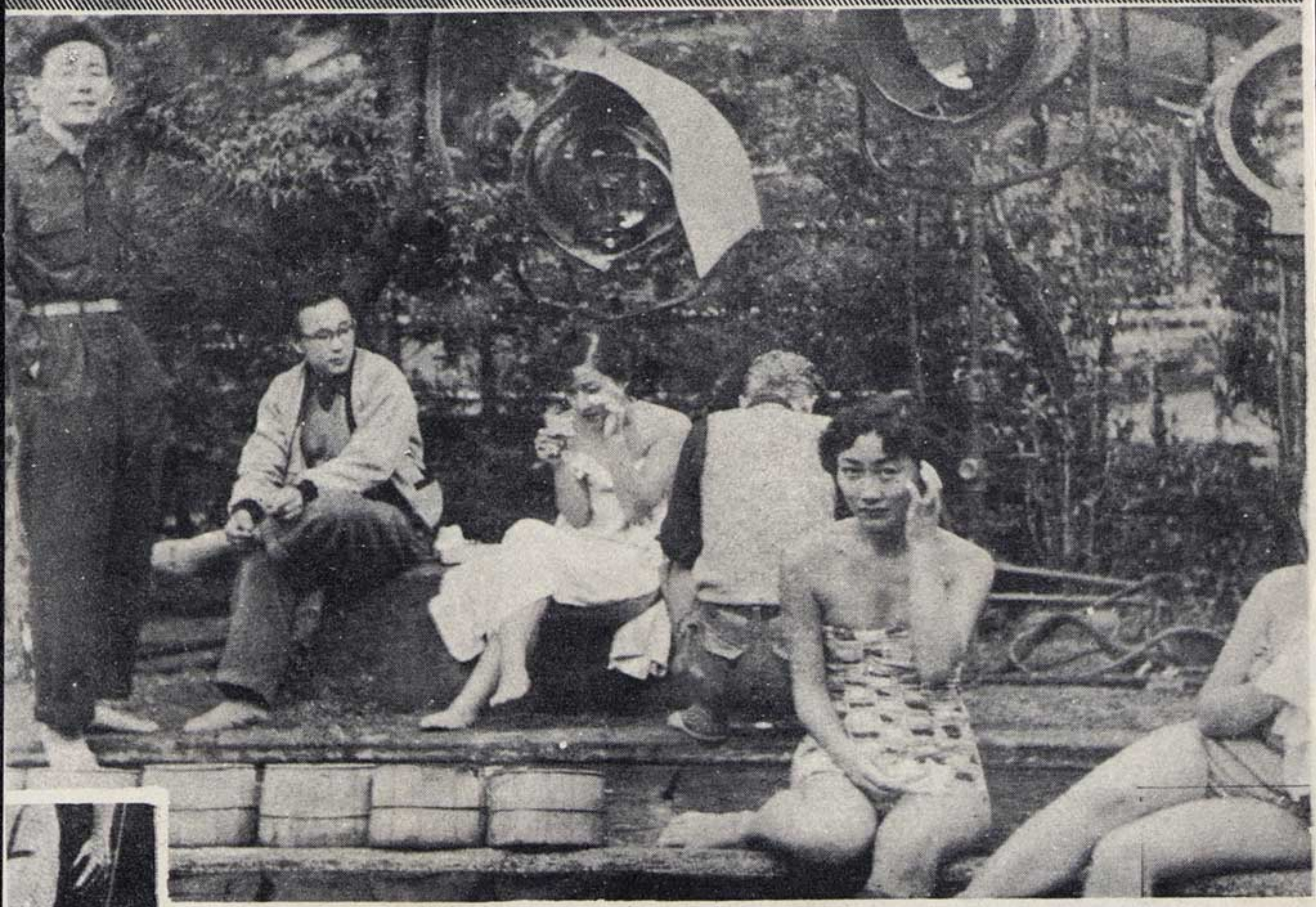
香具師連中は、肩を並べてよく晴れた空の下を、次のたかまちに向うべく、停車場に向つて歩きはじめたるのである。

（おわり）

アメリカの女プロ・レスリング

今やプロ・レスリングは新しいスポーツの花形として登場、先の試合には、日本中を血と興奮で湧きたゝせた。殴る、蹴る、投げる、このサディスティックな凄絶さに、観衆は完全にエキサイトされ、セックス・アッピールを感じるのだ。だが現在アメリカでは、更に新しいショウとして女プロレスが登場、写真で御覧のように、それは宛ら二匹の雌獅子がのたうち廻る姿——ブラジャーもパンツもあらばこそ、もみ合う白い肉体美に、殿方は「あゝ」と嘆息をもらして感激驚倒するものである。

東西映画入浴シーン競演



「OKネロ」の一カット

"見ちゃ嫌よ！"メイキャップする荒川さつきさん。艶っぽい姿態に、チラリ〳〵流し目を使う裏方たち……

ホントに全ストです……〈芸者小夏の岡田茉莉子さん〉

「愛すべき御婦人たち」のマルチン・キャロル

「ボルジア家の毒薬」

最近、門外の映画はあちらお色気映画のほかあるーサウンド・トラックへ入るかどうかというような事柄より、自由の国アメリカそれ自体、しばしば、カットされ、もの

上演映上問題を引き起こしている。この種の映画はすべて人、犯罪などを挿入して、それ以上お色気なお話しにはすでにあるまい、そんな事がのこって、あんなものを見ものである。

撮影　山名菊之助

★探偵小説よもやま話★

意外な犯人たち

中島河太郎

名探偵が犯人

探偵小説の古典的傑作の一つにガストンルルウの「黄色の部屋」がある。これは今から四十五、六年前の作品だが、密室、人間消失、探偵即犯人という三大トリックを含む探偵小説史上劃期的な地位を占めるものといって差支えない。

フランスの大科学者スタンガスン博士邸の離屋「黄色の部屋」で、令嬢マチルドが瀕死の重傷を負うが、密室状態で人の出入りは不可能である。新聞記者ルレタビーユが急行すると、既に警視庁の名探偵ラルサンが、捜査に従事している。二人とも博士邸に寝泊りして捜査につとめるが、ラルサンは種々の

殺人犯人に不在証明があつたり、絶対に人の入らぬ密室で人が殺されたり……世界の傑作探偵小説は様々の奇抜なトリツクを設定している、日本唯一の探偵小説研究家が解説する名作の謎！

行動から・令嬢の婚約者で最近破談になつたダルザツク教授を犯人と睨んでいる。

或る夜犯人が令嬢の部屋に忍び込んでいるのを見付けたルレタビーユが、犯人を追い出して、直線廊下の一方から彼と博士が、反対側から執事のジヤツク老人が、鍵手廊下からは探偵が飛んで来る。四人が出会つて額をぶつけ合わしたに拘らず、犯人は消失してしまう。窓や扉はぴつたり閉じられ、秘密の抜け口など全然ない所である。

二回目の犯人の令嬢襲撃の折、ラルサンもルレタビーユも眠り薬で昏睡状態になつており、弁護士を骨相学者に追われた犯人はピストルで傷付けられ、眠りから醒めたルレタビーユの命令で門番が銃を射つと犯人は建物の隅に倒れた。ラルサンも目覚めて「どうした」という。死骸を見ると山番なので皆その意外さに驚いていると、ルレタビーユが「ピストルでもない、鉄砲でもない、この男の殺されたのは双物だ」と叫ぶ。

その謎の解決は犯人として挙げられた教授を裁く法廷に、調査の旅から帰つたルレタビーユが突如姿を現わして大雄弁を振うのだが、密室の謎はさて措いて廊下の人間消失を次のように説明する。

「私は廊下から犯人が消え去ることが出来るように息せききつて一同に相会する位の芸当は、二秒もあればラルサンは十分やりとげることができるのです。」

といつて、警視庁の名探偵こそ実は稀代の悪漢バルメイエで、5—4＝0を鮮やかに説き明かしたのであり、第二の場合もラルサンは催眠薬でやられたふりをし、令嬢の部屋から逃れた際、行詰りになつている庭の端れで山番を刺した後、後を追いかけて来た皆と共に右往左往し、皆が死骸に見とれている間に壁を這いあがり露台にとび上つて、首尾よく自分の部屋にはいつた後、窓を押開き「なんだ、なんだ」と声をかける位、かの悪漢には朝飯前だつたというのである。

犯人と被害者が同一人

ルルウは一応謎の解決には成功しているが、ただその為には犯人が聊か超人的能力をもたねばならぬ所に難があるけれども、一人二役の原則を明確にし些細な機械的トリツクを弄しない点は見事である。

探偵小説は文学の中でも最も制約の多いもので、単に犯罪を扱つたり、探偵捜査の

物語だからといつて、簡単に探偵小説と銘うつわけにはいかない。そこには先ず殺人なり盗難なりの提出があり、物的又は心理的証拠があつて推理の手がかりが与えられ、そして始めて解説が示されなければならない。即ち作者だけで勝手に解決を心得ていてはならず、相当の智力があれば読者も作中に現われた材料によつて、犯人なり犯行方法なりを指摘できるものでなければ純粋探偵小説とはいえないのである。

それ故探偵小説では殊に独創性が尊ばれる。同じトリツクを使用するなら簡単に熟心な読者には見破られる恐れがあるし、なるべく斬新な着想が歓迎されるのも、トリツクを主軸とする以上無理からぬことであつた。元より文学としてもすぐれたものが要求されるが純粋探偵小説としてはその両方を満足させなければならない宿命を負うている。

その点前述の「黄色の部屋」は文学的にもフランスの通俗ロマンス臭を帯びて決して高く評価されるものではないが、ここでは触れなかつた密室の謎の提出に心理的な解決を以てした点、独創を誇るに足るもので、一人二役もやや芝居がかつて鮮やかすぎるが、時代の疵を発見し、妻がピストルに紐をつけ石を授に変装する場面があるが、一人二役は探偵小説のトリツクの中で最も使用の頻度の高いものである。それというのも探偵小説の面白さはある意味では不可能を可能にすることにあるからで、それが場所に関して最も著るしいのは密室であり、人物に関して最も著るしいのは被害者即犯人及び探偵即犯人の場合であつた。

有名なシヤーロツク・ホームズの生みの親ドイルの「ソア橋」を取上げよう。嫉妬に狂つた妻が、良人の愛情を奪つていると信じられる家庭教師のダンバアを呼出す。ダンバアが指定の場ソア橋に赴くと妻が物凄い見幕なので逃げて帰る。その後で妻はダンバアの返事の紙片を持つて死んでおり、ピストルは発見されない。しかもダンバアの部屋から同型のピストルが出てくるが、ホームズは橋の欄干に欠けた

「黄色の部屋」には探偵即犯人の典型的形式的な好尚に基づくものとして怨すべきであろう。

おもりにして自殺し、ピストルは川中に落ちて他殺に見せかけダンバアを犯人に仕立てようとする計画を見抜くもので、犯人と被害者が同一人の一例である。

アリバイのある犯人

このトリックはハンスグロスの「予審判事必携」にそつくりの実例が出ているもので、更にこの書に基づいてアメリカの巨匠ヴアン・ダインの「グリーン家殺人事件」に利用されている。

自分の死後二十五年内に邸から離れたら遺産相続権を失うという奇妙な遺言を残されたグリーン家の四人の息女、一人の養女はお互い激しい憎悪の念を抱きながら古い堅敷に暮らしていた。雪の夜長女はピストルで射たれたが一命をとりとめる。次いで長男も射殺されるが、この両人の屍体の顔には激しい驚きと恐怖が刻まれている。第三の事件はアダが検事局にいる時、電話で次男に依頼する用件があるが、彼は五分も経たぬうちに射たれて死んでしまうが恐怖の表情は見えない。次にはアダが歩行不能の筈の未亡人を夜中に見たというので、未亡人の診断をする手筈になつていた時、彼女は毒殺され、アダも薬を飲まされるが一命をとりとめる。

結局第一と第三の事件でアダは被害者を装つているので、第一の際は「ソア橋」と同様手段でピストルを窓の外に落し雪に埋もれるように仕組み、第三の事件は自分もモルヒネを意識不明になる分量だけ飲み、すぐ発見されないと困るので、睡くなるのを待つてベルの紐をひつぱり紐の光の絹糸を犬の歯にからませて、犬が引いたように見せかけ注意を喚起する。

長男と長女は自分に銃口を向けた者がアダなので恐怖と驚愕の表情を屍の顔に現わしたのだし、次男に依頼された物を取出す時があるように振舞つたのである。

犯人が被害者に化ける例ではクロツクのマギル卿を旅に誘い汽車の中で薬を飲ませて殺し死骸は窓から放り出し、共犯の一人

が繩梯子で忍びこんで被害者に化けまだ生きていたと見せかけるものであり、同じくクロツフの「ポンスン事件」は難波した船に同乗した男が系累のない身上で、しかも溺死したことを確認したので、自分がその男になりすまし、自分自身はその時死んだ者と思わせる。自分の妻が他の男と再婚しているので、その夫を重婚の罪で告発すると恐喝し金を絞りとる場合もある。

一人二役

また犯人が架空の人物に化けて犯罪を行い嫌疑を免かれる例も多い。

ジョン・ロードの「プレード街の殺人」は謎のため再起の望みもなく早く苦悩を取除いて欲しい、望みがきかれなければ自殺すると迄懇願された医者がモルヒネを過量に用いて死なせたが、その医者が負傷したため他の医者が死亡診断書を書こうとして死因が分り、その上死者が財産を贈つていたので故殺と見られ懲役に服した。十四年経つて医師は出獄後実験室内に骸骨を置いて出火させ、自分は焼死したと見せかけ、丁度獄中で頭髪も雪のようになつていたので自分を罪に陥し入れた陪審員に復讐する話である。即ち本人の方を抹殺し、架空の人物として残り犯罪を実行するから動機が不明になるわけである。

近年発表されたドイルの遺稿「求むる男」もこの型である。銀行員が偽造小切手で金を詐取して逃亡する。警察はニューヨーク航路の船に乗つたと確信しているが、下船の時当人だけ見当らない。彼は前々から別名を使つて二重生活を営み、本名と変装とで二つの船室を予約し、航行中も一人二役をつとめ、変名の方で下船したのである。

この型をもう一段ひねると、江戸川乱歩の「一人二役」になる。ある男が変装して自分の妻の所に忍びこみ、奴に自分以外の者と関係しているように思わせているうち、段々妻がその方に愛情を寄せていくので、自分は妻と絶縁して他の男となつて同棲生活に入る。だが実は妻の方でちやんと夫と知つての上だつたという筋である。

逆に二重生活をして、架空の方で犯行した上、その架空の方を抹殺する場合がある。これもドイルだが「唇の捩れた男」は街を歩いていた夫人が、阿片窟の窓から覗いた良人の姿に吃驚して中にはいろうとすると、家の主人といざりしかいなくて他には誰もいないと突つぱねられるが、良人の服が発見されず姿だけは見えない。ホームズが出馬して醜いいざりこそ良人の変装であることを看破するのだが、良人は妻には会社に勤めていると偽わつて、阿片窟を根城にしては変装し、昼は収入の多い乞食になつていたことが判明する。

一人三役

一人二役の裏返しに他人を自分の替玉にしてアリバイを作り嫌疑を免かれようとする二人一役があつて、双生児がよくそれに使用される。一方一人二役を更に複雑にした一人三役もある。

例えばルブランの「813」はパリ警視庁に四年間も在職しその期間中難事件の解決に非凡な腕を見せた刑事課長のルノルマンが怪盗ルパン逮捕の先頭に立つている。彼はルパンがロシア貴族セルニン公爵であることをルパンの部下として忍びこませてある刑事からの情報で知つたと首相に報告したが、首相はルノルマンと対抗出来る人

物は唯ルパンのみ、このルノルマンが悪人であつたらルパンになるだろうと演説している位である。所が怪賊アルテンハイムが臨終の際にルノルマンこそルパンの変装であることを警視庁の連中に暴露したので皆呵然と色を失う。ルパン撃滅に唯一の頼みの綱とされていた御当人が当のお訊ね者というのでは、黄色の部屋の亜流といえぬこともないが、そこを一工夫こらして一人三役にしているわけである。

江戸川乱歩の代表作「陰獄」も一人三役で見事な成果を示している。結婚前関係のあつた平田が大江春泥という探偵作家になり、今は実業家小山田六郎夫人となつた静子に脅迫状をよこすことから物語は始まる。静子はそれを作家の「私」に打明るが、そのうち小山田氏が漂着死体となつて発見される。小山田氏が秘かに蔵つておいた品から「私」は氏自身が平田となつて妻を脅迫することに快感を感じていたのだと推理するが矛盾した証拠にぶつかる。そこで「私」は更に次のように考え直した。静子は主人の外国旅行中、匿名の男名前で小説を書いた。つまり原稿を書く時は大江春泥の平田となり、雑誌記者に逢つたり家を借りたりする時は平田夫人になり、小山田家では夫人になりすましていた。毎日のように午後一杯茶の湯や音楽を習うのだといつて家を明けたのは、半日は小山田夫人、半日は平田夫人と、一つ身体を使い分けていたからで、それが小山田氏が帰朝したため今までの一人三役が不可能になり、大江春泥の行方不明ということにしたのだと。

この一人三役を更に変型させれば、三人一役のカーの「一角獣殺事件」となり、二人四役のセイヤーズの「ストロング・ポイズン」となる。

裁く奴が犯人

一人二役以外で意外な犯人のトリックとして探偵即犯人に最も面白味があるが、この最初の使用者は探偵小説の鼻祖ポーである。彼の「お前が犯人だ」は親友の死に対してある男が探偵の役割をつとめ、実は偽証である所の証拠を次々に発見して廃嫡された死者の甥を死刑に追いこみ、自分は頗りに弁護して、博愛ぶりを発揮するので、余りの慈悲深さに、却つて不審を抱いた

「私」が腹話術と死体とを利用して、探偵役の男に罪状を告白せしめるものである。

探偵が犯人という形式に似たものでは裁判長が現に自から裁いている当の事件の犯人であつたという奇抜なものから、警視総監、警官、典獄等が犯人というのまである。

例えばクリステイーの「そして誰れもいなくなつた」はインデアン島に十人の客が招待され、着いてみると肝腎の招待者は姿を現わさず、レコードの声が十人の罪状を告発し、古い子守唄の文句通り一人ずつ死んでしまう。これは判事のウオーグレイブが法律の手が届かない殺人者に対し制裁を加える為に目論んだものであつたが、自分もその一員となつており、六番目の犠牲者になる。医師と共謀して射殺された態を装い、残りの者が死ぬように計つて、最後に自分も先の偽死の時の状態で死んでいる。後で係官が島に来てみると、十人とも死んでおり誰が犯人か見当がつかないが、海に投ぜられたウオーグレイブの告白書によつて始めて真相を摑むという極めてサスペンスに富む佳作である。

それから問題になるのは事件の記述者が犯人という形式で、ドーゼの「スミルノ博士の日記」やクリステイーの「アクロイド殺し」がそれに該当するが、ヴアン・ダインはこの形式をフエア・プレイでないと非難した。勿論記述者は犯行の場面はカツトしているわけだが、それ以外の箇所から犯人を推定する可能性がある以上、非難されるどころか、劃期的な新形式の創造として賞讃さるべきであろう。

死人が犯人

犯行不能と思われた幼年や老人が犯人であつたり、不具者や病人をもつてくるなど意外性を狙つて、種々工夫がこらされている。

変つた犯人では死人の手にピストルを握らせておき、死後強直によつて指に力が入り、引金が引かれてその室にいた被害者が死ぬという、死体が犯人の場合のアーサー・リースの「死人の指」があるがこれは必ずしも虚構ではなく、プラーグで共同組合の出納係がピストル自殺後数時間を経て、死後強直のため手にしていたピストルの引金を引き警部に重傷を負わした事件や、アメリカのペンシルヴアニアで大戦の勇士がピストル自殺後同様にして検屍官を危く殺すところで、検屍官はそのピストルをもぎとるのに三十分を要したという実例までである。

更に犯人は人間とばかり思いこむところから、実は動物であつたというものも少くない。有名なポーの「モルグ街の殺人」のオランウータンを始めとしてドイルの「まだらの紐」は通風孔を通つて引返すように訓練された毒蛇であり、同じく「パスカヴイルの犬」の犬、「白銀号」の馬、その他獅子の顎、牛の角、一角獣、猫、毒蜘蛛、蜂、蛭等様々である。

探偵小説では論理的に説明できた上で、意外な犯人、奇抜なトリツクであればある程、大きな効果を挙げるのだから、作家はその発見に腐心しているけれども、どうやら底をついた感じである。果して考え尽されたものであろうか、新奇な着想をわれわれはいつも待望している。

（廿九・四・四）

× × ×

× ×

勝負師の生態

（花札の巻）

倉田一平

博打の魅力

人間は金を儲けるためにアクセクと働らいて居るが、何か楽をして儲かるボロイことはないかと始終夢見て居る。その夢の一部を実現させてくれるのが賭博である。

もしも賭博で儲けることが出来たとしたら世の中にこれ以上の愉快な金儲けはない。

堅実な金利とか家賃のあがりだけで充分な生活費の出る人々は、非常に楽をして金を儲けては居るが、金を儲けること自体に苦しみこそなけれ、楽しさもない、そこへ行くと賭博で勝つて儲けて行くのは、その一回々々に大きな喜びと楽しみを味はいながらボロク儲けて行くのだから、もしこの夢が実現すればこれに優る愉快な金儲けはない訳だ。

ギャンブリングの魅力は、そこにある訳で一度この世界に足を踏み入れた人なら、必らず勝利の甘酒に浸る経験はある訳であり、その味を忘れかねて、ズル〳〵と深淵に嵌り込んで身を誤る人も少なくない。

もしも勝ち続けることが出来るとしたらこれ程面白い金儲けはないのだから、この

道を真剣になつて研究する人々が出て来るのも不思議はない。これ等の人々を「勝負師」と言う。最近はこの言葉が流行語となつて、ゲームを生命とする職業に携わる人々、例えば碁将棋の専門棋士とか競馬の騎手とか株屋とか迄「勝負師」と呼ばれる人が出て来て居るが、その本家本元は博奕打ちで、テキヤの隠語でこれをひつくり返して「勝負師」と言われて居る。

然し博奕打ち全部が「勝負師」ではない、博徒の中には、腕つ節に物言わせて「顔」で食つてる連中もあれば、賭場のテラ銭のあがりで生活して居る者もある。こうした連中は博奕をさせれば下手糞で、弱い者もある。

博奕を打つてその勝負に依つて生活して居る者が「勝負師」である。

この「勝負師」には大別して二つの型がある。勝負にかけては真底から強い者と、テクニックを使う者とである。テクニックと言うと体裁がいゝが、早い話がインチキである。

真の「勝負師」はインチキ師を「勝負師」の面汚しとして自分達の仲間とは見て居ない。然し中にはこの二つの型を兼ねる者も居るから一概に仲間外れにすることも出来ない。

インチキさまざま

純粋な国産の博奕としては何といつても花札が王様である。これ程インチキの巧妙に出来る博奕はなく、素人を欺し易いしろものはない。

花札の遊び方にも「八々」「コイ〳〵」「六百ケン」「オイチョカブ」等いろ〳〵あるがこのうち「六百ケン」は関西及び信越地方に流行して居るもので全国的のものではない。

インチキ師の舞台となるものは「八々」と「オイチョカブ」で「八々」の方は組んでやるものがあつて「大尽」と「仕手」と組んで、「大尽」の方は素人のカモと一緒にカモになつてやつて、後で精算して分け前を取るのであるが、最近は組んでやると儲けが半分になるし率が悪いので単独インチキの方が多い。

インチキの最も基礎となるタネは「ガン」と「釣り札」である。

「ガン」（印）にもいろ〳〵あつて、札自体に最初から「ガン」のあるものは「毛札」と言つて札の四隅から眼に見えぬ程の毛が一ミリ程出て居る。この毛の方向に依つて役札の種類が判る仕掛けになつて居る。

又「大札」「小札」と言うのもあつて、役札のみ、他の札よりほんの僅かコバが出張つて居たり凹んで居たりする。

然し最も多く用いられるのは「クスリ」であつて、これは或る種の薬品を札の端に少しつける。これは無色透明で普通に見たのでは分らないが、或る角度から見ると光を反射して光つて見えるのである。これだと四十八枚の札全部につけることが出来るので、彼等にとつては一枚々々が裏から見透せるガラス札も同様なのである。

だが札が分つただけでは勝利を完全に把握することは出来ない。その札をいかにして、自分の手に持つてくるかと言うテクニックが必要になつてくる。

骨の髄からバクチに憑かれた勝負師にも大別して二つの型がある。勝負にかけては眞底から強い連中といかさまに長じた連中と。だ。勝負の変轉する波に人生を賭けた彼等の気魄に満ちた生態…

それに用いられるのが「釣り札」である。これは右手の掌のうちに札を一枚なり二枚なりかくして持つ、これを彼等の仲間うちでは「釣る」と言う。

場の札と掌のうちの釣り札と瞬間に摺り変える技術、彼等は日頃からこれを練習して居るから上手な者にかゝると、種明しをして見せられても、いつ摺り変えられたのか分らぬ程の早業に達する。

インチキ師の最も跳梁するのは「オイチョカブ」である。

古い手に「おかる」と言つて懐中鏡を使つて札を配る時にこれに写して相手の札を見てしまう手があつたが、これはネタがバレ易いので最近では用いられない。

この「おかる」を使うやつは最近では煙草のケースを用いて居る。ピカ〳〵な金属板のケースは鏡に同じ役目をする。だから渡世人が仲間に居るとこの煙草のケースは引込められてしまう。

彼等の毒手にかゝつたら素人のカモは蜘蛛の巣にかゝつた蝶々も同然で、もがけばもがく程いゝように操られてしまう。

そのよい実例を筆者は見た。東北地方のH市は賭博の非常に盛な所で、市の熊本と言う勝負師に連れられて、一日同市の賭場へ見学に出かけた。

花札の「オイチョカブ」をやつて居て、この地方では「オイチョヨシ〳〵」と言つて居る。

「この連中は皆素人ばかりですよ。」と熊本は笑つて居た。「あの真中に坐つてる×と言う男、あの男だけが渡世人ですよ」と教えてくれた。

熊本は仲に入つて勝つたり負けたり器用に遊んでアツサリ引上げた。「まああなたは見てらつしやい」と私にはやらせなかつた。

中に一人眼を真赤にしてコップ酒をあふりながらKの真向いに坐つて勝負を続けて居る男があつた。近在のリンゴ百姓だと言うが、熊本が家の者と話して居るのを聞くと三日前に六十万円の札束を持つて来て、もう五十万位やられてると言う話だつた。

他の連中はどうしてもKに敵わぬと見たかそろ〳〵とこしを浮かしにかゝつた。

「今日は面白い位受けてるなあ」

とKはひとり言を言つてニコ〳〵して居ながら皆が浮き腰になつたと見ると、

「どんだい、一丁おとしてもいゝぜ。」

と言い出した。「一丁おとす」と言うのは一目違いで勝つた場合は負になるハンデキヤップのことである。つまり子方が八で親が八でも九でも負けになつてしまうのである。だから子方はオイチョかカブをひけば、親が「つけ目」（シツピン、クツピン、ピンバサミ等）でない限り必勝となる訳だ。

「よし、一丁おとすなら、も一度やるべい」

「だが小さく張るんなら御免だぜ」

Kは一本釘をさした。そうなると他の者は一寸手が出ない。結局件の百姓だけが勝負に出たが「ゴケ」と「七ケン」の二丁差で又負けてしまつた。

「わるいなあほんとに。気の毒だから最後に一回だけ花つけてやるよ。今度は「二丁おとし」でいゝぜ。」

Kは熊本の方を一寸見て眼で笑つた。百姓は「二丁おとし」と聞いて有金を全部賭けたが、これも手もなくせしめられてしまつた。

素人を嬲るのはまあザツとこんな調子である。熊本は「博奕に一丁おとし」なんてものはあるもんじやない。もしそん事を言い出す奴があれば必らず其奴は手を使つてるんですと説明した。

父娘連れの勝負師

鉱山の飯場は博奕の温床である。

ひと頃北海道の鉱山を、十四、五になる少女を連れてわたり歩いたTと言う五十年輩の勝負師があつた。

Y鉱山と言えば天下に名高い鉱山だが、其処へブラリとやつて来たこのTが一晩で場の金をさらつて行つた。一同は呆気にとられて居たが、鉱夫の中に渡世人くづれの男が居て「どうも野郎の右手はおかしい」と最後の勝負に使つた札を調べて見ると、いつの間にかガンがつけられて居る。「野郎やりやがつた」と皆いきまいたがTがやつたと言う確証にならないので「今度来やがつたら手証を見つけて只ではおかねえ」と待構えて居ると、前のうまい汁が忘れかねたか又娘を連れてやつて来た。

「おいでなすつたな」と眼の利く者が二三人親爺（Tのこと）の手許に眼を光らせて居ると見えて、その日は神妙に勝負して居ると見えて、勝つたり負けたりでサツパリ埒が明かない。鉱山の連中はこの前取られた金を取返してやろうと言う肚があるもんだから、親爺のみゝたかドンと来ねえか。」と水を向けた。

「そうですねえ。この前勝たらお返ししねえと義理が悪いね。最後に一勝負やるかね」

「よしそんなら……」と大きく

鉱山の連中は皆してコマ（金）を集めて、これが受けられるかと札を山と積んだ。Tはそれをそつくり受けて勝負することになつた。

「奴さん、こゝで例の奥の手を使うぞ」

用人棒を任命された面々が、

サツと緊張して親爺を睨みつけて居る。

と親爺は、

「今日は俺アどうも大勝負なので、親かたは緊張して受けてねえ。この勝負は娘にやらせて下せえ。おい秀子、お前やつて見な」

と傍の十四、五の少女に言つた。この少女は親爺が勝負して居る間は、一人離れて映画の雑誌か何かを読んでおとなしく待つてるのだが、この時は親爺の傍に心配そうに坐つて居た。

「負けても知らないよおとつあん」

「いゝよ〳〵。誰がやつても同じこつた」

親爺はスツと立つて席を娘に譲つた。

この時の親は鉱山の鉱山から移つて来た鉱夫の話に札が配られて居た。方で、既に場には四枚の札を指でチヨント叩いて、少女はその内のアヤメの

「これがいゝわ」

と言つた。

「いゝな！　親爺」

念をおすと親爺は無言で頷いた。その札の上に一枚札がのせられると、少女は見よう見真似で札を二枚重ねて親指で札を一分か二分ズラせて覗き込んだが、

「トメ、これでいゝわ。」

とまことと無邪気なものである。気負つて見て居た連中も一寸拍子抜けした格好だつたが、何にしても大勝負なので、親かたは緊張して札を配り、自分の手札を見るとオイチヨと出たので、「勝負ツ」と娘の札を開いて見るとアヤメに藤がプラ下つたカブでものの美事な一目殺し。

「あつ！」

と声も出ないうちに、

「やあ、うめえ、でかした〳〵。」

と親爺一人が喜んで場の金をさらうと風のように去つて行つた。

其の後他の鉱山の親爺は鉱山の賭場荒しが専門で依ると、この親爺は鉱山の賭場荒しが専門でいつも最後のドタン場になるとこの少女が出て来て場の金をさらつて行くと言のうだつた思うにそのテクニツクにかけてはこの十四、五の少女の方が親爺よりも役者が一枚上だつたらしいと言うことである。この少女も今ではインチキを封ぜられてしまうと、気合負けして惨敗してしまう。

真の勝負師

ほんとうの勝負師と言われるものはインチキは絶対しない。相手がインチキをすれば見破る眼力はあつても自分はしない。

それでどうして勝つかと言うと、そこが勝負師として選ばれたる素質のあるところで兎に角素晴しく勘がいゝ。又度胸もいゝ。然し勘がいゝと言つても、百戦百勝の勘と言うものはないから負けることもある。所謂「落ち目」と「受け目」の、勝負の波と言うものをよく弁えて居るのである。素人は少し勝つと里心がついてやめたくなる。負ければ熱くなつて損を取返そうとする。

勝負師はこの正反対である。「落ち目」と見たらアツサリ切り上げる。その代り一たん有掛に入ると、トコトン迄あふつてくる。

同じ一勝一負でも素人は一万円損して一万円勝てばいゝ方だが、勝負師は一万円負けれれば勝つときは三万円も五万円も勝つ。張りを倍増しにして行くからである。

インチキを常習とする渡世人はこの真の勝負師にかゝつてインチキを封ぜられてしまうと、気合負けして惨敗してしまう。

又勝負師と言うものは星（貸し借り）の義理は非常に堅い。何日に返すと言つて借りた金はどんなことをしても期限迄に返す、これが果せないと男が廃ると言つて非

常に恥として居る。

勿論彼等とてインチキでない正当の技術は日夜研究に苦心して居る。前に書いた熊本と言う男などは、花札のハコ（四十八枚重ねたもの）を親指と人指し指で一寸摑んで見ただけで、「オヤ、こりや一枚多いな」とサラツと投出す。数えて見ると正しく一枚多かつたりする。この位のことは一人前の勝負師なら当然のことのようである。この熊本が或る日しみ〴〵と述懐した。「然し勝負師にも長い短かいの差こそあれ、寿命と言うものがありますねえ。年とつてくると気合が鈍くなつてダメですよ。矢つ張り若いひとり者でゴロつき出来ると昔のような真似はできませんや。」と淋しそうに言つた。この男は昨年持病の肺結核で四十五で死んだが、その勝負師としての勇名は、ひとりH市にとゞまらず、東京大阪にまでなりひゞいた男だつた。何百万と言う金を何度も儲けた男だつたが、晩年は借金ばかりで不遇だつた。「俺はバク才がある」と有頂天になつて居る世の天才諸君よ。勝利の女神は浮気なものでいつ迄もあなたのふところに抱かれて居ませんよ。いゝ加減に足を洗つて身をかためるのが賢明です。これは熊本が若い勝負師気取りの渡世人に口癖の様に諭す言葉だつた。

☆☆☆☆ 古今ピストル名人談 ☆☆☆☆

このごろは減つたが日本には、柔剣道を教える町道場がある。これと同じように、ヨーロッパやアメリカには、ピストルやフエンシングの練習所がある。

ヨーロッパには、裸の女の子を撮る会なんかないが、ピストルを射つ会はある。会員になつて練習所に出入するというわけである。ピストル道なるものを会得するのだ。

正式のピストルの撃ち方は右膝を立て、左足を後へ退き、右肩が正面に向くよう、つまり左胸、心臓部を出来るだけ保護する姿勢で、右手を水平に降しながら撃つ。

ピストルは、銃身の長いほど命中率がよく、婦人用の最小型のブローニングなど、まず当らぬほうが多い。アメリカ式考え方

みたいな名人が居るらしい。左手に銅貨を三枚もつて、一個ずつ空中へ投げ上げる。こいつを右手のピストルで順に撃つ。三個とも中央を抜くなんていうのは映画のトリックだが三個とも命中というのは珍らしくはない。

ヨーロッパの名人にはどういうものかイタリヤ人が多い。十メートルくらい離れたところにローソクに灯をつけておく。もちろんまツ暗闇の中でだ。右手を上げ、狙いをつけながら下しかける。とたんに、ローソクの灯を吹き消す。次の瞬間、パン！弾は正確にローソクの先端をかすつているサーカスやショオなどには、たいていピストル芸があるが、ほとんどインチキはないとみていい。長い間の練習の結果である。くるくる廻つている盤に書かれた数字を順に打ち抜いたり、ひよいと後向きになつて巧みに的に当てる。

史上で有名なピストルの名人には、ドイツのブランデンブルク侯フランスのアルトワ伯などが数々の逸話を残しているが、イタリイの俠盗ピエトロマツオーニの伝説のほうが面白い。この美男子にして冷酷な盗賊に狙われたら、まだ引金を引かない前から狙われた者の運命は決定していたという。

特異風俗の研究

男性アブニスト読本

——その四つのプレイ——

……十人に一人の女客を待つ辛抱もできないからやらずにいるか、美しい女性を、一段高い椅子に腰かけさせて、その足許に跪まづき丹念に靴を磨いて見たい、と常に考えている。……

鬼山絢策

一　純粋なるマゾヒズム

前章において、マゾヒズム心理を分類して解説すると、夜があけると書いたが、マゾプレイの種々を紹介し、解説するに当つては、どうしても分類せざるを得なくなるので、夜があけても日が暮れても構わない。どうせ眈美の扉をひらいてしまつたのだ。面倒でも追求して見よう。だがその前に、一言お断りしておきたいことがある。

マゾヒズムの中にホモセクシャリテットと厘なつた、同性から虐待を受けて喜ぶ型があ

る。これは純粋なマゾヒスト心理から変型した「変態的マゾヒスト」であると思う。

おかしいですか。

ちつともおかしくない。私はまじめに論じているつもりである。

変態性慾を総べて「狂」と見なす人には、変態の上に変態が重なつたつて、大したことはないと思うかも知れない。

これが常人のアサハカなところで、政府の予算が一兆億になろうと、二兆億になろうと、こう言うベラ棒な数字になると、庶民の数字の観念から離脱してしまつて、その大きさの実体が摑めないから、そうなればどうなるかと言うことは、他人ごとのようにピンと来ない。然し官吏と言う動物には、一兆億と一兆一千億との差でも判然と分かるのである。貧乏人から見れば、五千万の資産家も七千万の資産家も、同じように見えるが、五千万の資産家から見れば、七千万の資産家の優位さがよく分かるのである。

まあそう言つたようなもので、純粋な単性の変態性慾者には、複雑の変態性慾者が「変態的変態性慾者」に見えるのである。

この見解も通常性慾者と違うところで、通常性慾者の言う「変態中の変態」と称する性慾は、或る単種の変態性慾の、深度の深いものを指して言うようだが、私の言う「変態的変態者」はその深度には関係なく、純粋度が問題となる点で相違するのである。

だがここに注意すべきことは、複性の変態性慾でも、マゾヒズムとエキズビジョニズム（露出的性慾）とは、非常に密接な関係があり、この両者の複合したものはその純粋度においてあまり変化がない。又フェチシズムもマゾの系統に属して不自然ではない。

このように、変態性慾の中にも全然別個の流れのものと、支流に属したものとがあり、支流の複合したものは、同色の系統と見なせるが全然異種の変態性慾が混合した場合に、これと類別するために「変態的変態性慾」と言う新語が必要となつてくるのである。

ではなぜ同性愛と重なつたマゾヒズムが、マゾヒズムの本質から逸脱しているかと言うと、マゾヒズム心理の本質は異性への尊敬、崇拝、愛慕の凝集が変型したものであるからたとえ虐待屈辱を受けるとも、その愛情においては変りはない訳で、その愛情の中に尊敬崇拝の観念が、強度に変型しただけのものである。

その尊敬の根元がどこにあるかと言うと、相手が異性であると言う点である。

同性では絶対所有することの出来ない美の持主、或は知能の持主、と言う点に、尊敬の念が起きるのである。男性から見れば、女性の美しさが崇拝の象徴となり、女性から見れば、男性の逞ましい力が尊敬の的となる。

結局マゾヒズム心理の根元が、尊敬と性慾と結合したものが正系なのであるから、性慾的に見て、自己が総べて保有する同性を対とすることが不純であり、変態であると言えるのである。

二 注射プレイ

さてこれから、男性マゾヒストの四つのプレイを紹介しようと思うが、前に言つた如く私は純粋のマゾヒストのプレイを礼讃するものであるから、相手は総べて美しい女性を対照として居ることを御承知願いたい。

肉体的苦痛を楽しむプレイには、健康的に弊害を伴うものが多いので、これ等は総べて「邪道なるプレイ」として戒しめなければならない。然し苦痛讃美者にとつては、本能的欲望なのであるからこれを厳に戒めることは禁慾を強いられるも同然である。だから健康に支障のないプレイを案出しなければならない。Kと言う男は「注射マニア」である。

「風邪ひいたな」と思うと、直ぐマイシンの注射である。小さな腫物が出来てもペニシリンの注射、何でもかでも注射である。この注射は、必ず奥さんが就寝前にすることになつている。

この他にビタミン剤を毎晩奥さんに打つて貰つている。奥さんは毎日注射を打つているのだから相当上手になる筈だが、これが日によつてはとても下手な日があつて、静脈注射などになると、なかなか静脈針が刺さらないで、あつちへプスリ、こつちへプスリとやつて、肉の中を針でグリグリと静脈を探して、捕まらないと針を抜いて又プスリとやり直すのである。

「へただなあ」

「だつてあんた、肥つてるからなかなかうまく刺さらないのよ」

「穴だらけになつちやうよ」

「ダメーこの腕。そつちの手へ今度やるわ」

注射の穴だらけの腕をピシャリと叩いて、反対の腕へ又プツリとやる。こんな時に、どちらからともなくエロ話が交わされるのが通例となつている。

「痛いなあ。早く済ませてくれよ」

と言うKの言葉も、そのうらではこの小さな痛みに快楽を味わつているのである。

奥さんの針の刺し方は、時には手荒くプツリッ！と刺すこともあるし、ゆつくりと静かに、針を刺すことをためらうこともある。ゆつくり刺される方が痛いことは、双方よく承知しているので、そう言う時は、奥さんの情熱が特に濃厚に燃えている時なのである。

Kの方が燃えている時には、近頃「C」が欠乏したようだから「C」を打つてくれと、特に痛いビタミンCとか、液の流れこむ間にポカポカと暖かくなつてくるカルシウムだとか、そう言つた刺戟のある注射を求める。この二人の情熱が一緒に燃えあがつた時には、よそめには極めて下手糞で惨酷な、注射のプレイが行われるのである。注射すること四十分もかかつて行われるのが普通だが、Kは手の甲へ刺されるのを特に喜び、又頸筋へ刺されるのも、非常に性的衝動を受けると言うことである。

レイが三、

このプレイの行われた後は特に交情濃まやかになると言う。

だがKは元来壮健な質ではなく、奥さんの要望には全面的に応じられぬことがある。そんな時には一寸奇妙な現象が起る。仕事が忙しくてクタクタに疲れて帰つた時に、奥さんの方は愛情に燃えていて、寝床の上で長襦袢姿のまま、

「あなた、隨分お疲れのようね。今日は「A」と「D」を打つといいわ」

「いや、今日はいいよ」

「だつて、そんなに疲れてらつしやるのに。うつた方がいいわ」

「実際女の腋の下と言うものは、見ても臭い。でも魅力のあるもんだね」

Sと言う建築の設計をやつてる技手は、一

三　腋下の魅力

杯飲むと女性の腋の下礼讃をやる。

彼はマゾヒストと呼ばれるほどのアブではないが、確かにマゾの素質はある。

彼は若い時から、大工などと一緒に遊びに出かける事が多かったが、若さにまかせて「一寸」をやると、三、四回ごろ元気を回復することをきかなくなつてくる。そんな時でも女の腋の下の匂いを嗅ぐと、直ると言う。彼の嗅覚は特製で、女の体臭、特に腋の下の部分の体臭を、わきがを除いて大別して、六種に分類して嗅ぎ分けることが出来ると言う。そんな腋の下の好きな彼も、強いわきがの女だけは御免だと言う。それは彼の腋の下を愛撫する体形を聞けば、なる程もキエキするだろうと想像できる。彼の特徴は、女の腋の下の匂いを好むフェチストはよくあるが、彼は匂いももとより好きであるが、匂いよりも腋の下には、電車の中などで袖口からこれ見よがしに覗かせられると、魅せられるものであるが、彼のはそれに触れることの方が、よりも多きな刺戟を感ずるのである。常人でも腋の程度が違うのである。彼の眼は乳房よりも太股よりも、更に性器より以」に腋の下に昂奮を感じると言うのである。

彼は好んで、仰向けに寝た自分の顔へ、女の腋の下をベッタリとおしつけてもらう。こんなことから察すると、彼の素質の中に多分にマゾ的なものが潜在していると見られるのである。

彼女とジウドウをやつて、彼女のやわらかい腕の下に押え込まれる三十秒、何と甘美な想像に富んだプレイではないか。

四 苦手の使者

本誌の挿画画家は、皆それぞれ素晴らしい麗筆と才能を十分に発揮して、独自のニュアンスを醸し出しているが、そのモチーフの重点となるものは、主要人物の表情である。真に迫つた表情を描き出すためには、それぞれが大嫌いであろうが、先日お眼にかかつたP画伯は、女の責め場の表情を、モデル嬢も、画伯の製作意欲を理解して協力したのである。

このアイデアを、マゾヒストの立場から考えると、容易に位置を置き変えることができる。私の場合で言うなら、私は蟇と言う動物苦心されることである。嫌いなばかりでなく、非常に恐怖さえ感じるのである。あの背中一面膿み爛れたようなブツブツを見ると、ゾーツと寒気がして肌に粟が立つ。ハイキングなどに行つて蟇に出遭うと、もうその路が通れなくなるが、これはなかなか困難であるし、道徳的にもあまり程度のひどいものは考えなければならない。

そこでP画伯の場合は、別の面からモデルの恐怖と苦痛の、真実の表情を求めたのである。それはモデルの女性の非常に恐れ嫌う動物、例えば蛇の如きを、縛つたモデルに少しづつ近づけて、そこから起るモデルの表情の変化、それはあながち顔面ばかりでなく、肉体の各部から恐怖や苦痛のために、本能的に現われる美しいポーズさえ、発見することが出来ると言つておられたが、同画伯の妖麗な作品をうみ出すためには、モデル嬢と共にそのような苦心が払われてこそ、リアルな迫力のある傑作が産み出される訳である。勿論モ

つきをしている。ことにあの眼が気に喰わない。どの位置に立つても此方を睨んでるような眼つきをしている。蟇の姿の見える限り、いつも私は蟇から監視を受けているような束縛を受ける。要するに精神的に蟇に威圧されてしまつているのである。

だがこのような小動物に、負けていてはならない。私は蟇を征服しようと思い立つ。それは蟇を踏み殺すことではない。蟇に対する恐怖嫌悪感を征服することである。

この方法に私のマゾヒズムを利用する。私は理解ある私の恋人にその協力を求める。私は全身を彼女に縛つて貰い、巨大な蟇と睨めつこをする。

彼女自身も蟇はあまり好きではないらしい蟇を手摑みにするなどと言うことは出来ないだろう。だから蟇を捕つて来て貰つたら、その胴に紐をくくりつけて、その紐で蟇を操作して貰うことにしよう。蟇は餌を与えて飼つておく。私の方は身動きもならぬ程に縛られているが、蟇の方は胴を一括りされただけだから、私に向つて跳躍を試みることも自由である。蟇は餌を与えて飼つておく。私の方は身動きもならぬ程に縛られているが、蟇の方は胴を一括りされただけだから、私に向つて跳躍を試みることも自由である。私の最も嫌いなあの疣々を私の肌や顔に擦りつけて、膿汁のような体液を塗りつけられたら、私の皮膚は、「漆負け」したようにカブれてしまうだろう。

だが理解ある私の恋人は、そう簡単には蟇を私の皮膚には触れさせないだろう。

蟇を私の顔スレスレに近づけて、後からケシかけて飛びかからせようとしたり、私の眼の届かぬ位置において、掛け声をかけて、私の背後から蟇を私の身体の上に飛び上がらせようとしたり、色々な方法で私を脅迫し苦しめるだろう。

何しろ蟇は、自由は与えられていると言つても、それは私の尊敬する恋人の意志の下にあつて、蟇を私から遠ざけることも、あの四本に六本の手は全身を彼女に縛つて貰い、巨大な蟇と睨めつこをする。

彼女自身も蟇はあまり好きではないらしい蟇を手摑みにするなどと言うことは出来ないだろう。だから蟇を捕つて来て貰つたら、その胴に紐をくくりつけて、その紐で蟇を操作して貰うことにしよう

ことによると、何回やつても、今にも蠹をとびかからせるぞと脅かすばかりで、私に蠹をくつつけることはしないかも知れない。

そうすれば私は、永久に蠹の恐怖から去り得ないことになる。私が蠹に馴れてくるようなら容赦なく蠹をとびかからせるだろうが、それにしても、最初から最も鋭敏な個所へは触れずに、足の裏とか着衣の上からとか、鈍感な部分から手順を経ることを忘れないだろう。これは一面、精神の鍛練にもなることであり、健全なプレイであると思つているが、私は性来の不精から、いまだに企劃しているだけで、実行に移つていない。

五 靴みがき

雑誌の編集をやつてるS君は、無類の音楽好きである。同業の誼みで私はよくS夫妻と連れ立つてクラシックものでも、ジャズでも聞きに行くが、S君も非常にフェミニストである。

彼には妻君の靴を磨くと言う奇癖がある。近頃親しくなつたばかりの私の面前でも、妻君の靴磨きをやることがある。

私は最初、彼を靴のフェチストかと思つたのだが、そうばかりでもないようである。

私が始めて彼の「靴磨き」を見たのは、日比谷公会堂へ行くべく、時間を打合せて彼の家に行つた時である。彼の方はもう仕度が出来ていたが、妻君の方はまだだつた。私は時間がないから上らずに玄関で待つていると、彼が出て来て靴をはき、手際よく自分の靴を磨いて、妻君の出てくるのを待つていたが、なかなか手間がとれて出て来ない。玄関で立話をしていると、妻君が輝やくばかりに化粧して、ウールビケのオーバーを羽織つて出て来た。

「随分待たせるな、さ、早く行こう」と急き立て妻君が黒のハイヒールをはいてしまつた時「何だお前の靴、汚れてるじやないか。磨きなさい。」

「あらア、私手袋しちやつてるし、今マニキュアしたばかりなのよ」「仕様のない奴だな」と彼は舌打ちして、下駄箱から妻君用の靴ブラシをとると、彼女が敷石の上に立上つている足許に膝まづいて、左手を彼女の足首の後からおさえて、器用な手つきでブラシをあてた。

妻君は立つたままで、今日の音楽会のスタ
ー連中の噂を私に話しかけてくる。
急いでいるのに、彼の靴磨きは殊の他入念
でブラシをかけ終ると、今度はモケットの艶
出し布をとりあげた。
そして妻君は敷石から靴の先を半分ほど彼
の方へ突き出して、私と話しながら夫に磨か
せている。
磨き終つた彼の顔は一寸紅潮していた。
最初はこんな風だつたが、彼が妻君の靴を
磨く楽しさを私に話してからは、文句も言わ
ずに、恰も女主人に仕える下僕のような態度
で嬉々として叮寧に美しく靴を磨きあげるの
だつた。
彼は足の入つてない靴を磨くことは、あま
り興味がないらしく、いつも妻君が靴をはい
てしまつてから磨くのが癖だつた。その点か
ら見て、純粋な靴のフェチシズムではなく、
女の脚に対して魅せられているという様子だ
つた。
彼の靴を磨く態度は、真剣そのものだが、
そんな時に、彼の頭が屢々妻君の膝に触れる
ことがあつた。時には妻君の方で、私と話し
ながら他意ない風で膝を一寸前へ曲げて、膝
頭で彼の頭を一寸小突いたりすることがよく
ある。
Sは表を妻君と一緒に歩いていても、自分
の靴が汚れるのはさのみ気にしないが、妻君
の靴が汚れると、直ぐ靴磨きに磨かせるのだ
つた。
そんな時でも、本当は彼自身で磨きたいの
であろうが、往来ではそうも行かないので
靴磨きに磨かせるのであるが、彼の眼は靴磨
きの手許をみつめて、異様に光つていた。
私も一度、靴磨きになつて見たいと思つて
いるのであるが、男の靴を磨くのはイヤなの
で十人に一人の女客を待つ辛抱もできないか
らやらずにいるが、美しい女性を一段高い椅
子に腰かけさせて、その足許に跪まづき、丹
念に靴を磨いて見たい、と言う気持は常に持
つている。
豪華な寝室のベッドに、高貴な婦人を寝か
せて、片脚づつベッドから出して貰つて、そ
の靴をはいた足を膝の上に抱えて磨くのもま
た、楽しいプレイの一つだと夢に描いてい
る。

（小田明男画）

★脱獄囚物語★

フランス人ジョーゼブランは、実に二十回
の脱獄に成功した。もつとも二十回の脱獄と
いうことは、二十回捕縛されたということを
意味するので、彼は折角脱獄してもそれを自
分の運命開拓に少しも利用せず、忽ち捕縛さ
れて、最後はみじめな獄中の死を遂げた。
彼の奇妙な癖は、自分を捕えた刑事や探偵
に対して必ずお礼に出ますよと言つて、実際
にそれを果したことだ。刑事達が彼を忘れた
頃、脱獄した彼の訪問を受け、目星しい金品
をゴッソリと盗まれるのが常だつた。
英国のダートムーア刑務所はかつて脱獄な
しと言われていたものだが、ここを逃亡した
のがチャールスウエブスターという男。
刑務所内の病監に移されたのを好機とばか
り、二人の仲間と語らつて、食卓の床下から
物置を経て上手く脱獄に成功した。
アイルランドのメリボロー刑務所を脱獄し
たリンチハウンという男には、恰度わが国の
鼠小僧のように、今もつて数々の伝説が残つ
ている。彼も数回脱獄したその道のベテラン
だが、脱獄に際してあらゆる奇智をふるつ
た。ある時は典獄夫人に変装して逃亡した。

★特異風俗の研究★

私の耽溺日記

……着物をかけて、着物をかけて、と云うKさんの声を、聞えないふりをして、心の中ではKさんの気持を思いやつてゾクゾクして居たものです。……

（繪と文）喜多玲子

一

私の現在までのあり方は、正直なところ、賞めるよりも貶められる側の立場にありましたし、今でも受動的なものの方が多分にありますので、三十年の人生の経路の中に〝試みられた〟ことは案外少ないのですから、どうしても先あつても、〝試みた〟ことは何度もずそれを第一に申上げておかないと、これを期待して読んで戴く方に申訳がない様な気がします。

まして、研究などと云う理論的な見方からは程遠い耽溺の半生だつたので、それはそれなりに結構楽しんでいながら、今になつて考えて見ると、その中のどの場合が〝試み〟だつたものやら〝試み〟でなく本当のものだつたのやら判らないと云うのが本音なのです。

「これは研究的立場でやつているのだ」などと云う気持の余裕などと、とてもなく、ただその時その場の情熱のおもむくまま、耽溺のうちに身を沈めてしまつていたことに今更のように気がつきます。

しかし、意識してはいなくても、自分のひたむきな欲望に少しでも近づく為に、何かを〝試み〟ていたことは確かで、そんなことが人様から見れば、馬鹿々々しい人生の空転だと思われるようなことなのに、私には悲しいほどの現実でもあつたのです。

繩と云うものの持つ、不思議な魅力が、どう云う訳でこれほど私の心理の奥に喰い込んで来てしまつたものか、初期の頃にどの様な気持でこれを身に巻きつけ始めたのか、あまりよく判らないのですが、幼時からの遊びの中に必ずと云つていいほど、繩が登場していました。

私の家は京都で古くから続いた本屋でしたし、その上京都駅前で印刷会社も経営して居りました関係で、古い土蔵の中には、いろい

ろ昔の書籍や、絵草紙のようなものが棚にぎつしり積まれてありました。

表での遊びにあきると、ごく気の合つた二三人の友達と此の蔵の中にそーつと入つてうす暗い蔵の二階の半開きにした窓の下で頭を寄せ集めながら、私の引き出した絵草紙の血みどろ絵に見入るのです。そしてあげくの果は例の通りお姫様や悪侍になつて縛つたり縛られたりの遊びを始めるのでした。

太い木格子の裏から金網を張り込んだ土蔵の扉には、さも頑丈そうな錠前がかけてあるのですが、それは形ばかりで、ガチヤガチヤと引くと苦もなく外れてしまうのですから、尤もこんな訳もないのかも知れません。今考えるとずい分気楽な話ですが、あなところに他から人が入つて来る訳もないのかも知れないと思うで、ルーズにしてあつたのかも知れません。あの、うす暗さの中にあるゾーツとする様な奇妙な雰囲気は忘れられないものでした。何かこう、子供の好む不可思議な秘密性が、あの蔵の雰囲気にはあつたのです。

せまい書棚の間を鼠のように転がり廻りながら、カビの匂いの一杯する空気を吸つているうちに、だんだん変な気持になつて来たものでした。私達が好んで見た本は、今から考えると、それが種彦や振鷺亭や京伝や馬琴などのものだつたかも知れません。むつかしい変態仮名は全然判らずに、ただ、木版の毒々しい絵ばかりを見て、勝手気ままな想像の筋を思い描いたのですが、しかし、どうして、あの様な血みどろ絵や縛り絵が一ところに集められていたものかが不思議でした。きつと祖父がそう云つた趣味を持つていたのに相違ないと今では思つているのです。祖父が生きていれば、今ならばいろ〳〵聞くことも出来るのですが、私の物心つくかつかないかに此の世を去つてしまつた人なので、そうもゆかないのですから、此の種の性格の中にもあるものだとすれば、現在私が此のような絵を描いたり、趣味を持つていることも不思議でないのかも知れないと思うことがあります。

絵草紙に憑かれたように、お定まりのお芝居で、お姫様になつたり悪侍になつたりしてその虐げられている人物が、（主として女性ですが）如何にしてそのような破目になつたかと云うストオリイの方が重要で、まして、小暗い蔵の中で遊んだのですが、それが、縛られたり、縛つたりした最初でした。一体あの友達の中の誰がリードしたのか判然としないのですが、捕われたお姫様役の私を前にして、きまつて小さな雲助たちの行う責めは、どちらかと云うと、直接的なものではなかつたようです。絵草紙の逆吊りの場面や、一つ屋の鬼婆アのところや、水責めの絵や、蛇責めのくだりなどを眼の前に差し示して、こうしてやろうか、こんなにして吊り下げてやろうか、工場の裏の草むらから青大将を取つて来て首に巻きつけてやろうか、などと云う、他愛もないものだつたのですが、それが自分自身のマソヒズムと合致して、嘘だと判つていながらブルブルと身内が震える様な脅迫観念に取りつかれ、そうされることがたまらなくいやらしいことなのに、どうしてもそのような場面に引きずり込まれなければならないのですが隔世遺伝と云うことが、此の種の性格の中にもあるものだとすれば、現在私の倒錯した悦びを感じるのでした。

そんな訳で、私は直接的な苦痛を与える責めよりも、心理的なものを好みます。だから辛さ、悲しさ、恥しさと云うようなものに捲れる程の倒錯した悦びを感じるのでした。

絵草紙に憑かれたように、お定まりのお芝居で、お姫様になつたり悪侍になつたりしてその虐げられている人物が、（主として女性ですが）如何にしてそのような破目になつたかと云うストオリイの方が重要で、まして、小暗い蔵の中で遊んだのですが、それが、縛られたり、縛つたりした最初でした。一体あの友達の中の誰がリードしたのか判然としないのですが、捕われたお姫様役の私を前にして、きまつて小さな雲助たちの行う責めは、どちらかと云うと、直接的なものではなかつたようです。絵草紙の逆吊りの場面や、一つ屋の鬼婆アのところや、水責めの絵や、蛇責めのくだりなどを眼の前に差し示して、こうしてやろうか、こんなにして吊り下げてやろうか、工場の裏の草むらから青大将を取つて来て首に巻きつけてやろうか、などと云う、他愛もないものだつたのですが、それが自分自身のマソヒズムと合致して、嘘だと判つていながらブルブルと身内が震える様な脅迫観念に取りつかれ、そうされることがたまらなくいやらしいことなのに、どうしてもそのような場面に引きずり込まれなければならないのですが隔世遺伝と云うことが、此の種の性格の中にもあるものだとすれば、現在私の倒錯した悦びを感じるのでした。

そんな訳で、私は直接的な苦痛を与える責めよりも、心理的なものを好みます。だから辛さ、悲しさ、恥しさと云うようなものに捲れる程の倒錯した悦びを感じるのでした。

絵草紙に憑かれたように、お定まりのお芝居で、お姫様になつたり悪侍になつたりしてその虐げられている人物が、（主として女性ですが）如何にしてそのような破目になつたかと云うストオリイの方が重要で、まして、小暗い蔵の中で遊んだのですが、それが、縛られたり、縛つたりした最初でした。一体あの友達の中の誰がリードしたのか判然としないのですが、捕われたお姫様役の私を前にして、きまつて小さな雲助たちの行う責めは、どちらかと云うと、直接的なものではなかつたようです。絵草紙の逆吊りの場面や、一つ屋の鬼婆アのところや、水責めの絵や、蛇責めのくだりなどを眼の前に差し示して、こうしてやろうか、こんなにして吊り下げてやろうか、工場の裏の草むらから青大将を取つて来て首に巻きつけてやろうか、などと云う、他愛もないものだつたのですが、それが自分自身のマソヒズムと合致して、嘘だと判つていながらブルブルと身内が震える様な脅迫観念に取りつかれ、そうされることがたまらなくいやらしいことなのに、どうしてもそのような場面に引きずり込まれなければならないのですが隔世遺伝と云うことが、此の種の性格の中にもあるものだとすれば、現在私の倒錯した悦びを感じるのでした。

そんな訳で、私は直接的な苦痛を与える責めよりも、心理的なものを好みます。だから辛さ、悲しさ、恥しさと云うようなものに捲れる程の倒錯した悦びを感じるのでした。

そのまま残つていて、それに強く心を吸い取られている故だろうと思つて居ます。

丁度高いところから下を覗くとゾーツとする感じ、あれなのです。あの背筋が冷たくなるのは恐怖なのですが、私にはそれが何処かで快感と結びついてしまつてでもいるのでしょうか。また鉄道線路の横などを歩いていて、列車が通る度に、あの車輪の中に無理矢理に投げ込まれなければならない運命にあるとしたらどんなに恐ろしいだろうと思つて見たりするのですが、そう考えるだけで、もうゾクゾクして来て、身体中が熱くなつて来る様なこともあります。そんな訳で、私の好みは鞭で打たれることよりも、あの鞭を振り上げられた瞬間が一番高潮なのです。今火で焼かれると云う直前のあの脅えが好ましいのです。

表題に関係のないことを長々と書いてしまいましたが、この私の心理を判つて戴かないことには、私の試みた責めのあり方が、その目的や主要部分が何処にあるのか理解して戴けないのではないかと思います……。

二

実際に「責め」（と云つても責めではないかも知れませんが）を試みる機会が多くなり出したのは、戦争が終つてからのことで、それまではもう受け身ばかりで、能動的立場になろうとは思つて見なかつたのですが、思いもかけず、いつの間にやらそうなつてしまいました。舞鶴の病院にしばらく居た関係で私が京都に舞いもどつてからも、同じように京都の病院に転勤して来た看護婦さん達がよく遊びに来て呉れました。

この人達が当時の私の下手な絵の対象になつた訳ですが、その頃は三条堀川と云うところに上下四間の家を借りて、たつた一人で生活していましたので、そうした耽溺の日々を送るには、時間的にも、周囲の関係も恵まれていたようです。ただ経済的にはそれ程でもなかつたのですが……。

さて、その人達は私の性格をよく理解して

いてくれたので、そのような行為は案外やすやすと出来ましたものの、矢張り一種の云いようのない不安な気持になるらしく、Kと云う友人は縛られ始める時から、もう上ずつた様な声で、出来るだけ早くほどいてほしいと云うことをくり返し云うのです。そんな態度をとられると、私も何だか却つて昂ぶつて来て、意地悪く転がしておいたりするのですがもう一人の、うんと若いN子は、縛られても案外ふてぶてしくて平気らしくよそおつているたちでした。

気楽なのでしげしげとよく遊びに来た此のN子を、私はいいことにして虐めました。

あまりいつも平気な顔をしているので、一度困つた顔が見たいものだと思つていた或る夏のこと、おろしたてのワンピースがしわになるからと云うのでN子がそれを脱いだことがあつたのですが、シュミーズ一枚になつた彼女をとうとう裸にしてしまつたのです。

前に述べました様に、その頃まで、〝試みられた〟ことはあつても、私自身が相手の全裸を縛つたことはなかつたのです。

シュミーズの肩を外しておいて、後手に縛つてしまつてからは、もうこちらのものだと思つていたのですが、なかなか、どうして、

あとはいやだいやだと云う訳で、全部脱がせるまでに大騒ぎで一汗かいてしまつたのです。その日に限つて表戸を閉め忘れていたのが変なことになつてしまつたのですが、N子の匂うような可哀相な姿をスケツチしようと見廻して夢中になつている最中に、叔母が近まつた私は、あのやるせない身も世もない恥かしい気持をKさんに与えたらどんなに素晴らしいだろうと思つたのです。

勿論、故意にKさんの恥かしい姿を人に見せることは、折角私の無理を辛抱して訊いてくれる人に対して悪いことなのですし、N子の場合でも思わぬ失敗とは云いながら、その後しばらくの間は遊びにも来てくれなかつたので、若しKさんにそんなことをすれば友情を害することになります。

しかし、一度燃え上つた意慾は私には消すことが出来ませんでした。

いろいろ考えた末偶然のようにN子を訪ねて来た帰りに訪ねて来て、のこのこ二階に上つて来てしまつたものですから、私があわてるやら、N子が泣き出すやらでとんだことになつてしまいました。

その時のN子のやるせない顔付が頭の中にこびりついて、何かゾクゾクとしてしまつて用達に来た帰りに訪ねて来て、のこのこ二階に上つて来てしまつたものですから、私があわてるやら、N子が泣き出すやらでとんだことになつてしまいました。

その時のN子のやるせない顔付が頭の中に浸み込んでしまつ

てではなく、恰度、そんな時間に合わせて人が来て呉れる様に約束しておいたのです。

二階の表の間が三畳で、奥が六畳。その奥の六畳にKさんは手も足も縛られた全裸のまま変な姿で転がつています。訪ねて来た染屋の息子の中川さんと私とは表の三畳で話をしているのです。

中川さんが訪ねて来た時は、スケツチをしている最中でしたが、さつと不安な顔付になつたKさんに、ちよつとそのまま待つてて、直ぐ帰つて貰いますからねと階下に降りて行きましたがその時、着物をかけて、と云うKさんの声を聞えないふりをして心の中ではKさんの気持を思いやつてゾクゾクして居たものです。

中川さんと私とが連れ立つて二階に上つて来た時のKさんの気持はどうでしたろう。勿論、間の襖は閉め切つてあるので、三畳の間からはKさんの姿は見えないのですけれど、彼女にしてみれば、その襖一枚が頼みの綱でそれもいつどんなことで開けられるやら判らないのですから、全身から脂汗がにじみ出るような身も世もない一瞬だつたことでしよう。

中川さんとは用件を手短かに済ませてしまつて、それから私はお芝居にとりかかりました。今、となりの部屋でKさんをモデルにしてスケツチしているのだから、直ぐ帰つてほしい、とわざとすげなく云うと、縛りが好きなその人は是非仕事をしているところを見せて欲しいと熱心に頼むのです。勿論こう来ることが判つているのでこの人を何でもない用事でそれとなく呼んでおいたのですから、私自身がもうKさんになつた様な気持で昂つてしまつていました。此処で無理矢理に中川さんに襖を開かれればKさんはもう二度と私のモデルにはなつてくれないかも知れません。熱心に頼む中川さんの声と、それを断る私の声とを聞きながら次の部屋でKさんはどんな気持でいたことでしようか。私はわざと意地悪く襖を背中でガタガタと押したりしました。

駄目です、駄目です、とKさんに私の声を聞かせながら、さも中川さんに押されて襖に背中を押しあてて争つているような演出は、今にもガラリと襖が開かれて、男の眼の前に自分の恥かしい姿がさらされるのではないかと、それこそ気が気でないKさんに非常に強いショックを与えたことだろうと思います。

三人が三人とも、それぞれゾクゾクして居たに相違ありませんが……。

しかし、そう云つても矢張り火なのですから本当にその気になつてやられたら耐らないでしようけれど。

私がここで申上げたいのは、蠟燭責めの効

三

蠟燭責めのことがよく小説や何かに書かれるのですが、私が実際に自分自身で行つて見て、どちらかと云うと煙草の火の方が熱い様に思いますけれど、どうでしようか？　尤も同じ蠟燭の火でも当て方に依るのですが、あれは熱いと思つて身を引くと却つて耐らないのです。大道や縁日の夜店でよくやつている気合術に、あの蠟燭の火の上に掌をかざすのがありますが、あれは別に気合をかけなくても出来ます、蠟燭のシンを皮膚で撫でる様にこすり廻せばそれほど熱くなく、掌はススで黒くなりますけれど火傷はしないのです。

蠟を上からタラスことも、別に熱いとも思いません。ポタリポタリ落されたくらいでは声を出すところまで行きません。ただ、見た眼には煙草の火を押しつけるよりも雰囲気的な効果が大きいので用いられるのだと思いますし、雰囲気を楽しむ為なら素晴らしい道具だと思います。

しかし、そう云つても矢張り火なのですから本当にその気になつてやられたら耐らないでしようけれど。

私がここで申上げたいのは、蠟燭責めの効

わせるかも知れないのです。光線を下から受けた人の顔と云うものは、どんなに美しい人であつても、何か知ら気味の悪い陰影を持つもので、それが責め場にのぞむ男の顔であつたとしたら、もつと気味の悪い妖気をただよわせていることでしよう。その上、男の顔に気味悪い陰影を作り出している蠟燭の灯は、娘のふくよかな肌の起伏を、より以上もつこりと闇の中に浮き上らせる役目もするのです。光線の動きにつれて、あらゆる角度から妖しく浮き出してながめられる娘の裸身は美しい絵なのです。しかし娘にして見れば、直接炎を膚に当てられる苦しみよりも、何をされるか判らない、気もそぞろになる様な灯の動きの方が心理的には苦痛だろうと思います。

軍隊の思い出を語つてくれた人が、殴られている最中よりも、殴られる前に古参兵から叱言を云われて居る時の方が恐ろしい気がする、と云うのも本当かも知れません。そして打たれる順番が自分に廻つて来て、相手が拳を振り上げた時が緊張度が最高になるとも云つて居りました。

そんな意味で、前の蠟燭責めなどとは、心理的効果を狙つた含みが多分にあるのではな

果は、火責めの辛さと云うこともありますが、それよりも雰囲気の妖しさと云いますか、演出上の効果の方がより以上大きいのではないか、と云うことなのです。

電燈の明るくついている下での蠟燭責めなど絵にもなりませんし、白昼のあの炎の弱々しさも馬鹿々々しいものだと思います。矢張りうす暗い土蔵だとか、地下室だとかがバツクになつてこそ、あのトロトロとした炎のゆらめきが生きて来るのでしよう。

その様な場所の柱に縛り付けられた半裸の娘は、現実に火を身体に当てられなくとも、

いでしようか。私は、そんな雰囲気を現出して見て何度もそう思つたことです。

また、いやらしい虫などもも、責めの小道具によく使われるようですが、これはいたずらつ子が棒切れの先に死んだ鼠や蛇などを引かけて、女の子を追い廻す、サジズム心理と同じでしよう。あのおぞましい形の虫どもが自然に持つている醜悪な姿と云うものは、女にとつては大へん気味の悪い感じを受けるもので、別に危害を加えられることはなくてもキヤツと飛び退きたくなるものなのです。

しかし、飛び退こうと思つても、縛られてでもいれば避けることが出来ないので、美しさは倍加することでしよう。

こんなことを遊戯半分に或る奥様にやつて見たことがあります。子供が二人ある人で、古くから親しくしているので気のおけないままに、よく無理を云つたものですが、美しい人でした。

全身が総毛立つと云うのは本当で、きれいな肌に粟粒の様な毛穴がプツプツと現われるのです。使つた虫は、わざわざ近所の子供に頼んで手に入れた大きな百足でした。勿論生きているのは私の方がごめんなので、頭を石でたたき殺したのをもの好きに空罐の中に入れてとつておいたのです。

それを箸でつまみ上げて眼の前に持ち上げただけで、その人はぞつと、総毛立つてしまつたものでした。唇に押しつけなくともそうなのです。縛られた身を後ずさりながら、美しい眼を、丸く見開いていました。そして、ひびきを押えたかん高い声で、子供が起きるわ、子供が起きわ、と必死に云うのです。わざと私がむき出ししてにしまつた膝や肩には粟粒の様に毛穴が立つて、眼を近ずけて見ると柔らかな細いうぶ毛が、一本一本粟粒の上に直立していました。子供が起きるわ、と云う言葉は不思議に聞えますが、これには意味があるので、その日一緒に連れて来た一年半くらいの赤ちやんが隣室に寝かせてあつたので自分が悲鳴を上げれば折角寝ている子供が起きる、だからそのようなことはしないで頂戴と云う意味なのです。しかしそれが今にも虫を押しつけられそうになる切迫した短い時間なので、単的に要約された言葉になつて現れたものでしよう。

女と云うものは、奇妙にそのような飛躍した心理があるものなのかも知れません。

（おわり）

風俗草紙七月號

風俗草紙は都合により五六月号休刊致しましたが七月号より読者諸覧の御要望により復刊五月中旬発行の予定で御座います倍旧の愛読を賜りますよう切に御願申し上げます

倘旧号御入手もれの方は直接本社へ

風俗草紙 七月号 一〇〇円〒共
風俗草紙 八月号 一〇〇円〒共
風俗卓紙 九月号 一〇〇円〒共
風俗草紙 十月号 一〇〇円〒共
風俗草紙十一月号 一〇〇円〒共
風俗草紙十二月号 一〇〇円〒共
風俗草紙 一月号 一二〇円〒共
風俗草紙 二月号 一〇〇円〒共
風俗草紙三四月号 一五〇圓〒共
秘蔵版風俗草紙号 五〇〇圓〒共
以上残部僅少につき至急御申込み下さい

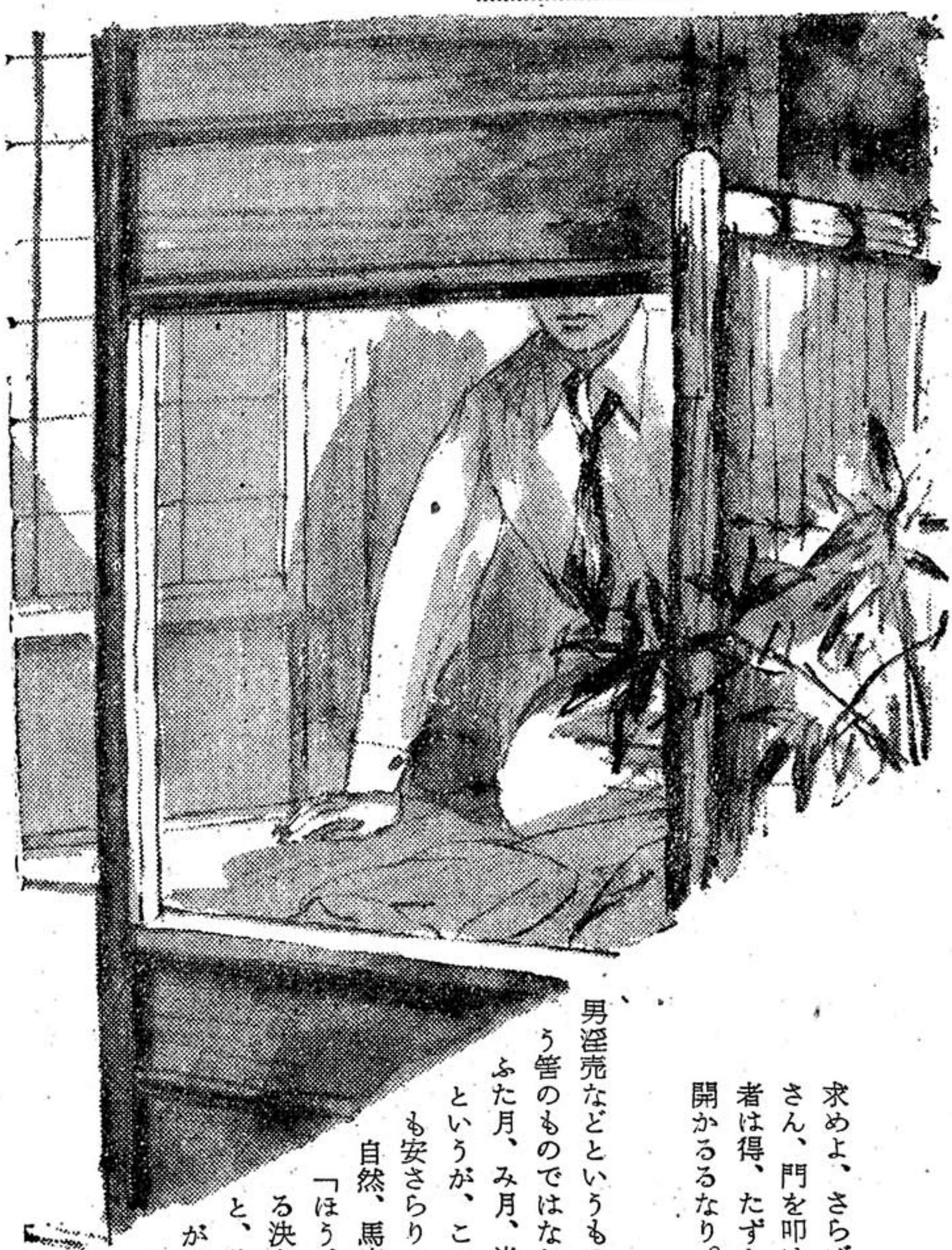
東京都千代田区猿楽町一ノ三
株式会社 日本特集出版社
振替東京一〇一、五一七番

異色風俗小説

女の扉

武野藤介

水野浩画



求めよ、さらば与へられん、尋ねよ、されば見出さん、門を叩け、さらば開かれん、すべて求むる者は得、たずぬる者は見いだし、門をたたく者は開かるるなり。　――マタイ伝第七章

男淫売などというものが、勿論、公然と、世間の商売往来にあろう筈のものではなかつたが……。

ふた月、み月、半年とたつうちに、俗にも、習うより馴れろというが、この商売が身ついてきて、そうなれば津村秋三も安さらりいで、夜学の英語教師などをしているのが、自然、馬鹿らしくなつてきたから、

「ほう、それじや、いよいよ、探偵作家で身を立てる決心をしたんだね」

と、その辞表を受理した教務主任の佐久間さんが、半ば羨ましそうに云つたが、まだ、投書家の程度ながら、津村秋三がコツコツと探偵小説を書いているのは、同僚間でもよく知られていたからだつた。

夜學の英語教師から、世を忍ぶ男淫売に轉業した男！美しい人妻や未亡人が彼の躰を買いに来るのだ。風俗の底流を艶治な筆に斬る傑作小説

「二兎を追う者は一兎を得ずというからな」

津村が曖昧にうなずいてみせると

「君、いくつだッたッけ？」

「三十二歳です」

「若いな。商売替えをするのなら若い時のほうがいいのさ。まだ、独身だったね。係類のないのが羨ましいよ」

と、このくらいの簡単な会話で、別に、引きとめられもせずに、その場で辞表が受理されたのは、やめられても惜しいほどの教師でもなかったからだろうが、ひとつには、この程度の英語なら、大学生のアルバイトでもやれたので、その後任にも困らなかつたのだ。

「おやツ？　君。髭を落したのかね」

「……」津村は、あわてたように、こし椀くなつていた。

「道理で……君の顔、さつきから、何ンだかへんだと思つたよ。ウム、考えたね。教師でなければ髭は無用の長物というわけか。つまり、髭を剃り落して、背水の陣を敷いたということなんだね」

と、そんなことを云つて佐久間さんが、そのとき、面白そうに笑つたのである。

ところが……いちど、剃り落した髭を、津村秋三はまた近頃伸ばしたのである。が、教師時代のそれとは、すつかり、形を変えて、コールマン髭にした。「モロッコ」という古いアメリカ映画に出てくる俳優の口髭である。それがまた、面ながな美青年で、西洋人のような白哲の、すこしあか味をおびた顔の色にもよく似合つたのだ。

今日も、津村秋三は朝から机の前に坐つていた。コツコツと書いているのが、近頃の彼のものやら、勉強のつもりなら無駄骨でもあるまいが、発表するあてのない探偵小説に苦吟しているのだ、右の手にはペン。あいている左の手の、指先で、そのコールマン髭を、ときどき、小刻みに掻いているのが、一体彼のほうでおかしな手癖だつたが、それがいかにもワイセツな感じなのは、あの、チチラチオを連想させるからだろう。

事実、今夜も、それが好きな有馬夫人のところへ、例の、商売往来にも無い商売に出かけることになつていたのだつた。

ここはアパートの一室。アパートといつても、素人下宿に毛の生えたぐらいなもので、食事付だつたが、その七部屋を一人できりまわしている女中のお豊が、同宿人に隠すようにして、何かと、彼の身辺の世話をやきたがるのは、俗にもいう「気がある」証拠のようなもので、文学少女みたいなところもあつたから、そこが身最、の過大評価で、津村秋三が探偵作家の眼鼻がつくまいが、きりようも十人並、えくぼの愛嬌も捨てたものではなく、まんざら、不似合な夫婦でもなかつたのだ。

ときどき、このお豊が彼の婚約者か何かのように、振舞うのは、はたの見る限にもいじらしいようなところがあつたが、一体彼のほうでそれをどう思つているのか、いまだに、その反応を彼が見せないのは、女は欲しかつたが、彼自身、心迷いがしていたからだろう。

そこへ、こんどの、珍商売が始まつたのである。

そんなことを夢にも想像していないお豊が、随分、お洒落になつたわね」

と、これも探偵作家になるための一歩前進ぐらいに思つて、頼もしそうな、ひやかしかたをしたりするのだつた。

同宿人が、耳をすこし敏感にはたらかせると、日には何度も、二階の梯子段を昇り降りするお豊の、パタパタと、スリツパを鳴らした足音が、津村の部屋へ用事がある場合と、そうでない ときとの区別もつきそうなもので、いまも、そのいそいそとしたスリツパの音が、津村の部屋の前にとまつて、

「津村さん。お客さまよ」

「お客さま？　どんな人だね？」

第一、それも津村の性格の一部だつたが、これまでも、彼の部屋へ客などが訪ねて来たことがなかつたのだ。その物珍しさに、お豊も聊かあわてたらしく、名前も聞かずに取次いだのだつた。ドアのあく音がした。

「津村さんの叔父さんぐらいの御年配の方ですわ」

机に坐つて背中を向けたまま、

「誰だか知らないが……」

「お仕事中だからといつておことわりしましようか。お髭を生やしていらつしやるわ」

「ほう！　髭をね」

「お気の毒ですが、また、出直して下さい……

…と、申しましょうか」

「そうだな。髭なら僕も持つていることだし、ク

「……」お豊が、頸を縮めるようにして、

スリと笑つた。これではまるで、アルバイト

の学生が、鉛筆や便箋や、ゴム紐などを売り

に来たのを間に合つているからと云つて、こ

とわるみたいな台詞である。それがおかしか

つたのだ。が、いま、ちようど、感興が乗つ

てきていて、それに打込んで、余事のことは

一種の放心状態だと見れば、机に向つたうし

ろ姿も、お豊には何ンとなく頼もしかつた。

その実、津村秋三は、原稿は遅々としてす

すまず、例の指くせに、コールマン髭のさき

を小刻みに掻きながら、今夜、「お約束」に

なつている有馬夫人の、あの豊満な姿態を空

想していれば、そこが娼婦とちがつて、その

夜が待ちどおしいほどに亢奮もしてくるのだ

つた。

お豊が、もういちど、ドアから、あのえく

ぼの顔を見せて、

「お客さん。お帰りになりました。ミトメを持

んという方よ。おついでのとき、退職金が出

参して、学校へ寄つて下さいと云つていた

わ。遅くなつたが、僅かながら、御礼をさせて

ているからつて」

独身者の身軽さに、津村秋三は、何もかにも売り払つて、この一張羅を新調したのである。外出するときなど、まことに、颯爽とした青年紳士で、頭のてツぺんから爪先まで、ネクタイの趣味も悪くはない。夜学の教師をしていた頃の彼とは同じ人に見えないぐらいだ。コールマン髭の美貌で、モウパツサンの「ベラミ」の主人公デユロワも、こんな身だつたろうと想像すると、戦後派族の御曹子にもみえたから、ルノーか、シトロエンあたりを乗りまわしていても、ちつとも、おかしくはなかつた。

津村秋三が外出するときは、これも彼の習慣のようになつていて、駅前通りの、パチンコ屋を、ちらりと横眼で見て通るのだが、柴田の模様を見つけると、すつかり、酔いつぶれたほどだつ入つていつて、

「当つているかい？」

と、声をかける。知らぬ顔をして通り過ぎないのだ。

「いま、帰りか」

「いや。今夜は夜業のお約束なんだ。これから出かけるところ、さ」

「夜業なら、さぞ、お楽しみだろう、と申し上げたいところだが、商売とあつては、お楽しみばかりではないからね。どうだ？　まだ、時間があるなら、そこでちよつと……コーヒーでも飲もうか」

津村が肯いてみせると、未練気もなく、柴田は、パチンコ台の前を離れた。

実をいうと……津村秋三に最初、この商売をすすめて、未亡人クラブのようなところへ紹介したのも、この柴田だつたのだ。二人が知り会いになつたのもやはりこのパチンコ屋だつた。二人とも、その日は大いに当つて、びつしよりと汗をかいた。町の銭湯で汗を流して、きゆうと、生ビールでもやつたら、さぞ、うまかろうというような話になつて、意気勾ち相投じたかたちで、その夜は、柴田のおごりで、すつかり、酔いつぶれたほどだつたが、あとから考えてみると、その銭湯で、裸になつた津村秋三の体を、柴田がじろじろと無遠慮に見ていた意味もわかるのである。

が、今もつて、この男の事情を津村は知らなかつたのだ。

「どうだい君なら、御婦人がたのお気にも召したろう。商売繁昌、疑い無しというところだ。技巧は、トレーニングのようなものだか

ら、数を多くこなしているうちに、その個人差のようなものもわかり、自然と、自分で、えとくしてくるものだよ。パン助だつて同じさ。口だけでは教えにくい。それこそ、手をとり足をとつてというふうでなくちやアね」

と柴田は、この商売の先輩らしい口吻で、コーヒー茶碗を匙で掻きまわし乍ら云つた。

このような男淫売を買おうとするほどの女なら、殆ど一人の例外もなく幾人も男の肉体を知りつくした揚句の猟奇か、それが姥咲きぐらいならまだしも、いずれも、それ相当な年輩で、未亡人なら、きまつて不美人で、ありあまつた遺産を持てあましているような有閑マダムだつたり、多情で多淫、閨房のことにかけても、女の羞恥心さえ忘れて、海千山千の女ども。

そして、ここにも「初会」があり、「裏を返して」から、「馴染み」になる順序がある。

「そんな女どものことだから、変態みたいなのがいるのはありがちなことで、俺なんぞも何度か、そいつにぶツつかつたさ。きたねえるわね。あれを見ると、私、体じゆうが、ぞくぞくしてくるのよ。私の、前の夫……海軍のほうの軍人で、これは戦死しましたけれど、口髭があつたものですから。今の、再婚した夫は、アメリカ映画とちがつて……髭を生やしていないのよ。これ、アメリカ人みたいに、その口髭がなくなる？」

と、最初は、こんな謎のようなことを云つた。

「これ、つかつてみて下さらない？」

する女もいるからね。」

「……」津村は、さツと、顔が赧くなりそうだつた。危く、平気な顔をよそおつたが、その有馬夫人というのがそれだつたからである。事務引継というのもおかしいが、一人では商売が廻りきれなくなつたし、最初から、へんな女にぶつかるのは腐るだろうからと、実は、柴田が紹介した第一の女がこの夫人なのである。

そのときの、有馬夫人との会話を、いま、まざまざと思い出すのだつた。

「あなた。外国映画をごらんになつてお気づきにならない。フランス映画とアメリカ映画のちがいよ。色事師が、フランス映画では、

と、津村の鼻の下を、指先で撫でながら云つたものだ。

「あの、コールマン髭がいいわ」

その形まで注文をつけた。実は、津村秋三のコールマン髭にはこれだけのいきさつがあつたのだ。なる程、柴田には髭が無かつた。津村が云うには、

「しかし、えたいのわからないような女がいますなあ」

「戦後は男も御同様さ」

この位のように、とは、柴田も云わなかつた。それが津村にはちよつとおかしかつた。

「その素性や、身上話を、こちらから根掘り葉掘り聞いちやいけないンだ。名前だつて、枕もとの、ハンドバッグから取り出したのが、髭剃りのときに用いる小型な刷毛。

「ああ、物足りない！」

「チク、チクと、刺すところが何ンとも云えないのよ。あなた、口髭をお生やしにならない？」

ほんとうかどうかわかりやしない。こちらから、何も聞かないというのが、この商売のコツみたいなもの、さ」

事実、その寝物語に、女のほうから、問わず語りに打明け話をするのもあつたが、どこまでがほんとうか、また、嘘とわかるような節々もあり、その身上話にしても、ところどころ、勿論、自分の都合のいいように潤色もしていたろうし、読んだ小説や、見た映画の筋を、巧みに織りまぜているような跡さえあつたから、気にいりそうな合槌ぐらいは打つても、いわば、黙つて聞いているほうが無難でもあつたのだ。

有馬夫人は、その身上話めいたことも、あの口髭のことを云つたぐらいのもので、津村には、まるで、謎のような女性だつた。

「女は謎の生物だなあ……」

最も、彼女の云つた数が、そのままに信じ兼ねたし、なによりも、美人だつたのが彼女の謎をいよいよ深めた。

「女を謎にしてしまつたのは男の罪だともいいますね」

と、津村は云つた。

「こないだ、僕の買われた女なんかにも驚いたな。あんなのは僕もはじめてだつた。ひど

い後屈なんだよ。それが君、こういう女どものなかには珍しく、なかなか、美人だつたが、どんな美人でも、あれじや玉にキズ、さ。女は、顔だけじやわからない。まつたく、わからないものだと思つたね。それが象徴しているといふ女の唇については、僕も、臨床学的に、産婦人科の医者ぐらいのことはわかつているつもりでいたが。その唇を見て、女の、よろこぶカンどころがわかる。これが僕の自慢でもあつた。が、後屈は、その唇のかたちでは全然わからない。それもその筈で、それなら、手術でその後屈をなおしたら、唇もかたちが変るかというに……」

「そうはいかないでしよ」

「寝た瞬間に、それとわかつたとき、僕の感情がすうつと逃げていつたからね。これには弱つたよ。大汗をかいた、な。子宮を吊りさげている紐がゆるんでいるんだ。子供を産んだあとなどによくそんなことがあるらしい。簡単な手術でなおるんだ。僕、よつぽど、そう云つて忠告してやろうかと思つたぐらいだが、要するに君、女の謎は、それを男の罪などというのは文学的表現で、すべての子宮につながつているの、さ」。

津村が、ここらあたりで腰をあげたのは、もう、ぼつぼつ、出かけなければならない時間だつたからだろう。腕時計を見た。

或日のことだつたが……。

その日は、未亡人クラブを通じてとつた客だつたが、この客と、アベック、ホテルのシヨート・タイムを済ませてから、一時間ばかりダンス・ホールでお相手して、別れてから一人で、津村秋三は、銀座へ出てみた。銀座が夜の化粧をしたばかりの頃。ダンス・ホールを出て来た津村が、これも商売上の必要から、近頃、覚えたばかりのステップを、心愉しそうに靴先で調子をとりながら、その舗道を、土橋を渡つて、並木通のはしへ折れていくと、うしろから、除行してきた一台の小型タクシーが、

「旦那……これへ旦那をお乗せして来いといつけられたのですが……」

「僕かい？」と、津村が立ちどまつた。

「御婦人なんですがね、へ、へ、へ」

と、また、その運転手が、意味ありそうにニヤニヤと笑いながら、彼の耳へ口を寄せるばかりにしてそんなことも云つた。

「よし、乗つてやろう……」

乗込むと、すぐ、クルマは滑りだしたが、尾張町のゴー・ストツプを越して、築地方面へ走つて行く。歌舞伎座前、三原橋のゴー・ストツプも通り越すかと思つたら、昭和通へと右に折れた。案外、このストリートは暗

の暗い物蔭へ曳かれて行つて、男淫売とは男の風上におけない奴だと、面罵された揚句、撲る蹴るというのにあわされた男の話を、あの柴田から聞いたことがあつた。

津村はまだ、そんなめにあわされことは一遍もなかつたが、てつきりそれに違いない。が、津村は腕のほうには自信があつた。我ながら、喧嘩上手とは思わなかつたが、学生時代に柔道をやつたりして、相当なものだつたのである。ひとつには、いわば、この暴力は商売妨害でもあつたから、このような機会にこそ、法律用語でいえば緊急避難で、ウンとかかる逆コースの反動性の奴等を、痛いめにあわせてやる痛快味も思つてみた。

「旦那。据膳食わぬは男の恥てなことを言いますぜ」

い。

が、これはどうやら、商売妨害の暴力沙汰でもないらしく、運転手が、客席に背中を向けたままバツク・ミラーから、津村の顔に微笑みかけながら、

「これを、その御婦人が、お渡ししてくれということでしたから……」

と、うしろの坐席の、津村の膝の上に投げてよこしたネツカチーフ。ぷんと、女の身につけた香料の匂いが、彼の鼻腔を刺戟した。どこかの寝床で、鼻に、覚えのある香水。コツテイだ！　それが、あの、有馬夫人の匂いだつたのだ。

「御婦人がたは秘密がお好きですからね」

と、その運転手が、ポツリと一言、フランス映画にでもありそうな台詞を云つた。

秘密といえば、その秘密が、確に守られることを約束し、それを信じさせたら、誘惑に抵抗し得る女は一人もあるまい。それをまた別の言葉でいえば、その秘密の守られる確心さえ与えられたら、人妻だろうと、未亡人は勿論、女は一人の例外もなく、仇し男に肌身を許すものだ。この商売は、いつでも、そういう信念を持つていなければいけないと、こんな意味のことを、もつと露骨な言葉で、い

つかあの柴田が云つていたのを思い出した。
そのとき、津村は、あの女中のお豊のことがちらりと頭をかすめたので、「処女は？」といつて訊いたら、柴田が云うには、「処女？　処女は女じやないの、さ」と。これも、僕たちの商売じやないからね。すくなくとにも理窟があるように思われるのだ。
自動車は、東京温泉の煙突を右に見て、それから半町ばかり先を左に折れたが、新橋演舞場の手前、その露路口でストツプした。
「運転手さん。ここ、よ。御苦労さま」
女中風な小綺麗な女が立つていた。
が、この女の顔に、全然、津村は見覚えがなかつた。あの有馬夫人のとこの女中なら、勿論、津村もよく知つていたから、ネツカチーフのコツテイの匂いで、てつきり、有馬夫人だとばかり思つたら、どうやら、これは津村の思いちがいのようだつた。それにしては、なぜ、運転手が、このネツカチーフを津村に渡したのだろうか。
それをスプリング・コートのポケツトから取り出して、その小綺麗な女中に返すと、この女は、皓い歯並に、謎のような微笑を傾けて、
「さつき、奥さまのお供をして、新橋のホールへ参つていましたら、あなたをお見かけしたものですから……」
「……」
「このネツカチーフをお渡ししたら、きつと、あなたは来てくださると、私、奥さまからこの有馬夫人は二号さんらしかつた。
それにしても、さつき新橋のホールで、有馬夫人の来ていることに気がつかなかつたのは、津村も、そこはエチケツトやらを心得いて、いわば、買われた客も同伴だつたから、じろじろと、よその御婦人を強いて見ないようにもしていたからだろう。
「これ、お返しするわ」
「……」その小綺麗な女中が、そこの露路を、肩を並べて歩きながら、袂から取り出したサン・グラス。津村には何ンのことかわからない。黙つて、手にはとつたものの、その物問いたそうな横顔に、また、皓い歯を見せながら、微笑みかけて、
「あなた。マツサージの先生よ。按摩さんなの。そのおつもりで、ね」
「あ、なるほど……」
と肯いてみせたのは、津村にも、このお芝

居の筋書がすこし呑みこめかけたらしい。

そのサン・グラスをかけて、

「それじや、私、眼も、つぶりましようか」

「いいえ。いいのよ。あきめくらのつもりでいらつしやいな」

「杖がいりますね。あの白い杖」

「私が、お手をひいてさしあげますから…」

つと津村は、やわらかい女の手のひらで、横から片手を握られた。にわか盲目である。

芝居気のない津村は、すつかり、戸惑いながらも……苦笑したのだつた。

連れられていつたのは、やはり、その露路奥の、高板塀の待合で、お勝手口に、蔦屋という軒燈が出ていた。

「お湯へどうぞ……」

と、廊下を、これも手をひかれて、浴室へ連れて行かれた。

津村には、そんなにまでして、逢おうとしてくれた有馬夫人が嬉しかつた。娼婦でも、最初にとつた客は、何かにつけて思い出し、忘れられないものではなかろうか。有馬夫人は女と男とのちがいで、津村が最初に買われた客で、それがもう、ふた月の上も続いたと、「馴染み」だつたから、ともすれば、津村も、商売気を離れた気持にもなるのである。

あの柴田から注意されて、

「女郎なんかと同じで、こちらから客に惚れると、第一、体が続かないし、他のお客に、つい、サービスをサボることにもなるからね」

と、云われたことがあつたが、こないだのあの夜業のときに、それ、してさしあげるわ」

「私もあなたに、いきなり、津村の腰に顔を投げかけてきた有馬夫人だつたのだ。

「いいえ、私は……」

と、津村が逃げようとするのを、

「きたないと思わないわ、私……」

「……」

「だから、遠慮なさらないでよ。私が、そうしたいと思うンだから。そうさせてよ」

それには、女の効利的なふくみもあつたろう。が、津村にはこれが初めての経験だつた。津村に、わざわざ、コールマン髭を生やさせたぐらいで、彼女もその愛撫が好きなだけあつて、そのテクニックもうまかつた。いま、津村秋三は浴槽に浸つて、その夜のことを思い出しながら我乍ら、見ていて、恥しいほど、亢奮していつた。

そのとき、がらりと、浴室の刷硝子があいた。

振り向くと、濛々たる湯気の向うに、茶羽織をひつかけた細帯姿の有馬夫人が、につこりと、皓い歯を見せて立つていた。

「シーツ……」

と、指一本、自分の紅い唇の上に、十文字に、縦に立てて、くちばやく、

「あの女中を買収しておいたのよ。昔、私のうちにいた女中なものですから。マツサージの先生のつもりでいて、ね。ここのマダムが私の古いお友達なの。照れくさいからよ。早くあがつていらつしやいな。お離室よ。待つているわよ」

と、自分の云いたいことだけ云つて、トイレツトの刷硝子をあけた。便所へ行くようなふりをして、早く、津村に顔が見せてやりたかつたからだろう。汚職で捕まつていた旦那が、保釈になつて、小菅を出てきたとすればこれからは自宅のあいびきは危険だつたし、待合を利用することは、誰でもすぐ思いつきそうなことだつた。

「色恋に夢中になると、女という奴は、どんな六ケ敷しそうなことでもやつてのけるものらしいや……」

津村は、肚のうちで、感心したように呟いたのだ。

思い出のギャング映画

ギャング映画誕生

アメリカで劇映画が初めて作られたのは、映画が発明されてから九年目の一九〇三年のことで、それはエジソン・フイルムのエドウイン・S・ポーターという監督が作った「**大列車強盗**」と題する列車襲撃の集団強盗を描いた活劇もの、今のギャング映画であつた。

又フランスでも劇映画が初めて作られたのは一九〇三年であつたが、これが「**ギイズ侯暗殺**」と題するやはり、殺人事件を扱つたものであつた。

さらにまた、日本で劇映画が作られたのは一八九九年、すなわち明治三十二年のことであるが、この映画が「**清水定吉**」と題して、当時世間を騒がせたピストル強盗の清水定吉

山下修平

カツト写真は「死の接吻」

を描いたものであつた。

この「清水定吉」は広目屋という当時の映画会社が、日本橋本町の写真機商小西六商店に勤めていた浅野四郎というキヤメラマンに撮影させ、赤坂の演伎座で上映したもので、清水定吉を横山運平、小川巡査を市川目高という配役で、まだ撮影所というものがなかつた当時のことなので、山王下の中上川邸の庭を背景にして撮影したものである。

このように、各国で作られた最初の劇映画が、いずれも申し合せたようにギャング映画であつたということは、興味のあることである。

☆…「ジゴマ」のころ

そして明治三十五年にはギャング映画の元祖のように言われている、あの有名な「**ジゴマ**」がフランスのエクレール社によつて作られた。

「**ジゴマ**」は巴里の日刊新聞ル・マタン紙に発表されたレオン・サージーの原作を映画化したもので、今日からみれば平凡な犯罪探偵劇なのだが、一篇、二篇、三篇と続けられるスリルに富んだ活劇は、当時の活動写真フアンの血を沸かせたものであつた。

この三巻の映画が創立間もない福宝堂に輸入された当時は、使いものにならないように思われて、お倉になつたままお棄てられようとしたのであつたが、番組の都合で、これが封切られると、驚いたことに、全然予想を裏切つて大入満員の盛況を続けジゴマの名はあらゆる人達の話題の中心になり、ジゴマの手口を真似た強盗や不良少年が現れて街の人達をふるえあがらせてしまた。

わが国でも「**続ジゴマ**」「**女ジゴマ**」「**日本ジゴマ**」などというすさまじい映画が製作され、中州の真砂座では山崎長之輔一派が、「**濵路駒**」という芝居を上演し、子供達の遊戯にまでジゴマごつこが現れるようになつた。

ところが教育者達の非難がケンケンゴウゴウと捲き起り、当局でも棄てておけず、遂に明治四十五年に上映を禁止してしまつた。

映画が社会問題にまで発展し、その悪感化がやかましく論じられるようになつたのは、この「ジゴマ」からである。

「ジゴマ」の好評はエクレール社をして、同じスタツフで「**悪魔パトラ**」「**プロテア**」を作らせ、ゴーモン社をして同じくギャングもの「**フアントマ**」「**ドラルー**」を作らせ、アルセーヌ・ルパンを産んだ国民の悪漢探偵趣味をいよいよあおつていつた。

「突然の恐怖」のジヤツク・パランス

「俺は善人だ」のエドワード・G・ロビンスン

「ファントマ」は大正七年に日本に公開され好評であつたが、この全盛を誇つたフランスの活劇も、間もなく現れたアメリカの冒険活劇のスリルとサスペンスに路を譲らなければならなかつた。

ドイツ映画では、ヴアイタスコープ社のブラウン探偵もの「**天馬**」が大正三年に封切られ、馬が軽気球に天高くつるしあげられるシーンがファンを喜ばせた。

☆…人気を唆つた「名金」

アメリカ映画が人気を得はじめたのは、連続活劇映画が現れた大正四年のころからで、そのトップはユニヴアーサル映画の「**名金**」であつた。

「名金」は横浜の輸入商平尾商会が輸入したもので、大正四年の暮に浅草の帝国館で封切られ、「ジゴマ」以来のセンセーションを捲き起した。

これ以来洋画上映館は連続映画を必らず番組に組むようになり、この流行は大正十二年の震災まで続いたが、人気の絶頂は大正五、六、七年あたりで、その頃封切られた主なる連続映画は、ユニヴアーサル映画の「**紫の覆面**」「**電話の声**」。パテー映画では「**鉄の爪**」「**運命の指輪**」「**護る影**」などで、そのストオリイは貴重な財宝や秘密地図をめぐつての葛藤で、勇敢な青年や令嬢の危難が相次いで起り、ライオンの檻に投げこまれた青年や、鉄路に縛られた令嬢の運命や如何に？というところで「天国と地獄」の勇ましい伴奏のうちに来週のおたのしみということになるのであつた。

この「天国と地獄」の伴奏

「情け無用の街」

音楽は当時の少年達の胸をかきたてた。そのために教育上面白からずというので、映画館は甲種乙種に区別され、少年少女達はこの種の映画は見られなくなつてしまつた。

☆…ギャング映画全盛期

こうして犯罪は映画の最もよきネタとして映画に取り入れられつつ、映画はサイレントからトーキーに進歩し、やがて犯罪映画の黄金時代ともいうべきギャング映画時代がやつてきた。

そのトツプを切つたのが、昭和三年に封切られたパラマウント映画「**暗黒街**」であつた。これは去年来朝して「アナタハン」を作つたヨセフ・フオン・スタンバアグの監督作品で、ジョージ・バンクロフトという蛮性的な俳優を、一躍スターにのしあげ、イヴリン・ブレント、クライヴ・ブルツクの二女優に確固たる演技を示させたもので、プル・ウイードと呼ぶ暗黒街のボスを主人公にして、その人間性、やかに描きだしたものである。

これに続いてギャング映画が続々と上映され、昭和六年には

リチヤード・ウイドマーク

ゲーリー・クーパー、シルヴイ・アシ監督、ゲーリー・クーパー、シルヴイ・アシドニイ主演の「**市街**」などというスマートなギャング活劇も現れ、昭和八年にはその人気の絶頂期を迎えた。

この年のギャング映画の傾向は、暗黒面の暴露であつて、シカゴのギャングスター、アル・カポネの映画化が続々と行われ、ベン・ヘクト原作、リュイス・マイルストン監督、アドルフ・マンジュー、パツト・オブライエン主演のユナイテツド・アーチスト映画「**犯罪都市**」が、その代表をなすものであつた。

これは犯罪の都シカゴの市役所新聞記者上りの一日、こしらえられた死刑囚をめぐつて、政治的暴露と諷刺を盛りこんだものであ

「民衆の敵」、マーヴィン・ル・ロイ監督の「犯罪王リコ」などという作品が現れたが、「暗黒街の顔役」が、この種の映画の決定版ともいうべきものであつた。これはハワード・ホークスが監督したユナイテッド・アーチスト映画で、ポール・ムニ主演、カレン・モーレイ、ジョージ・ラフト共演であるが、ギャングの残忍、酷薄、性格破産があますところなくポール・ムニによつて表現されていた。

昭和十二年ドイツのフリツツ・ラング監督がハリウツドに渡つて作つた、前科者に対する苛酷なる迫害を描いた「暗黒街の弾痕」(ヘンリー・フオンダ、シルヴイア・シドニイ主演)など、幾多の名作が出たが、間もなく戦争のためにこの種の映画のみならず映画そのものの自由が全く奪われてしまつた。

☆…社会劇として復活

そして終戦と共に現れた映画は、広い意味にも、その大部分が犯罪映画であつた。

酷似の双生児ゆえにどちらが殺人犯か見分けがつかず、みすみす釈放した迷宮入り事件を心理学者の手をかりて、ものの美事に解決するというユニヴアーサル映画「暗い鏡」、表面善良なる市民でありながら、実はギャング映画の傾向は、活劇との大親分であつたという二重人格的な人物の犯罪心理を描いた、フランスのレジナ映画「求婚」、一女性の犯罪心理を追求した英国のジョンコーフイルド映画「ベデリア」、新聞記者とボスとの争闘を描いたC・A・C映画「ボス」など、など……。

戦後現れたギャング映画の傾向は、活劇と

「明日なき男」

してよりもむしろ社会劇として新装をこらして復活し、エリオット・ニューゼント監督、アラン・ラッド主演、パラマウント映画「**偉大なギャツピイ**」は、二十年代の青年が絶望からギャングになり悲惨な死を遂げるまでを描いた、F・スコット・フイツツゼラルドのアメリカ文学史に残る傑作小説の映画化で、ある意味では、社会問題映画とみることの出来るものであつた。

☆…新生面拓いた「白熱」

ロオール・ウオルシュ監督、ジエームズ・キヤグニイ主演のウオーナー・ブラザース映画「**白熱**」は、新形式のギャング映画としての話題にのぼつたものであつたが、一昔前のギャング映画に、拳銃戦を売物にするものではなく、ギャングの異常性格を強くえぐり、犯人逮捕の科学的捜査を緻密に描いて、新生面を切り拓いたものであつた。

これはギャング役者ジエームズ・キヤグニイが、その本領に立ち帰り、冷血無比の悪党振りを再び見せた映画で、流石にギャング映画をあれほどに流行させただけの凄さをもつて、再びギャング映画流行の端緒を切つたものであつた。長い間、再びギャング物はやらないと言つていたキヤグニイは、ギャングの親分役を止してから、そのことごとくが板につかなかつたが、再びこの本領に帰ると、あたかも魚が水を得たかの如く、ハツラツとして、たちまち、批評家陣をうならせてしまつた。

「暗黒街の弾痕」

ストオリイは、最初、アリゾナを進行する列車泥棒のシーンから初まる。列車が襲われて、政府の御用金三十万ドルが略奪される。非常線が敷かれ、逃がれた犯人がかくれた山小屋に残された悪党の一人から、この犯行が名うてのギャング、コデイ・ジヤレツト（キヤグニイ）の仕業であることが判る。ラジオを通じて、その非常線の強力なことを知つたジヤレツトは、わざと捕われて、その犯行に証拠がないところから、犯行を自白して、軽い罪で入獄する。彼の計画では、その短い刑期を終えて出獄、ほとぼりのさめたところで生活を楽しむ予定であつた。妻のヴアーナ（ヴアージニア・メーヨー）と、彼が心から信頼する母に、この事を言い含めて入獄する。

ところが外では、かねてヴアーナに心を寄

せていた乾分のビッグ・エドガヴァーナと心を合せて、母親を殺してしまう。ここに於いて、巧みに破獄した彼は、母の仇を討ち、結局、追つ手の弾丸にうたれて死んで行く…。

というのであるが、この映画が、特に好評を得た点は、彼と彼の母の性格の描き方にあり、この犯罪型の親子を異常精神者にしている点、彼等の冷酷を今まで見られない手法をもつて描き出したところにあり、ベテラン、ロオール・ウォルシュの演出は水ぎわ立つた出来栄えで、鋭いカッティング、演出のメカニズムは感嘆すべきスリルを与えていた。さらに情婦に扮するヴァージニア・メーヨーの淫婦らしい演技は、副産物としても出色のものであつた。

☆…サジを描く「暴力行為」

これと前後して出たギャング映画で印象に残るものはM・G・M映画では、フレッド・ジンネマン監督、ヴァン・ヘフリン、ロバート・ライアン主演の「**暴力行為**」、R・K・O映画では、レイ・エンライト監督、ランドルフ・スコット、ロバート・ライアン主演の「**拳銃街道**」、ユニヴァーサル映画では、ジュールス・ダッシン監督、バリイ・フイツツジェラルド、ハワードダフ主演の「**裸の街**」、廿世紀フオックス映画では、ヘンリイ・ハサウェイ監督、ジエームス・スチユアート、リチヤード・コンテ主演の「**出獄**」などがある。

第二次大戦の余談に属するもので、過つて戦友を裏切つた男が、戦後、裏切られた男に執ように狙われる恐怖と悲劇を描いた「暴力行為」は「白熱」と同様に、暴力それ自体を描くことが、ひどく目立つていた。

このように犯罪と暴力行為を、如何に極端に、そして如何に兇暴なかたちでスクリンに移すかということも、この当時のギャング映画の見逃せない傾向の一つであつた。このサディステイツクな暴力の描写は、単なる映画的ショックを与えることのみに一生懸命で、その暴力を振るう人間の動機とか性格づけは、いきおいおろそかにされる危険性があつた。「白熱」と「暴力行為」はそう

「夜霧の誘惑」

「その男を逃すな」

いう意味でも、典型的な作品であった。

☆…セミ・ドキュ「裸の町」

「裸の町」はセミ・ドキュメンタリイ映画として騒がれたもので、ニューヨークのあるアパートで殺人が行われ刑事が犯人捜査に活躍する犯罪捜査映画であるが、戦後に現れた犯罪捜査映画の代表とも言わるべきもので、犯罪捜査は、これをもつて一つの頂点に到達したといつてもよろしく、その塁を摩する映画の出現は一寸望まれない。

そこで「裸の町」以後の犯罪捜査映画は、それ以上に出て何かヒネリを利かさなければならないことになつた。そして、その意味でよく出来ていた映画は、昭和廿六年に出たエリア・カザン監督、リチャード・ウイドマアク主演の廿世紀フオツクス映画「**暗黒の恐怖**」であつた。これはそのヒネリを利かせようとした一つの試みであつた。

それで普通の犯罪捜査映画の過程の上にデツドラインを設けた。発見された殺人事件の被害者の死体から、伝染病のなかでも最も悪質な肺ペスト菌が検出された。加害者をはじめ被害者に接触したものは感染しているに違いない。四十八時間以内に加害者を逮捕しなければ、病気は蔓延のおそれがある。犯罪捜査に時間的制限をつけたところがヒネリである。しかもこの捜査には極秘を必要とする。もし事実が知れ渡れば、たちまち市民の間に一大恐慌が捲き起るであろう。聞きこみも腹を打ち割つて尋問するわけにいかない、これが捜査上の第二のヒネリをきかせたところが、制限でもあるし、紙数も尽きたので、他日にゆずることにしよう。

ジエームス・キャグニイ

さて、この後も、『情無用の街』『死の接吻』『明日なき男』『我れ暁に死す』などと数々の印象的なギャング映画が登場しているが、これらは未だ公開されて日も浅いことであるし、紙数も尽きたので、他日にゆずることにしよう。

★★★特異風俗の研究

軽症マニヤ雑談

大槻久良二

……まず、前記三角木馬の変型として誰しも考えられるのはローリング木馬である。……

三角木馬失敗談

浅草のストリップ劇場A座で日舞ショウに本馬責めを一景演じたいと云うので、演出者のK氏からその台本のことで相談をうけていたが、上演を明日にひかえた本稽古の夜、私に立会ってもらいたいと云うのでA座へ出かけて行つた。

木馬といつても、もともと芝居の小道具としてつくられたものだから、どうせハリボテか何かのお粗末なものだろうと思つていたところが、驚いたことには、ちやんと角材を削り出した本物の三角木馬で、しかも精巧に細工した首の尻尾がついているひどく凝つたものである。

今までにも他のストリップ劇場で責め場の芝居はずいぶん観てきたが、どれもお座なりな、縄のかけ方などもまるでいい加減なものばかりだつただけに、この凝つた木馬の出現には、それだけでも責め場の雰囲気にさそいこまれそうで、こいつは面白い芝居が観られると、私はひそかに固唾を嚥む思いで舞台を見まもつたのである。

原案通りを採用してくれた演出者に、思わず、満足の微笑をもつて応えると、K氏はニコリと、自信に満ちた顔を向けて頷き返したが、直ぐに視線を舞台の方にうつしてしまつた。

舞台は、お七風の小町娘に粉したエリー春木と云う若いストツリパーが高手小手に縛られ、木馬に押し上げられ、縄尻をとつた男から折檻をうけているところからスポツトが入るのだが、黄八丈にお七帯の小町娘が、裾も

あらわに木馬の背で身悶える姿は、さすがに私を恍惚とさせるものがあつた。

結髪の鬢毛が五、六本、あつらえ向きに顔にかかつて、国貞の絵を見るようなこいしらえは、責められる女の風情よろしく実に艶治である。

もちろんこれは責める男の台詞や責められる女の仕草、登場人物も多く、筋も割合いに混み入つていて、私の台本通りにゆくと、この責め場だけでも、独立した一幕としてかなりの時間にわたつて観客の目を愉しませてくれるはずであつたが、実はものの五分間とはつづかなかつたのである。

いや、本当のことを云うとこの木馬責めの一景は、翌日、上演のときにそつくりカツトされていたのだ。

つまり私の観た責め場のくだりは本稽古の一日限り、それも時間にしてホンの三分か四分で、ついに日の目を見ずになつてしまつたのである。

と云うのは、この芝居で初めて三角木馬というものを見、初めてそれに乗つたエリー春木は、途端に責め道具の苦痛を知つて一遍に驚いてしまつたのである。

経験のあるひとなら直ぐ気づくことだが、木馬の屹立つた背に蒲団を一枚くらい敷いたくらいでは、特別の仕掛けをしない限り、とうていものの五分とは乗つていられるものではない。

私もそれに気がつかなかつたわけではないが、どうせお芝居のことであるから、そのへんのところは小道具方で適当になんとかやつてくれるだろうと思つていたところへ、いきなりその場にぶつかり、エリー春木の目も覚めるような艶治な姿を見せつけられたので、どうにも仕方がない話で、小道具方で勝手に改造するうつかりK氏に注意するのを忘れてしまつたのだから、どうにもできないわけである。

結局、エリー春木が泣き出し、誰か他のひとに代役をさせてくれと大変な騒ぎになつたが、もともと仕掛けも何もない本物の責め道具を使つたのではK氏は木馬についてはまるで不案内なので、簡単に、そのまま舞台で使えるものと思いこんでしまつていたらしい。それではK氏が三角木馬をつくつたときは、あくまで私が三角木馬をつくつたときは、あらかじめ長時間の責めに堪えられるように準備しておいた。屹立つた背をできるだけ深く削り取つて、特別につくつた分厚い座布団を二枚かさねて、ずり落ちないように固定させた。それでも木馬の上の女は、ものの五分とたたないうちに、そろそろ苦痛をうつたえるようになり、それを恢えようと腰を左右によじる仕草は、嗜虐的な官能美であり、さらに絵画的な美しささえ見られるものであつた。

木馬責めの醍醐味は、云うまでもなくこうした耽美的なエロチシズムの追求にあり、それによつて責める側には視覚的によろこびを

K氏は、前からそれを舞台で使つてみたいと思つていたところへ、たまたま私の台本でその実現を見ることになつたと云うわけである。

ところが、K氏は木馬についてはまるで不

より一層たかめることになる。

しかし、三角木馬本来の使途はそんな生やさしいものではなかつたらしい。「月堂見聞集」などの文献によると、罪人拷問の刑具として享保年間頃まで牢内で使用したと云うから、ちよつとわれわれの感覚には遠い惨酷な責め道具だつたかも知れない。私刑用としても好事家の手でつくられたものもあつたようだが、A座の木馬はおそらくその一つだつたようである。

それにしても、この頃のように嗜虐感覚がエロチシズムを主流にして考えられるようになつてくると、そんな酷たらしいケースなど、われわれには凡そ縁遠いものに感じられるのである。

ローリング木馬の使途

そこで、われわれのような軽症サジ党の悦びを満たすケースが考え出されるわけである が、エロチシズムを主流にした責めの各様を概略的に検討してみようと思うのである。

まず、前記、三角木馬の変型として、誰しも考えられるのはローリング木馬である。もちろんローリングを利用することが主目的であるから、三角木馬のように疼痛感をあたえることは避けねばならない。

安楽椅子（ロッキングチェア）のように木馬の下に橇を取りつけたもので、乗り手に苦痛をあたえない程度に背をまるくした方がいい。ただ余り安定度があり過ぎると効果的でないから、そのへんの呼吸はよろしく工夫していただきたいのである。

つまり余り安定度があつても面白くないし、さりとて少くも二十分、三十分くらいは苦痛なく乗つていられるようでなくては、目的のローリングプレイは達せられない。云いかえれば、ローリングを大きくすれば木馬の主が転落しそうになる程度の方が効果が大きい。ローリングの強弱、その手加減一つで、あんがい変化に富んだプレイを愉しむことができようと思うのである。

かつて私は、或る裁縫工場でこんな情景を見たことがある。数十人のミシン女工が広

い一室に並んで、ガシヤガシヤとミシンを踏んでいる。すると、どこかで急に異常な加速音が聞えてきて、それが速力の最高点にまで達した。そしてパツタリと止んだかと思うとそのミシンの主は真赤な顔を俯せて、暫くの間は急迫した呼吸をしずめるため顔を上げることもできずにいる。

この工場では、こうした情景が一日中、あちらこちらのミシンの前で幾回となく見られると云うが、この工場の監督に訊ねたら、彼はこんなことを云つていた。

腿と腿を接して浅く椅子に掛けミシンを踏むと、それが交互に踏む足の速度で、いつしか彼女等に或る種類のエクスタシーをあたえることになると云うのである。

そう云えば、凸凹の田舎道を往復する乗合自動車の中の腰掛も、ミシンの場合と同様に浅く腰をかけた婦人客は、絶えざる動揺によつてある種の刺戟をうけるらしい。最初は平然と腰を掛けていた婦人が、五分、十分とたつにしたがつてだんだん両頬を紅潮させてくる。そしてやがてのこと、ハツとわれに返つて羞しそうに顔をそむけてしまう。こんな情景に、誰しも、一度や二度はぶつかつたことがあるはずである。

ミシンや乗合自動車、あるいは自転車、乗馬など、女性が動揺からうける生理的な刺戟は、肉体的に、どうにも避けがたい宿命のようである。

話がだいぶ横道に外れてしまつたが、これでローリング木馬の使途をご想像ねがえると思う。要するに、それによつて、女性の羞恥感情と嗜虐的に結びつけて考えていただけばいいわけである。

軽症アブノーマル実行派

私の交友中には、嗜虐行為はもちろんのこと、仮定的にも、女を縛つたことすらない者があんがいに多い。いわゆる非実行派で、空想性マニヤとでも云うのであろうか、こう云う軽症クラスは、最近の傾向として相当に多いように思われる。

彼等は例外なく無惨絵に見るようなケースを嫌い、人によつては女を殴るなどと云うことを寧ろ罪悪であると考えている者もあるくらいで、アブノーマルな神経など、とうていできないが、彼女は、これについて面白いことを云つている。

「こんなことを本物でやられたら困るので、一種の安全弁のつもりで相手によつては、それにしたがつてやる場合がある」

と笑つていた。

映画女優の写真に雁字絡目の繩掛けを加筆したり、ヌード写真に刺青を描き入れたり、彼女の肌に刺青の下図を描いてやや昂進して、女性のように温和しいのだそうだ。

彼女の話によると、こう云う客のほとんどよろこぶ程度なら常態の者に見られる神経であるが、もう一歩昂進してくると、対照のない嗜虐感覚では満足しなくなつてくる。いわゆる、実行が伴わないではいられなくなつてくるのである。

それでは実行派と云われる人たちはどんなケースを好むかというと、まず圧倒的に多いのは縛つた女を眺める観賞派から、女の自由を奪つておいて、酒をつがせるなどの四畳半組、縛つておいて、酒をのませる、後手にくくり、肌打ち（軽打）と云つたところで、いずれも合意のうえでのことであるから、きわめて軽微な加虐行為であることに間違いない。

最近、或る赤線地区の女と親しく話したことがあつたが、この頃のお客のうちには、この程度の行動を願望する者がかなり多いと云つていた。いまここでは詳細にわたる報告はできないが、彼女は、これについて面白いことを云つている。

と笑つていた。

彼女の話によると、こう云う客のほとんどが女性のように温和しいのだそうだ。

性犯罪の発生と捜査の苦心
実話集 -I-

戦慄の〝鎌斬り魔〟

三谷祥介

陳野重晴画

桜の花が咲くころになると、毎年かならず性犯罪者が現われる。犯人はふくよかな肉体美の女性にメスを入れて、無上の快感にひたるのだつた。彼等の手口は同一でないが、性格はまことによく似通つているし、年令も十七八から二十歳前後の青少年に限られている。ところが、やがて桜の花が散つて、幹から毛虫が落ちるようになるとこの犯罪はぴツたりアトを絶つてしまつて、その後に性犯罪があつても、ぜんぜんカタチのちがつた犯人であり犯行である。だからこの犯罪は、春の花にサキがけて女性が毎年『血祭り』にされるようなもので、犯人の捜査にあたる刑事たちは、ひとかたならぬ苦労を舐めている。まず犯罪の特徴は、ほとんど屋外の犯行であること。宵の口からだいたい夜の十時すぎまで——犯罪は兇器を持つて立ち廻り、血を見なければ納まらないという厄介な犯罪であり、そのすべては初犯——つまり前科がないのだ。

今ちよツと私の頭にうかんだだけでも、目黒の桜トンネルのアベツク殺しや、東横沿線

の『口笛通り魔』。砧の『鎌斬り』。また最近では品川の繁華街で、二人の若い女性を背後からいきなり錐のようなもので、肺部を貫くほどの傷害をあたえた『魔の千枚通し』などである。

☆鎌斬り魔☆

砧の『鎌斬り犯人』は、小田急沿線の成城学園を中心に、祖師ケ谷、狛江、野田、狛谷のあたりまで出没した。いわゆる神出鬼没に振舞ってあたかも捜査官を愚弄するかのごとき有様だったので、刑事はまったくへとへとに疲れた。

最初この犯人は、三本杉の農家を狙って、妻女の入交ふくよ(25)というものが、自宅で入浴しているところを、板戸の隙間から覗いていた。ふくよは初産したばかりで、

大学の受験をパスする爲に女を刺す！
思考の因果關係！　青葉したゝる初夏の宵に姿なき痴漢を追究する刑事の労苦……
古強者（つわもの）の刑事でさえ頭をひねるこの奇怪な

皮膚の色はぬけるように白い。おまけに豊満な肉体の持主で、界隈でも美人であつた。

入交家は農家と言つても、すぐ近くに野菜を大量に消費する大東京がひかえているので一町四段歩を耕作するこの家は、作づけ男も三人いて、土地でも五本の指に折られる裕福な農家であつた。しかし浴場はいかにも粗末だ。納屋の片隅に五衛門風呂が据えつけてある。ふくよは赤い湯巻をまきつけて、湯上り姿で庭先きへ出たが、五月の六日は立夏と言つても夜風は肌に寒い。いそいで母屋へ足を運ぼうとした途端に、いきなり脊後から左の横腹へ鎌を打ちこまれたのであつた。ところがどうしたハズミだつたか、兇器はなめらかな肌を滑つて、盛り上つた腰の肉を切り落した。

ふくよの悲鳴に驚いて家人が駈けつけたが、もちろん犯人の影も姿も見当らない。それどころか、ふくよの夥しい出血に、膽を潰して家の内はでんぐりかえるような騒ぎになつた。刑事たちが三本杉へ自動車を乗りつけたときは、ふくよはすでに篠原という医院につぎこまれて、応急の手当をうけていた。

男なら血を見て気絶するほどひどいものだつたが、女はあんがい血には驚かない。ふくよは落ちついて、刑事に当時の模様をくわしく話した。そこで刑事たちの推理では、被害者のふくよは犯人の姿を見ていないが、この家の勝手を知つているものだろう——いずれにしても『土地鑑』がある。土地鑑というのは、この土地にかしら関係のあるもののことだつた。これを洗えば、必ず犯人を検挙することが出来ると考えたので、土地の不良やこの種の猥褻行為をやつた前科者など文字通り虱潰しの捜査にうつツた。ところがどうしてもつかまらない。のみならず刑事が懸命の捜査をつづけているにもかかわらず、第二第三、第四と次ぎつぎに若い女が斬られた。

これが同一の犯人であるという証拠は、兇器がすべて鎌であること。傷口から判断すると同じように左利きだつた。刑事は左利きの男を探しはじめたが、はからずも突き当つたのは、三本杉の牧場で働いている石川彰(18)という者だ。この男はすこぶる直面目で、主人にも気に入られているし、同じ職場で働いている友達の評判もよかつた。彼を知るほどの者はみな口をそろえて模範的な人物だと褒めたてた。けれども実際は世間の評判なんてアテになるものではない。

犯人の石川は、粕谷の八幡宮の裏手へやつてきて、研ぎすました鎌を持つて隠れていたが、ついに悪運が尽き、かねて現行を逮捕するために、彼を尾行していた伊倉刑事の手によつて逮捕された。

☆ 勉学出來ぬ鬱憤 ☆

「どういうワケでそんなバカな真似をするのかい」

と伊倉刑事は職務訊問をはじめた。

すると石川は、眼に涙をいつぱい溜めて、

「バカだなあ、刑事さん。僕の気持がわかんないかかね」

と言つた。

もちろん伊倉刑事は理解出来ないので、いろ〳〵事情を訊いてみると、昼間の仕事がはげしい上に、月給が安くて夜学へも通えない、世の中がつまンないからやツたと答えた。けれどもしかし、若い女を見つけて鎌で斬りつけることと、彼が夜学に通えない事情との間に、いつたいどんなつながりがあるだろう？　石川はこのことについて、伊倉刑事に問いつめられると、

「英語がおぼえられないからです」

と答えた。

伊倉刑事は、なんと考えても犯人の気持が

わからない。そこで石川の郷里である山形県の白炭へ出向いて、貧しく百姓しているいちばん上の兄や、その家で世話になっている年老いた母親について、犯人の生立ちを調べたが、幼いときから独立心があつておとなしく親たちにはまことによくつかえてくれる子供であつたという——少年時代に通つた学校へも立ち寄つて、校長先生や受持ちの教師に会つて素行を訊くと、申分のない青年だといい、優秀な成績表を持ち出して見せる始末だつた。

「どうも不思議だ、友達と喧嘩したこともなく、勉強に熱中してわき目もふらなかつた少年が、なぜこんな犯罪を犯すことになつたろう?」

伊倉刑事は自分でも判断することが出来なくなつた。訊問調書には事件の経過やだいたいの意見を書添えねばならない。彼は何か拠所が必要になつたので私を訪ねてきた。

「あなたはずツと記録係に勤務されて、犯人の手口や犯行の動機について多年お調べになつているから、鎌斬り犯人について、お気づきの点があつたら忌憚なく話してくれませんか」

と言うことだつた。

私はまだ犯人の顔さえ見ていなかつた。そればかりでなく、伊倉刑事が意見書を添えるという段になつても、その罪を左右するほどの力はなくても、法廷で裁きをうける際のためには、重要な事柄なので滅多に軽卒な意見をのべることは差控えねばならぬが、

「もとより君はごぞんじでしょうね。東横沿線に現われた口笛の通り魔」

「だいたいのことは知つていますが、くわしいことはわかりません」

「あの事件は野中太吉刑事が犯人を逮捕したんですよ。このときの犯人の供述は、君の場合にあんがい役立つかも知れないね」

私は伊倉に次のような話をした。

☆ 口笛通り魔 ☆

「桜の花が散つて新芽がふき出した頃だつた、霧のような雨が降つたりどんより曇つてなんとなく陰気な日も多いワケだ、陽がくれてあたりがすつかり暗くなると、東横の沿線に口笛を吹く通り魔が現われた。

「この犯人は、コーモリ傘をさして自転車に乗り、朝顔型の自動燈を車に取りつけていて自転車屋へ雇われたが、昼間は親方の片腕になつて自転車の修繕をやりながら、夜は神田の大学へ通つていた。勉強が好きで直面目一天張りだが、まるで大学に取り憑れでもしたかのように、一種の病的な試験狂なんだ。

すいツと泳ぐようにハンドルを切つてカーブを描くんだね。自動燈の光りに眼を奪われた女は、その瞬間ちよツと戸惑いするのだが、その隙に女の腹部へ錐のようなものを突き刺して、なんと憎らしいことには、後も振り向かず口笛を吹いて燕のように遠ざかつてゆくことだよ。この事件は祐天寺駅を中心に中目黒から柿ノ木坂方面にひろがつた。被害をこうむつた若い女は重態で、病院にかつぎ込まれ、五人も枕をならべた大事件だつた。

私は現場を歩いて見たが、もちろん土地鑑がある。こんなに自転車を巧みに乗りこなす犯人は、もしかするとそば屋の出前持ちかも知れないぞ——と野中刑事に話したことであつた。

犯人がつかまつたのはそれから間もないことだ。下馬の自転車屋の小僧でね。小僧と言つても十九だから、人によつては立派な青年に見える体格の持主もあるが。この犯人はチビで五尺にたらない。石川県から上京してきて自転車屋へ雇われたが、昼間は親方の片腕になつて自転車の修繕をやりながら、夜は神田の大学へ通つていた。勉強が好きで直面目一天張りだが、まるで大学に取り憑れでもしたかのように、一種の病的な試験狂なんだ。

この男が新学期になつて夜学へ通い始めると、どうしたことか、今までとは違つて勉強が出来なくなつた。記憶力が悪くなつたワケだ。そこでふと若い美しい女が勉強の敵だと考えるようになつたんだよ。

その理由は、野中刑事の訊問に答えた犯人の供述によると、上京するとき、東京の若い女は学問の敵だぞと両親にいい聞かされたが、まつたくその

とおりで、何と言うこともなく女が恋しくて心がひかれ、勉強がおろそかになる。

いろ〳〵考えた揚句のはてに、この男は、心の敵を退治する決心をしたと陳述している。

この気持はとうてい普通人には理解が出来ないだろう。しかし郷里の母親や姉を慕う気持が変化して、いつの間にか若い女を心に描くような年頃になつていたのは事実で、もちろん自慰行為もやつていたにちがいない。こんなことではいけないと幾度も発憤する精神も手伝つて、若い女を学問の牲犠にしようとする悲願を立てたわけだ」

☆ドンキホーテ的犯罪☆

伊倉刑事は腕を組んで私の話を聞いていたが、

「とうてい考えられないことだ」

と言つた。

しかしこんな供述をしたものは、鎌斬り犯人や口笛通り魔ばかりではない。夜になると目黒の桜トンネルへ出かけて、片ツ端からアベックの若い女を突き刺した河野は、町の工場へ通つて働くかたわら、ラジオやテレビの研究を熱心につづけている男だつた。彼はアベックの男女がキスしたりセックスを愉しむ

光景が目の前にちらついてどうすることも出来なくなつた。そこでこの男は偉大な研究を成しとげるために、やむを得ずアベック退治に出かけるようになつたと供述している。

すべてこれら青少年の犯罪は、オノレの才能を過信して性への堕落を喰い止めようとする努力であつた。だからこの犯罪はモノ盗りが目的ではない。また女に対して猥行をする考えもない。私等が理解のある解釈をくだすと悲しむべきドンキホーテ的な犯罪である。警視庁に犯罪者の精神鑑定をする医博がいるが彼は、

「私の調べたところによると、セックスと非常に密接な関係をもつているようだ。その裏づけは、目の前で刑事たちが血眼になつて捜査しているにもかかわらず、犯人は何度でも犯行を繰り返している点だ。だから変態的な性慾をみたすためには、どんな危険を侵してもやつてのけるという勇気も出てくるというワケでつまり本能なんだよ」

と説明した。

私はこの説に全面的に反対するものではないが、彼等の犯行を、性慾的な本能だということで、これを片づけるということは間違つていると思つた。なぜかと言えば、この種のすべての犯人の供述は、五人の女を必ず突き刺すとか、また十人の女を血で染めるとか一迷信にちかい神だのみを心に誓つて、犯罪を侵した——と刑事はその心境をもらしている。

いずれにしても街のダニだと言われる不良痴漢の行為とはぜんぜん毛色のかわつた犯行で、彼等はどれもこれも内気で真面目で勉強好きだと言う点が、春の花にサキガケて女を血祭りにする犯人の特徴だつた。

☆ 盗みと性的快感 ☆

精神鑑定をすると医博は、この犯罪をセックスと結びつけて考えているが、それは犯行どきの瞬間的な昂奮であつて、たとえば掏摸の中にも相手からモノをスリ盗つたとき射精するものが可成り多くあるしい傾向が、本屋で書籍を立読みする学生達にもあつて、彼等が店員の隙を見て本を盗む瞬間には、全身が燃えるように熱くなり、心臓が破裂せんばかりに鼓動する——もちろんこの状態は恐怖心とは逆だが、同時に官能が刺戟され、恐怖心とは逆に、快適な性的クライマックスを味い射精するのであつた。いちどこの味をしめると、いわゆる病癖になり、書籍を盗むことがやめられなくなる。

このような悪癖に憑かれた学生は、全国的に驚くべき多数である。彼等は自分の買いたい本があつても、金がないために買えないので、店員の隙を見はからかつて盗むというのではなく、目的がぜんぜん違つているのだつた。

彼等は盗む書籍はなんでもいい。慾望はむしろ悪癖によつて呼びおこされる性慾だつた。刑事に捕つても学生のことではあるし、定価どおり書籍の代金を支払つて徴罪放免ということになるので、それツきり書籍の窃盗をやめたという学生はないようだ。

このように犯罪者の心理が、徴妙に性慾と結びついていることは事実であるが……女を刺して血を見て歓喜する青少年の賊とは同一でない。

そしてまた、どの犯罪人も迷信深いものだ。そのむかし武蔵坊弁慶が五条の橋に現われて、千本の刀を剽盗する悲願を立てたということが伝えられている。しかし弁慶は仮空の人物だという史家の説があつて信じがたいが、モノ盗りするものが迷信深くて、折りにふれ、いろんな悲願を立てるという——いわ

ゆる賊の心理を後世に伝えたのは弁慶の例にも一種の悲願であつた。泥棒に入るまえ、その家の庭先きへ脱糞し、盥で伏せておくと家人が眼をさまさないという迷信が、まことしやかに賊の仲間に伝えられているのも、神だのみに共通するものである。

これはしかし、賊たちが庭先きへ脱糞して落ちついて家の中の様子をうかがえば、勝手もよくわかるし、ことのほか度胸も出るわけで、その上、身軽になることも事実だから、見ても真理であり、女を刺すヤツの神だのみ泥棒の迷信だとばかり一笑にすることも出来ないが、現在の発達した科学捜査では、もし脱糞を見つけて鑑識した場合、立ちどころにその全部ではないが、ほとんど犯人の全貌を読みとることができる。

今日ではこの迷信も科学捜査陣の前には影が薄くなつた。

ことの序に書添えたいことは、強盗に強姦がつきものだということだ。これにはいろいろ理由があるがまず婦女子をつかまえて強姦しておけば、家族のものは外聞をはばかつて警察へ訴えない率が多い。また、強盗に押入つて何人かの婦女子を強姦するという悲願をその人数の女を強姦するまでは悪運が尽きないーという、迷信の故なのである。

性犯罪の発生と捜査の苦心
実話集 —II—

おとりになつた處女

いたいけない少女ばかりを専門に誘拐し暴行する変質漢！　一日逮捕が遅れれば一人被害者が増える悪魔の跳梁を、見事に喰止めた刑事の苦心実話

福岡　透
瀧川共画

一

A署は騒然と湧き返つた。おつとり刀ならぬピストルで駈け出す刑事の顔は緊張感に溢れている。外はお揃いの浴衣にオシロイを塗りたくつた兄チヤン連が威勢よく〝おみこし〟を担ぎ、沿道は露店がズラリとアセチレンの焔に品物を並べて「買つた、買つた」の手拍子をとる。人、人の波。刑事は雑沓を縫つて現場に急い

だ。

その夜―十月十五日、K神社の秋祭りは人出でごつた返していた。A町、B町、C町三カ町に氏子を控えたK神社はここ数年の間は戦時中の寂れを一挙にもり返し、爆撃をうけた社殿は忽ち復旧、境内の神楽殿を新設するにぎやかさ。秋祭りの人出は数万といわれ、迷子は出る。スリは躍る。腕きき の刑事が警視庁から応援に来てA署に連行されたスリは十人を超えた。

その最頂点に達した夜八時半ごろ、A署にあたふたと駈け込んで来た一人の娘があつた。

「妹が暴漢に……」

息を弾ませて訴えるのである。

この娘は斎藤輝子、区役所の事務員で二十歳、襲われた妹は末つ子の知子、小学校二年生の七歳である。

訴えによると―二人は夕飯を終えて午後七時ごろ、A町の家を出た。散歩がてらブラブラ神社に近付くにしたがつて、思つたよりの人出である。二人は固く手をつないでいたがともすれば離れそうになるほどだつた。どうやら神社の石段を上りつめたところ、上から降りようとする人の中にはさまつて二人の手

はちぎれてしまつた。輝子は大きな声で、知子の名前を呼んだが、ざわめきの中に吸込まれて、空しい努力、社殿の前まで押されて出たものの、知子の姿は見えない。マキを組んだ篝火が風にあほられてパツと燃え上つた。

——そのころ、知子もまた社殿に上つた、そこでおとなしく待つていれば、問題も起らず二人は会うことが出来たであろう。しかし知子は神社に始めて来たわけではない。しよつ中遊びに来ているし、学校の図画の時間にでも、写生に来る場所だ。おまけに境内では身ぶり、手ぶり面白くお神楽の最中である。知子はさつさと境内に降り、人波をかきわけて、神楽殿の前に出た。お面をかぶつた神師が、太鼓、笛に合わせて踊つている。小さい背をのび上げながら見ていると、ポンと肩を叩かれた。

「ネエちやん、独りかい」

ハツと振り返ると一人の男が笑つている。ウンとこつくりうなずくと男は、

「よく見えるように肩車してやろう」

と慣れ慣れしくいつた時はもう、知子を抱き上げ、やんわり肩に乗せていた。

「重いなア幾つ？」

「七つ」

「フーン、よく見えるかい」

やさしい男の態度に慣れて知子はそのまま肩の上でお神楽を見物した。

「ネエちやん、アンちやんが、いいもの買つてやるよ」

暫くして男はいつたとたんにくるりと神楽殿に背を向け、人混みの中を歩き、神社の裏手の方に進み出した。社殿の横まで店が出張つていて、男はそこでアメを買つた。

「甘いよ。ナめな」

知子はすつかり嬉しくなつて、男の肩を下りた。

「家はどこだい？」

「A町…」

「じやあ、アンちやんが送つて行つてやる。」

今度は知子の手を取つて、神社の裏手に回わつた。

「こつちじやないわ」

子供ながらにも不審に思つた知子が〝アンちやん〟にいう。

「ここを通つた方が近道なんだ」

男は知子の言葉にとり合わず、グングン知子の手を引くように歩るくのである。ワアツという人声が段々遠くなり、辺りは真暗なヤブに出た。

「コワい」

泣き出しそうな声で知子がいうと、男は恐ろしい顔をして背中をついた。

「黙つて来るんだ」

知子は完全に怯え、ワツと泣き出した。

「うるせえな」

上ずつた声でドンと知子を突き倒す。ワアワア声を出して泣こうとしたが、口はふさがれている——。

人が近付いて来るような気配で、男は慌てて立つた。そして知子を置き放しで姿をくらます——。哀れ、知子は気絶していたのである。

二

「秋祭りの惨劇」——謎は大きくなつて黒山の人が集まるころ、もしやと思つた輝子がのぞき込み、すぐ近くの病院に運んだ。

刑事たちはすぐ現場の周囲にナワを張り、足跡、落し物など手懸りを追つたが、お祭り

そつちのけで集つてきたヤジ馬のため現場はメチヤクチヤに荒されて、空しく引上げなければならなかつた。

高田捜査主任はすぐ病院に駈け付け、元気を回復した知子に会つたが、もとより男の人相など覚えていようはずがない。何をしてどうしたということですら、全く無我夢中で、

「恐かつた、恐い」

と泣くだけなのである。

「ガイ者（被害者）からホシを割り出そうとしても、皆んな子供なんだから無理だ」

現場検証、聞き込みを了えて上つて来た刑事達の帰りを待つて、A署の一室では深更まで捜査会議が開かれ、お互いに摑んで来た情報の交換を行つた結論として高田主任は発表した。

「ここ一カ月の間に、A小学校で一件、B C両小学校で一件ずつ起つた暴行事件はガイ者がみんな小学生二、三年、場所は校庭を使つている。今夜は場所こそ違え、手口が似ており、同一犯人と断定しても誤りはないと思う」

高田主任は事件の類似性を説明する。いずれも事件は夜七―八時ごろ、ちよつと使いに出た少女をねらい、ものを買つてやるという甘言に乗せて、ところもあろうに学校の庭に引つ張り込んで暴行を加えるのである。子供だから男の人相などもちろん覚えていない。しかも届出は相当遅れるので、男の足取りなど捉えようもないのであつた。

ただいろいろ調べてゆくうちに〝アンちやん〟と自称することから年令は十七―二十歳まで、絶対にA署管内の地理に明るい者恐らく居住者と見做して差支えないこと。ナツパ服らしい服装でゲタばきが多く、工員ふうの変質者。被害者のズロースから採つた精液の検査はO型、などの点が推測された。しかし場所が小学校を舞台にしている事件である。学校、PTAが騒ぎ出す一方は変質者の少年を片端しからそのケツを洗う。事件の当夜アリバイのないやつは任意で連れて来て調べる。それからもう一つ、さつき署長さんに話して了解を得たことだが…」

幾分声を低めて高田主任は秘策を語つた。

A署始つて以来の工作が翌日から始められたのである。

三

K神社の裏道からA小学校の裏門までは距離にして七、八百メートル、大通りから外れて夜は暗い。その丁度真中に「お化け屋敷」といわれる廃屋が不気味に静まり返つている。家主が病気で戦争前から転地療養中でありながら手放なそうとしないとかで、家は荒れ放題、昼間は子供達にとつて絶好の遊び場になつているが、逆に夜ともなれば本当に〝お化

いつでも出そうな、あばら屋に見える。その屋敷の前に若い女性が人待ち顔に夜七時ごろフラフラと現れるようになつた。一時間ばかりで、いつの間にかまた姿を消す。薄く化粧すらほどこしてハンドバックをぶら下げている。だがこの中には冷たく光るピストルと手錠が仲良くおさまつているのである。この女性こそミスA署、若い独身巡査の憧れの的——藤井澄子婦人警察官だつた。

藤井婦警は二十五歳、四年前に警視庁巡査を拝命、A署に勤務してから、もつぱら防犯係で青少年の補導に活躍していた。家出、自殺など、彼女の手で解決された事故も少くない。美人という顔ではないが、すつきりした肢体もさることながら、溢れるような清潔感が、常に犯罪人と対決している警察官に魅力を与えているのである。愛称おスミちやんが何時、誰と結婚するかはA署員の等しく注目するところであつた。

「スミちやん、頼みがあるんだが…」

朝出勤したとたん、藤井婦警は高田主任から呼ばれたのである。話を聞かされて、可憐なおスミちやんはおとりになつて貰いに来た。恥ずかしいからではない、緊張のあまりである。

「このまま放つて置くと大変なことになる。そこでスミちやんがおとりになつて貰いたいのだ。もちろん、我々も周りに身を隠し

て警戒する。万一の時はピストルを打つてもかまわんがどうも少年くさいから、充分手におえるシロモノと思う」

「私、やらせて戴きます。私一人で充分ですよ、別に守つて貰わなくても…」

婦警は俄然、勇み返つた。大事なミスA署だ。

「いやそうはいかん。大事なミスA署だ。しかも相手は何といつても男、顔でも傷つけられたら縁談に響く」

大真面目で高田主任はその無暴を戒めた。

話は簡単にまとまつて、その夜からわざと髪をお下げにした少女姿、藤井婦警の〝暗闇パトロール〟が始まつた。神社の裏からA校まで何回となくブラつく、油断なく光る目には獲物をねらう鋭い視線が流れている。婦警を中心に二カ所のヤミには刑事が秘かに辺りに気を配り、合図のピリピリが鳴るのをいまや遅しと窺つていた——。

張り込みは一週間続いた。丁度七日目のこと、C町に強盗事件が起つた。タバコ屋に真昼間、フクメン面の男が押し入り、留守番の老婆を縛り上げて売上金千五百円とピース五十箱を奪つたのである。A署は直ちに緊急警戒を行い、刑事は八方に飛んだ。こうなれば暴行事件は一時中断も止むを得ない。

「スミちやん、まずこつちから片付けなくちやあならなくなつて、英気を養つていてくれよ。これから先何時まで続くか解らんのだからな……」

事件に気負つた高田主任は藤井婦警に伝えて現場に飛び出していつた。

しかしおスミちやんはいつものように夜七時ごろ、お化け屋敷の前に立つた。

「こんな日こそ犯人が現れそうだ——」

女性特有のカンに訴えるものがあるのである。やがて七時半——小学校の方から一台のタクシーが走つて来た。そして婦警の前にピタリと横付けされた。

「A町の千五百番というとどこら辺ですか。知つているかネ、姉ちやん」

運転手が、婦警とは知らず、気安すく〝姉ちやん〟と呼びかけた。

「そうね、そこら辺はK神社の裏手だから…。この先二つ目の角を右に曲つたあたりでしよう」

「ヘエ、どうも」

ペコリと頭を下げて車は走り去る。

もう一週間もすれば十一月、散歩する人も行き交う人も滅多にない。立ち止つてなく、行いては寒くてならなくなつた。ブラブラA小学校の方へ歩るき出した。

「キヤッ。タースケ」

〝テ〟の余インがとぎれる声を聞いた。ロを防がれたようだ、現場は近い。ハツとしておスミちやんは走つた。

すると前から慌て気味に、あかりもつけず一台の自転車がバク進して来る——夢中でペタルを踏んでただごとではない。藤井婦警は用意していた懐中電燈を光らせた。服のボタンはちぎれ、顔にひつかかれたカキ傷……

「犯人だ！」

一瞬に見てとつた彼女はパツと手を広げて通せんぼよろしく身構えた。しかし男は脇目もふらず自転車を突つ走らせる。

「ドケ、じやまだ」

男がどなつた時は、もう目の前に迫つていた。

る。

〝ガキツ〟　〝ガチヤン〟

自転車は真向から彼女にぶつかつた。反動で思いきり尻モチついたおスミちやんは暫く腰を上げ切れない。用意のピリピリを吹くことはすつかり忘れている。

「バツカヤロー、何しやがるんだ」

口こそ威勢がよいが、男もまた足を打つた様子、それでも気丈に起き上つて自転車を取り上げた。

「待つてー」

ここで逃げられては百年目、婦警は痛む腰も忘れて立ち上つた。

「うるせえ、急ぐんだ」

男は走り掛ける。そこを彼女はパツと飛び掛つた。二人はまたもんどり打つて倒れる。だが婦警は所詮男の敵ではなく、簡単に組み伏せられた。パン、パン、パン、三つばかりバツクはとつくにすつ飛んでピストルを手に顔をハリ飛ばされた。婦警の手にしたハンドしようもない。

丁度その時、二人の姿にパツと光が掛つた。自動車のベツドライトが鮮かに馬乗りになつた男の顔を浮び上らせる―。車は急停車して運転手が駈け降りた。

「捕えて」

婦警の金切声がヤミにつんざく。手は慌てて駈け出そうとする男の足を必死につかんでいるではないか。運転手はすぐ男を引つ捕えた。婦警は落ちたハンドバツクを探して手捉をかけた。

「オヤ、姉ちやんはさつき道を聞いた帰りの驚ろいた運転手はさつきの…」

車である。

「フテエ野郎だ。何だか変な悲鳴を聞いたと思つたが、婦警さんに馬乗りになりやがつて」

運転手は捕えた男を自動車に突つ込んで走り出した。男の隣りにはまだ興奮もさめやらぬおスミちやんが、じつと男の監視を続けている。どうやら腰の痛みが甦つて来た…車はA署にひた走りに走り続ける。

四

男は強制わいせつ致傷の罪名がかぶせられた。B町五三八八、M製作所工員、浜名茂（一七）は次々と知子ら被害者の面当しをうけいずれも、

「このアンちやんにや一切の犯行を自供、大間題となつていた、小学生襲撃事件は、おスミちやんの体当り的武勇伝を残してどうやら解決に導かれた。

浜名の両親は幼ない時に相次いで死亡、浜名は兄の家に引取られたが、狭い一間に同居させられている。兄夫婦の性生活を嫌でも知らされる浜名は、自分自身の〝春の目覚め〟を抑制することができなかつた。彼は桃色雑誌にウツツプンをはらそうと試みたが、逆に得体の知れないコウフンにとりつかれた。

タバコ屋の昼強盗も間もなく検挙になつた。しかし浜名が捕えられた緒口になつた暴行未遂事件の被害者は、遂に発見されなかつた。

おスミちやんの〝武勇伝〟は、写真入りで新聞を埋めた。頼もしさを見染めて未知の人からプロポーズの手紙が、アツチコツチから殺到した。

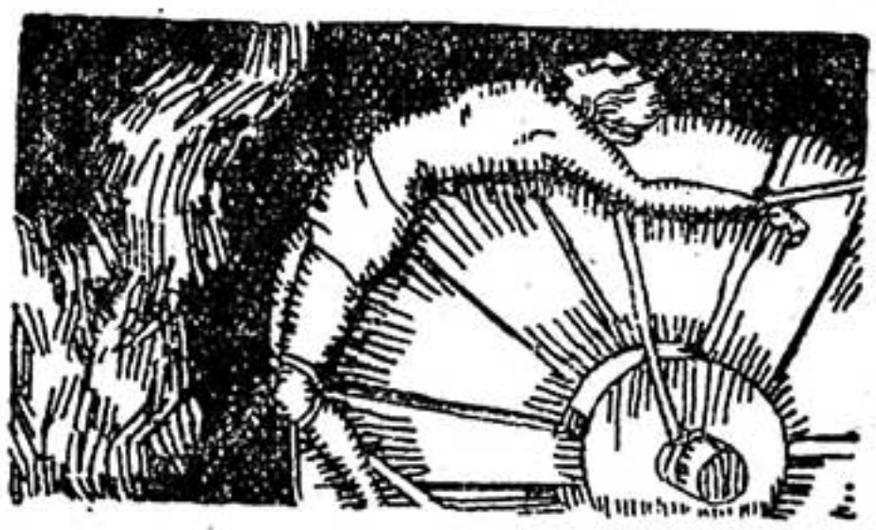
―（完）―

特異風俗の研究

西洋拷問具研究

坂ノ上信夫

☆ローマ時代特有のものに山羊拷☆
☆問がある。被拷者を縛つて、足☆
☆の裏に塩をすりこみここを山羊☆
☆になめさせるのだ。この無邪気☆
☆な動物は、好物の塩を、忽ち骨☆
☆が現われるまてなめはじめる。☆



拷問においての、もつとも簡単な方法としては、一の拷具をも要せず、つねるか、平手拳骨でなぐるか、指一本でくすぐることにようであろう。くすぐることの他愛なさでも、しかし、いわゆる「張翼の鷲（スプレッド イイグル）」の態勢に拘束して、緩慢に、しつこく、きわめて智巧的に、感覚虚脱（アネステシア）へにげこむことを上手に防いで遂行するなら、意外に痛烈な、おそるべき効果が期待されぬでもないことが想像される。

拷問具なるものは、智巧のはてに考えられた、いわば好奇的な、遊戯的なものでしかないのであつて、かならずしも、拷問の遂行に必須なものとして要求されたものではないような気がする。たしかにこれは、クリミナルなサヂストが昂進する症状において、着想されたにすぎないのではないか。

拷問が、容疑的な被告への、自白による罪の確認を最後の目的とすることによつて、単なる責めとは違うとはいつても、それは要するに、「苦痛をあたえる」ことが形式になつている。その意味で、痛苦をあたえるいろいろな方法が案出され、これでもかこれでもか、といつた風に、段々いろいろな道具の使用にまで、発達していつた、きわめて自然的な過程はもちろん納得できるけれども、これを発案し発明した人は、たしかによほどの嗜虐の天才だつた。じつさい、そんな道具はなくもがな、それでしかし、拷問の目的は結構達しられるとおもうのである。

で、拷具なるものの器械化は、そう古いものではあるまい。それが発達するには、歴史的な時間の推移と、そしておそらくは時代の様相が条件になつた。それでも、きわめて素朴な形のそれが現代になお行われ

うること、行われていることを、決して拒むものではない。

むしろ、現代の拷問では、その最も進んだ形では、道具を用いないことが、特色だともいえる。今から六年ばかり前、ブタペストの共産主義裁判で行われたハンガリアのカトリック教会大監督ヨセフ・ミンゼンチイ枢機卿に対する予審拷問においては、三人の取調官が（取調官自身が訊問に疲れるので）代る代る交代して、徹頭徹尾、被告を休ませない。そして「質問に次ぐ質問」だけで、三十五時間、或は四十時間乃至六十時間、七十時間七十五時間といつた風に、立ちづくめで立たせて、連続訊問したという。訊問官自身ですら、半時間以上とつづけてこの緊張に堪えうるは一人もなかつた。立会い看守の当番でさえ、「頭はぐるぐる回る、目はくらむ、あれ以来、何日間も同じ質問の言葉が耳から抜けませんでした」というようなほどの、惨憺たる立場を強要した。精神的拷問である。

その間に、疲労恢復のためと称して与えられるコウフイなるものは、じつは眠らせないための薬物で、アクテドロンだつた。これはその少量を服用すると元気がついたような気持がするが、服用量を増加すると、めまいをおこし、激しい頭痛を伴つて、精神を休めることができなくなる。それにメスカリンを併用する。と、それは、真性の早発性痴呆症すなわち精神分裂をおこすのである。この方は人格喪失という言葉で知られている不思議な効果を生みだすもので、この二つの薬を併用することによつて、犠牲者の頭脳は完全に人位に限られ、外の連中は、きびしく口間しながら、目の前にその責苦を見せつけるに止まつたというーそのような脅嚇においわが江戸時代の日本でも、それは大概一時に四人、多くて五人を一時に行うも、そのうち、実際この苛責に及ぶはまず同時に二人の連中は、きびしく口間

拷具の使用は、脅嚇主義的な法理の上にまた一の意味を包摂した。けだし、総じて拷具を使わぬ拷問は依然として存続した事実つとも盛んに中世紀に使われた。

共産主義秘密警察の「工程」においては、これは最後的な第三段の処置であるが、これを彼らは、「生活機能学的処置」とよぶ。いわゆる誘導訊問の一の形であつて、これには拷問の事実を確証づけるような、そんなまぬけた一の道具も使われないのである。

一七七六年、オウストリアの法律は、拷問を廃止した。前後して、漸く拷問に対する批判がおこり、それは廃止の傾向にあつたとはいい条、おそらくは、それは、拷問を非合法とする表面の理論において、道具を使うそれが否定されたにすぎまい。何らかの形で、拷具を使わぬ拷問は依然として存続した事実

いつたような、別の新しい一の人格ができあがるのである。根本的に、彼はかくして、否応なしの罪人につくりあげられる。

共産主義秘密警察の「工程」においては、これは最後的な第三段の処置であるが、これを彼らは、「生活機能学的処置」とよぶ。いわゆる誘導訊問の一の形であつて、これには拷問の事実を確証づけるような、そんなまぬけた一の道具も使われないのである。

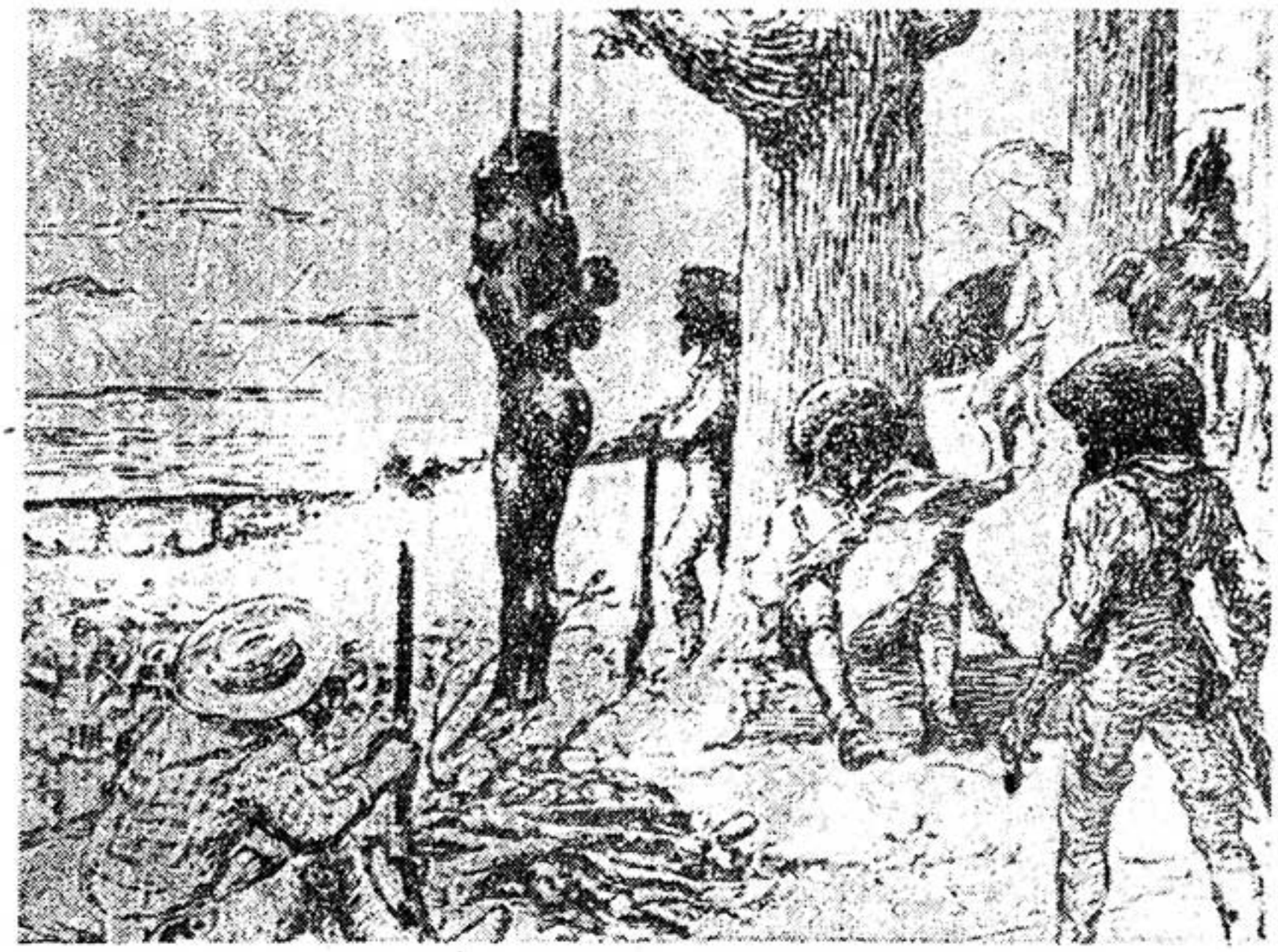
一七七六年、オウストリアの法律は、拷問を廃止した。前後して、漸く拷問に対する批判がおこり、それは廃止の傾向にあつたとはいい条、おそらくは、それは、拷問を非合法とする表面の理論において、道具を使うそれが否定されたにすぎまい。何らかの形で、拷

具を使わぬ拷問は依然として存続した事実を信ずることができる。結局、拷具は、もつとも盛んに中世紀に使われた。

拷具の使用は、脅嚇主義的な法理の上にまた一の意味を包摂した。けだし、総じて人格喪失という言葉で知られている不思議な効果を生みだすもので、この二つの薬を併用することによつて、犠牲者の頭脳は完全に人位に限られ、外の連中は、きびしく口間しながら、目の前にその責苦を見せつけるに止まつたというーそのような脅嚇においい

その水を呑んだ。そして、三杯目で参つてしまつて、遂に白状したという。」

ところで、そのいわゆる拷具なるものには一体どんなものがあるか。拷問の手法の複雑さは、ただちに、拷具の複雑さを示すものでは必ずしもないかもしれぬ。拷具といえば、一定の機構を予想させるがしかし、これをきわめて広汎に解釈すれば、「拷問の目的のために利用活用されるあらゆる物」ということに考えられてもいい。拷問蔵のごとき、そのための一定の建造物、設置もそう解釈してよかろうし、水の如き、火の如きものを使うための、しかし極めて簡単な道具にも限らないことを、断つておきたい。



まず、しばり拷問よりも、もつと素朴なものとしての笞杖による敲き拷問があり、この場合では、もちろん、笞と杖が道具である。敲き拷問は、しばしば格打ちの刑として、刑拷相通じたが、徳川時代、わが国で行われた敲の笞杖すなわち簀尻は、太さ三寸廻り、長さ一尺九寸、割竹二本を併せてその芯とし、麻苧で包み、その上を

素朴な形式の拷法、しばり拷問における一条の綱索のごときも、また一の拷具にはちがいない。で、ここでは、拷具といつても、拷問に使われるあらゆる物という意味の、もつとも広汎な範囲での、それについて散見したいので、かならずしも、器械的な道具には限らないことを、断つておきたい。

まず、しばり拷問よりも、もつと素朴なものとしての笞杖による敲き拷問があり、この場合では、もちろん、笞と杖が道具である。敲き拷問は、しばしば格打ちの刑として、刑拷相通じたが、徳川時代、わが国で行われた敲の笞杖すなわち簀尻は、太さ三寸廻り、長さ一尺九寸、割竹二本を併せてその芯とし、麻苧で包み、その上を観世撚りで巻き、把持する部分は、白革で巻いたと「刑罪大秘録」にあるけれども、一八四七年に発見されたハンブルグの一売春婦の備忘録では、娼楼でのリンチ、或は責問のために用いられたそれは、白樺の小枝の鞭だつた。小枝の太さ、強さ、長さによつて差等があり（リンチの場合）、それは鞭に結びつけられたリボンの色で区別された。「ドリイ・モルトンの思ひ出」に見える打鞭の種類は、およそ次の如きものである。

打たれる部位は、時には背中で、多くは臀部である。主として、胡桃の枝、革紐、橡で、胡桃の枝とはいつても、それを使う力次第では、肉を切り、血を流す。外にいわゆる牝牛鞭（cow-hide）という革紐があり、橡は、長い柄のついたまるい平らな板片で、これで打たれると、血は出ないが、皮膚一面が水ぶくれに腫脹して、肉が裂けるような痛みに悩く。可なり緩漫な、しかし辛酷なものだつたという。江戸時代のわが国で、牢内私刑に用いられたキメ板というものがある。「四分板で、長さ二尺ほど幅五寸許り」の板だが、元来の用途は、そうでないのだけれども、囚人たちはこれ

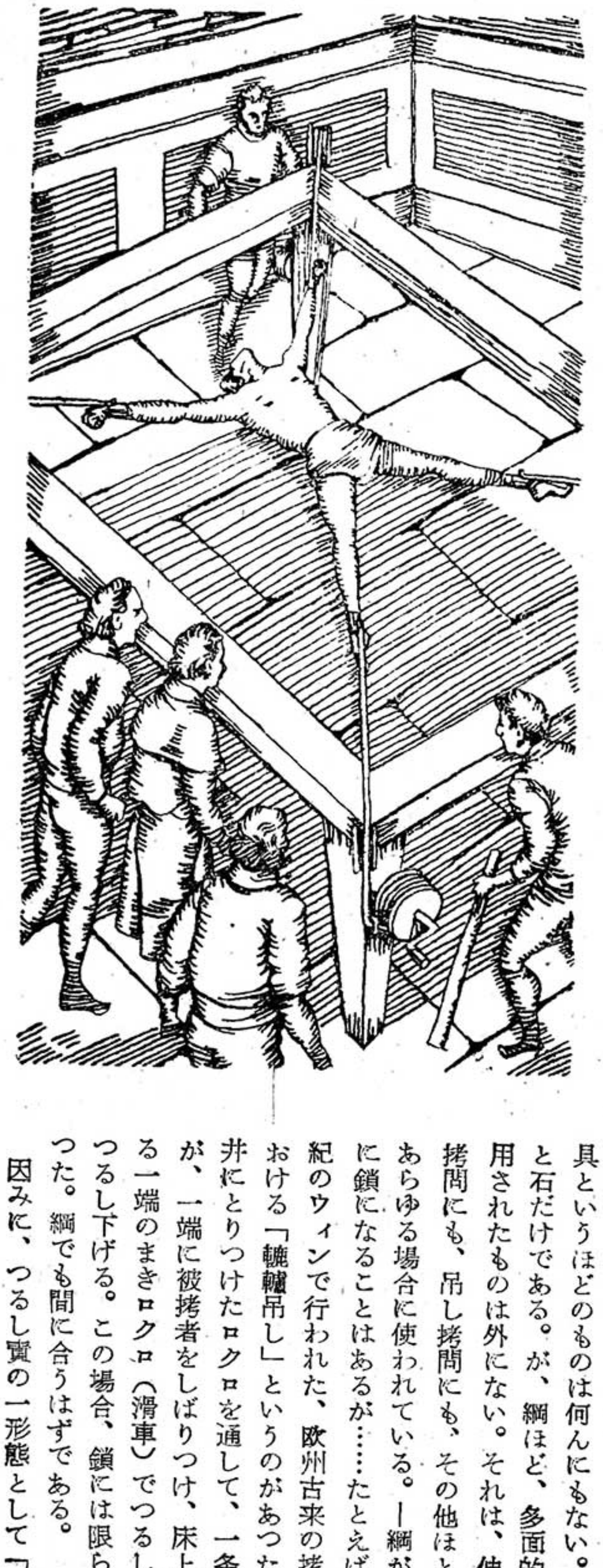
をリンチに使つた。またインヂアンたちは、冷水か微温湯を海綿にひたして局部を罨法し、袋鼠の脂肪を塗抹して直す。不思議に腫脹がとけて痛みもとれるという。

わが国の昔では、酒の湿布で直した。

縛り拷問においての方法としては、単に指頭においての局部的な緊縛においても十分の効果をもつ。縛つたまま放置するのが原形だが、それだけにこれは、全く一条の紐、綱だけのインストリュメントで、いとも簡単に遂行できる。中世ヨーロッパで、もつぱら行われたというひも、貫の如きそれであつて、これは両手を正しく合掌の形に重ね合せ、両肱をその関節において屈することなく一直線に前方に伸ばし、かくして二本の腕を一本にして手首から肱関節まで一本のひもでグルグル巻くだけのものだが、その紐や綱がどんな材料でつくられてあつたかは詳かでない。総じてしばり拷問は、また圧迫の意味や気味合ももつが、支那の「北史」倭伝にいう圧膝というは、説明としては単に「木を以て膝を圧す」とあるに止まり、その委曲を伝えないけれども、おもうに、紐に代ゆるに板を、或は木を以てしたので、それを重ねてその両膝を挟ましめ、更に紐でしめ合せたものだろう。

十六世紀のプラアグ市で用いられたという拇拇刑器という拷具は、紐の代りに鉄板を使つたもので、扶状の数多の尖頭突起をもつた二枚の幅のせまい小さな鉄板を、突起のある方を内側にして対い合せ、その両端において、つまり全身がしぼられる。しぼり竇のねじでしめつけるように連結したもので、被拷者の拇指をその両面突起の間に挟み、一方の鉄板をねじでしめる。この場合、その無数の尖頭突起は、拇指を表裏の両面から刺衝すると共に、二枚の鉄板は、指そのものを、わずかな指頭の局部においてではあるが、拇拇指を圧迫するのである。この手法において、丁度水車のようにその並べられた轍の横木の上に被拷者を轍なりに弧状にまげてしばりつけ、これを傾斜した自然地盤の上でころがすことによつて蹂躙する。或は、一定の場所にこの車輪を固定して、水車のようにこれを回転することによつて、車輪の下、地上床上におかれた鉄板との間で、轣くが如くにしぼる。もちろん、この場合、車と鉄板の間隔は、被拷者の肉体を、一回転でひき殺さぬ程度に、わづかに離間されるのである。

しばり拷問に通ずるものとして、しかし紐を使わず、やはり一の鉄器を使う「スケ



ヴィングトンの娘」という拷法があつた。ヘンリイ八世治下の、ロンドン塔の番人だつたスケヴィングトンの発案に因んでその名を得たと伝へられているが、被拷者の両膝を合せて前に屈し顎に届かしめる。同時に両腕も前に合せて屈する。丁度膝をだくような形で。この姿勢で、彼をそのままそつくり支持拘束するようにつくられた大きな鉄鐶を、肩から下背部膝下へかけてはめるので、そのままで一時間も放置すると、眼、鼻、口、耳などから、或は時として背中からも、血が吹き出すという。その上、この鉄鐶を、被拷者を拘屈したまで高い架柱に鎖でつるしあげる。わうになつていたという。苦しみに叫喚する騒々しくうるさい男には、馬の口鉗の如く木の棒が咽えさせられた。

イギリスで行はれた圧迫拷問は、法律の規定するところに従へば「片腕は細引で壁に、片腕は他の壁にしばられる。（かくてるらしい。一九〇〇年のクルシュネルの年鑑を見ると、バルセロナのカンビオス・ヌエヴァス街での爆弾暗殺事件の容疑者として検束された約四百人の大衆がモンティュウ獄でう突立つたまゝの）その両脚は十分に両方に開いて拡げられ、そのからだに背負へるだけ、或はそれ以上に、重荷の石が積けしめられねばならなかつた」。これなどは、拷具という石だけである。が、綱ほど、多面的に使と石だけでもいうほどのものは何んにもない。細引用されたものは外にない。それは、伸ばし拷問にも、吊し拷問にも、その他ほとんどあらゆる場合に使われている。一綱が、時に鎖になることはあるが……たとえば中世紀のウィンで行われた、欧州古来の拷問における「轆轤吊し」というのがあつた。天井にとりつけたロクロを通して、一条の鎖が、一端に被拷者をしばりつけ、床上にある一端のまきロクロ（滑車）でつるしあげつるし下げる。この場合、鎖には限らなかつた。綱でも間に合うはずである。

因みに、つるし責の一形態として「つる

し落し」ともいうべき一法があり、それは滑車を利用しているしあげた被拷者を、丁度それが落ちるであろう真下の地上に尖鋭な稜角をもつ小石をならべてその上におとすのであつたが、ヨウロッパの拷問史にしばしば触目するつるし責なるものは、そのすべてがほとんどブラ下つた両足に重石をつける。中世紀に行われた逆さつるしでは、そのブラ下つた頭部の例の如く重錘をつけた。

やはり、中世ヨーロッパには「バアクレイ馬」という道具があつた。これは拘縛の補助器みたいなもので、店頭の立看板の如き、キャタツの形をした二枚板であるが、その一側の板の上に、板八付の形で被拷者をしばりつける簡単な道具である。ところで、この場合でも結局、やはり幾条かの綱が物いう。

次ぎに、この圧迫拷問の反対に、伸ばし拷問があつた。中世ヨーロツパのアルチルダムで盛んに用いられたらしく、これは器械的に被拷者の四肢五体を伸ばす拷問である。手足頭部と縛つた綱が、滑車仕掛の拷器でまきこまれると共に、手足は無繻無性に引き伸ばされる。大体平行の形で行われるが、いわゆる「伸肢刑架」という名で知られているそれは梔の木でつくられた大きな枠が、床上三フイートの高さに置かれる。はじめ容疑者を仰向けに床上に平行させ、「張翼の鷲（スプレッドイイグル）」の形にして手首足首をしばつた綱の各端は、刑架の四隅にある回転機へ固定する。で、この回転ロクロを、二人の人が両方反対の方向へまわすと、四肢を縛つた綱は次第に短かくなり、五体は段々に高まり床上をはなれて宙に浮き、遂に枠と同じ高さに、それと水平にもちあげられる。遂には、すべての肢骨が関節を脱してポキリポキリ音がするというが、ニコラス・オウビアンという男が、かけられた後の五体の数日の間は立つことこの拷器にかけられたこの伸肢拷問をされるときいただけですつかり参つて、ナイフで自殺してしまつた。状況によつて、こ回転轆轤を、しめたりゆるめたりするのだから、全く息もつけない。

伸ばし拷問は、その基本型をスプレッド・イイグルに見る。これは大体、航海者が船の上で行つたもので大の字になり、手足を帆綱でしばつたのであるが十九世紀パリ監獄で行われたという拷問図「ダミアンの訊問」という絵によれば、下に敷いたものは、意外にも蘭団のようなもので、その上に横わつた被拷者の四肢頭部は、革紐でしばられた、先端についている鉄鐶で張り鳥賊のように張られている。

フイツシャアの拷問史に見える木馬責乃至バンベルグ責というのは、木馬型の拷問

台に被拷者をのせ、背中を猫背の如く、或はホウスやポンプで注入するという方法がある。スペインの異端糾問（インクイジション）での水拷も、このの反対に鶯出させて縛りつける。そして、る。そして、ませる方法でフランスでものませるのが普通先端が無数にわれた馬鞭で緩々鞭つのであつたが、近代日本の初頭において用いられたとだつたらしい。ルイ十四世の頃では、もつばいういわゆる「木馬責」とは異るらしい。こら毒薬（麻酔剤）頒布の婦人を拷訊するのにの木馬責は、名義をつたえて方法を語らず、この方法を用いた。

「私刑類纂」の説明挿図も容易には信じがたきものだといわれているが、ロウマからつたえてフランスで固有に行われたという「馬」火拷問では、古代ロウマで Tormentum ignis とよばれて、というのは、三稜或は四稜の角錐形の立木台長い梯子の上に丁度小形のピラミツドの如きもので体部をなでまわし、もしくは高い梯子に後その上に被拷者をまたがしめ、その稜錐の尖ろ手にしばつて前に乗せた足を焼くという三端を肛穴にあてる。ブラ下つた両脚には、鉄種が用いられたが、中世末期以来、ヨウロツパ丸或は璽石重錘をつけるものだつたという。で最も普通な方法としては、東西古今にわりあげて梯子に固定し、その両腋をロウソクたつて広く且つふるいが、水拷においては、の火でやくのである。古代ドイツで行つたと身体の一部を水につける法、全身を出没させいういわゆる「鉄牛責」というのは、金属製る法、それから水をのませる法の大体三つの牛の胴腔の中へ囚人を入れて、下から燃す。方法があつた。前二者の道具としては、場所肉体を直接に傷害する。いわゆる「皮肉の的な設備の外にはないが、或るときは、波打拷問」では、クルシュネルの年鑑に、スペイ際に逆磔して、潮の干満、潮波の進退による上海での中共の血の粛清でンで行われたというそれがある。足趾の爪と自然利用の窒息拷問もあつた。水をのませる肉との間に木の釘をうちこむので、PANA方法ではたとえば梯子などに定縛した被拷者の香港特電による上海での中共の血の粛清での顔に、単に杓子で注ぎかけるという単純なて、この怪しげな臍の穴を、唯一の出口返ものから、多少の道具をつかつた、たとえばキユアというのがあつて、これは指の爪の間に焼火箸をさしこむのである。湖南省華容の羅炳圻市長がそれをやられたと報道されの羅炳圻市長がそれをやられたと報道された。古代ギリシャ、ロウマ中世ヨウロツパなどで、この外に、鉄槌を使つて肉を殺ぐ法、肉さし棒で突刺す法、皮を脱ぐ法、これに類似の幾多の傷害拷問も行われたが、最後に動物を道具として使う拷問に、ロウマ特有のものとしての、いわゆる山羊拷問、土螢拷問があつた。フイジヤアの拷問史によると、山羊拷問とは、被拷者を縛つて足の裏に塩をすりこみ、それを山羊になめさせるもので、この無邪気な動物は、味のうまさに忘我に引きずられて、忽ち骨があらわれるまでなめつくす。土螢の場合には、彼拷者を裸体にして俯向けに固縛し、土螢を彼拷者の臀の上におきそれを厚いコツプを伏せて覆う。土螢の代用として時にさそりを用い、特に女の場合、廿日鼠が使われた。そうするとコツプの中にとじこめられた件の動物は不安と恐怖におののいて、この怪しげな臀の穴を、唯一の出口返道と思いこみ、ヤタラ無性にそのまわりを嚙みまわる。これらの拷法は滑稽なようで、じつは非常におそるべきものだという。

そどみあ交際術

……ペデの場合、相手のウールの男性の姿の中に、女のような羞恥、つつましやかさ、柔さしさをもとめていることは、確言できる。またそれでこそ、彼はペデといえるのだ……

かびやかずひこ

古正英生函

世のかずかぎりないそどみあたちにとつて、長く長くあつたであろう、鳥羽玉色の夜も、ようやくほのぼのと明けかかつているようである。

これからは、そどみあも、明るい太陽に、そどみあとしての現身を真向うことができようというものだ。とするならば、そどみあは、たがいに、いままでのようなグルミーな交際のみでなく、フランクな、そして明快な交際のテクニツクも知らねばならない。

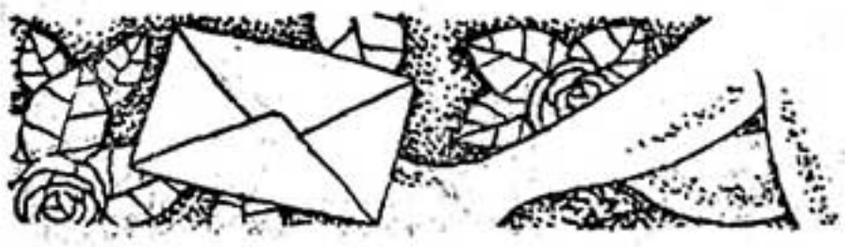
私の許に寄せられている千に垂んとするそどみあからの書信を見るに、その大半が、はげしく相手をもとめながら、相手を知るキツカケや交際のテクニツクがあまりにも拙劣なのにおどろく。しかも遅疑逡巡でありのごとき課題をあたえられたのを機に、そどみあ交際術についてここにすこしく呶々を費してみたいと思う。

そどみあでない人々にとつても、これが、良き友を得るに、又、友情を深める上に、或は異性との交際の上に、なんらかプラスなるところがあれば幸いである。

同志をみわけるには

ここに、ウールニング型の一青年が、電車に乗つているとする。彼の傍近く、彼の理想のタイプの中年紳士が佇つている。それは青年にとつて未知の人なのだが、彼はその紳士に接触したい欲望にうずうずしている。

——こう書くと、人は、その紳士がいかに青年の好みの型の人であつたとしても、もし相手が男色デ



家でなかつたとしたらどうするのだろう？また、男色家（ペデ）だと青年が見ているとすれば、それはどうして見わけるのだろう？等々と思われるにちがい。

ソドミアにおける同志の見わけ方――それはまず大体カンである。

私の知つているT・Mというソドミアの青年（能動・被動両傾向を有す）は、こう言つている。

「真のソドミーとは、実に相手を吟味するものです。吟味するというよりも、自分の求める相手であるか否かが、一目見た瞬間に、カンでピーンとわかるのです」

又、K・Sというウール傾向の中年者から寄せられた書信に、

「私は多年の経験によつて考うるに、一面識なくも、自分の好める同性に対しては、からず二年三年の後には握手す。その容貌によりて、同性を好む人は寄りつく」

とあつた。

このように、そどみあが同志を見かけるカンのよさは、独特のものなのだ。

カンであるから、言葉で現わすことはできない。しかし上記K・S氏の書信に「その容貌によりて」云々とあるように、そこにおのずからそどみあ特有の容姿的特徴もあり、また相手の挙作、態度なども、かれらの〝カン〟をたすけることは否まれない。

では容姿的特徴とはどんなものであるかというと、これはむずかしい問題であつて、明確に定義づけることなど勿論できぬが、私の「診断」によればこうである――

まずペデ傾向の人の外見的特徴としては

1、眼光にいわゆる「好色的」なかげがない。鈍い眼ではなく、ちよつと鋭さがある。

2、一見とりすましたところがある。

3、服装は概してジミである。

4、細面より円顔或は腮の張つたものが多い。

5、女に目をくれないところは以上のとおりだが、次に、エリスの調査によるウールニングの身体的特徴を挙げてみると、

1、臀部が豊満である。

2、両腕にも女性的なふくらみがある。

3、体毛がうすい。

4、女性的な高音を出すものがある。

5、容貌が年令のわりに若々しい。

（解している）

3、皮下脂肪の沈着

4、容貌は大体端正である。

5、一見むツつりしている。

（しかし話しだせば多弁のものが多い）

6、ものしずかな動作、柔さしい挙作、気取つた挙作。

7、服装はハデなものもあるが、共通するとジミなものである。

8、絶対に女性に目をくれないところは潤洒な点である。

私の気の付いたところは以上のとおりだが、次に、エリスの調査によるウールニングの身体的特徴を挙げてみると、

1、臀部が豊満である。

2、両腕にも女性的なふくらみがある。

3、体毛がうすい。

4、女性的な高音を出すものがある。

5、容貌が年令のわりに若々し

6、総じて、口笛が吹けないと見わける上におこの第六項目など同志を見わけるし、面白いといて、用い方では効用できるし、面白いと思う。

以上の点を心得ていて、あとはカンをはたらかせれば、大体相手を見わけられるのではあるまいか。

キツカケのテクニック

途上の行きずりで、電車の内で、映画館で、その他もろもろの場所で、おのれの好みの男性を見かけ、それが同志だと感じとつた場合、相手と接近するためのキツカケは、いかにすれば効果的か？——

ソドミアは、特にウールニングは内気である。その内気をウールニングが、未知の好みの相手に親近するためのキツカケの一つに、眼を送る方法がある。いうまでもなく、ものいう眼を相手に通わせるのだ。

それは勿論、娼婦が客にするような、いやらしい秋波であつてはいけない。好意と情熱とをもつた眼で、睨みすえるように相手を凝視するのである。

それが、ウールからペデ型男性へ送つた場合、相手も好意の眼差で見返してくれば、OKと見ていい。

「城之崎伍長の貌を一目見たとき、私は、一瞬、激しい、そして快い衝撃に発止とうたれた。私は、彼と結びつきたい衝動に、戦くなるウールニング青年が、ベルナルディーニという警察官に恋情をを睨みすえるように、しかし優さしい目の色でジーツと凝視していた。彼も、私と同じよ抱いて、その後を毎日尾行しつづけ、二年後に愛を告白する一節がうなショツクに撃たれていたのだろう。

ある。

間もなく、彼は、私を已が傍へのみ、ひきつけはじめた。」

はなはだ拙ない例で汗顔のいたりだが、これは、男色をテーマとした私の小説「煉獄」の中の一節で、あるソドミアの事実を素材として書いたものである。

次に、ペデからウールへ眼を送つた場合、ウールの顔に羞じらい或は媚の色が見えればそれは愛の肯定を意味するものだ。

又、こうした場合、ソドミアというものは気取り屋であるから、内心相手の愛を肯定していても、表情はうらはらに、わざとさりげない目色やいぶかしげな顔をすることもあるから、そのようなときには、眼でするキツカケはうちきつて、他の方法に転ずることが賢明である。

第二に、相手を尾行する手がある。

姿みと男色を主題とした作品として有名なジャンジュネの「泥棒日記」に、作者自身らしい「私」なるウールニング青年が、ベルナルディーニという警察官に恋情をを睨みすえるように、しかし優さしい目の色でジーツと凝視していた。彼も、私と同じよ抱いて、その後を毎日尾行しつづけ、二年後に愛を告白する一節がうなショツクに撃たれていたのだろう。

ある。

「翌日から、わたしは毎日巧妙に彼の後をつけ、遠くからそれとなく彼の姿を見ることができるように工夫した。わたしは精巧な尾行の糸で彼とわたしを結びつけた。（中略）二年後、わたしはマルセユに舞い戻ると同時にサン・シヤルル駅で捕まつて警察に連れて行かれた。刑事たちはわたしが何か白状するだろうと思つて、わたしを手荒く責めたてた。その最中に警察署の入口の扉が開いて、驚いたことにベルナルディーニが入つて来た。わたしは彼がきつと同僚たちに加わつて、更にわたしを打擲するのではないかと思つた。が、彼は打擲を止めさせた。し

かし彼は、わたしが恋情を抱きながら彼の後をつけていた頃、一度もわたしに注意したことはなかつた。たとえ二、三度わたしの顔を見かけたとしても、二年も経てば忘れている筈だつた。その時なぜ彼がわたしを護つてくれたのか、わたしには説明がつなかい。（中略）

「実はずつと前からあなたを存じ上げているんです」

「そうかい、いつから？」

わたしは咽喉が締めつけるような思いで、彼を憤らせはしまいかと怖れながら、彼に対するわたしの恋情と、彼を尾行けるために用いた数々の術策とを彼に打ち明けた。彼は微笑つた。

「そうか、お前さんおれに惚れてたつていうわけかい？　で、今は？」

「ええ、まだ、いくらか」

彼は更に声を高めて笑つた。（中略）わたしは微笑みながら、多少やくざな調子で言つた。

「どうもこいつばかりはしようがないんですよ。あたしはいい男が好きなたちなんで」

彼は寛大な態度でわたしを眺めた。（中略）

彼は笑いながら、

「なあに、じきに忘れてしまうよ」

と言つた。

「あたしもそう願つてますよ」

（中略）が、結局、我々は愛し合うようになつた。

ジュネとベルナルデイーニとの恋愛は、つまりはジュネの相手に対する尾行が、そのキツカケをつくつたわけである。惟うに、ベルデイーニは、ジュネの尾行を気付いていたのであろう。そして、そうしたジュネに対して注意したのであろう。そして、そうしたジュネに対して注意しなかつたのは、彼がジュネの恋情を暗黙のうちにうけいれていたのだ。それが、二年後に現れたと私は見る。

ジュネの例をすこしく長く引用したのは、このように時間をかけた恒久的な恋愛もあるということを、現今のそどみあ――に示したかつたからである。

相手を尾行中に、機を見てさりげなく言葉をかけてみることもいいだろう。たとえば、相手にどたずねて、その言葉のやりとりの間に、相手に愛の反応が見えれば、近くのコーヒー店などへ誘うのである。

不良少年の常套的誘惑手段に、「話しかけ」「握り」（相手の手を握ること）「エンコズケ」（相手の肉体に手を接触させること）等があるが、それらは、そどみあが相手にするキツカケにもあてはまることで、つまりはそれらの方法を明るく品よく巧用すればいいのだ。

尤もその中の「エンコズケ」は、映画館における半娼的ソドミアがよく用いている手であつて、紳士的そどみあがするキツカケとしては、どぎつすぎて、あまりすすめられるものではない。

ともあれ、相手へのキツカケをつくるには勇気と自信が必要であつて、そどみあにありがちな遅疑逡巡は西の海へすてさらねばならない。

男性が街頭などで未知の異性へモーションづける場合は、他目にも目にたちやすいものだが、これが同性同士ならば、他人も気にとめないから、大膽に明快に行つて、すこしもさしつかえない。もともとウール傾向をもつと知るべし。

その点、外人はいかにもフランクでありスピーデイである。彼は、自分が愛する者の前に立つと、わざときまつて無関心で冷たい態度をとる癖があるのだ。それは、愛していることを相手が気付いて、自分を軽蔑しはしないかとおそれるからである。

やがて時経つて、米人ボクサーは少年に、すまなかつたと謝まり、

「仲直りしよう。そして君をいい所へつれていこう。さア来給へ」

と少年を旅館へひつぱつていつた。米人はペデであつたのである。

その米人は少年を見た瞬間、相手がウールであることを見破つた。

あるアメリカのボクサーと知合つた十六歳の高校生の手記によると、——

その少年が拳闘練習所内で、シヤワー室の前を通りかかると、室内に裸体のままよこたわつていた米人ボクサーが、少年にマツサージボーイではないといつて強く拒絶し、腹立たしい態度を示した。

が、もともとウール傾向をもつていた少年は、このときすでにその米人を愛しはじめていたのである。彼は、自分が愛する者の前に

か否かは知らぬが、とにかく少年に一目惚れし、マツサージしてくれという、命令的な強引なキツカケを投げたわけである。そしてそのキツカケの的は外れなかつたのだ。彼は親切で男らしい態度と、ボクサーにはめずらしい高度な智能と、美しいバスをもつていた由である。

寝室の心得

相手を愛し、相手との交流をながくつづけようとするならば、その閨房においても、たがいのためにもろもろの配慮がなされなければならない。

まず、それが肉体だけの戯れであつてはならない。肉体の愛情の内側に、強い深い精神の愛情が腰をすえていなければならない。精神的愛情の強さ深さは、肉体の愛情をもいつそう強烈にさせるものである。

そどみあに共通するファルス・ナイドも、かかつてそこに存するわけだ。つまり、「このように愛してくれる人の——或は愛する人の、このように立派なもの」というところにあるのである。

精神の愛情のない交会のいかに貧しいことか。それは男娼との交りを経験している人ならば、よく知るところであろう。

次に微細な点をいうならば、第一に清潔を心がけることである。

不潔はそどみあの最も嫌うところのようだ。新宿の男色茶房〝夜曲〟のマスターなども、

「双方が裸になつたとき、相手のパンツがよごれていたりすると、一遍に興味を失つてしまいます」

と言つているが、まことに肯なりである。

下穿、下着のみでなく、身体の清潔も肝要であるこというまでもない。それは互いのためである。

戦後、そどみあの交会は、一方が能動一方が被動と限定されず、両者が交互に能動被動をたのしむ傾向になつているが、それにしてもウール傾向の者はパツシヴの位置になることをよろこび、ペデ傾向の者はアクテイヴの位置におきかえてよいのである。

真のそどみあは、同性の男性本来の姿を愛することにあるとはいえ、ペデの場合、相手のウールの男性の姿の中に、女のような羞恥、つつましやかさ、柔さしさをもとめているることは、確言できる。またそれでこそ、彼はペデといえるのだ。

ましやかさを忘れてはならぬと言いたい。

ジヤン・ジユネは、ベルナルデイーニと愛しあうようになつてから、次のようなことを、述べている。

「わたしはその後頻繁に彼と会つた。わたしは彼と並んで街を歩く時は、彼の足音にわたしの足音を重ね合せた。それが日中ならば、わたしは努めて彼の影がわたしの身体を包むような位置に身を置いた。このような単純な戯れがわたしを幸福感で一杯にした」云々。

この場合のジユネの位置はそのまま閨房におけるウールニングの位置におきかえてよいのである。

真のそどみあは、同性の男性本来の姿を愛することにあるとはいえ、ペデの場合、相手のウールの男性の姿の中に、女のような羞恥、つつましやかさ、柔さしさをもとめているることは、確言できる。またそれでこそ、彼はペデといえるのだ。

泣くな演歌師

華やかなネオンの巷を陽気に流して歩く演歌師にも、人に隠した哀しみがある。演歌小説の添田氏が実在の人物に材をとつて描く盛り場挿話……

§巷のピエロ§

添田さつき

アコーデイオンと、ギターと、ヴアイオリンと、三人もしくは四人の一組、時花の唄をうたつて奏でて、ネオンの咲き狂う歓楽の小路々々を、流してまわる演歌師が、東京には三百人からいる。

銀座、新宿、浅草。このそれぞれを職場とする演歌師の、三つの大きなグループがあるが、外に渋谷もあれば池袋もある。上野もある。さらに周辺の小歓楽街を専らの小集団もある。

キヤバレーといい社交場といい、ナイトクラブといいサロンという。呼び名は変り、設らえは新しくなつても、所詮は若い女性が酒間を斡旋するの場で、曾てのカフエーバアの類と実質的には変りはない。多少のフロアをとつて、いつでも踊れるようになつているのが、まあ戦後型というところだ。大きな店にはバンドがある。バンドのないところではレコードで踊る。そんなところへ演歌師が来合わせれば、早速に御用とおつしやる。バンドのある店でも、バンドが時間でひきあげてしまつたあとでは、また演歌師が重宝に呼び込まれるなどあつて、案外に、いや中々に彼らは忙しいのである。

演歌師といつても、もはや歌が主ではなくなつている。こうなれば演歌師というよりも「巷の楽人」といつた方が適切なのだが、それが未だに演歌師で通つているのだから、そこに伝統というものの妙があるとでもいうのだろう。

ネオンの下ではジヤズとブギ、半裸の女性がうづまき、ライトがくるめき、雰囲気はいやが上にもわきたつているのだから、そこへよび込まれる演歌師とてもせいぜいうきうきとうたい、奏でなければ、酒客の御機嫌をとり結ぶことはできない。憂いを帯びていたり、泣きべそであつたりしては、小説か読物の主人公にはなれるかもしれないが、現実の演歌師とあつては、それでは当人が商売にはならない。

ところがそういう演歌師が東京に三百人からいる中に、たつた一人いる。浅草グループの田川満夫がそれである。

§流れて漂つて§

田川はセピアの色眼鏡をかけている。だから彼の憂鬱の表情は、人にはちよつとわからない。

佐山のアコ、吉野のギター、歌の松原。その三人のうしろから、田川は昔からヴアイオリンで随いてまわつている。みんなはうきうきとやつているが、彼はちつとも気もちが弾まない。しようことなしに、弓をひきこすつているだけである。仲間はみんな、結構たのしそうに、うたつたり、奏でたり、合間には女の子とふざけたりもすれば、客と駄洒落問答をやつたりしている。それがなんだか、遠い世界のことのように、田川だけは、うしろの方でぼんやりしている。

田川はいまでは演歌師の中で、一番の古顔になつた。色眼鏡のせいで、すぐにそれとはわからないが、四十をとつくに越しているのだが、何分外の点では進歩しているといえる。歌の松原にしたつて、ヴアイオリンもひけば、アコもギターもいじるのだから、結構成り立つのである。そうなると田川は、古顔という理由だけで、しようことなしに、連れて歩かれているのではないか、というようなことを、時に考えることがある。

といつて誰からも露骨にいやな顔をされたというわけではない。だからこれは田川一人の、所謂ひがみというのかもわからない。

正直いつて、どうして憂鬱なのか、田川自身にも、はつきりはわからないのである。

こういうふさぎの虫という奴が、一番始末がわるい。

第一仲間の誰彼が、若い女の子と仲よくしているのを見ても、格別なんの感慨もない。それなら田川は女に興味がなくなつていたのかといえば、そうでもない。若い女にもてたらよかろうと思いはするのである。それでいて、自分から女に働きかける気もちはしない。女の方から働きかけられたら、どうなるか、それはわからないが、そういうチヤンスには絶えて久しくぶつからないし、この調子

ではどうもぶつかりそうもない。なんだか人類から仲間はずれにされたような、そんな気もちがするのである。

彼が演歌師になつたのは、昭和の初年である。

彼は九州の、さる大都市の、駅前旅館の息子だつた。十五才で母に死別し、第二の母が来た。第二の母は彼にもいい人であつたが、彼の年令ではもう「お母さん」といえなかつた。そのお母さんと呼べない気もちのしこりが嵩じて、その母によつて弟ができてから、家をとび出した。

父は、彼にとつて父に変りはなかつた。しかし第二の母が来てから、その父が、彼から遠くなつて行つた。父は恋しいのであり、近くありたいのだが、それがどうも勝手がちがつてしまつた。継母も大切にしてはくれたが、それにどうしてもなじみ切れなかつたのは、自然なものにうけとれなかつたからであろうか。

弟ができてから、田川は、どうも自分が、この家の中で余分の者のように思えてきた。そんな気もちの自分がここにいることは、この家を不幸にすることだと思つた。何も知らない弟もかわいそうだと思つた。

といつて、自分が身をひくといつたような犠牲的精神でだけ、とび出したとはいい切れない。なんだか人なかつた。一人になつて、自由に、とびまわつてみたいという気もちが一方に多分にあつたことは争われない。

そして東京に出て、道楽商売の演歌師になつた。勉強をするつもりもないではなかつたが、らくにのんきにわたれることで、ついずるずるに演歌師になり切つてしまつた。

その頃は、都会には縁日があつたし、田舎にはたかまちがあつた。それからそれと、流行りの唄をうたつてまわつて、景気不景気のない波はあつても、景気がよければスリルだし、とんだ曲芸だといえばスリルだし、商売はふるわなくても、それはそれなりにまたおもしろいこともあつた。

その気になれば、女にもてることもあつた。

仲間の中には、女をこしらえると、これをだからそれは、古い仲間のうちでは、一つしばらくなぐさんだあとで、言葉たくみに、話にされていた。いまでは田川自身、そんなことを、わが身の上におこつたことと実感できない。遠いことであり、絵そら事のように思える。

それは年令から来るものであろうか。その頃の仲間は、いまではそれぞれ、事業家になつたり、有名歌手になつたり、町の顔利きで

魔窟へはめ込んだりした悪質の者もいたが、つまり演歌師にも硬派と軟派とがあつて、軟派の中には、そんなアブノーマルな雰囲気があつた。

田川には、女を売りとばしたり、金品をまきあげたりというような、あくどいことはさすがにできなかつたが、しかしアブノーマルな雰囲気の影響下にあつたことはたしかである。

たとえば、ひと頃、下谷のある町で、二階借りをしていたことがある。そこの娘がしげと二階へあそびに来るようになつた。いつもヴアイオリンや唄の稽古をする。その音が、らくにのんきにわたれることで、ついずるずるに演歌師になり切つてしまつた。

仲よく親密となつたのだが、さて、その娘といいことをするのに、こそこそやつては、階下の親たちに感づかれてしまう。そこで彼はヴアイオリンを弾きながら、一方の運動をしたというのである。これはなんとも、スリルといえばスリルだし、とんだ曲芸だといえばまさしく曲芸でもある。

田川は、そんなサムライであつたこともある。

区会議員になつたり、あるいは興行師になつたり、店舗を持つたり、派手なのもあれば地道なのもあるが、おちついた市井の生活に入り込んでいる者がたくさんいる。その中で、田川一人が、相も変らずヴァイオリン一挺の演歌師である。

それが、とり残されたような気もちをもたらすのだろうか。

そうともいえない。それらの成功者を格別羨ましいと思つたこともないのだし、家をとび出したときから、生涯漂泊の旅だと思つていたのだから、いまになつて世間並の生活を羨んだりしては、これはおかしいことになる。

それならば、なぜ、憂鬱なのだろうか。それが自分ではわからない。四十面をさげて、「知らず知らずに泣けてくる」ことがある。

§ 大人現れて §

ある晩、例の通り四人でナイトクラブ・キャンドルをのぞくと、すぐ呼び込まれた。三人づれのみな年配の客である。一人つるつるに禿げた大人がいたが、客と客の間に女性がはさまつているのは型通りである。

こちらも型通り、恋と別れのブルースをやり、お次にはんこ節と行く。手なれたものだ。二曲演奏して百円が浅草の通り相場である。松原の咽喉の調子はいいし、女性たちがうたい添えたりするので、場はいかにもうきうきとなつているのに、どうしたわけか、禿げた大人がだんしかめ顔になつてきた。

二曲目が終つて、「お次は何を」と松原が伺いを立てた。百円でおしまいか、延長戦にするかというところだ。すると大人が、

「演歌をやれよ。君たちは演歌師だろう。そんなのはレコードでもラジオでもいくらでも聴けるじやないか。古くてもいい、演歌独特のものをやれよ。（お前とならば）でも（パイノパイ）でも、いくらでもおもしろいのがあるじやないか。」

松原の知らないものばかりだ。頭をかいて田川の方へふり向いた。

「やりましよ。お古いところを、」

田川が一足出て、ヴァイオリンを弾きながら、うたいはじめた。

お前とならば、どこまでも
春なれば
花咲く上野や向島
ドツコイ　手をとりて　二人づれ

いとし姿を、見送りて
闇ならば
いつそ未練はあるまいに
ドツコイ　どこまでも　月が照る

眼を細くして聴いていた禿の大人が、そこ

で、われとわが手をぱんと叩いて、
「うむ、いい文句じやないか。え、わしも昔好きでよく唄つた文句だ。そのものずばりと来られたな。これこそなつかしのメロデイーだ。よしよし、もつとやつとくれ。」
「では、これは如何で？」

貧乏でこそあれ日本人はえらい
それに第一辛棒づよい
天井知らずに物価はあがつても
湯なり粥なりすすつて生きている
アハ　ノンキだね

「おや、ノンキ節と来たな。石田一松よりうまいじやないか。こりや愉快になつてきた。よし、わしも一つ、やつてやろう。」
禿の大人は笑うと眼が細くなるというより眼がなくなつてしまうという方があたつている。まつたく、つるつるの童顔になつてしまう。よほどの御機嫌でないとこうはならないのだよと、連れの客が女給にいつて聞かせていた。その眼のなくなつた、つるつるの大人が、うたい出したのだから、女性たちはくすくすと、笑いをおさえるのに苦しんでいた。

柳芽をふく　イソイソ　春恋しさに
南の国からはるばると
今年もお世話になりに来た
こちらの姉さん美しい
わけて島田が似合います
などとつばめの　イソ　愛嬌者

田川はその声を聴いて、おや、と思つた。くすくすだつた女たちも、途中から本気で聴き入つてきた様子である。大人は眼をなくしたまま、肩をゆすつていい気もちそうにうたいつづけた。

川岸の柳が　イソイソ　その傘待ちやれ
待ちやれ待ちやれと止めるのに
さらりさらりと受け流し
ほほと笑うて　橋わたる
わたる蛇の目を　ちよとのぞき
すいとマタそれたる　イソ　ぬれつばめ

「これは増税節といつてな、ゼーゼーというのはつまり税々だ。わかつたか諸君。わかつたら本は一組十銭と二十銭だ。」
大人の声に、どつと笑いがあがつた。田川もうきうきとなつていた。

女性たちは冗談ととつたらしいが、田川には発声や節まわしで、これは演歌のものだとうなずいていたのである。
「もつとお古いところで、これはどうだ。」
大人はいよいよ興が乗つたらしい。

背には子を負い太鼓腹抱えノーヤ
それで車のナンギナモンダネ
トツアツセー　あとを押す
マシタカゼーゼー
くの字なりした白髪の婆がノーヤ
納豆々々とナンギナモンダネ
トツアツセー　しやがれ声
マシタカゼーゼー

「旦那、それは（つばめ節）ですね。」
田川がせき込んで、いつた。
「さうだよ。わかるだろう。だが、旦那なんていわないでや。わしも君らと同職だつたんだよ。ははは。」
「旦那、いえ、それぢやあ大先輩。先輩といわして頂きます。先輩はいつ頃、演歌をおやりになつたんですか。」
「はつはつ、こりや到頭化けの皮をはがれることになつたか。さようさ。頃は大正も、七

八年の頃だな。だからノンキ節もニコニコ節も、まだ出来立てのやつを、われわれはうたつたわけさ。あの頃の演歌はさかんだつたなあ。縁日もさかんだつたし、演歌人にもおもしろい人物がたくさんいた。なつかしい時代さ。」

「失礼ですが先輩。そういう話をいろいろ聞かして頂きたいんですが、私は田川満夫といつて、いつも浅草でやつている者です。」

「うん、君はいくらか演歌の本筋がわかるようだ。なに、わしだつて、学校へ行くために演歌を、それ、今でいうアルバイトに、二三年やつただけのことだから大したことは知らないがね、演歌のおかげは蒙つているんだ。まあ遊びに来たまえ。隙のある時はいくらでも話すよ。」

と名刺をくれて、

「だが、これだけは今言つておくがね、演歌は昔、楽器などは使わないで、声だけでやつていた。それが明治の末年から、ヴアイオリンだけ使うようになつた。それが今では、君たち、そのようにいろいろの楽器を使つてにぎやかにやつている。たしかに進歩したものさ。しかしね、演歌は歌に味があつたんだ。これはわしも、当時先生から聞いたことだが演歌のはじまりは、明治の二十年頃で、自由民権の運動がさかんな頃、ダイナマイト節だとか、欣舞節、愉快節などと、壮士がうたい出したもので、大衆の気もちを天下に訴えたものなんだな。だから大衆と離れちやいけないし、楽器は従で歌が主でなくちやいけない。こんな理窟をここでいつてもはじまらないか。はつはつ。おい、せつかくわしも思い出したんだから、もう一つうたわせてくれ。」

子ども三つ四つ　イソイソ可愛いい盛り
憎まれ盛りは六つ七つ
十七八は　花盛り
二十七八は　色盛り
分別盛りは　四十一二
五十六十はイソはげ盛り

爆笑だつた。はげた当人がうたうのだからこれは御愛嬌である。どうもこの場は、当の演歌師よりも客の方にすつかりさらわれたかたちだつた。多分の祝儀にもありついたが、そんなことよりも、何か田川は、心の底からうずうずするたのしさを味わつた。もらつた名刺には「多摩伸銅株式会社々長　宮田幹爾」とあつた。あの客は自身演歌をやつたという

「だから別にしても、要するにあの年配の客なら演歌の意気をよく知つているのだと納得できたことが、たのしく、また希望的だつた。

「田川さん、うまいや。ああいうのをうたいなさいよ。ぼくたちもおぼえるよ。」

若い仲間からいわれて、田川はそれから夜毎うたいだした。すると顔なじみの女たちにも、

「あら、田川さん、ヴアイオリンをひくだけだと思つていたら、歌もうまいのね」

と再認識されるようになつた。二つ三つうたつているうちに、忘れていたいろいろの歌や、いままでも立派に通るいい歌詞が、だんだんに思い出されてきた。いい歌だつたが、とあとの文句がどうしても思い出せないものもあつた。（そうだ、昔はちやんと歌本があつたからよかつたなあ）と思つた。

とにかくそれから、古い演歌をうたうのが田川の通りものになつた。そのノンキ節からあだ名がつけられた。もし読者のうちで、田川に会つてみたいと思われる方があるなら、浅草の演歌で「ノンキナトウサン」と訊かれるならば、色眼鏡のやせた男が、しかしさつそうと現れるでありましよう。

飜譯ハードボイルド探偵小説

嘲笑う殺人

ダン・エル・ハメット

平井イサク譯

「ロナルド・エイムスと申しますが、ビネツトさんーテイモシイ・ビネツトさんにお目にかかりたいのです」と、サミュエル・スペイドは云つた。

「ビネツト様はお休みなのでございますが」と執事はためらいがちに答えた。

「いつお目にかかれるか訊いてもらえませんか？　重要な用件なのですが。オーストラリアから帰つて来たばかりなのですけれど、むこうにある彼の財産についての話なのです」

「お訊きいたしましょう」と云うと、執事は階段をあがつて行つた。

スペイドは煙草に火をつけた。

執事がまた階下におりて来た。

「申しわけございませんが只今はお目にかかれませんそうで。しかし、テイモシイ様の甥のウオーレス・ビネツト様がお目にかかりますそうでございます」

「ありがとう」と云つて、スペイドは、執事について階上にあがつた。

ウオーレス・ビネツトは、すらつとした、スペイドぐらいの年令の——三十八——色のくろいきれいな男だつた。彼は、微笑を浮べて椅子から立ちあがると、「はじめまして、エイムスさん」と云つて、椅子を示すとまた腰をおろした。「オーストラリアからお出で?」

「今朝ついたんです」

「テイム伯父の、仕事の方のお知り合いですか?」

スペイドは、微笑を浮べて首を振つた。「そういうわけではないのですけど、彼の耳に早く入れておいた方がいいような情報を持つているんです」

ウオーレス・ビネツトは、考えこむように床を凝視めていたが、やがてスペイドの方に眼をあげた。

「できるだけお目にかかるように話してみましょう。ですが、時どきひどく頑固になるので……」

「会うのは嫌だと云われているのですか?」

◇原作者ハメットとハードボイルド◇

いわゆるハードボイルド派の探偵小説とは、簡単にいえば、従来の探偵小説の本筋であつた〝謎解き〟に興味の中心をおかずに、カンと行動によつて事件を解明してゆく探偵小説のことであり、この派がまた、行動派とよばれるのはこのためである。

そしてこの派の創始者が、ここに短篇を訳出したハメットなのである。

彼の特色は、冷酷非情に現実を描破していく点にあり、彼の文体を評して、ヘイクラフトなどは、〝ヘミングウエイすら、ハメットほど効果的な会話は書けまい〟と云つたほどであつた。

彼につづくハードボイルドの作家としては、レイモンド・チャンドラーがいるが、その長篇は全部、邦訳紹介されているから、お読みになつた読者も多いだろう。

ハメットの長篇では、〝マルタの鷹〟などが映画も入つているので最も知られているのではないかと思う。（平井イサク）

私立探偵サム・スペードの眼前で続けざまに起つた二度の殺人！　莫大な遺産を持つ老人をめぐつて暗闘する一家の秘密！　行動派探偵小説（ハードボイルド）の始祖ハメットの傑作短篇！

「ええ」

スペイドは立ちあがつた。その顔には何んの表情も浮んでいなかつた。

ビネツトは、すばやく片手をあげた。

「ちよつとお待ちになつてください。何んとかして気を変えさせるようにしてみますから、きつと……。あなたは彼に何か売りつけようとしてるのぢやないでしようね？」

「違いますよ」

「ぢやあ、なんとか……」

若い女が、怒つたように叫びながら入つて来た。「ウオーリイ、あの爺つたら……」

彼女は、スペイドに気がつくと、片手を胸にあてて言葉を切つた。

スペイドとビネツトは、同時に立ちあがつていた。

「ジョイス、こちらはエイムスさん、義理の妹のジョイス・コートです」

とビネツトはおだやかに云つた。

スペイドは頭をさげた。

ジョイス・コートは、まごついたようにちよつと笑うと、「突然とびこんで来たりしてごめんあそばせ」と云つた。

彼女は、背が高く、眼の青い、すらつとした色のくろい二十四、五の女だつた。彼女はブルーのサテインのパヂヤマを着ていた。

ビネツトは、やさしく彼女に微笑みかけると訊いた。——

「いつたい何を興奮しているんだい？」

怒りでその眼をまた曇らせると、彼女は何か云いかけた。がスペイドに眼をやると、云つた。——

「だけど、何もうちの中のつまらないごたごたをエイムスさんに……。もし……」彼女は躊躇つた。

スペイドは、また頭をさげた。「どうぞ、どうぞ」と彼は云つて、ビネツトは彼女といつしよに部屋を出て行つた。

「すぐ戻ります」と云つて、ビネツトは、蒼白な顔をスペイドの方にむかつてあげながら云つた。

スペイドは、彼らが出て行つた入口へ行くと、そのすぐ内側に立つて聞き耳をたてた。

彼らの足の音が聞えなくなつた。その他には何も聞えなかつた。

悲鳴が聞えてきたのは、スペイドがそこに立つている時であつた。それは、恐怖にみちた女の悲鳴だつた。銃声が聞えてきた時には、スペイドはもう入口を駈けぬけていた。

それは、壁と天井にこだましたピストルの音だつた。

入口から二十フイートほどの所に階段を見つけると、スペイドは三段とびにそれを駈けあがつて行つた。彼は左に折れた。廊下を半分ほど行つた所に、女が仰むけに倒れていた。

ウオーレス・ビネツトが、その女の片手を握つて傍に膝まづき、低い声で、「モリイ・ダーリング」と叫んでいた。

ジョイス・コートは、彼の後ろに立つて、涙を流しながら、手をもみ絞つていた。

床に倒れている女は、ジョイス・コートに似ていたけれども、彼女より年をとつていた。

「死んでいる、殺されたんだ」とウオーレス・ビネツトは、蒼白な顔をスペイドの方にむかつてあげながら云つた。

ビネツトが顔を動かすと、彼女の心臓のうえの洋服にあいた穴と、どんどん大きくなつていく黒ずんだしみがスペイドの眼に入つた。

スペイドは、ジョイス・コートの腕をつつき、「警察と救急病院電話」と彼は云つた。

彼女が階段の方に走つていくと、「誰が……」とウオーレス・ビネツトに行つた。

スペイドの背後で、弱よわしいうめき声が

聞えた。

彼はすばやく振りかえつた。開いているドアごしに、白いパヂヤマを着た老人がくちやくちやのベツドに斜めに横たわつているのが彼の眼に入つた。頭、肩、それに片腕は、ベツドの端からたれさがつていた。もう一方の手は、ぴつたりとのどにあてられていた。彼はまたうめき声をあげて、まぶたをひきつらせたが眼は開けなかつた。

スペイドは、老人の頭と肩を持ちあげて、枕にのせた。老人は、またうめき声をあげると、のどから手をはなした。そののどは、半ダースほどの傷あとであかくなつていた。彼は顔に傷あとのあるやつれた男で、そのために老けて見えるようだつた。

ベツドの傍のテーブルの上に、水がコツプに入れておいてあつた。スペイドは、老人の顔に水をぶつかけ、彼がまばたきすると、かがみこんでおだやかに云つた。

「誰がやつたんです?」

充血した灰色の眼が見えるまで、ひきつつたようなまぶたが開いた。老人は、片手をまたのどにあてながら、苦しげにしやべつた。

「男の奴が……奴が……」彼はせきこんだ。

スペイドは、いらいらしたように顔をしかめた。彼は、老人の耳にほとんどくつつくほど近くへ口をもつていつた。

「奴はどこへ行つた?」彼の声はせきこんでいた。

やつれた手が、家の裏側を指さすように動いたが、ベツドのうえに落ちてしまつた。

執事と、二人の驚ろいた女中が、死んだ女の傍に集つていた。

「誰がやつたんだと?」スペイドは彼らに訊いた。

彼らは、ぼんやりと彼を凝視めていた。

「誰か老人をたのむぞ」と云つて、彼は廊下を走つて行つた。

その廊下のつきあたりが、裏階段になつていた。彼は階段をおりると、食料品室から台所に入つた。誰もいなかつた。台所のドアは閉つていたが、彼が開けてみると、鍵はかかつていなかつた。彼は、狭い裏庭をぬけて門まで行つてみた。そこにも鍵はかかつていなかつた。彼はその門を開けた。その先の狭い道にも、人影はなかつた。

彼は、溜息をもらし、門を閉めると家に戻つた。

スペイドは、いらいらしたように顔をしかめた。彼は、老人の耳にほとんどくつつくほど近くへ口をもつていつた。

「奴はどこへ行つた?」彼の声はせきこんでいた。

スペイドと向いあつて、プレスを必要とするようなじみな洋服を着た、ろくにひげもつていない大柄なポルハウス部長刑事が坐りの傍に集つていた。

「誰がやつたんだと?」スペイドは彼らにまた訊いた。

彼らは、ぼんやりと彼を凝視めていた。——

老人としやべらせやしないんだ。彼がすこしでからまた訊けばいいんだけど、あんまりは知つてそうもないな。うとうとしているひき廻すんで眼が覚めたんだよ。彼は、自分をしめつけてる奴をちらつと見ただけなんだ大柄な、ソフトをまぶかにかぶつた、色のくろい、ひげをそつてないような奴だつたつて云つてるんだよ。トムみたいぢやないか」スペイドは、ポルハウスにむかつてうなずいた。

部長刑事は、クスクスと笑つたが、ダンディ警部が立つていつた。

「それから?」とそつけなく云つた。

スペイドは、ニヤツと笑つてつづけた。

「ビネツト夫人の悲鳴がドアの所で聞える、と、のどから手がはなれて、銃声が聞え、気を失う直前に、大きな男が家の裏の方へ走つてくのと、ビネツト夫人が廊下に倒れるのが彼の眼に入つたんだよ。前には会つたことのない奴だつて云つてたぜ」

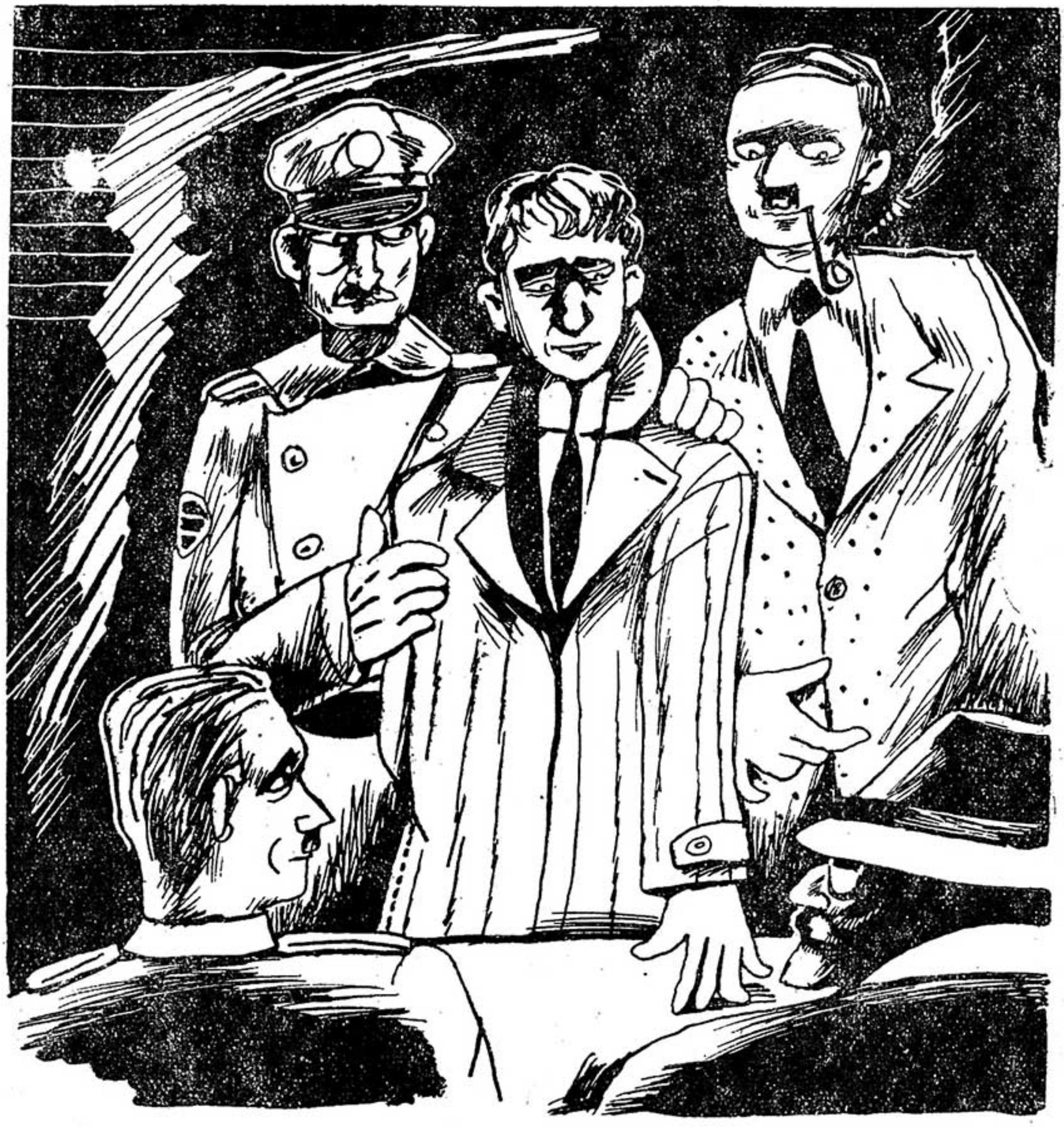
「ピストルのサイズは？」とダンデイが訊いた。

「三十八口径だよ。このうちの連中はたいして役にたたないな。ウオーレスと義理の妹のジョイスは、裏の階段を駈けおりて行くような音を聞いたように思うけど、二人とも彼女の部屋にいてとび出して来た時には死んだ女以外、誰も見えなかつたつて云うんだよ。何年もの間、誰も彼のことを厄介者だつたんだな。何年もの間、誰も彼の話を聞いていなかつたわけだな。俺は、オーストラリアから八ケ月前に、かなりひどいかくこうで姿を現したんだよ、金だけは持つてるんだけどね。オーストラリアで一もうけしてきていて、余生を生きているたつた二人の親類のもの、甥のウオーレスとアイラといつしよに送りたいつていうわけさ。

「二人にとつてもうまい話さ。〝たつた二人の生きている親類〟つてことは、連中にとつちやあ、〝たつた二人の後継ぎ〟つてことだからな。しかし、だんだんに甥たちは、二人の後継ぎの一人であるよりも、唯一人の後継ぎの方がいいつて思い始めたんだよ——実際、二倍になるんだからね。すくなくとも、アイラは、ウオーレスのことをそう云つたよ。ウオーレスが同じようなことを云つたとしても俺は驚ろきやしないけど、ウオーレスの方がうわてらしいな。とにかく二人の甥は仲違いして、アイラの所にいたテイム伯父はこちらへ移つて来たわけなんだ。それ以来アイラは伯父と会えないでいるし、電話をかけても手紙を出しても、連絡が取れないんだよ。

「それで、彼は私立探偵が必要になつたわけさ、彼はどんなことになつてるのか知りたかつたわけだな。俺は、オーストラリアから船が入る今日まで待つて、エイムスと名のりテイム伯父さんのオーストラリアにある財産のことについて話があると云つて、ここへやつて来たんだよ。俺は、十五分間彼と二人つきりで話がしたかつただけなんだ」

スペイドは、考えこむように顔をしかめた。「それができなかつたんだよ。ウオーレスが、老人が会わないと云つた、つて云うんだ。ほんとかどうか知らんがね」



ダンデイの、冷やかな青い眼に浮かんだ、凝惑のいろがこくなつた。

「それで、そのアイラ・ビネツトつてのは今、どこにいるんだね?」と彼は訊いた。

「知りたいもんだよ。奴さんの事務所とうちに電話したんだ、だけど……」

しといたんだよ。奴さんの事務所とうて、すぐこつちへ来るように伝言指をまげて、鋭く二回ノツクする音が聞えた。

部屋にいた三人が、そのドアの方を振りむいた。

「入りたまえ」とダンデイが云つた。

よくあつたグレイの洋服を着た、四十からいの太つた男の右手首を、左四十四、五手で握つた金髪の警官がドアを開けた。警陽やけした、太つた男を部屋の中に押し入れた。

「こいつが台所のドアをいぢつているのを見つけたんです」と彼は云つた。

「アイラ・ビネツトさん、ダンデイ警部とポルハウス部長刑事です」

アイラ・ビネツトは、早口で云つた、「スペイドさん、この男に……」

ダンデイが警官に云つた。「よし、よくやつた。ここへおいて行つていいよ」

警官は、片手を帽子にもつていくと、部屋を出て行つた。

ダンデイは、アイラ・ビネツトをにらみつけて、「それで？」と云つた。

ビネツトは、ダンデイからスペイドに眼をうつした。「何か……」

「なぜあなたが玄関でなしに裏口にいたか彼に説明した方がいいですな」とスペイドは云つた。

アイラ・ビネツトは、さつと顔をあからめた。彼は、どぎまぎしてせきばらいした。

「そう、説明した方がよろしいでしような何も私が悪いんぢやあないんです。が、ジヤアポウ――執事ですが――がテイム伯父が私に会いたいと云つているという電話をかけてきた時、台所のドアに鍵をかけないでおく、そうすればウオーレスが……」

「何んのことであなたに会いたがつたので す？」とダンデイが訊いた。

「わかりません。彼が云いませんでしたので。何か非常に重要なことだと云つてました」

「私の伝言は聞きませんでしたか？……」

スペイドが訊いた。

アイラ・ペネツトは眼を見開いた。「いや何んです？　何か起つたんですか？……」

スペイドは、ドアの方へ歩いて行つた。

「トーストがさめちやうぞ」とスペイドは云つた。

ジヤアポウは、あわててコーヒー・ポツトをひつくりかえしそうになり、顔をまつかにしながら立ちあがつた。

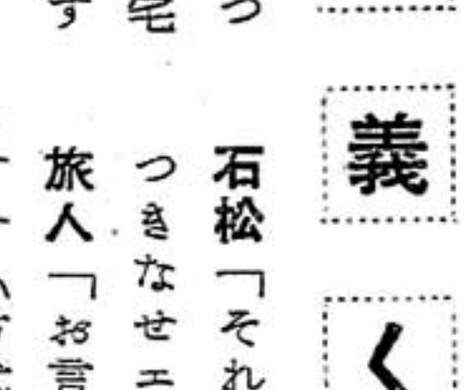
「し、しつれいしました。お持ちする前にテイモシイ様がお眼覚めかどうか確かめたかつたのです。もしお休みでしたら……」と云つて彼はお盆を取りあげた。

ドアの所に立つたスペイドは、「わかつた」と云つて、身をかがめると、鍵穴から中をのぞきこんだ。「椅子と窓の一部だけで、ベツドは見えないぢやないか」と、彼は起きなおると、おだやかに非難するように云つた。

「先へ進めろよ、すぐに戻つて来る」と彼は、ダンデイに云つた。

彼は、きちんとドアを閉めると、三階にのぼつて行つた。

ジヤアポウ執事は、テイモシイ、ビネツトの部屋の前に膝をついて、片眼で鍵穴からのぞきこんでいた。彼の傍の床には、エツグ・カツプにさした卵、トースト、コーヒー・ポツトなどをのせた、お盆がおいてあつた。



東西仁義くらべ

旅人「エエどめんなすつて。当地次郎長親分の宅はこちらさんでござんすか」

石松「御意にござんす。おはいンなンし」

旅人（敷居をまたぎながら）「敷居のうち御免なンし」

石松「おつきなせエ」

旅人「これにて御免こうむります」

石松「それじや御仁義になりませんからおつきなせエ」

旅人「お言葉に甘えまして御免こうむります」（方式どおりに手をつき）「これは親分さんにごめんなさンし」

石松「どう仕りまして。手前、若いもんにござんす。」

旅人「手前、旅中の若いもんにござんすか、おひかえなせエ」

石松「どう仕りまして。手前とても若いもんにござんす。おひかえなせエ」

旅人「おひかえなせエ」

石松「おひかえなせエ」

旅人「おひかえなせエ」

石松「おひかえなせエ」

旅人「おひかえなせエ」

石松「仰せに従いまして名乗らせていただきます。早速おひかえ下すつて有難うさんにござんす。手前、生国発しましては三州にござんす。三州といつても広うござんす。広い三州は八名郡八名村にござんす。渡世縁もちまして清水一家でござんすもんにござんす」

すると、旅人は、誰でも知つている金波銀波の隅田川式の近付（仁義）を長々と詳しく述べる。これは近藤日出造氏が次郎長三代目の鈴木幸太郎氏宅で見聞した記事を解りやすく拝借したものだが、玄関先の仁義である。手前とても若いもんにござんす。おひかえなせエ」

旅人「おひかえなせエ」

石松「おひかえなせエ」

旅人「おひかえなせエ」

石松「おひかえなせエ」

旅人「おひかえなせエ」

石松「仰せに従いまして名乗らせていただきます。早速おひかえ下すつて有難うさんにござんす。手前、生国発しましては三州にござんす。三州といつても広うござんす。広い三州は八名郡八名村にござんす。渡世縁もちまして清水一家でござんすもんにござんす」

すると、旅人は、誰でも知つている金波銀波の隅田川式の近付（仁義）を長々と詳しく述べる。これは近藤日出造氏が次郎長三代目の鈴木幸太郎氏宅で見聞した記事を解りやすく拝借したものだが、玄関先の仁義である。手前とても若いもんにござんす。おひかえなせエ」

旅人「おひかえなせエ」

石松「おひかえなせエ」

旅人「おひかえなせエ」

石松「おひかえなせエ」

旅人「おひかえなせエ」

石松「仰せに従いまして名乗らせていただきます。早速おひかえ下すつて有難うさんにござんす。手前、生国発しましては三州にござんす。三州といつても広うござんす。広い三州は八名郡八名村にござんす。渡世縁もちまして清水一家でござんすもんにござんす」

すると、旅人は、誰でも知つている金波銀波の隅田川式の近付（仁義）を長々と詳しく述べる。これは近藤日出造氏が次郎長三代目の鈴木幸太郎氏宅で見聞した記事を解りやすく拝借したものだが、玄関先の仁義である。手前とても若いもんにござんす。おひかえなせエ」

旅人「おひかえなせエ」

石松「おひかえなせエ」

旅人「おひかえなせエ」

石松「おひかえなせエ」

旅人「おひかえなせエ」

石松「仰せに従いまして名乗らせていただきます。早速おひかえ下すつて有難うさんにござんす。手前、生国発しましては三州にござんす。三州といつても広うござんす。広い三州は八名郡八名村にござんす。渡世縁もちまして清水一家でござんすもんにござんす」

すると、旅人は、誰でも知つている金波銀波の隅田川式の近付（仁義）を長々と詳しく述べる。これは近藤日出造氏が次郎長三代目の鈴木幸太郎氏宅で見聞した記事を解りやすく拝借したものだが、玄関先の仁義である。手前とても若いもんにござんす。おひかえなせエ」

旅人「おひかえなせエ」

石松「おひかえなせエ」

旅人「おひかえなせエ」

石松「おひかえなせエ」

旅人「おひかえなせエ」

石松「仰せに従いまして名乗らせていただきます。早速おひかえ下すつて有難うさんにござんす。手前、生国発しましては三州にござんす。三州といつても広うござんす。広い三州は八名郡八名村にござんす。渡世縁もちまして清水一家でござんすもんにござんす」

すると、旅人は、誰でも知つている金波銀波の隅田川式の近付（仁義）を長々と詳しく述べる。これは近藤日出造氏が次郎長三代目の鈴木幸太郎氏宅で見聞した記事を解りやすく拝借したものだが、玄関先の仁義である。手前とても若いもんにござんす。おひかえなせエ」

旅人「おひかえなせエ」

石松「おひかえなせエ」

旅人「おひかえなせエ」

石松「おひかえなせエ」

旅人「おひかえなせエ」

石松「仰せに従いまして名乗らせていただきます。早速おひかえ下すつて有難うさんにござんす。手前、生国発しましては三州にござんす。三州といつても広うござんす。広い三州は八名郡八名村にござんす。渡世縁もちまして清水一家でござんすもんにござんす」

すると、旅人は、誰でも知つている金波銀波の隅田川式の近付（仁義）を長々と詳しく述べる。これは近藤日出造氏が次郎長三代目の鈴木幸太郎氏宅で見聞した記事を解りやすく拝借したものだが、玄関先の仁義である。手前とても若いもんにござんす。おひかえなせエ」

旅人「おひかえなせエ」

石松「おひかえなせエ」

旅人「おひかえなせエ」

石松「おひかえなせエ」

旅人「おひかえなせエ」

石松「仰せに従いまして名乗らせていただきます。早速おひかえ下すつて有難うさんにござんす。手前、生国発しましては三州にござんす。三州といつても広うござんす。広い三州は八名郡八名村にござんす。渡世縁もちまして清水一家でござんすもんにござんす」

すると、旅人は、誰でも知つている金波銀波の隅田川式の近付（仁義）を長々と詳しく述べる。これは近藤日出造氏が次郎長三代目の鈴木幸太郎氏宅で見聞した記事を解りやすく拝借したものだが、玄関先の仁義である。手前とても若いもんにござんす。おひかえなせエ」

旅人「おひかえなせエ」

石松「おひかえなせエ」

旅人「おひかえなせエ」

石松「おひかえなせエ」

旅人「おひかえなせエ」

石松「仰せに従いまして名乗らせていただきます。早速おひかえ下すつて有難うさんにござんす。手前、生国発しましては三州にござんす。三州といつても広うござんす。広い三州は八名郡八名村にござんす。渡世縁もちまして清水一家でござんすもんにござんす」

すると、旅人は、誰でも知つている金波銀波の隅田川式の近付（仁義）を長々と詳しく述べる。これは近藤日出造氏が次郎長三代目の鈴木幸太郎氏宅で見聞した記事を解りやすく拝借したものだが、玄関先の仁義である。

何はともあれ腹が減つていたら相手に飯を食わすのがあちらのやくざ精神。

A「兄弟、ニューヨークから来たもんだが」

B「ユーは飯を食つたか？」

A「サンキュー。俺ア、ジム・ホプキンス」

B「俺ア、テキサスのトミイだ。ユーは飯を食つたか？」

何はともあれ腹が減つていたら相手に飯を食わすのがあちらのやくざ精神。

執事は、あわてて答えた。「はあ、わたくしにも」

スペイドは笑つた。

執事はせきをして、何か云おうとしたようだつたが、云わなかつた。彼は躊躇つていたが、やがて軽くノツクした。

弱よわしげな声が云つた。「お入り」

「コート嬢はどこにいる？」とスペイドは小声で早口に訊いた。

「御自分のお部屋だと思います。左手の二つ目のドアでございます」

執事は、ドアを開けて入つて行つた。執事がドアを閉める前に、スペイドは、ベツドの中で起きなおつているテイモシイ・ビネツトの姿をちらつと見た。

スペードは、左手の二つ目のドアをノツクした。ジョイス・コートがすぐにドアを開けた。彼女は、微笑も浮べず、話しかけもせず部屋に入口に立つていた。

「コート嬢、私がお兄さんといつしよにいたリイ、あの爺いが……」と云つてましたけどテイモシイのことですか？」

彼女は、しばらくの間スペイドを凝視めていた。「ええ、ええ」

執事は、あわてて答えた。「はあ、わたくしにも」

スペイドは笑つた。

執事はせきをして、何か云おうとしたようだつたが、云わなかつた。彼は躊躇つていたが、やがて軽くノツクした。

弱よわしげな声が云つた。「お入り」

「コート嬢はどこにいる？」とスペイドは小声で早口に訊いた。

「御自分のお部屋だと思います。左手の二つ目のドアでございます」

執事は、ドアを開けて入つて行つた。執事がドアを閉める前に、スペイドは、ベツドの中で起きなおつているテイモシイ・ビネツトの姿をちらつと見た。

スペードは、左手の二つ目のドアをノツクした。ジョイス・コートがすぐにドアを開けた。彼女は、微笑も浮べず、話しかけもせず部屋に入口に立つていた。

「コート嬢、私がお兄さんといつしよにいたリイ、あの爺いが……」と云つてましたけどテイモシイのことですか？」

彼女は、しばらくの間スペイドを凝視めていた。「ええ、ええ」

「何を云おうとしていたのか、話していたけませんか？」

彼女は、ゆつくりと云つた。「あたくし、あなたがほんとうにどなたなのかも、なぜ、そんなことをお訊きになるのかも存じませんけど、お話しいたしましょう。〝アイラを呼びにやつた〟と云おうとしたんですの。ジヤアポウがそう云つたところだつたんです」

「ありがとう」

彼がむきをかえないうちに、彼女はドアを閉めてしまつた。

彼は、テイモシイ・ビネツトのドアまで戻ると、ノツクした。

「誰だね？」と老人が訊いた。

スペイドはドアを開けた。老人は、ベツドのうえに起きあがつていた。「ジヤアポウがちよつと前に、鍵穴からのぞいてましたよ」と云うと、彼は書斎に戻つた。

スペイドの坐つていた椅子に腰をおろしたアイラ・ビネツトは、ダンデイとポルハウスにむかつてしやべつていた。「それでウオーレスもわれわれの大部分と同じように、破産したんです。だけど、彼は、身を守ろうとして、ごまかしたらしいんですね。彼は、株式取引所から追放されちやつたんですよ」

ダンデイは、その部屋と家具をさし示すように手を振つた。

「破産した男にしちやあ、立派なもんぢやないか」

「女房がいくらか持つていたんです。彼はいつでも身分不相応の暮しをしてきたんです」

「知りません」

「奥さんは？」とスペイドが、つぎの質問をおだやかにはさんだ。

ビネツトは、口をこわばらせて、隠気な微笑を浮べた。

「家内は、金を持つてはいなかつたんですだいぶ前のことになりますが、私が財政的に行きずまつたとき、財産を助けようとして、彼女の名儀にかえたのです。それを、彼女は私が知らない間に金に代えたんですよ。彼女は、その中からわれわれの生活費を支払つたんですが、私に返そうとはせず、どんなことがあつても、彼女が死のうが生きていようがいつしよにいようが、別れようが、けつしていたんですよ。その金を一銭たつて渡さない、と云つたんですよ」

「あなたは離婚をのぞんでいらしたんですか？」とダンデイが訊いた。

「えゝ、」

「かしこまりました」と大男のポルハウスは云つて、アイラ・ビネツトをつれて出て行き、ウオーレス・ビネツトをつれて戻つて来た。

「伯父さんは、遺書を作つてありますか？」とダンデイが訊いた。

「知りません」

「奥さんは？」とスペイドが、つぎの質問をおだやかにはさんだ。

ビネツトは、口をこわばらせて、隠気な微笑を浮べた。

「家内は、金を持つてはいなかつたんですだいぶ前のことになりますが、私が財政的に行きずまつたとき、財産を助けようとして、彼女の名儀にかえたのです。それを、彼女は私が知らない間に金に代えたんですよ。彼女は、その中からわれわれの生活費を支払つたんですが、私に返そうとはせず、どんなことがあつても、彼女が死のうが生きていようがいつしよにいようが、別れようが、けつしていたんですよ。その金を一銭たつて渡さない、と云つたんですよ」

「あなたは離婚をのぞんでいらしたんですか？」とダンデイが訊いた。

「えゝ、」

「かしこまりました」と大男のポルハウスは云つて、アイラ・ビネツトをつれて出て行き、ウオーレス・ビネツトをつれて戻つて来た。

「伯父さんは、遺書を作つてありますか？」とダンデイが訊いた。

「知りません」

「奥さんは？」とスペイドが、つぎの質問をおだやかにはさんだ。

ビネツトは、口をこわばらせて、隠気な微笑を浮べた。

「家内は、金を持つてはいなかつたんですだいぶ前のことになりますが、私が財政的に行きずまつたとき、財産を助けようとして、彼女の名儀にかえたのです。それを、彼女は私が知らない間に金に代えたんですよ。彼女は、その中からわれわれの生活費を支払つたんですが、私に返そうとはせず、どんなことがあつても、彼女が死のうが生きていようがいつしよにいようが、別れようが、けつしていたんですよ。その金を一銭たつて渡さない、と云つたんですよ」

「あなたは離婚をのぞんでいらしたんですか？」とダンデイが訊いた。

「えゝ、」

「なぜです？」

「幸福な結婚ぢやなかつたんです」

「ジョイス・コートのことで？」

ビネツトの顔があからんだ。「ジョイス・コートは尊敬していますよ、だけど、どつちにしても離婚をのぞんだでしよう」

と彼は、かたくなつて云つた。

「あなたは、彼を絞めあげたという、伯父さんが云つているような男に心あたりはほんとうにないんですか？」

「ほんとうにないですね」

呼鈴のなる音がかすかに聞えてきた。

「これだけです」とダンデイが、不気嫌に云つた。

ビネツトは出て行つた。

階下から、屋内でうたれたピストルの音が聞えてきた。灯が消えた。

暗い廊下にとび出そうとして、三人の男たちは、ドアの所でぶつかりあつた。

スペイドが最初に、階段までたどりついた。下から足音が聞えてきたが、階段の曲り目までおりるまでは、何んにも見えなかつた。やがて開いている玄関から通りのあかりが入りこんで、玄関を背にして立つた男が眼に入つてきた。

スペイドの傍にいたダンデイの手の中で、懐中電燈が、カチツと音をたてて、その男の顔に光りをあてた。

彼はアイラ・ビネツトだつた。彼は、光りをあてられてまばたきし、彼の前の床にある何かを指さした。

ダンデイ

は、懐中電灯の光りを床にむけた。ジヤアポウが、顔を下にむけて、後頭部の弾痕から血をながして倒れていた。

トム・ポルハウスがどたどたと階段をおりて来た。ウオーレス・ビネツトがそれにすぐつづき、ジヨイス・コートのおびえた声が、さらにそのうえから聞えてきた。

「どうしたの？　ウオーリイ……どうしたの？」

「電灯のスウイツチはどこだ？」とダンディが吠えたてた。

「この階段をおりた所の、倉庫のドアの内側です」とウオーレス・ビネツトが云つた。

「どうしたんです？」

ポルハウスが、ビネツトの前をぬけて倉庫のドアの方へ行つた。

スペイドは、のどの奥で妙な声を出すと、ウオーレス・ビネツトを押しのけて階段を駈けあがつて行つた。彼は、ジヨイス・コートの前を駈けぬけ、そのおびえきつた悲鳴も無視して駈けあがつて行つた。三階でまたピストルの音がしたのは、彼が三階への階段を半ば駈けあがつた時だつた。

彼は、テイモシイ・ビネツトのドアに駈けよつて行つた。ドアは開いていた。彼は、その部屋に駈けこんだ。

何か固い、角のあるものが彼の右耳の上にあたり、彼を部屋のむこう側にはねとばして膝まづかせた。ドアを出たすぐの所の床で、何かが、がたがた音をたてた。

灯がついた。

部屋のまん中の床に、左の二の腕の弾痕から血を流しながら、テイモシイ・ビネツトが仰むけに倒れていた。そのパヂヤマの上衣はさけており、眼は閉ぢていた。

スペイドは、立ちあがつて彼の頭に手をあてた。彼は老人にむかつて、部屋にむかつてそしてまた、廊下にころがつている黒い自動拳銃にむかつて顔をしかめた。

「さあ、おいぼれの人殺し。起きあがつて椅子に坐るんだ、医者が来るまでその血を止められるかどうか見てやるからな」

彼は、窓に近づくとそれをていねいに調べ始めた。彼は首を振ると、片手を後ろにのばして、「懐中電灯をかしてくれ」と云つた。

ダンディが、懐中電灯を渡した。

スペイドは、窓をあげると身をのり出して家の外側を電灯で照らして、やがて彼はうなり声をあげると、もう一つの手を外に出して窓枠のすぐ下にしたのレンガをひき出し始めた。やがてそのレンガがぬけてきた。彼はそれをいビネツトを従えて入つて来た。ダンディが、二人の若顔は、怒りに燃えていた。

「台所のドアがおつ開いてやがるんだ。奴らは、あそこから……」

「そんなこと忘れちやいな。テイム伯父だよ」とスペイドは云つた。彼は、ウオーレス・ビネツトの溜息にも、ダンディとアイラ・ビネツトの不審そうな顔にも、何んの注意も払わなかつた。「さあ、立つんだ。そして、執事が鍵穴からのぞいた時に何を見たんだかしやべるんだ」と彼は、床に倒れている老人に云つた。

老人は、身動き一つしなかつた。

「奴は、俺が執事がのぞいていたよ、つて云つたから執事を殺したんだよ」とスペイドは、ダンディに説明した。「俺ものぞいてみたんだけど、椅子と窓しか見えなかつたよ、もつともその時には、俺たちが騒いだんで奴が驚いてベツドに戻つちやつたんだろうけどね」

彼は、窓枠のすぐしたのレンガをひき出し始めた。

家の外側を電灯で照らして、やがて彼はうなり声をあげると、もう一つの手を外に出して窓枠のうえにおくと、その後の穴に手をつつこんだ。その穴から、空の黒いピストルのサ

ツク、薬包の箱、封のしてないマニラ紙の封筒などを、彼は一つづつ取り出した。

これらのものを手にして、彼はみんなの方にむきなおつた。

ジョイス・コートが、洗面器に入れた水とガーゼを一巻き持つて入つて来て、テイモシイ・ビネツトの傍に膝まづいた。

スペイドは、ピストルのサツクと薬包をテーブルのうえにおいて、マニラ紙の封筒を開いた。その中には、両面に太い鉛筆で字を書、いた紙が二枚入つていた。スペイドはその一節を目読していたが、突然笑いだすと、また始めから声を出して読み始めた。

〝予、テイモシイ・キーラン・ビネツトは心身ともに健全であり、これが遺書であることを宣言する。愛する甥、アイラ・ビネツトとウオーレス・バーク・ビネツトに対し、私をその家庭に迎え入れ、世話をしてくれた親切の報酬として、予の全財産、即ち、予の屍体と、着ているものいつさいを等分にわけあたえる。

〝予はさらに、彼らに対して予の葬儀費用及びつぎのごとき思い出をわけあたえる。

第一、予がシンシン（刑務所の所在地）ですごした十五年間を、オーストラリアですごしたと思いこんだ彼らの軽卒さ。

第二、この十五年間に予が大金持になつたものと思い、予が彼らに寄食し、彼らから金を借り、予自身の金を一銭も使わなかつたとしても、予が、非常な吝嗇漢で、その蓄財は自分たちが継ぐのだと思い、彼らから絞り取つた以外には一文もないからだとは思わなかつた、という彼らの楽天性。

第三、もし予が何ものかを持つていたとしても、それを彼らに遺すと思つた彼らの希望から、これがいかに人殺しのことを話そうぢやないかとスペイドは云つた。

何らのユーモアを解するセンスも持たない彼らには永遠にわからないであろう。

スペイドは、顔をあげると、「日附はないよ、だけど、テイモシイ・キーラン・ビネツトつて達筆でサインしてあるよ」と云つた。

アイラ・ビネツトは、怒りで蒼白だつた。ウオーレスの顔も蒼白で、全身をわなわなと震わせていた。

ジョイス・コートは、テイモシイ・ビネツトの腕の手当てをやめてしまつていた。

老人は、体を起すと眼を開いた。彼は、甥たちに眼をやると笑い始めた。その笑いにはヒステリツクなところも気狂いじみたところもなかつた。それは、健全な心からの笑いであり、しだいにおさまつて行つた。

「よし、さあ、お前はもうたのしんだんだ。人殺しのことを話そうぢやないか」とスペイドは云つた。

「最初のぶんについちやあ、前に話した以外のことは知りませんよ」と老人は云つた。「それに今度のは人殺しぢやなく、あたしはただ……」

まだひどく震えている、ウオーレス・ビネツトは、苦しげに云つた。「嘘だ。お前はモリイを殺したんだ。モリイの悲鳴を聞いて、

待望の「風俗草紙」七月号近日発売!!

鋭意編集中の「風俗草紙」七月号はこのほど編集を完了、レギュラー執筆陣による興味ある読物、並びに未発表の写真、絵画貴重なる資料を満載して、再び皆さまの膝下にお贈り出来ることになりました。何とぞ垂誕の内容を御期待下さい。

僕とジョイスは彼女の部屋から出て来たんだぞ、そうしたら銃声が聞えて、お前の部屋の外に彼女が倒れるのが見えたんだけど、誰も後から出て来なかつたんだ」

老人は、おだやかに云つた。「よし、話してやろう。あれは事故だつたんだよ。オーストラリアから、ある男がむこうにあるわしの財産のことについて会いに来たと云つたわけさ、オーストラリアになんかいなかつたんぢやからな。おかしいな、と思つたんぢやよ。ところが、彼女はひどく興奮しよつて、わしからピストルを取りあげようとしたんで、そのピストルが発射し、わしは自分の首にこの傷を作り、例の大男の話をでつちあげにやあならんかつたんぢやよ」

彼は馬鹿にしたように笑つた。「最初の殺人は事故だつた。と――それはまあいいさ。二番目の方はそうはいかないぜ。両方の弾丸と、それにお前の腕にある弾丸が同じ拳銃から発射されたもんだ、ということを示すのは簡単なことだからな。どつちの人殺しで、証明したつて同じぢやないか。お前を一度、二度、絞り首にできるだけだよ」

彼はたのしそうに微笑を浮べた。

「それに一度は必ずするからな」

（おわり）

僕とジョイスは彼女の部屋から出て来たんだぞ、そうしたら銃声が聞えて、お前の部屋の外に彼女が倒れるのが見えたんだけど、誰も後から出て来なかつたんだ」

老人は、おだやかに云つた。「よし、話してやろう。あれは事故だつたんだよ。オーストラリアから、ある男がむこうにあるわしの財産のことについて会いに来たと云つたわけさ、オーストラリアになんかいなかつたんぢやからな。おかしいな、と思つたんぢやよ。おかしいな、わしの一人が疑い始めて、わしにかまをかけてるのかな、とも思つたんぢやが。しかし、もしウオーリイがやつてるんぢやないとすれば、奴がそのオーストラリアからやつてきた紳士から話を聞き出そうとするに違いないし、そうなれば、ただで下宿していられる所が一軒なくなるということがわかつたんぢやよ。ウオーリイと思つてたんぢやが、自分の女房を殺した奴を、――女房を好きではなかつたとはいえ――ただ金のためにはいつでもわしを半気狂いだと思つてたんぢや」――彼は男の方を横眼で見た――「それで、わしが彼に有利なように遺言を書く前に気狂い病院に入れられやしないか、心配してたんぢやよ。彼は、株式取引所のことや何かで、悪い評判があつたんぢやからな。わしはそこで芝居をうつために台所のドアを開け、玄関に廻つて呼鈴をならしてドアを閉め、表の階段のしたの倉庫のドアのかげにかくれてたんだよ。呼鈴がなつたんでジヤアボウが出て来ると、お前は彼を撃つたんだ、――弾痕は彼の後頭部にあつたからな――それから倉庫のドアのすぐ内側にある電灯のスウイツチを引いて、暗闇の中を裏階段を駈けあがり、注意深く自分の腕を撃つたのさ、俺が早くここへあがつて来すぎたんだろう。それで、お前はピストルで俺を撲り、ピストルはドアの外へほうり出して、自分で床に倒れたんだよ。

彼は馬鹿にしたように笑つた。「最初の殺人は事故だつた。と――それはまあいいさ。二番目の方はそうはいかないぜ。両方の弾丸と、それにお前の腕にある弾丸が同じ拳銃から発射されたもんだ、という、ことを示すのは簡単なことだからな。どつちの人殺しで、証明したつて同じぢやないか。お前を一度、二度、絞り首にできるだけだよ」

彼はたのしそうに微笑を浮べた。

「それに一度は必ずするからな」

（おわり）

◇後記◇

一日働いてグッタリ疲れた躰には、七面倒臭い芸術より、肩の凝らぬ、時間を忘れてグイグイ引き込まれて行くような娯楽が必要だ。長い戦争の後で、刺戟に対する感度が鈍つているのは世界的なことらしいが、わが国の場合は尚更で、汚職沙汰や事々に敗戦国の惨めさが身に滲みるような世情では、娯楽もよつぽど刺戟の強いものでないと〝疲労を忘れる〟なんてところ迄ゆかない。相変らず動(ション)きを売物の西部劇やギャング映画が盛であり、大衆の正義感を満足させてくれるスピレーンの小説などが広く読まれるのも、その故だと思う。

小社はさきに『風俗草紙』を発刊して多大の反響を浴びたが、今度新に『現代読本』を発行するのは、前記の如き世情に生きる現代人に、最もふさわしい娯楽誌を提供したいという徽意からに他ならない。

何分にも創刊号であり、御不満な点は多いことと思うが、次号は既に山積の秘材によつて、独自の形式の雑誌をお贈りすることをお約束致します。何卒御期待を乞う次第です。

尚、大変遅れましたが、上掲の如く、風俗草紙七月号が近日中に発売されます。満載された外国アブ・フォトは是非一見に価するもので、本誌共々倍旧の御愛読をお願い申上げます。

★

風俗草紙 七月号 愈々近日発賣!!

最新着! アメリカ・アブ写眞豪華口絵大特集!

喜多玲子・中川彩子 凄艶妖美傑作大画集!

載連評好

蠱妖の虹……龍胆寺 雄
淫雨熄まず……松井 簫子
まにや地獄……日夏由紀夫
マゾくらべ……鬼山 絢策

嗜虐時代小説……島本 春雄
レスボス通信……園村 恵子
ソドミー通信……藤井 晃
読者交歓室

★二十万円懸賞原稿・入選作品発表!

特集 新しき悦虐の歓こび……(手記集)男女五名
アブチックな女体美の探究……マニヤ・四氏

☆永らくお待たせ致しましたが、愈々『風俗草紙』七月号を皆様にお贈りします。全頁すべて漸新豪華な秘材で埋めた激情耽溺版です御入手はお早目に! 定価百円

現代讀本

第一巻 第一号
毎月一回一日発行
定価 百五十円

昭和二十九年五月二十五日 印刷
昭和二十九年六月 一日 発行

編集人 氏家富良
発行人 野村佳秀
印刷所 株式会社国文社
東京都千代田区西神田二ノ三
発行所 株式会社 日本特集出版社
東京都千代田区神田猿楽町一ノ三
電話神田(29)五九八二
振替東京一〇二、五一七番